

大 渕 遺 跡

—1・2次調査—

2 0 0 0

松山市教育委員会

財団法人 松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

大 涴 遺 跡

—1・2次調査—



2 0 0 0

松山市教育委員会

財團法人 松山市生涯学習振興財團

埋蔵文化財センター



卷頭図版1 大洲遺跡南上空より斎灘を望む



巻頭図版2 大沢遺跡A区湿地内第5層出土の土器
(展示用に想定復元したもの)



卷頭図版 3 大渕遺跡出土彩文壺・土偶・收穫具
(壺口頭部は想定復元)



卷頭図版 4 大測遺跡 A 区湿地内第 7 層出土朱漆塗り結齒式豎櫛

序

大湧遺跡の位置する道後平野北部は、現在も田園風景がよく残る水田地帯です。この地域で昭和62年、松山市立北中学校の開校に先立って発掘調査が実施されました。その結果、縄文時代の終わり頃、私たちの祖先は、この遺跡の周辺でこの平野初めての米づくりを開始したことが明らかになり、大きな話題となりました。

以来、大湧遺跡の数々の出土品は、開館10周年を迎えた「松山市考古館」の常設展の柱のひとつとして、松山市民のみならず各地から訪れる観覧者の方々に親しまれ、今日に至っています。このたび、待ち望まれていたこの遺跡の調査成果を、報告書というかたちで広く公開できることは、埋蔵文化財の保護、継承に日々携わる者のひとりとして大きな喜びであります。

本書が、文化財保護、今後の調査研究の一助にご利用いただければ幸いに存じます。

平成12年3月31日

財団法人 松山市生涯学習振興財団

理事長 中村時広

例　　言

1. 本報告書は、松山市太山寺町の2地点において松山市教育委員会が実施した、大瀬遺跡および大瀬遺跡2次調査の発掘調査報告書である。
2. 大瀬遺跡の調査は、松山市立北中学校の建設とともに1987（昭和62）年に行われ、2次調査は個人住宅建設とともに1989（平成元）年に実施された。
3. 遺物の実測・製図、遺構図の製図等は、加島なおみを中心に丹生谷道代、横田知子、矢野久子、多知川富美子、村上真由美、木下奈緒美、渡部寿美子が行った。
4. 遺構の撮影は、各調査担当者が行い、遺物撮影・写真図版の作成は大西朋子が行った。
5. 遺物の縮尺は、土器・土製品を1/3にすることを原則とし、石器・石製品では遺物の大きさに応じて2/3、1/2、1/3、1/4を使い分けている。また、漆製品は1/2、玉類は1/1で掲載した。
6. 使用した方位は磁北である。
7. 自然科学分析は、下記の方々、機関に依頼し、いくつかの分析結果についてでは報文をいただいた。厚くお礼申し上げるとともに、報文のほとんどを調査終了直後に既に頂戴していたにもかかわらず、本報告の刊行の遅れにより、今日までに至ってしまったことを深謝いたします。

花粉分析	中村 純（高知大学名誉教授）
糊痕土器	近藤日出男（元土佐高等学校）
プラント・オパール分析	古環境研究所
赤色顔料分析	本田 光子・志賀 智史（別府大学）
C ¹⁴ 年代測定	岡田 文夫（京都造形芸術大学）
朱漆塗り堅櫛保存処理・X線撮影	成瀬 正和（宮内庁正倉院事務所）
	社団法人 日本アイソトープ協会
	奈良国立文化財研究所
8. 調査および本報告書の作成に至るまでの過程で、多くの方々にご指導・ご教示をいただいた。記して感謝申し上げます。

梅木謙一、梅崎忠司、岡田敏彦、工渠普通、高妻洋成、肥塚隆保、坂口隆、沢田正昭、柴田昌児、下條信行、田崎博之、高橋徹、多田仁、谷若倫郎、平井泰男、平井勝、平井幸弘、藤尾慎一郎、家根祥多、前田義人、南博士、宮崎哲治、宮地聰一郎、宮本一夫、森下英治、山本三郎、吉田宏
9. 本報告書の執筆は、第1・2章を栗田茂敏が、第3章を武正良清が担当し、編集は栗田が行った。

本文目次

第1章 はじめに	1
1. 大渕遺跡をめぐる環境	1
(1) 地理的環境	1
(2) 歴史的環境	1
2. 組織	3
第2章 大渕遺跡	9
1. 調査に至る経緯	9
2. 調査の概要	9
(1) 調査区と層位	9
(2) A区の調査	13
(3) B区の調査	139
3. 自然科学分析	162
(1) 花粉化石による大渕遺跡の古環境復元	162
(2) 大渕遺跡出土羽丘痕について	181
(3) 大渕遺跡のプラント・オバール分析	187
(4) 大渕遺跡出土遺物の赤色顔料と漆塗り堅櫛の塗装構造について	192
4. まとめ	198
(1) 大渕遺跡A区湿地第6・5層の縄文晩期土器について	198
(2) 船ヶ谷遺跡出土の縄文晩期土器	199
(3) 久米高畠遺跡36次調査出土の縄文晩期土器	213
(4) 大渕遺跡A区湿地内第5層出土土器の編年的位置	214
(5) 大渕遺跡における稻作の受容について	218
第3章 大渕遺跡2次調査	225
1. 調査に至る経緯	225
2. 調査の概要	226
(1) 層位	226
(2) 造構	238
(3) 出土遺物	238
3. まとめ	235

挿図目次

はじめに

図1 調査地と周辺の主要遺跡	2
図2 調査地位置図	3

大測遺跡

図3	A区A～A' ライン土層図	10
図4	トレンチの配置と調査区	11
図5	A区全測図	13
図6	A区北半土坑・柱穴群	14
図7	土坑SK-1	15
図8	A区SK-1出土遺物実測図(1)	16
図9	A区SK-1出土遺物実測図(2)	17
図10	A区SK-1出土遺物実測図(3)	18
図11	土坑SK-2	18
図12	A区SK-2出土遺物実測図(1)	18
図13	A区SK-2出土遺物実測図(2)	19
図14	土坑SK-3	19
図15	土坑SK-4	19
図16	A区SK-4出土遺物実測図	20
図17	土坑SK-5	20
図18	A区SK-5出土遺物実測図(1)	21
図19	A区SK-5出土遺物実測図(2)	21
図20	土坑SK-6	22
図21	A区SK-6出土遺物実測図(1)	23
図22	A区SK-6出土遺物実測図(2)	24
図23	土坑SK-7	25
図24	土坑SK-8	25
図25	土坑SK-9	25
図26	A区SK-8出土遺物実測図(1)	26
図27	A区SK-8出土遺物実測図(2)	26
図28	A区SK-9出土遺物実測図(1)	27
図29	A区SK-9出土遺物実測図(2)	27
図30	不明遺構SX-1	28
図31	A区SX-1出土遺物実測図	28
図32	溝状遺構SD-1	29
図33	A区第9C層出土遺物実測図(1)	31
図34	A区第9C層出土遺物実測図(2)	32
図35	A区第9C層出土遺物実測図(3)	33
図36	A区第9C層出土遺物実測図(4)	34
図37	A区第9C層出土遺物実測図(5)	35
図38	A区第9C層出土遺物実測図(6)	36
図39	A区第9C層出土遺物実測図(7)	37

図40	A区第9C層出土遺物実測図(8)	38
図41	A区第9C層出土遺物実測図(9)	39
図42	A区第9C層出土遺物実測図(10)	40
図43	A区第9C層出土遺物実測図(11)	41
図44	A区第9C層出土遺物実測図(12)	42
図45	A区第9C層出土遺物実測図(13)	43
図46	A区第9C層出土遺物実測図(14)	44
図47	A区第9A層出土遺物実測図(1)	45
図48	A区第9A層出土遺物実測図(2)	46
図49	A区第9A層出土遺物実測図(3)	47
図50	A区第9A層出土遺物実測図(4)	48
図51	A区第9A層出土遺物実測図(5)	49
図52	A区第9A層出土遺物実測図(6)	50
図53	A区第9層出土遺物実測図(1)	50
図54	A区第9層出土遺物実測図(2)	51
図55	A区第9層出土遺物実測図(3)	52
図56	A区第8~9層出土遺物実測図	54
図57	A区第8層出土遺物実測図(1)	55
図58	A区第8層出土遺物実測図(2)	56
図59	A区第8層出土遺物実測図(3)	57
図60	A区第8層出土遺物実測図(4)	58
図61	A区第8層出土遺物実測図(5)	59
図62	A区第8層出土遺物実測図(6)	60
図63	A区第8層出土遺物実測図(7)	61
図64	A区第8層出土遺物実測図(8)	61
図65	A区第8層出土遺物実測図(9)	62
図66	A区第8層出土遺物実測図(10)	63
図67	A区第7層出土遺物実測図(1)	64
図68	A区第7層出土遺物実測図(2)	65
図69	A区第7層出土遺物実測図(3)	65
図70	A区第7層出土遺物実測図(4)	66
図71	A区第7層出土遺物実測図(5)	67
図72	A区第6層出土遺物実測図(1)	68
図73	A区第6層出土遺物実測図(2)	69
図74	A区第6層出土遺物実測図(3)	70
図75	A区第6層出土遺物実測図(4)	71
図76	A区第6層出土遺物実測図(5)	72
図77	A区第6層出土遺物実測図(6)	73

図78	A区第6層出土遺物実測図(7)	74
図79	A区第6層出土遺物実測図(8)	75
図80	A区第6層出土遺物実測図(9)	76
図81	A区第6層出土遺物実測図(10)	77
図82	A区第6層出土遺物実測図(11)	78
図83	A区第6層出土遺物実測図(12)	79
図84	A区第6層出土遺物実測図(13)	79
図85	A区第6層出土遺物実測図(14)	80
図86	A区第6層出土遺物実測図(15)	81
図87	A区第6層出土遺物実測図(16)	82
図88	A区第6層出土遺物実測図(17)	83
図89	A区第6層出土遺物実測図(18)	84
図90	A区第6層出土遺物実測図(19)	85
図91	A区第6層出土遺物実測図(20)	86
図92	A区第6層出土遺物実測図(21)	87
図93	A区第6層出土遺物実測図(22)	88
図94	A区第5層出土遺物実測図(1)	89
図95	A区第5層出土遺物実測図(2)	90
図96	A区第5層出土遺物実測図(3)	91
図97	A区第5層出土遺物実測図(4)	92
図98	A区第5層出土遺物実測図(5)	93
図99	A区第5層出土遺物実測図(6)	94
図100	A区第5層出土遺物実測図(7)	95
図101	A区第5層出土遺物実測図(8)	96
図102	A区第5層出土遺物実測図(9)	97
図103	A区第5層出土遺物実測図(10)	98
図104	A区第5層出土遺物実測図(11)	99
図105	A区第5層出土遺物実測図(12)	100
図106	A区第5層出土遺物実測図(13)	101
図107	A区第5層出土遺物実測図(14)	102
図108	A区第5層出土遺物実測図(15)	103
図109	A区第5層出土遺物実測図(16)	104
図110	A区第5層出土遺物実測図(17)	105
図111	A区第5層出土遺物実測図(18)	106
図112	A区第5層出土遺物実測図(19)	107
図113	A区第5層出土遺物実測図(20)	108
図114	A区第5層出土遺物実測図(21)	109
図115	A区第5層出土遺物実測図(22)	110

図116 A区第5層出土遺物実測図 28	111
図117 A区第5層出土遺物実測図 29	112
図118 A区第5層出土遺物実測図 30	113
図119 A区第5層出土遺物実測図 31	114
図120 A区第5層出土遺物実測図 32	115
図121 A区第5層出土遺物実測図 33	116
図122 A区第5層出土遺物実測図 34	117
図123 A区第5層出土遺物実測図 35	118
図124 A区第5層出土遺物実測図 36	119
図125 A区第5層出土遺物実測図 37	120
図126 A区第5層出土遺物実測図 38	121
図127 A区第5層出土遺物実測図 39	122
図128 A区第5層出土遺物実測図 40	123
図129 A区第5層出土遺物実測図 41	124
図130 A区第5層出土遺物実測図 42	125
図131 A区第5層出土遺物実測図 43	126
図132 A区第5層出土遺物実測図 44	127
図133 A区第5層出土遺物実測図 45	128
図134 A区第5層出土遺物実測図 46	129
図135 A区第5層出土遺物実測図 47	130
図136 A区第5層出土遺物実測図 48	131
図137 A区第5層出土遺物実測図 49	132
図138 A区第5～7層出土遺物実測図 (1)	132
図139 A区第5～7層出土遺物実測図 (2)	133
図140 A区第5～7層出土遺物実測図 (3)	134
図141 A区第5～7層出土遺物実測図 (4)	135
図142 A区第5～7層出土遺物実測図 (5)	136
図143 A区第5～7層出土遺物実測図 (6)	136
図144 A区表採遺物実測図 (1)	137
図145 A区表採遺物実測図 (2)	137
図146 A区表採遺物実測図 (3)	138
図147 B区全測図	139
図148 B区SX-1出土遺物実測図 (1)	141
図149 B区SX-1出土遺物実測図 (2)	142
図150 B区SX-1出土遺物実測図 (3)	143
図151 B区SX-1出土遺物実測図 (4)	144
図152 B区SX-1出土遺物実測図 (5)	145
図153 B区SX-1出土遺物実測図 (6)	146

図154	B区SX-1出土遺物実測図(7).....	147
図155	B区SX-1出土遺物実測図(8).....	148
図156	B区SX-1出土遺物実測図(9).....	149
図157	B区SX-1出土遺物実測図(10).....	150
図158	B区SX-1出土遺物実測図(11).....	151
図159	B区SX-1出土遺物実測図(12).....	152
図160	B区SX-1出土遺物実測図(13).....	153
図161	B区湿地出土遺物実測図(1).....	154
図162	B区湿地出土遺物実測図(2).....	155
図163	B区湿地出土遺物実測図(3).....	156
図164	B区湿地出土遺物実測図(4).....	157
図165	B区湿地出土遺物実測図(5).....	158
図166	B区湿地出土遺物実測図(6).....	159
図167	B区湿地出土遺物実測図(7).....	160
図168	B区表探遺物実測図.....	161
図169	試料採取地点図.....	162
図170	花粉の消長(1).....	172
図171	花粉の消長(2).....	173
図172	174・175
図173	176・177
図174	178・179
図175	182・183
図176	184・185
図177	試料採取地点図.....	187
図178	イネのプラント・オパール密度.....	190
図179	おもな植物の推定生産量.....	191
図180	赤色塗彩土器の塗装構造顕微鏡写真.....	196
図181	漆塗り堅樹の塗装構造顕微鏡写真.....	197
図182	船ヶ谷遺跡出土遺物(1).....	201
図183	船ヶ谷遺跡出土遺物(2).....	202
図184	船ヶ谷遺跡出土遺物(3).....	203
図185	船ヶ谷遺跡出土遺物(4).....	204
図186	船ヶ谷遺跡出土遺物(5).....	205
図187	船ヶ谷遺跡出土遺物(6).....	206
図188	船ヶ谷遺跡出土遺物(7).....	208
図189	船ヶ谷遺跡出土遺物(8).....	209
図190	船ヶ谷遺跡出土遺物(9).....	210
図191	船ヶ谷遺跡出土遺物(10).....	211

図192	船ヶ谷遺跡出土遺物⑪	212
図193	久米高畠遺跡36次調査地 S B004出土遺物	214
図194	道後今市遺跡10次調査11号土坑出土遺物	216
図195	南久米片廻り遺跡2次調査D 3区出土遺物	216
図196	南海放送遺跡包含層出土遺物	217
図197	朝美澤遺跡・文京遺跡4次調査S B-1出土遺物	217
大淵遺跡2次調査		
図198	調査地位図	225
図199	調査地区割り図	226
図200	調査区北壁土層図	227
図201	S K-1測量図	238
図202	10~8層出土遺物実測図	229
図203	7層出土遺物実測図(1)	230
図204	7層出土遺物実測図(2)	231
図205	7層出土遺物実測図(3)	232
図206	6~4層出土遺物実測図	233
図207	層位不明・表探遺物実測図	234
図208	石器実測図	234

表 目 次

表1	層位と試料番号	163
表2	大淵遺跡A区出土花粉化石一覧(1)	167
表3	大淵遺跡A区出土花粉化石一覧(2)	169
表4	試料1gあたりのプラント・オバール個数	189
表5	イネの生産量の推定	190

図 版 目 次

巻頭図版1	大淵遺跡南上空より斎灘を望む
巻頭図版2	大淵遺跡A区湿地内第5層出土の土器
巻頭図版3	大淵遺跡出土彩文壺・土偶・収穫具
巻頭図版4	大淵遺跡A区湿地内第7層出土朱漆塗り結節式堅櫛

大淵遺跡

図版1	調査前全景(西より)	調査前近景(南東より)
図版2	A区土坑・柱穴群(南東より)	A区土坑群(南より)
図版3	A区土坑SK-1遺物出土状況(北より)	A区土坑SK-6遺物出土状況(北東より)

- 図版4 A区湿地の擲削状況（南東より）
- 図版5 A区湿地内第5層深鉢出土状況
- 図版6 A区湿地内第5層彩文壺出土状況
- A区湿地内第5層石庖丁出土状況
- 図版7 A区湿地内土層堆積状況（南より）
- 図版8 A区SK-1出土遺物
- 図版9 A区SK-5・6・8出土遺物
- 図版10 A区湿地内第9C層出土遺物(1)
- 図版11 A区湿地内第9C層出土遺物(2)
- 図版12 A区湿地内第9C層出土遺物(3)
- 図版13 A区湿地内第9C層出土遺物(4)
- 図版14 A区湿地内第9C層出土遺物(5)
- 図版15 A区湿地内第9C層出土遺物(6)
- 図版16 A区湿地内第9C層出土遺物(7)
- 図版17 A区湿地内第9A層出土遺物(1)
- 図版18 A区湿地内第9A層出土遺物(2)
- 図版19 A区湿地内第9A層出土遺物(3)
- 図版20 A区湿地内第9A・9層出土遺物
- 図版21 A区湿地内第9・8～9層出土遺物
- 図版22 A区湿地内第8層出土遺物(1)
- 図版23 A区湿地内第8層出土遺物(2)
- 図版24 A区湿地内第8層出土遺物(3)
- 図版25 A区湿地内第8層出土遺物(4)
- 図版26 A区湿地内第8層出土遺物(5)
- 図版27 A区湿地内第7層出土遺物(1)
- 図版28 A区湿地内第7層出土遺物(2)
- 図版29 A区湿地内第7層出土遺物(3)
- 図版30 A区湿地内第6層出土遺物(1)
- 図版31 A区湿地内第6層出土遺物(2)
- 図版32 A区湿地内第6層出土遺物(3)
- 図版33 A区湿地内第6層出土遺物(4)
- 図版34 A区湿地内第6層出土遺物(5)
- 図版35 A区湿地内第6層出土遺物(6)
- 図版36 A区湿地内第6層出土遺物(7)
- 図版37 A区湿地内第6層出土遺物(8)
- 図版38 A区湿地内第6層出土遺物(9)
- 図版39 A区湿地内第6層出土遺物(10)
- 図版40 A区湿地内第5層出土遺物(1)
- A区湿地内第5層遺物出土状況（北西より）
- A区湿地内第5層浅鉢出土状況
- A区湿地内第7層朱塗り結歎式堅櫛出土状況
- B区土器溜まりSX-1全景（北西より）

- 図版41 A区湿地内第5層出土遺物(2)
図版42 A区湿地内第5層出土遺物(3)
図版43 A区湿地内第5層出土遺物(4)
図版44 A区湿地内第5層出土遺物(5)
図版45 A区湿地内第5層出土遺物(6)
図版46 A区湿地内第5層出土遺物(7)
図版47 A区湿地内第5層出土遺物(8)
図版48 A区湿地内第5層出土遺物(9)
図版49 A区湿地内第5層出土遺物(10)
図版50 A区湿地内第5層出土遺物(11)
図版51 A区湿地内第5層出土遺物(12)
図版52 A区湿地内第5層出土遺物(13)
図版53 A区湿地内第5層出土遺物(14)
図版54 A区湿地内第5層出土遺物(15)
図版55 A区湿地内第5層出土遺物(16)
図版56 A区湿地内第5層出土遺物(17)
図版57 A区湿地内第5層出土遺物(18)
図版58 A区湿地内第5層出土遺物(19)
図版59 A区湿地内第5～7層出土遺物・表探遺物
図版60 B区S X-1出土遺物(1)
図版61 B区S X-1出土遺物(2)
図版62 B区S X-1出土遺物(3)
図版63 B区S X-1出土遺物(4)
図版64 B区S X-1出土遺物(5)
図版65 B区湿地出土遺物(1)
図版66 B区湿地出土遺物(2)
図版67 B区湿地出土遺物(3)

大瀬遺跡2次調査

- 図版68 挖削状況(西より) 遺物出土状況(西より) 調査区北壁土層(南東より)
図版69 包含層出土遺物(1)
図版70 包含層出土遺物(2)

船ヶ谷遺跡

- 図版71 船ヶ谷遺跡出土突帯文深鉢(1)
図版72 船ヶ谷遺跡出土突帯文深鉢(2)
図版73 船ヶ谷遺跡出土突帯文深鉢(3)

第1章 はじめに

1. 大渦遺跡をめぐる環境

(1) 地理的環境

道後平野は、その北東部を高縄半島の大部分を占める高縄山系の南西面に、また、東から南東部を四国山脈北東麓に限られ、西方の海岸線に向かって扇状に開けた沖積平野である。平野には、高縄山系に源を発し、北東から南西方向に流れる石手川と、四国山脈東三方が森に水源を持ち、西流する重信川の2大河川がある。この2河川は、それぞれいくつかの支流を集めながら西流し、西方の海岸線から約4kmの通称「出合」で合流し、伊予灘に注いでいる。平野は、これらの河川の沖積作用によって形成されている。その構成を大雑把にみてみると、平野北方の石手川扇状地、およびその西方にひろがる氾濫原、扇状地の北に延びる沖積低地、平野南方の重信川扇状地、およびその中流域以西にひろがる大規模な氾濫原に加えて、両河川の中間にあって、石手川の支流である小野川により形成された比較的小規模な扇状地などが主なものである。調査地はこの平野の北西部、松山市太山寺町に所在する水田地で、先述の石手川扇状地北方の沖積地上に位置している。この低地は東西幅約2~4km、南北長約7kmにわたってひろがる地溝性の低地で、遺跡はこの低地の北端付近、斎澤に面する現海岸線まで約2kmの位置、標高3.5mに立地している。また、東方約2kmには高縄山系の南西面を望み、西方100mには太山寺山塊の東面が迫るという立地で、遺跡は地溝性低地の最も幅狭な部分の西端に位置していることになる。

(2) 歴史的環境

大渦遺跡周辺の道後平野北西部域における遺物・遺構の確認例のうちで最も遡るものは縄文時代後期の土器片で、馬木町所在の蓬莱寺遺跡において六軒家I式とされる擦消縄文系の土器の出土^①が伝えられているが、遺構として人間の生活の痕跡が確実に確認できるのは縄文時代後期中葉以降のことである。調査地の南1kmの船ヶ谷遺跡では晚期突帯文を遡る時期の河川、杭列、住居址が多量の土器、石製品、木製品とともに検出されている^②。これらの遺跡は先述の沖積低地上に立地する遺跡であるが、この低地上での発掘調査例が少ないこともあって、これ以降弥生時代を通じて顕著な矣落の確認例がない。ただ、単発的な遺物の出土例はいくつかあって、調査地南0.5kmの市営三光閉地内において近年行われた大渦遺跡3次調査で中~後期の土器が流路内から出土している^③ほか、堀江遺跡では前期前葉の重弧文小壺が出土している^④。この低地周辺で弥生時代の遺構・遺物が多く確認されているのは低地を臨む周辺の丘陵麓、あるいは麓から低地にいたる緩斜面上である。主な遺跡を挙げておくと、溝から前期中葉の土器とともに板鋤、柳葉形磨製石鋤などを出土した山越遺跡2次調査地^⑤、前期中~後葉の貯蔵穴・土坑などとともに炭化米、リヨクトウなどの炭化種子が検出された石風呂町鶴が岬遺跡^⑥、弥生時代各期の遺物の出土のうち、前期突帯文系壺の出土が特徴的な谷町庭拌坂（ざわいざ

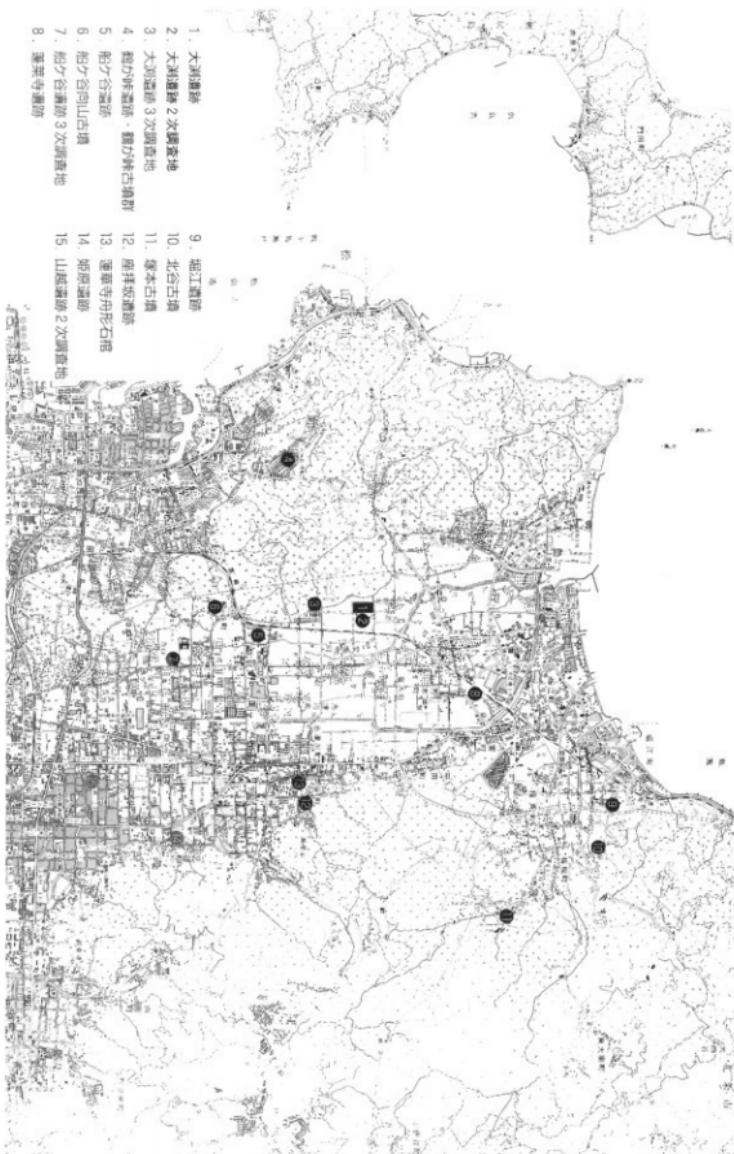


図1 調査地と周辺の主要遺跡 (S=1:50,000)

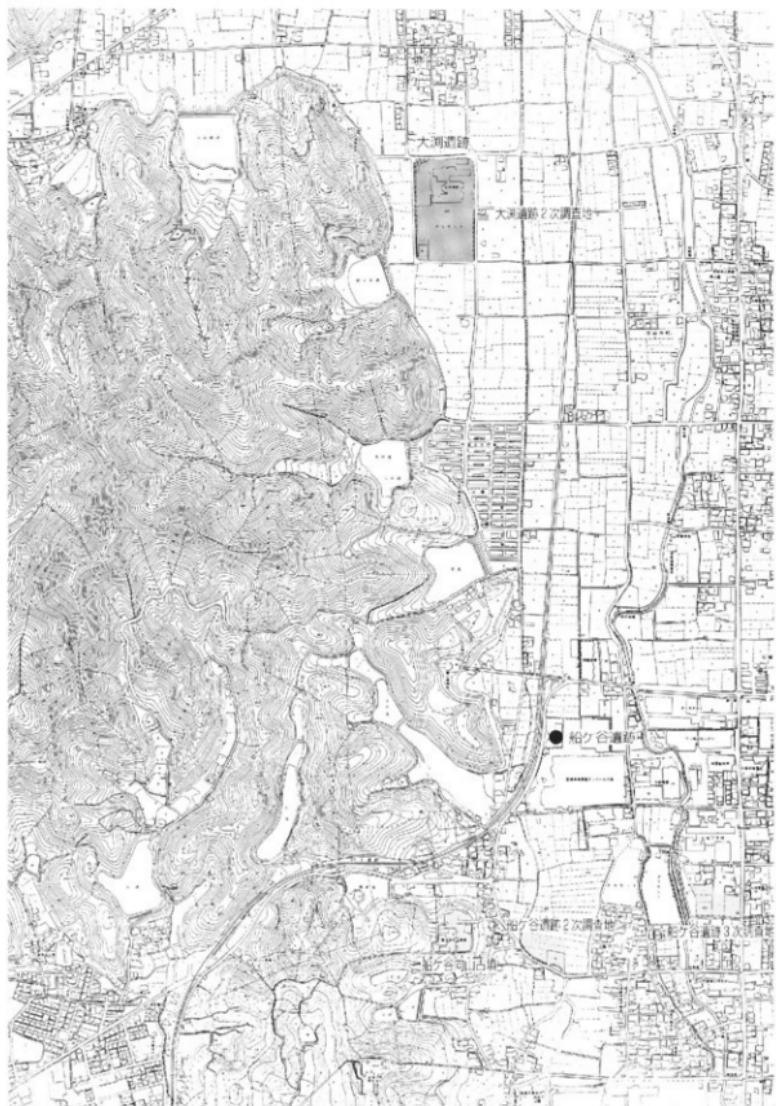


図2 調査地と周辺の主要遺跡 ($S=1:50,000$)

か) 遺跡^⑦、中～後期の溝を多く検出し、なかでも後期の円形周溝状遺構の検出で注目される姫原遺跡^⑧などがある。

弥生時代に統いて、古墳時代の集落そのものの確認例も多いものではなく、先述の大河遺跡3次調査で前期の竪穴式住居数棟と古式土師器を多量に出土する流路や後期の掘立柱建物数棟が検出されている程度である。これに対して古墳そのものは周辺の丘陵上に数多く分布している。太山寺山塊北面の勝岡町高月山古墳群の7基の古墳のうち2号墳は、箱式石棺を主体部とする小長方墳で、周溝内より布留I式期併行の土師器壺や銅鏡を出土しており、この地域のみならず平野内でも最も古い段階の古墳のひとつである^⑨。この古墳群の周辺には同様に箱式石棺を主体部とする古墳群、赤子谷古墳群、坂浪古墳群などが分布しており、この坂浪古墳群中の塔ノ口山古墳では長宜子孫銘内行花文鏡、画像鏡の2面の鏡片が出土し、古い段階の首長墳ともいわれているが、須恵器や人物埴輪等の出土も伝えられており、墳形・主体部とともにその実態については不明な部分が多い^⑩。同じく太山寺山塊に属する古墳群で発掘調査が行われたものなかには石風呂町所在の鶴が峰古墳群がある。この古墳群では宅地造成に伴って5世紀末から7世紀前半までの各期の古墳20数基が調査されたが、これらのうちでも形象埴輪を伴う5世紀末の円墳群が注目を集めている^⑪。その他、調査地南1.5kmの低丘陵上にかつて存在した小規模な前方後円墳船ヶ谷向山古墳では、くびれ部円筒埴輪樹立列とともに馬、鶏、雀などの形象埴輪が出土しており、やはり5世紀末頃の年代を与えられている^⑫。

沖積低地東方の高繩山系南西麓にも多くの古墳群が分布しているが、そのなかでも福角町所在の市指定文化財北谷古墳^⑬や権現町所在の塚本1号墳^⑭など、大型石材を用いた横穴式石室を主体部とする6世紀末から7世紀前半代の円墳・方墳というこのエリアでの首長系譜に連なる古墳がよく知られている。また、湖見古墳群内に属する谷町室岡山蓮華寺境内には、阿蘇溶結凝灰岩を削りぬいた舟形石棺の身部がある^⑮。出土地、出土状況等の詳細は不明だが、県内唯一の削りぬき式石棺の例であり、瀬戸内海上交通ルートの要衝の一角を道後平野北部が担っていたことがしのばれる。

古代以降のこの地域についても不明な部分が多く、座拵坂遺跡の奈良～平安時代の2棟の掘立柱建物、あるいは姫原遺跡の溝、また船ヶ谷遺跡3次調査の掘立柱建物、柵列、井戸等で構成された中世村落遺構^⑯などが知られている主なものである。

以上、簡単に道後平野西北部の遺跡について概観してきたが、古墳時代の阿蘇溶結凝灰岩舟形石棺の存在からしのばれる海上交通ルートの一点、また京灘に面し中世河野氏の重要な港湾であった和氣・堀江湾の現在に至るまでの港湾としての重要性を考えるとき、その萌芽は本書で述べられるように、遡って縄文晩期には既に確認できるのである。

註

①『松山市史料集 第2巻 考古編 II』 松山市教育委員会 1987

②阪本安光『松山市・船ヶ谷遺跡』 愛媛県教育委員会 1984

③吉岡和哉「大河遺跡3次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報 11』 松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1999

④長井教秋「農耕文化の形成と発展」「愛媛県史 原始・古代 I」 愛媛県教育委員会 1982

⑤梅木謙一・武正良浩「山越遺跡－2次調査－」「山越・久万ノ台の遺跡」松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1993

組 織

- ⑥西尾幸則「鶴が峰遺跡」「愛媛県史 資料編 考古」愛媛県教育委員会 1986
- ⑦松村 淳ほか「平井坂遺跡」「和氣・堀江の遺跡」松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1993
- ⑧相原浩二「姫原遺跡」「和氣・堀江の遺跡 II」松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1993
- ⑨宮崎泰好「高月山古墳群調査報告書」松山市教育委員会 1988
- ⑩ 前掲註①文献
- ⑪西尾幸則「鶴が峰古墳群」「愛媛県史 資料編 考古」愛媛県教育委員会 1986
- ⑫池田千子・宮崎泰好「船ヶ谷向山古墳」「松山市埋蔵文化財調査年報 II」松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1991
- ⑬岡野 保「北谷古墳（墳丘・石室実測調査報告書）」松山商科大学史跡研究会 1980
- ⑭栗田茂敏「北谷王神ノ木古墳・塚本古墳」松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1991
- ⑮藤田憲司「鐵岐の石棺」「倉敷考古館研究集録 第12号」倉敷考古館 1976
- ⑯加島次郎「船ヶ谷遺跡－3次調査地-」松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1999

2. 組 織

大瀬遺跡調査組織

松山市教育委員会 教育長 西原多喜男
文化教育課 課長 伊賀俊輔
課長補佐 大野衛治
第二係長 戸田 浩
△主任 西尾幸則
△主事 重松佳久
△調査員 栗田茂敏（A区担当）
宮崎泰好（B区担当：平成3年退職）

調査地 愛媛県松山市太山寺町甲496~498外

調査期間 1987（昭和62）年7月4日~11月2日

調査面積 4,500m²

はじめに

大渕遺跡 2次調査組織

松山市教育委員会 教育長 平井 亀雄
文化教育課 課長 渡部 忠平
課長補佐 大野 衛治
第二係長 西 伸二
△主任 西尾 幸則
△主事 重松 佳久
△主事 栗田 正芳
△調査員 宮崎 泰好（平成3年退職）
武正 良浩

調査地 愛媛県松山市太山寺町甲474-3

調査期間 1989（平成元）年6月7日～7月3日

調査面積 251m²

刊行組織

松山市教育委員会 教育長 池田 尚郷
事務局局長 園上 和敬
次長 森脇 将
△赤星 忠男
文化教育課 課長 松平 泰定

（財）松山市生涯学習振興財團

理事長 中村 時広
事務局長 二宮 正昌
△次長 河口 雄三

埋蔵文化財センター

所長 河口 雄三
次長 田所 延行
調査係長 田城 武志
主任 栗田 正芳（文化教育課職員）
担当 栗田 茂敏

第 2 章

大 涉 遺 跡



第2章 大渕遺跡

1. 調査に至る経緯

1989（平成元）年4月、松山市北西部の太山寺町に松山市立鴨川・内宮中学分離新設校として「松山市立北中学校」が開校した。当時、建設予定地は松山市の指定する包蔵地には含まれてはいなかつたが、周辺地域で点的にみられる遺物の採集例や、教育施設建設に伴う大規模開発ということも鑑みて、建設着手に先立つ1987（昭和62）年7月、松山市教育委員会（以下、市教委）は建設予定地内において試掘調査を実施し、埋蔵文化財の有無の確認を行った。この結果、南北160m、東西100mの合計16,000m²におよぶ用地のうちの2箇所において、縄文時代を中心とした遺物を包含する土層が検出された。このため、市教委はこの2地点について発掘調査を実施することとし、北方の約1,000m²の地点をA区、南方の約600m²をB区としてそれぞれに担当者を置いて7月4日より2ヶ月の予定で発掘調査を開始した。しかし、予想を上回る遺物の出土や多量の湧水による調査行程の遅れから、結果として、一定程度の成果を上げ調査を終了できたのは、4ヶ月後の11月2日のことであった。

2. 調査の概要

（1）調査区と層位

試掘調査では、図4のような配置で用地にトレーンチを配置した。トレーンチは北からT1、T2……T9となっている。この結果、T2、T3、T7において遺物を包含する土層が確認された。このため、T2、T3周辺を拡張して掘り下げ、この約1,000m²の調査区をA区とし、またT7周辺の拡張区約600m²をB区として調査を行った。

調査地の層位をA区の湿地状地形を例に述べておくと、水田である調査地の現耕作土（第1・2層）下層には、第3層黄灰色粘土層が10~15cm堆積しており、この層に古墳時代から中世に至る遺物が少量含まれている。この第3層の直下には黄色シルトの無遺物層があり、この黄色シルトを切り込んだ古墳～中世の遺構の存在が予想されたが、該期の遺構は全く検出されなかった。この黄色シルトは用地全体にひろがっており、後述する縄文時代晚期の各遺構はこの黄色シルトをベースとして検出されている。先にも述べたように第3層の直下で黄色シルトが検出される場合が多いが、ところによってはその間に第5層暗茶褐色シルトが介在する部分もある。第4層暗緑褐色粘質土は、部分的に第5層の上位で検出される基本的には無遺物の層で、第3層との間には黄色の粗砂が間層として挟まっている。このような層のあり方から下位の第5層に含まれる縄文晚期の遺物が4層に僅かに混入する場合もある。第5層以下の土層は、黄色シルトをベースとして落ち込む湿地状地形の中に堆積している層で、第5層から9層までの間に縄文時代の遺物が含まれている。第5層は多いところでは40cm程度の厚さで堆積しており、下位に向かって漸移的に微砂質となるがラインがひけるような分層はできない。第6層は第5層が漸移的に砂質を帯びてきたものが明確に微砂と認識できる層で、色調は第5層と変

わらない。この第5・6層に縄文晩期後半の遺物が含まれる。第7層は第6層と色調を異にして黄灰色を呈するが、粒度は第6層と同様の微砂である。第8層は黄灰色粗砂、第9層は中粒砂層と腐蝕質の粘土層が互層のような状態で堆積しており、この腐蝕質粘土帯を目安に上から9A、9B、9C層としている。第7層から第9層までの間には縄文後期中業から晩期後半までの遺物が混淆状態で含まれている。第9C層の下位には腐蝕質粘土が一面に堆積し、その下層に第10層がある。この層は径0.2~1cm大の亜角礫を含む青灰色砂礫層で遺物は含まれていない。この第10層まで、地表面からの深さは1.5m、湧水のため掘削はこれまでが限界であった。なお、この第10層までの掘削も調査区全域で行われたわけではなく、A区内の2×4m程度の範囲で、調査最終段階に行われたものである。

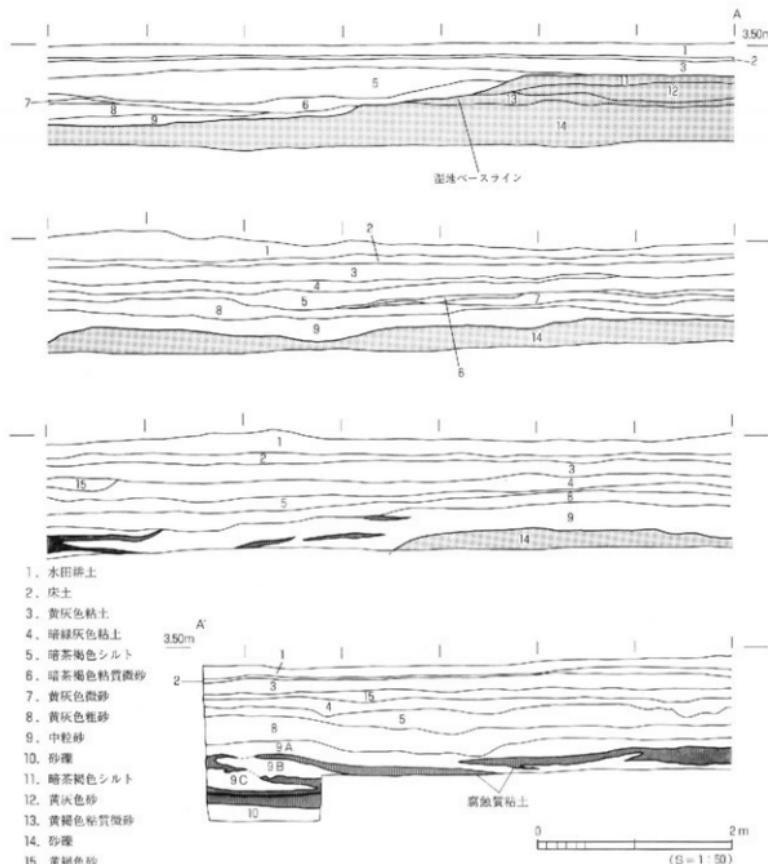


図3 A区A~A' ライン土層図

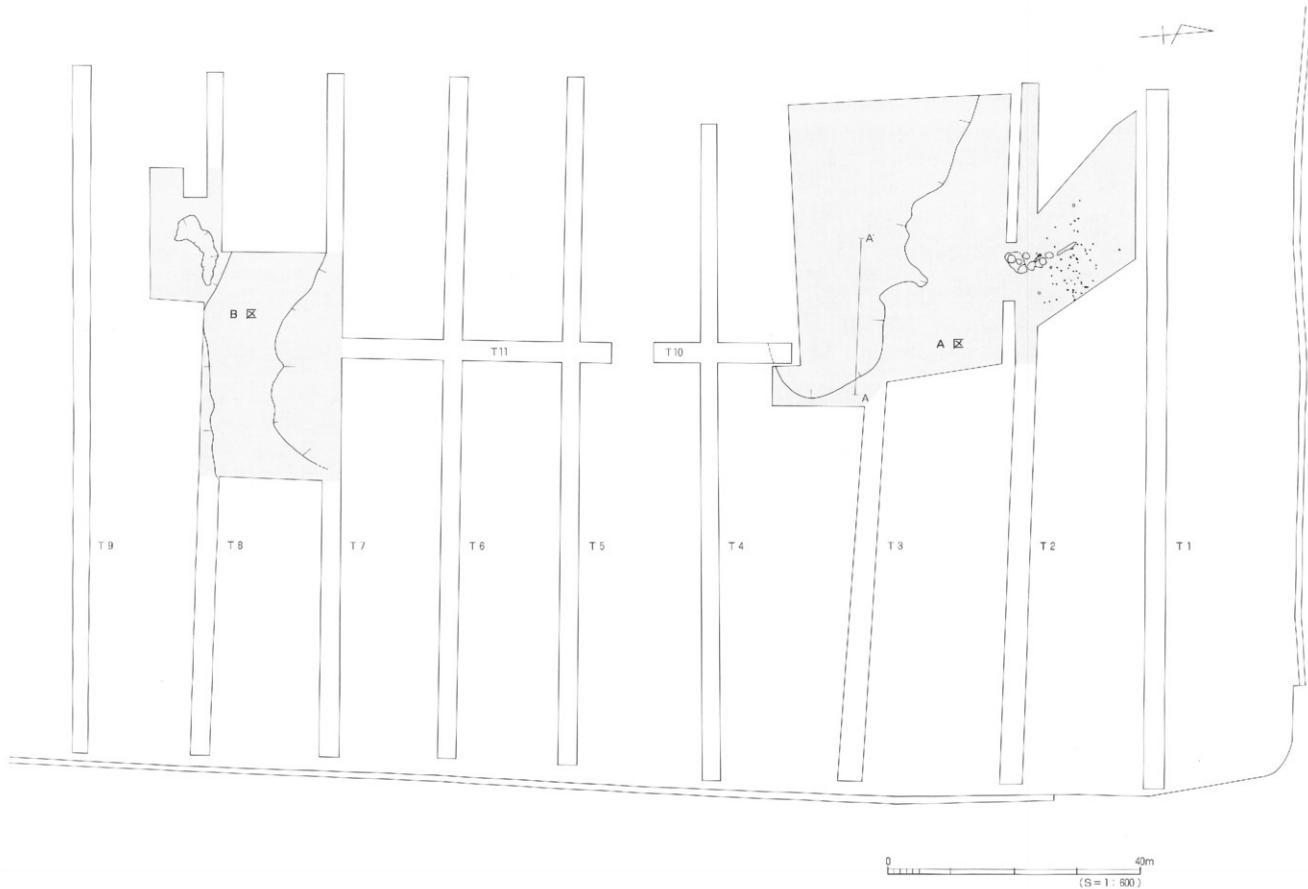


図4 トレンチの配置と調査区

(2) A区の調査

1) 遺構の調査

A区としているのは用地北西部の約1,000m²の調査区で、試掘トレンチT2、T3を拡張して設定された調査区である。この調査区では、北東から南西に落ち込む湿地状地形の汀が総長60mにわたって検出された。また、この汀から北へ20~30mの地点で9基の土坑や柱穴群が検出されている。切りあいによる前後関係はあるにしても、大きくは層位的に土坑と柱穴は同じ時期のもので、柱穴は60基あまり検出されたが建物を復元できるような配置での検出はなかった。そのほか溝状を呈する遺構や不整形の窪みなどが数基検出された。

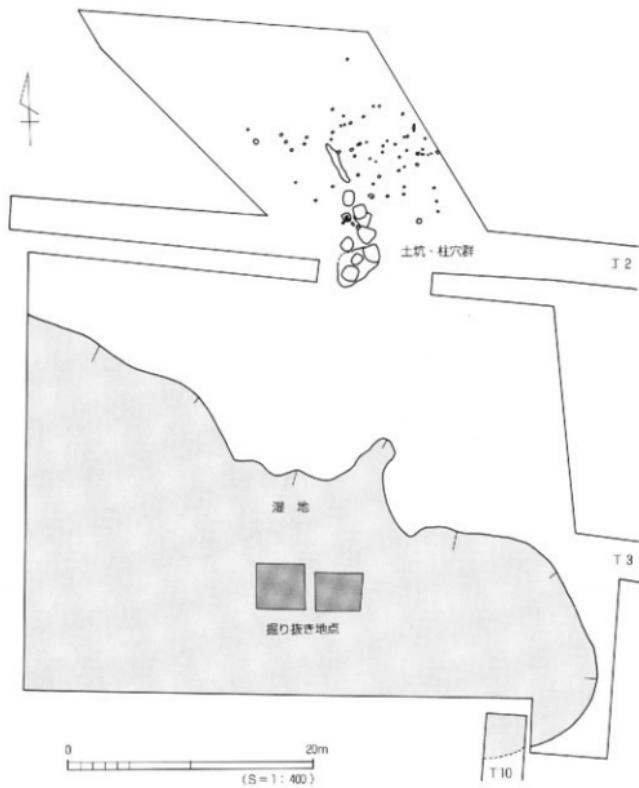


図5 A区全測図

大 面 遺 跡

① 土 坑

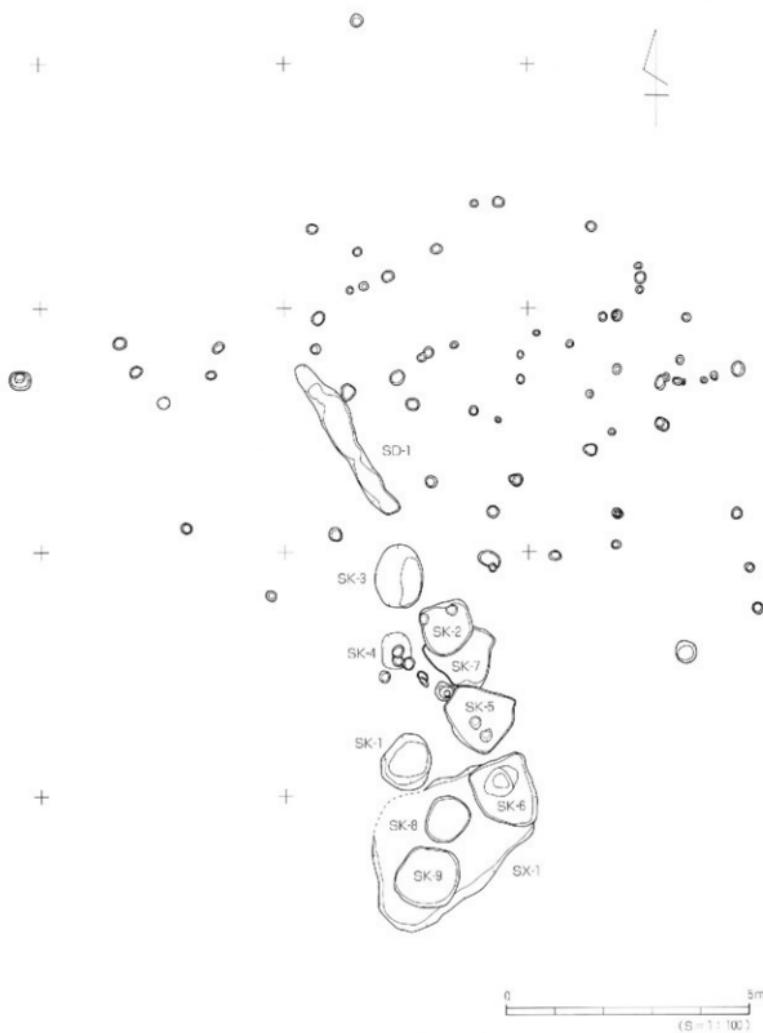


図 6 A 区北半土坑・柱穴群

調査の概要

SK-1 (図7~10)

長径120cm、短径100cmの椭円形に近い平面プランで、深さ35cmを測る。埋土は大きく上下2層に分けられ、そのうちの上層に遺物が、下層の砂質土に木炭や焼土のブロックが混じっている。

9点出土している深鉢のうち、口縁部がさほど外反せず、砲弾形に近い形態の2は、口縁部にリボン状の突起と、刻み目を持ち、また、胴部上位にはD字形の浅い刺突列点文を施される。胎土に大きめの長石粒を含むため、外面の削りは荒々しく見える。3は頭部から口縁部が外反するものであるが、口端面を刻まれるのみでなく、口縁部内面や頸胴界に刺突を施されている。その他、頭部に2条以上の単位の沈線で山形文を施されるものや頸胴界に半裁竹管文を持つものがある。これらの深鉢に混じって口縁部をやや下がった部位に刻み目突起が確認できる小破片5が1点ある。浅鉢のうち口縁部が二段に屈曲し、端部を玉縁状に肥厚するものには、12のように頭部で一旦外反し、形態的にも頸胴界が明確などちらかといえど深鉢に近い形態のものと、13のような単純な形態のものがある。13には蟠状突起が伴う。これらの浅鉢に混じて逆「く」の字形に屈曲する口縁部小破片がある。14はサヌカイトの素材剥片である。

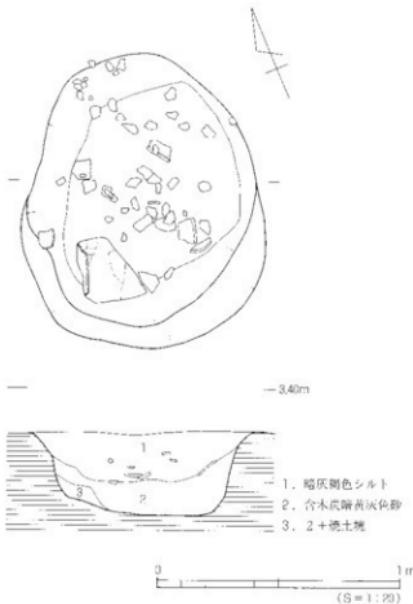


図7 土坑SK-1

大測遺跡

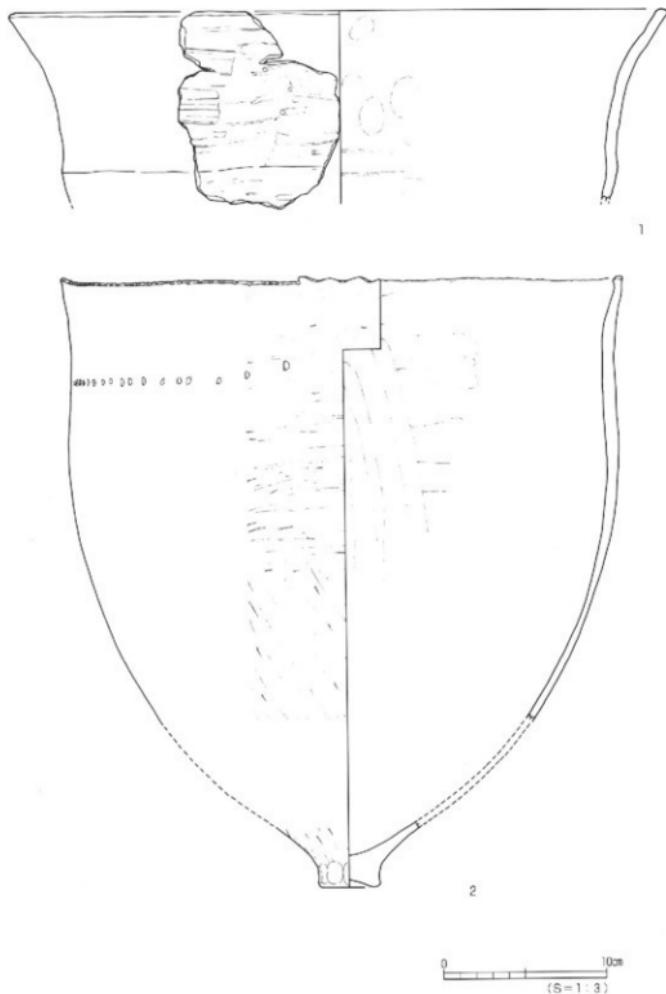
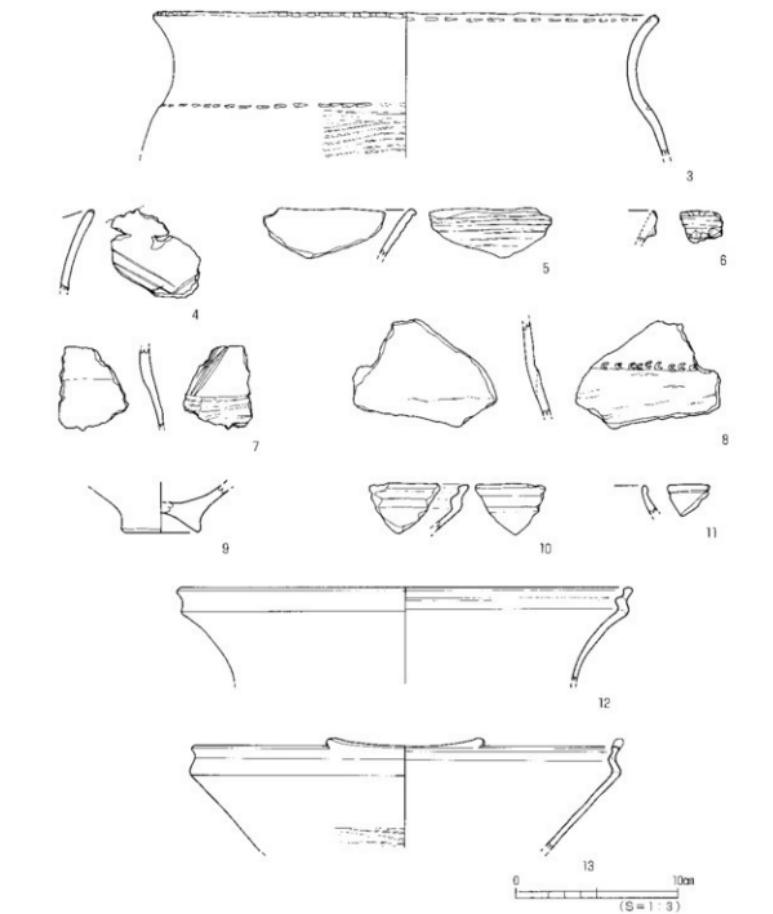


図8 A区SK-1出土遺物実測図(1)

器名 番号	各 種	圓 形		口 縁		突 起		色 調		そ の 他
		外 面	内 面	輪廓形	崩 み	輪廓形	崩 み	内 面	外 面	
1	深体 二枚貝塗板。	二枚貝塗板。	二枚貝塗板→テグス	直	無	直	無	灰褐色	藍褐色	云母・砂粒多含。
2	深体 二枚貝塗板。	二枚貝塗板。	ヨコ方向ナゲ→テグス方向ナゲ。	直	D字形	直	無	灰褐色	灰褐色	剥外・鉄穴。

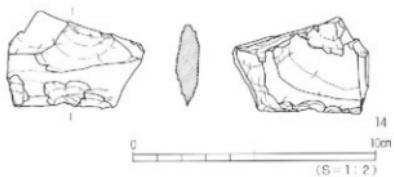
調査の概要



件名 番号	深		径		口	縁	突		倍	色	圖	その 他
	外 面	内 面	直	曲			溝	割				
3 錐鉢 口一頭:ミガキ。胸:ケズリ。 ミガキ?					圓	丸形	頭面割	脚		黒褐色	波状捲	口周内墨、鋸削系剥光。
4 錐鉢 ナデ。					丸	D字形				黒褐色	脚部捲文。	
5 錐鉢 —枚貝条痕。					圓					黒褐色		
6 錐鉢 ナデ。	不規。				圓	丸形	台形	D字形		褐褐色		
7 錐鉢 頭:ナデ。胸:ケズリ。 ナデ。										灰褐色	波状捲	
8 錐鉢 頭:ナデ。頭:柔板。										褐色	波状捲	
9 錐鉢 マドリ。	マドリ。									深褐色	波状捲	
10 錐鉢 ミガキ?	ミガキ。									明灰褐色		
11 錐鉢 ミガキ?	ミガキ。					頭形				暗褐色		
12 錐鉢 ミガキ?	ミガキ。					頭形				生褐色		
13 錐鉢 II:ミガキ。底:一枚貝条痕。 ミガキ。	II:ミガキ。					頭形				灰褐色	灰褐色	ヒレ状尖鉢。

図9 A区SK-1出土遺物実測図(2)

大潤遺跡



件名 番号	器種	石材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他
14 素材剖片		セスカイト		3.9	55	0.9	25.5	

図10 A区SK-1出土遺物実測図(3)

SK-2 (図11~13)

一辺100cm前後の隅丸方形に近い平面形を呈し、最も深い部分で10cm程度しか遺存していない。遺物は浮いた状態での出土で、実際この遺構に伴うものか包含層の遺物であるのか微妙ではある。固化可能な土器は突帯文深鉢の口縁部小片2点、両者ともに摩滅や欠損のため口端部刻み目の有無は不明である。16では突帯そのものも剥離してしまっている。斜格子状の沈線による頸部施文が施されている。

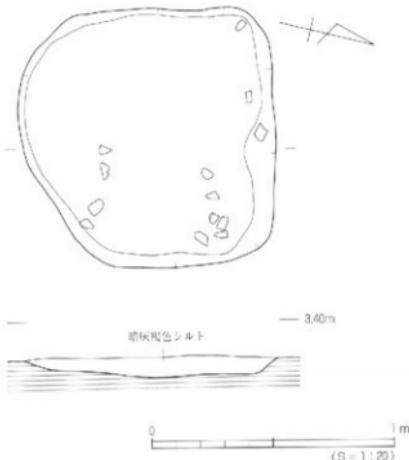
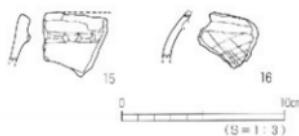


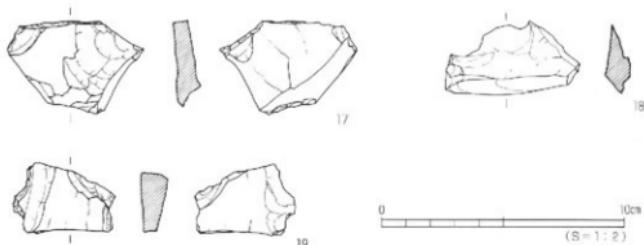
図11 土坑SK-2



件名 番号	器種	外面	内面	口縁	施文	突起部	色調	その他
15 深鉢	マメフ。	ミガキ。	面	マメフ	滑面	円み	内面 黒褐色	外面 淡褐色
16 深鉢	ナゲ。	ナゲ。	面	ナゲ	滑面	W字形	黒褐色	淡褐色

図12 A区SK-2出土遺物実測図(1)

調査の概要



図面 番号	着 板	石 材	残 存 度	長 さ(cm)	幅 (cm)	厚 さ(cm)	重 量(g)	そ の 他
17	素材剥片	サスカイト		3.8	5.5	1.0	22.1	
18	素材剥片	サスカイト		5.0	3.1	1.0	13.0	
19	素材剥片	サスカイト		2.8	4.3	1.2	15.0	

図13 A区SK-2出土遺物実測図(2)

SK-3 (図14)

長径130cm、短径100cmの椭円形、深さ5cm程度の遺存で、ほとんど窪みのような遺構である。遺物の出土はない。

SK-4 (図15・16)

80×60cm程度の開丸長方形に近い平面形で、浅い深皿状の断面形を呈する。これも窪みのよ

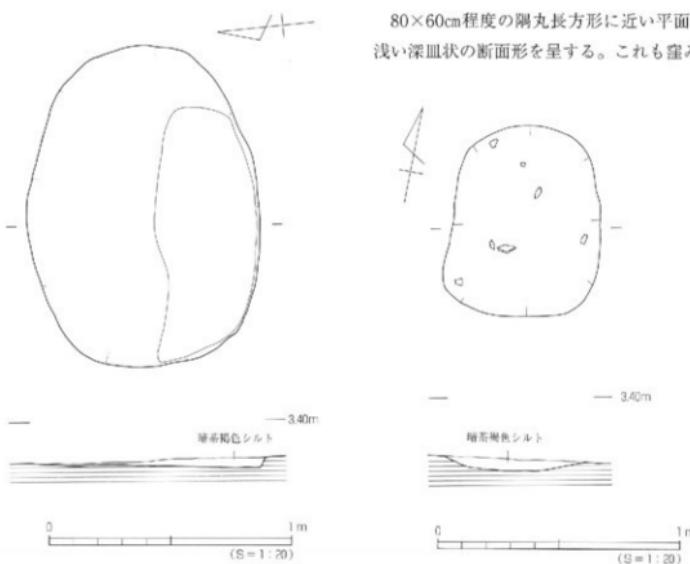
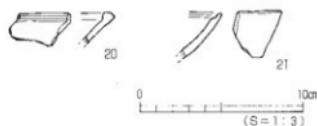


図14 土坑SK-3

図15 土坑SK-4

大河遺跡

うな遺構で、図化可能な土器は浅鉢口縁部小片2点である。20は口端部を内面に玉線状に肥厚させるもので、外反する頸部と強く張る胴部を持つ個体と思われる。21は椭状の鉢、口縁部内面に沈線1条が巡る。



件名	器種	測定		口縁		実帶		色調		その他の
		外面	内面	溝部形	粗み	断面形	粗み	内面	外面	
20	浅鉢	(ミガキ)	(ミガキ)	丸				淡灰色	淡灰色	
21	浅鉢	(ミガキ)	(マメフ)	尖				灰白色	灰白色	

図16 A区SK-4出土遺物実測図

SK-5 (図17~19)

不整形、どちらかといえば台形に近い平面プランで、深さ10cmの遺存である。埋土に灰状土や焼土塊が含まれている。有文深鉢の頸部片2点と突帶文深鉢の口縁部1点が出土している。浅鉢には皿状のものと、二段に屈曲し鱗状突起を持つ口縁部がある。その他、サスカイトのスクレイバー1点と剥片3点の出土があるが、剥片30には使用痕が観察できる。

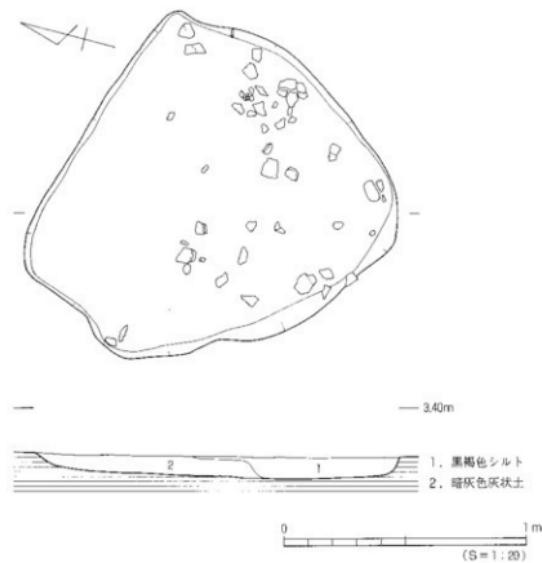


図17 土坑SK-5

調査の概要

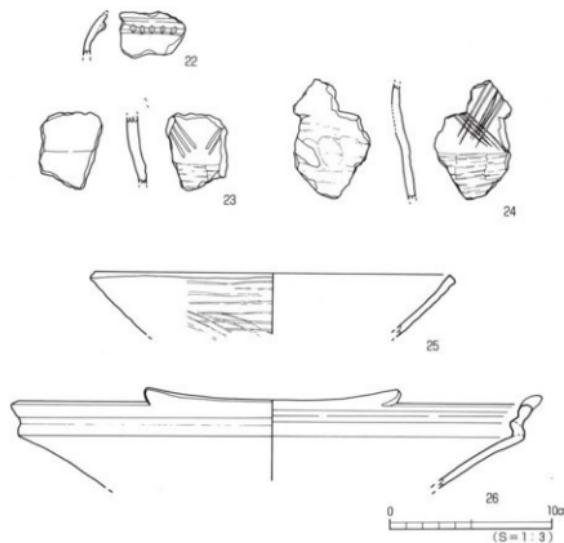
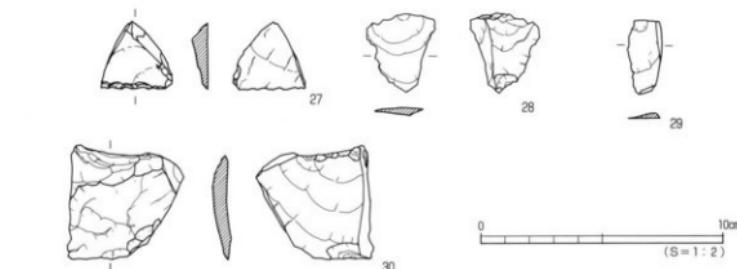


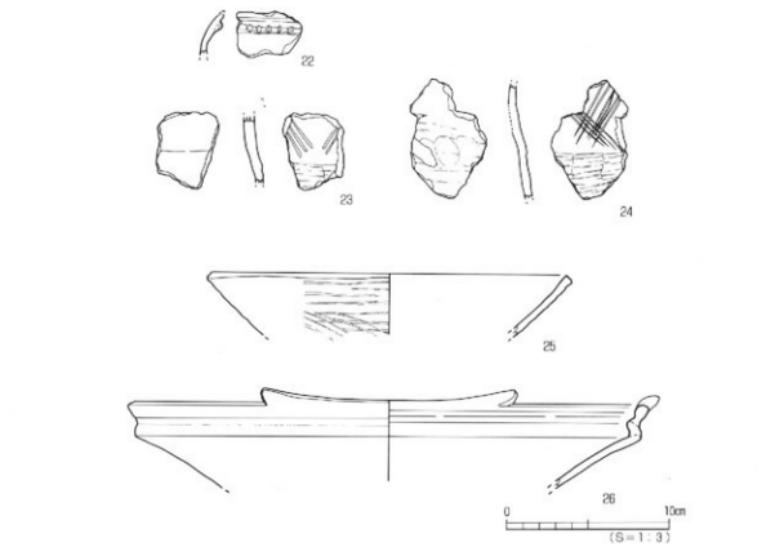
図18 A区SK-5出土遺物実測図(1)



種類 番号	器種	石 材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他の 記述
27	スケレバー	サヌカイト		2.8	3.0	0.6	4.4	
28	素材剥片	サヌカイト		3.25	2.8	0.3	0.4	
29	素材剥片	サヌカイト		3.0	1.45	0.2	0.2	
30	素材剥片	サヌカイト		4.6	4.8	0.8	21.6	

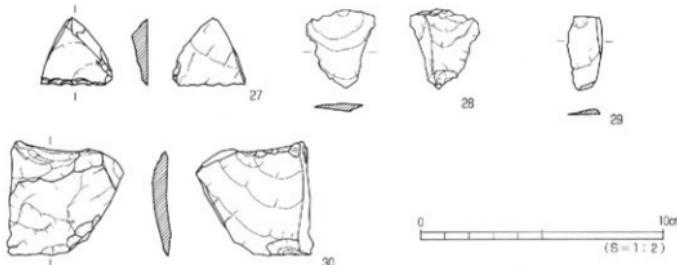
図19 A区SK-5出土遺物実測図(2)

調査の概要



埠固 番号	器 種	裏 外 面	裏 内 面	口 縁	突 部	色 調	その 他
22	深鉢	マツツ。	ミガキ?				
23	深鉢	裏:ナデ。割:ケズリ。	ナデ。		台形	D字形	黒褐色 深褐色
24	深鉢	裏:ナデ。割:ケズリ。	ナデ。				深褐色 深褐色
25	浅鉢	二枚貝壳。	ミガキ。	直			淡黄灰色 淡黄灰色
26	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	直			明灰褐色 明灰褐色 ヒレ状突起。

図18 A区SK-5出土遺物実測図(1)



埠固 番号	器 種	石 材	残 存 度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重 量(g)	その 他
27	スクリーパー	サヌカイト		2.8	3.0	0.6	4.4	
28	基材削片	サヌカイト		3.25	2.8	0.3	0.4	
29	基材削片	サヌカイト		3.0	1.45	0.2	0.2	
30	基材削片	サヌカイト		4.6	4.8	0.8	21.6	

図19 A区SK-5出土遺物実測図(2)

SK-6 (図20~22)

SK-5の南に隣接して検出された土坑で、SK-8・9とともに不整形の竪穴SK-1を切る。平面形態、規模ともにSK-5に類似するが、二段堀りに深くなる部分がある。この部分の底近くには木炭層が検出された。深鉢口頭部31はこの深くなった部分の木炭層上面からの出土で、木炭層以下の遺物の出土はない。31は胴が張り、頭部ですばまって口縁部が若干外反する形態で、口端部は外斜め下方に傾いた面をなし、この面の上端・下端とともに横丸形に軽く押圧された刻みを持っている。頭胴界にみられる小さな段は、これより上位の条痕、以下の条痕の後のナデといった調整の違いによって生じたものである。また、条痕調整の頭部には沈線による斜格子文を持つ。浅鉢口縁部小片35は、口端部に粘土帯を貼り付け、玉環状に内面に肥厚させている。

SK-7 (図23)

SK-2とSK-5に切られた不整形の窪みのような遺構である。遺物の出土はない。

SK-8 (図24・26・27)

長径100cm、短径80cmの椭円形に近い平面形の土坑で、SK-1を切る。頭胴界に刺突列点文を持つ深鉢や波状口縁浅鉢を出土している。この浅鉢の口端部にはD字形の刻みが施されているが、この刻みは波頂部近辺にのみ施されるものである。

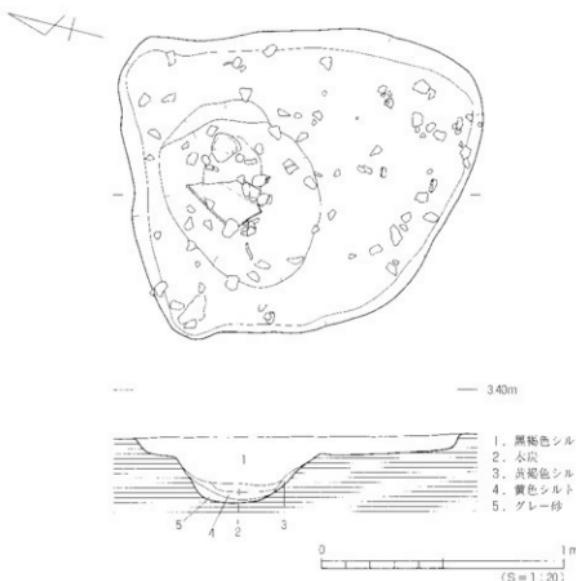


図20 土坑SK-6

調査の概要

SK-9 (図25・28・29)

直径140cm前後の不整円形、SK-6・8とともにSX-1を切るが、遺物にはSX-1と混じつてしまっているような印象を受ける。遺物はすべて小片で突帯文深鉢や、逆「く」の字口縁の浅鉢、あるいは浅鉢の鱗状突起などがある。逆「く」の字口縁には、53のように極端に短いものや54のように長いものがある。

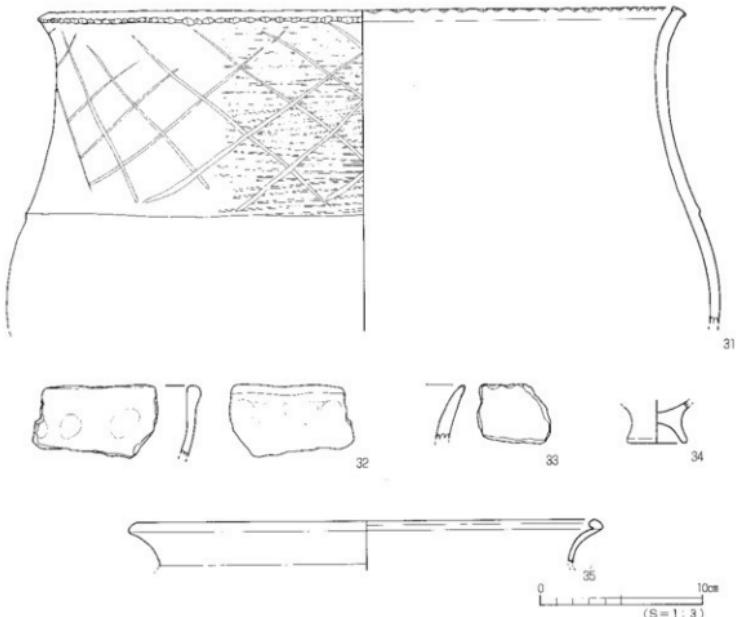
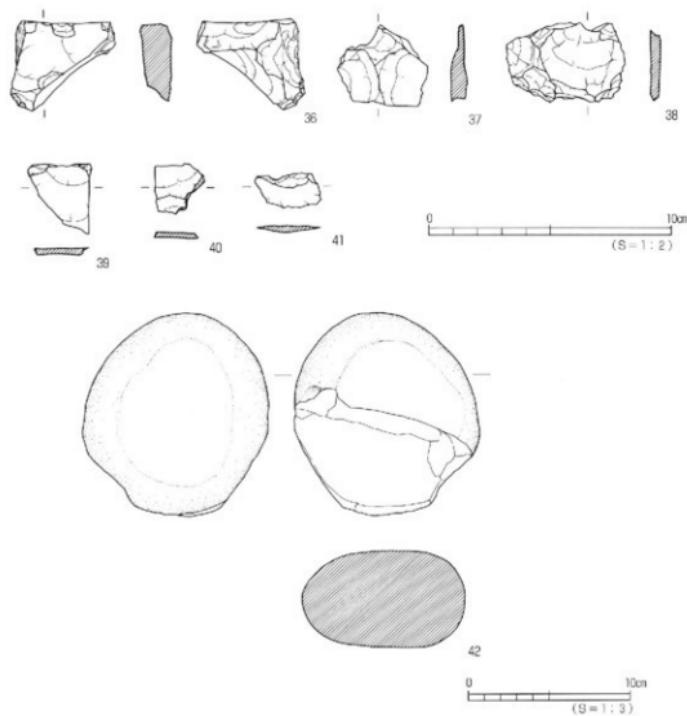


図21 A区SK-6出土遺物実測図(1)

番号	品種	調査		II 縫合	突 起	帶	色	縫	その他の
		外 面	内 面						
31	深鉢 網：条痕。羽：条痕→ナデ。	ケズリ。ナデ。	面 裏形	縫合	無面形	網み	内面 外面	淡褐色 淡褐色	II号外縫割み。
32	深鉢 マメツ。	マメツ。	丸	—	—	—	—	淡褐色 灰褐色	—
33	深鉢 ナデ。	ナデ。	尖	丸形	—	—	—	深褐色 淡褐色	—
34	浅鉢 ナデ。	ナデ。	—	—	—	—	—	灰褐色 灰褐色	—
35	浅鉢 ミガキ。	マメツ。	丸	—	—	—	内面 外面	灰白色 灰白色	II號王縫状内面肥厚。



種別 番号	石 器 種	石 材	残 存 度	長 さ (cm)	幅 (cm)	厚 さ (cm)	重 量 (g)	そ の 他
36	骨材剥片	サヌカイト		3.7	4.4	1.3	20.6	
37	骨材剥片	サヌカイト		3.3	3.7	0.7	10.0	
38	骨材剥片	サヌカイト		3.2	4.9	0.4	0.9	
39	骨材剥片	サヌカイト		2.9	2.6	0.3	0.4	
40	骨材剥片	サヌカイト		2.1	2.1	0.3	0.2	
41	骨材剥片	サヌカイト		1.5	2.8	0.3	0.2	
42	搬入石	安山岩	欠損	12.4	11.4	6.2	1,000.0	

図22 A区SK-6出土遺物実測図(2)

調査の概要

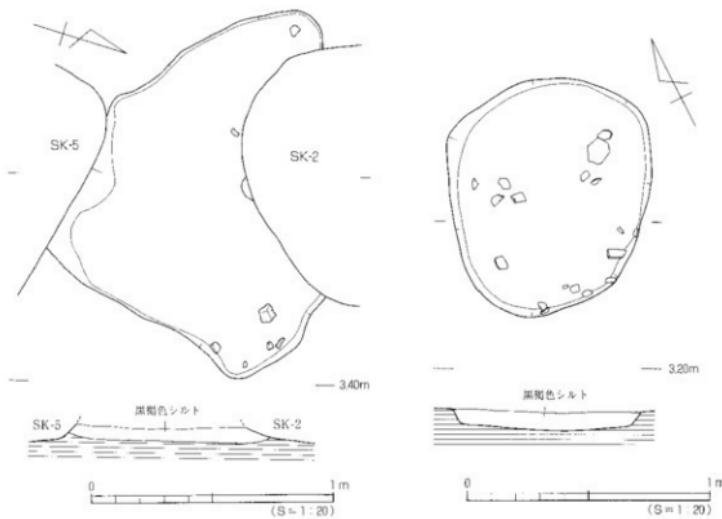


図23 土坑SK-7

図24 土坑SK-8

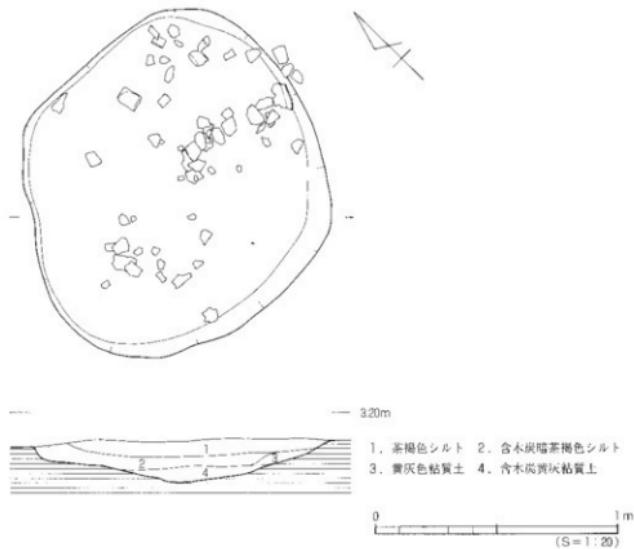
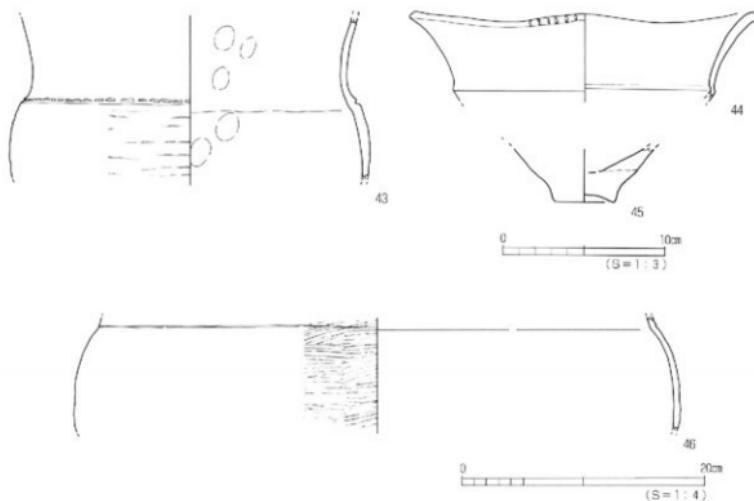


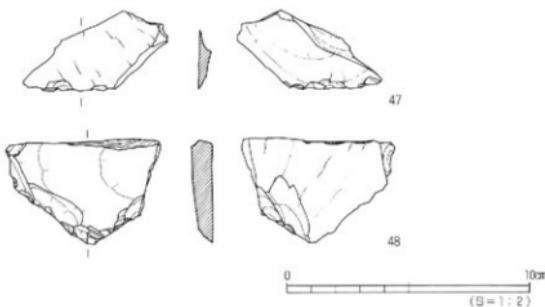
図25 土坑SK-9

大 洞 道 跡



號 団 番 号	器 様	洞		縫		口		縫		突		重		色		圓		その 他
		外	内	面	面	縫合形	断面形	縫	面	内	外	面	面	内	外	面	面	
43	深鉢	浅口ナゲ	削：全剥。	ナゲ。										黒褐色	赤褐色			深褐色斜光。
44	深鉢	マメフ。		ミガキ。			D字形							黒褐色	褐褐色			
45	浅鉢	マメフ。		マメフ。										灰褐色	棕褐色			
46	浅鉢	二枚貝貝殻。		ナゲ。										黒褐色	棕褐色			

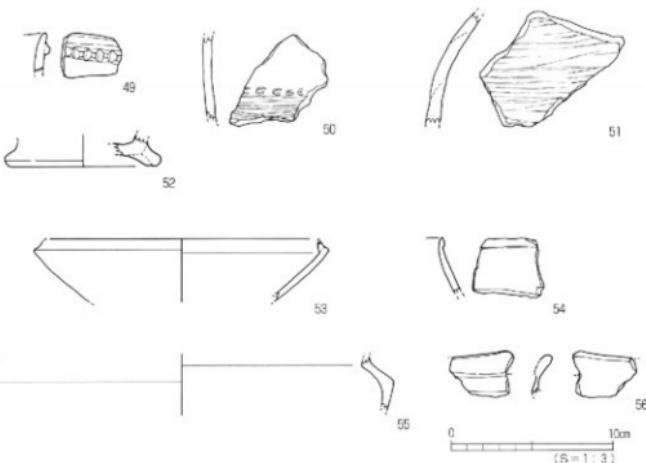
図26 A区SK-8出土遺物実測図(1)



號 団 番 号	器 様	石 材	残 存 度	長さ(cm)		幅(cm)		厚さ(cm)		重量(g)		その 他
				長	幅	幅	厚	厚	重	厚	重	
47	スクレーパー	サヌカイト		3.3	5.9	0.5				0.8		
48	石材剝片	サヌカイト		4.1	6.3	0.8				31.0		

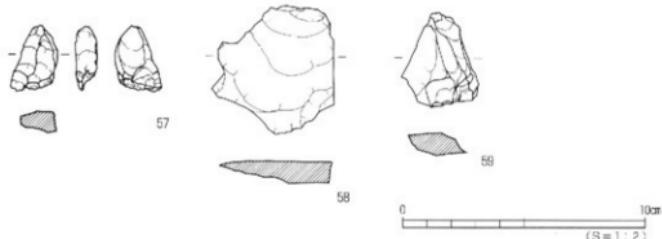
図27 A区SK-8出土遺物実測図(2)

調査の概要



番号	器種	表面		裏面		口縁		実際		色調		その他の
		外	内	馬面形	斜み	直面形	斜み	D字形	内	外	前	
49	深鉢	マメツ。	マメツ。		丸				棕褐色	埋褐色		
50	深鉢	底:ナゲ。斜:二枚貝条板。	マメツ。						淡褐色	褐褐色	強調界割合。	
51	深鉢	底:赤き貝条板。	ナゲ。						淡褐色	淡褐色		
52	深鉢	マメツ。	マメツ。						褐色	淡褐色		
53	浅鉢	マメツ。	不明。		尖				褐色	淡褐色		
54	浅鉢	マメツ。	よがせ?		尖				褐色	淡褐色		
55	浅鉢	マメツ。	ナゲ。						灰褐色	褐色		
56	浅鉢	マメツ。	マメツ。	丸					淡灰褐色	淡褐色	ミレ状層面。	

図28 A区SK-9出土遺物実測図(1)



番号	器種	石 材	残存度	反さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他の
57	石材剥片	サスカイト		2.7	2.0	0.8	4.4	
58	石材剥片	サスカイト		5.2	5.0	0.9	20.8	
59	石材剥片	サスカイト		3.9	3.2	1.1	10.5	

図29 A区SK-9出土遺物実測図(2)

② 不明遺構

SX-1 (図30・31)

4×2.5m程度の不整形の窪みで、SK-6・8・9に切られている。土器細片を僅かとサヌカイト剥片の出土があった。

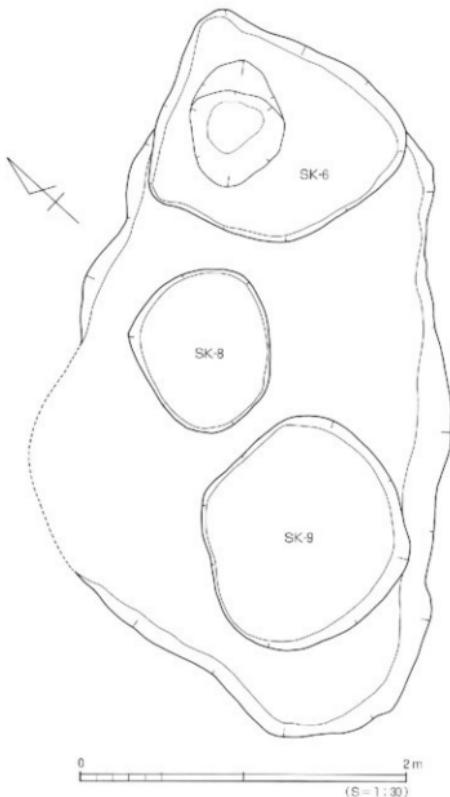
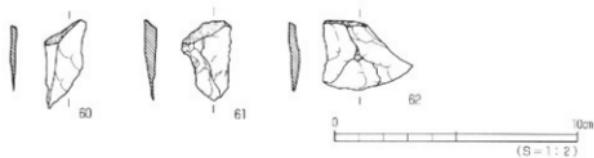


図30 不明遺構 SX-1



遺物番号	器種	石 材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他の
60	石材剥片	サヌカイト		3.6	1.7	0.2	0.1	
61	石材剥片	サヌカイト		3.3	2.0	0.5	0.2	
62	石材剥片	サヌカイト		2.9	3.7	0.4	0.2	

図31 A区 SX-1 出土遺物実測図

調査の概要

③溝状遺構

S D - 1 (図32)

幅40~60cm、深さ5cm程度の窪みが南北方向に長さ3.7mにわたって検出されているので、一応溝状遺構として扱った。縄文土器片を僅かに出土しているが、図化可能なものはない。周辺の土坑群と同時期のものである。

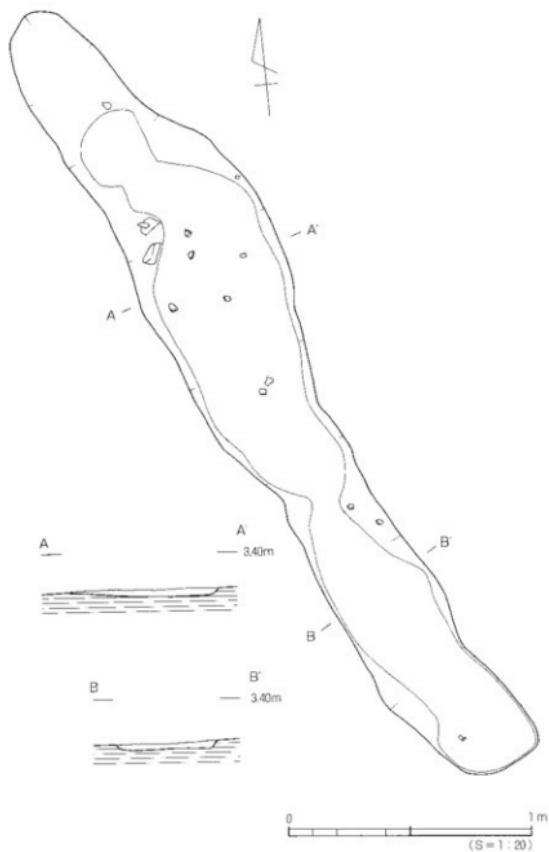


図32 溝状遺構 S D - 1

2) 湿地の調査

先述のように湿地内には第5層以下、掘削して確認できた範囲では第10層に至るまでの土層が堆積しており、そのうち第10層を除く各層に遺物が包含されている。しかしながら湿地内は湧水が激しく、実際に調査が可能であったのは、湿地東半部分のしかも汀から4~5mの範囲の7層までの調査が限界であった。したがって、8層以下の遺物は調査最終段階で、図5に示された部分を堀り抜いて採集されたものである。以下では下位の層から順を追って出土遺物について記述してゆく。

① 第9C層出土遺物（図33~46）

9C層では縄文後期を主とした遺物が出土している。多数の条痕文粗製深鉢とともに図33に示したような有文土器がある。沈線に縄文あるいは擬縄文を組み合わせたものや、沈線のみ、または沈線と刺突を組み合わせたものなどがある。その多くが深鉢になるものと思われるが、68は注口土器であるかもしれない。瀬戸内津雲上層式併行の遺物群と判断でき、後期中葉に属するものである。

後期後葉から末の特徴的な深鉢には図40の一群がある。近畿でいう官窯式に特徴的な、巻き貝による凹線と扁状圧痕を持つもので、瀬戸内福田KⅢ式併行の土器群である。

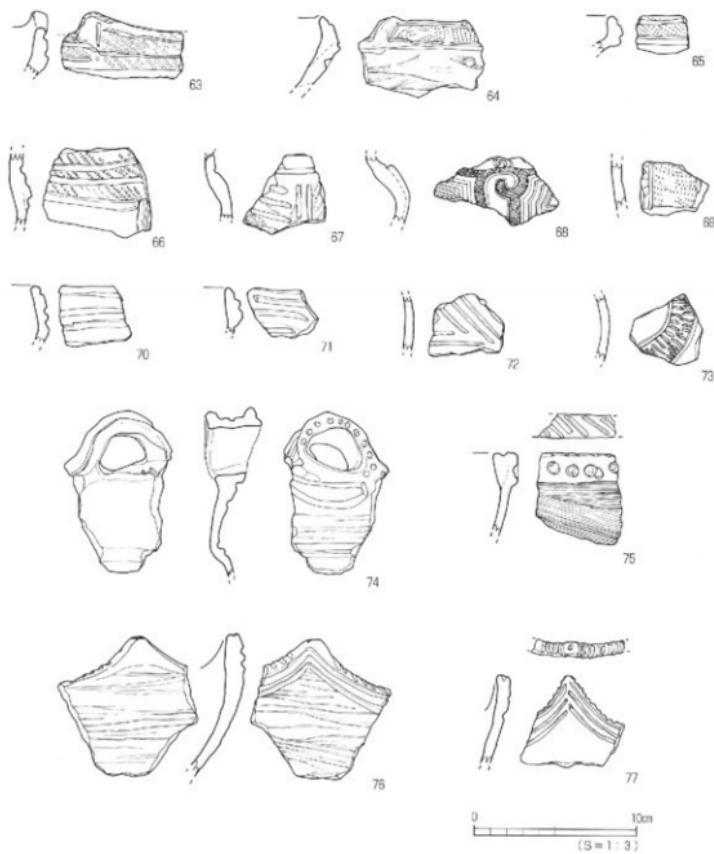
これら精製、あるいは有文深鉢とともに出土している粗製深鉢には頸部から口縁部にかけて外反しながらすばまるもの、外反して聞くもの、内湾するものなどがある。口縁部は平縁になるものが多いが、波状を呈するものや瘤状の突起を持つものなどもあり、これらの口端部は肥厚され、端面に刻み目を施されることが多い。後述するように、この層からは晩期の土器も少量出土しており、これら粗製深鉢の類うち、特に口端部が肥厚して刻み目を施されたり、突起を有したりするもの以外の全くの無文で単純な器型のものに関する個々の所属時期については厳密には判断しづらいが、後期に属するものが多いと考えている。

浅鉢で後期段階のものと判断したものは、図42に示してある。概ね浅い皿状の器型で口縁部を内面に肥厚したり、外反させたりするものが多い。口縁部を外反させるものの中には141のように口縁下に刻み目突帯を貼り付けるものがある。外面は条痕調整の後磨いたり、撫でたり調整はまちまちであるが、大抵の場合内面は磨かれたり撫で調整で入念に仕上げられている。そういう意味では内面に条痕の残る150は、口端部の刻み目とともに異例であって、深鉢口縁部の歪んだ破片である可能性がある。

晩期の土器については、深鉢を図41に、浅鉢を図43に図示した。深鉢138は、砲弾形の器型で比較的薄手のつくり、口縁部・胴部の外面にそれぞれ2本ずつの平行沈線を施されている。近畿滋賀里I式併行、晩期前半の土器。139は近畿滋賀里IIIb式の範疇におさまる深鉢で、近年提唱されている樅原式にあてはめるると古・中段階に併行する資料、瀬戸内舟津原式段階のものであろう。浅鉢も同様に晩期前半から中頃までにおさまると考えられる資料があり、特に樅原式文様を持つ椀型の152は愛媛県内でも類例に乏しく、注目される資料である。上浮穴郡久万町笛ヶ滝遺跡に一例だけ採集例がみられる。

石製品には緑色片岩や砂岩製の礫石錘や打製土掘り具、石皿、敲石、サムカイトのスクレイバーなどがある。

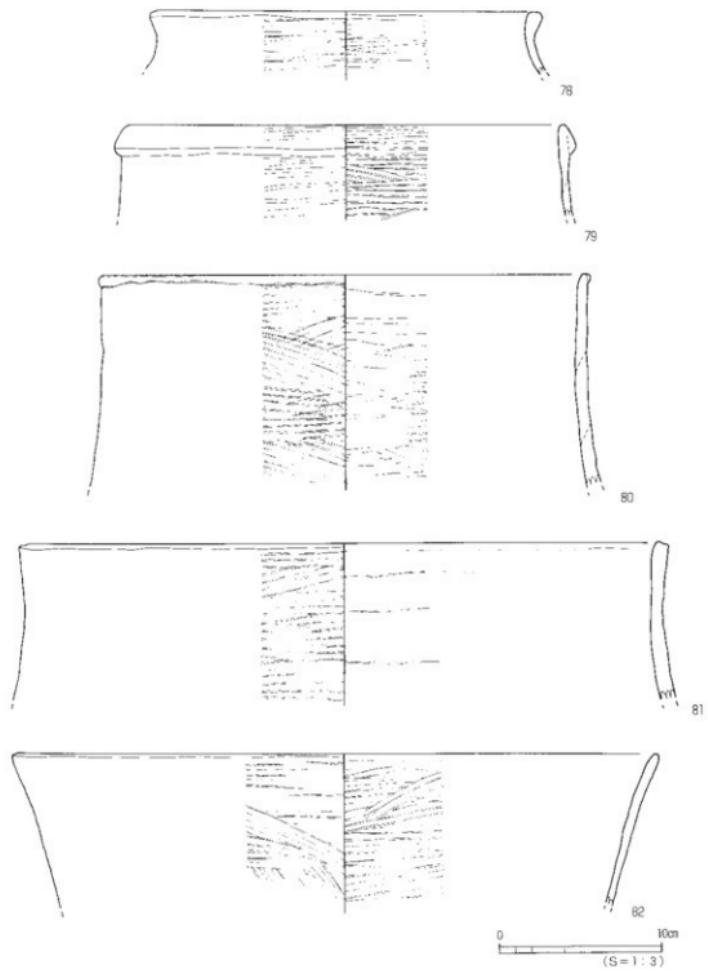
調査の概要



図面 番号	器種	圓		整		口	縁	突	重	色	調	その性
		外 面	内 面	端部形	割 み					内 面	外 面	
63	陶器	ナデ。	丸底→ナデ。							灰褐色	淡灰褐色	貝 L。
64	深鉢	巻き只条板。	巻き只条底。							灰褐色	淡褐色	縫合文。
65	深鉢	ナデ。	丸底→ナデ。							淡灰褐色	淡灰褐色	R L。
66	深鉢	卷底→ナデ。	巻き只条底→ナデ。							淡灰褐色	淡灰褐色	R L。
67	深鉢	ナデ。	ナゲリ。							淡灰褐色	淡灰褐色	L R。往日土器?
68	深鉢	ナデ。	ナデ。							灰褐色	灰褐色	R R。
69	深鉢	ナデ。	ナデ。							灰褐色	灰褐色	R R。
70	深鉢	ナデ。	ナデ。							淡灰褐色	淡灰褐色	
71	深鉢	ナデ。	ナデ。							淡灰褐色	淡灰褐色	
72	深鉢	マメワ。	ミガキ。							淡灰褐色	茶褐色	
73	深鉢	ナデ。	ナデ。							淡灰褐色	淡灰褐色	
74	深鉢	卷底・ナデ。	丸底→ナデ。							灰色	淡褐色	肥子。
75	深鉢	巻き只条底。	巻き只条底。							暗褐色	淡灰褐色	貝による押印文。
76	深鉢	巻底→ナデ。	巻底只条底→ナデ。							淡灰褐色	灰褐色	
77	深鉢	ナデ。	ナデ。							淡褐色	淡褐色	

図33 A区第9C層出土遺物実測図(1)

大 溝 遺 路



通 番	器 様	内 面		外 面		口 横	突 横	縫 み	内 面	外 面	色 調	そ の 他
		外 面	内 面	内 面	外 面							
78	深鉢 舟き貝条痕。	舟き貝条痕。									淡黄褐色	淡黄褐色
79	深鉢 舟底・ミガキ。	舟底・ミガキ。									淡黄褐色	灰褐色
80	深鉢 舟底貝条痕。	舟底貝条痕。									淡褐色	黑色
81	深鉢 舟底貝条痕。	舟底貝条痕。									淡黄褐色	淡黄褐色
82	深鉢 舟底貝条痕。	舟底貝条痕。									淡灰褐色	淡灰褐色

図34 A区第9C層出土遺物実測図(2)

調査の概要

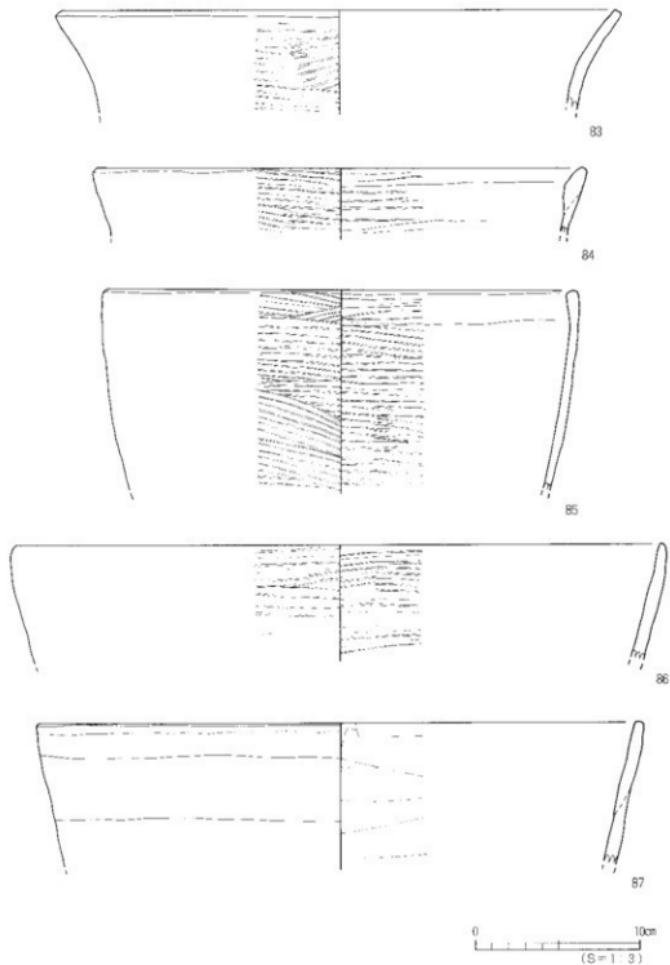
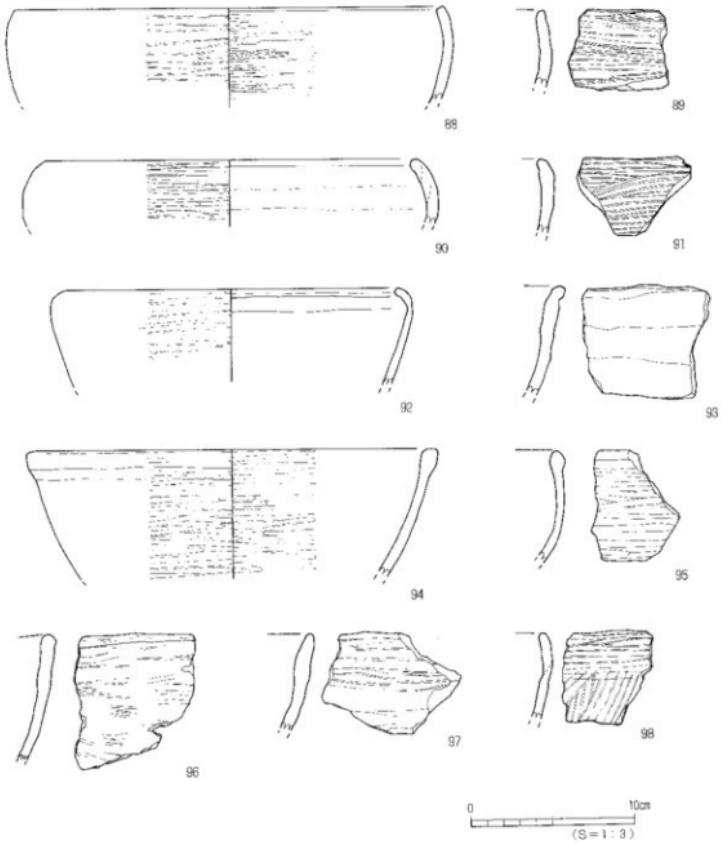


図35 A区第9C層出土遺物実測図(3)

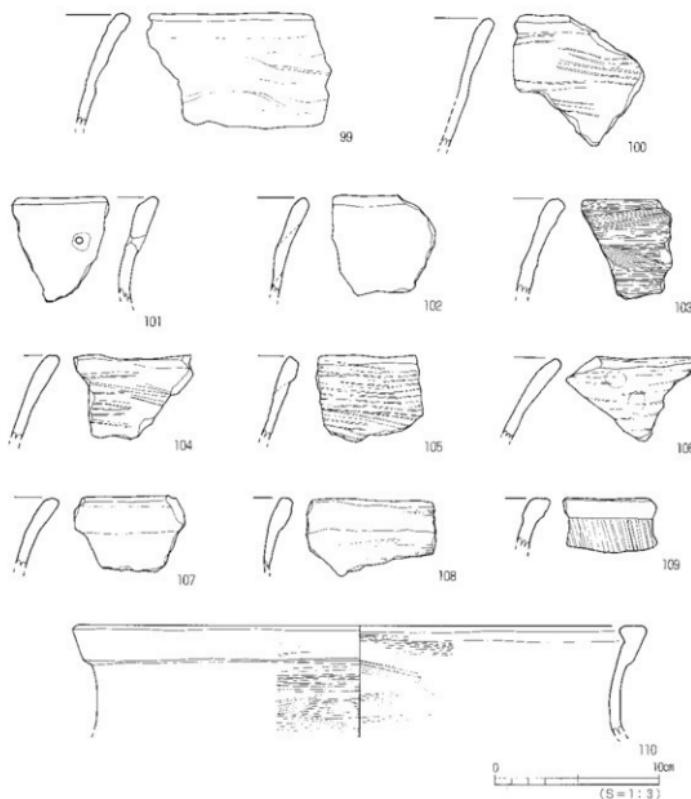
番号	器種	形		口縁		穴盤		色調		その他の
		外面	内面	端部形	肩み	腹面部	肩み	内面	外面	
83	漆鉢	丸き貝皿。	ナゲ。	---	---	---	---	柳葉色	桜色	
84	漆鉢	丸き貝皿。	ナゲ。	---	---	---	---	灰褐色	灰褐色	
85	漆鉢	丸き貝皿。	ナゲ。	---	---	---	---	灰褐色	灰褐色	
86	漆鉢	茶盆→ナゲ。	ナゲ・ナゲ。	---	---	---	---	桜葉色	黒褐色	口縁外周縁付着。
87	漆鉢	茶盆→ナゲ。	ナゲ・ナゲ。	---	---	---	---	黑色	黑褐色	外周縁付着。



件名 番号	器種	開 鑿		口 縁		内 部		色 調		その 他
		外 面	内 面	縦型形	矧み	断面形	矧み	内 面	外 面	
88	深鉢 「条痕→ナズ」。		ミガキ。					淡黄褐色	淡黃褐色	
89	深鉢 「ケズリ」。		ミズリ。					灰褐色	深灰褐色	
90	深鉢 「ナズ」。		ナズ。					灰白色	灰白色	
91	深鉢 「巻き貝条痕」。		巻き貝条痕。					灰白色	灰黃白色	
92	深鉢 「巻き貝条痕→ナズ」。		ナズ。					灰白色	灰白色	
93	深鉢 「ナズ」。		巻き貝条痕、 ナズ。					灰褐色	灰褐色	
94	深鉢 「ミガキ」。		ミガキ。					灰褐色	灰褐色	
95	深鉢 「ミガキ」。		ミガキ。					灰褐色	灰褐色	
96	深鉢 「巻き貝条痕→ナズ」。		巻き貝条痕。 ナズ。					褐色	褐色	
97	深鉢 「美痕→ナズ」。		美痕。					灰褐色	淡褐色	
98	深鉢 「巻き貝条痕」。		巻き貝条痕。					黑褐色	灰褐色	

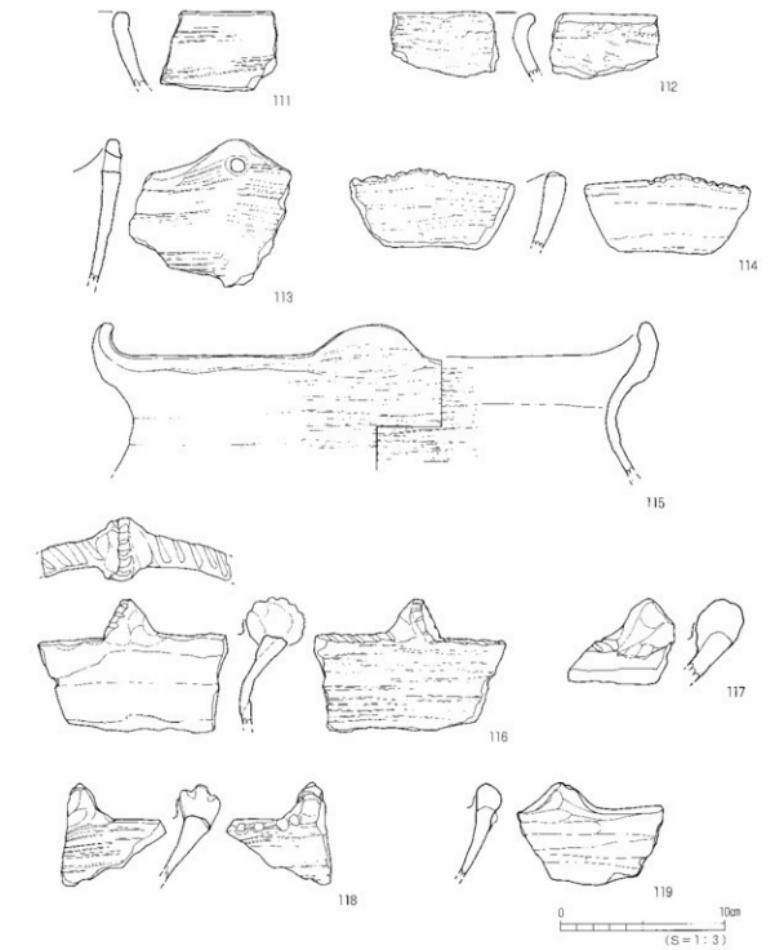
図36 A区第9C層出土遺物実測図(4)

調査の概要



編 番 号	器 種	外 面		内 面		II		種 類		突 起 部		各 部 色		調 査 面		そ の 他
		端 部	周 辺	端 部	周 辺	端 部	周 辺	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	
99	深鉢	磨き貝多板。		磨き貝多板。								灰褐色	灰灰褐色			
100	深鉢	柔板→ナテ。		磨き貝多板。								灰灰褐色	灰灰褐色			
101	深鉢	小明。		素面。								黄褐色	黄褐色			
102	深鉢	磨き貝多板。		磨き貝多板。								黑褐色	黑褐色			
103	深鉢	磨き貝多板。		磨き貝多板。								黑褐色	灰灰褐色			
104	深鉢	磨き貝多板。		磨き貝多板。								灰白色	灰白色			
105	深鉢	磨き貝多板。		磨き貝多板。								灰褐色	灰灰褐色			
106	深鉢	柔板→ナテ。		磨き貝多板。								灰褐色	灰褐色			
107	深鉢	マメ。		磨き貝多板。								浅褐色	浅褐色			
108	深鉢	磨き貝多板。		磨き貝多板。								黑色	黑灰色			
109	深鉢	II; ケヅリ。頭; 柔板。		ナテ。								灰褐色	黑褐色			
110	深鉢	磨き貝多板。		磨き貝多板。								灰褐色	灰灰褐色			

図37 A区第9C層出土遺物実測図(5)



番号	器種	圖		縁部形	II 縁み	突 部 形		色 調	外 面	その 他
		外 面	内 面			III 縁み	IV 縁み			
111	漆鉢	毛き口直底板+ナテ。	毛き口直底板→ナテ。					淡灰褐色	淡灰褐色	
112	漆鉢	毛き口直底板+ナテ。	毛き口直底板。					淡灰褐色	淡灰褐色	
113	漆鉢	毛き口直底板。	毛き口直底板。					淡灰褐色	淡灰褐色	口縁穿孔
114	漆鉢	毛き口直底板。	毛き口直底板。					淡灰褐色	淡灰褐色	
115	漆鉢	毛直。	毛直。					淡灰褐色	淡灰褐色	
116	漆鉢	毛き口直底板。	毛き口直底板+ナテ。					淡灰褐色	淡灰褐色	
117	漆鉢	毛き口直底板。	ナテ。					淡灰褐色	淡灰褐色	
118	漆鉢	毛き口直底板。	毛き口直底板。					淡灰褐色	淡灰褐色	
119	漆鉢	毛き口直底板。	毛き口直底板。					淡灰褐色	淡灰褐色	

図38 A区第9C層出土遺物実測図(6)

調査の概要

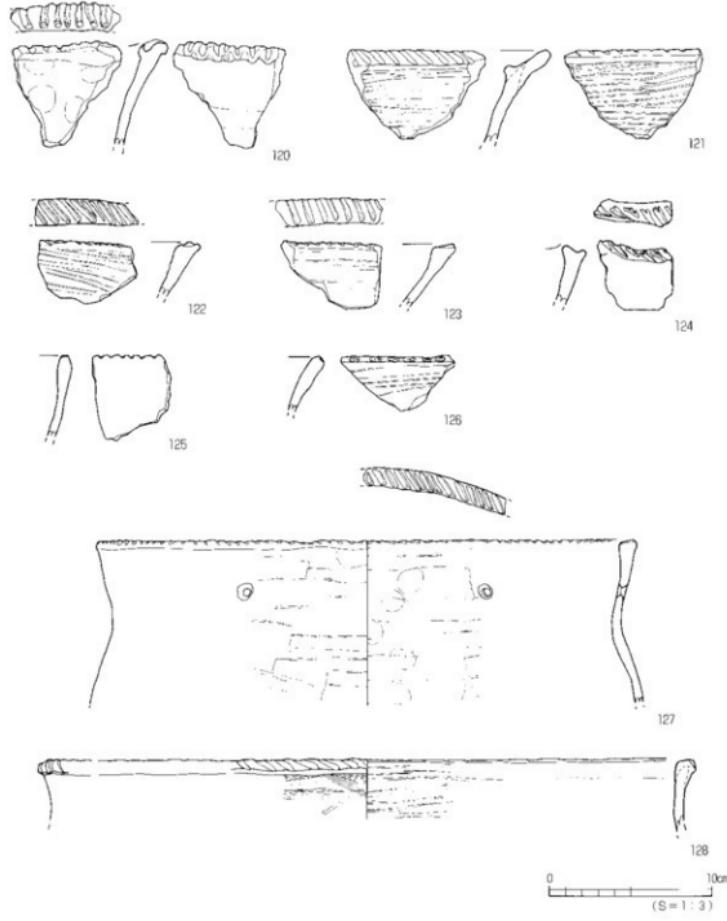
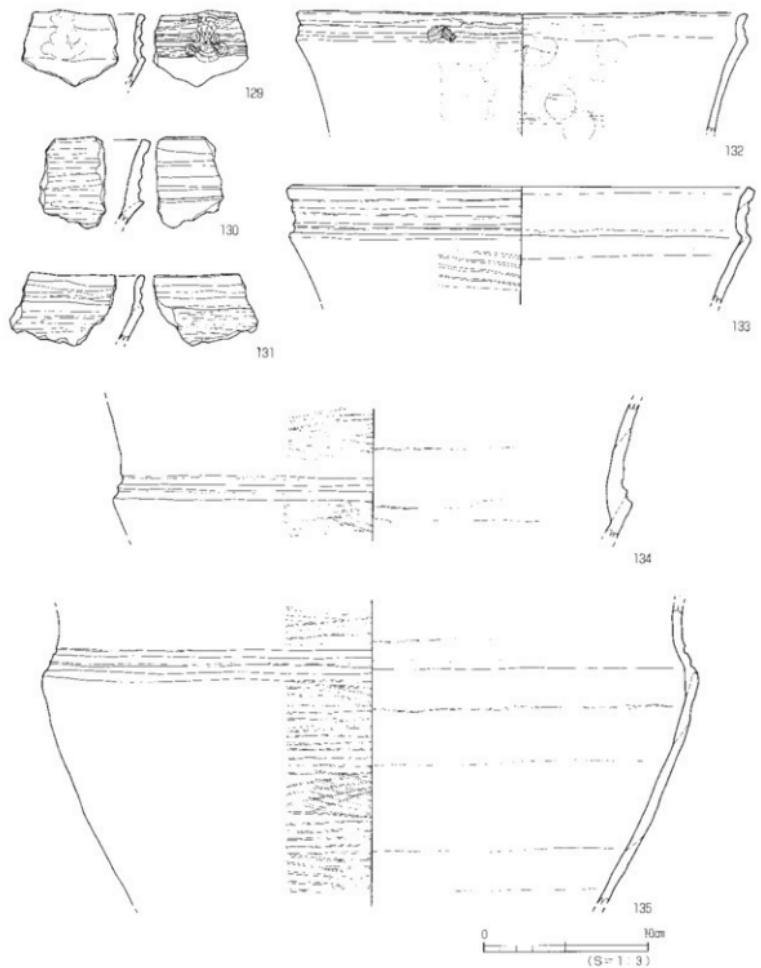


図39 A区第9C層出土遺物実測図(7)

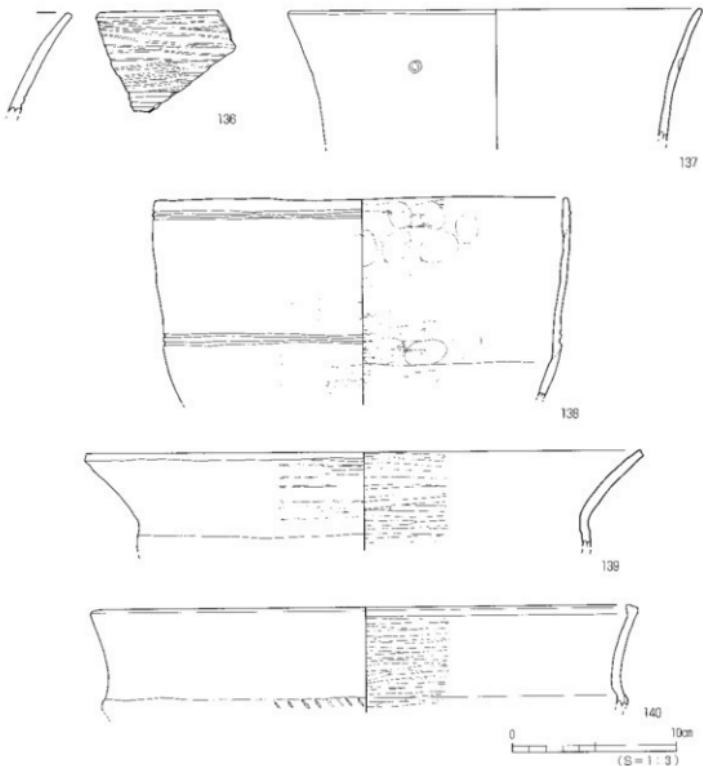
番号	器種	調 整		口縁形	縁 形	突 無	無 色	内 面	外 面	その 性
		外 面	内 面							
120	漆鉢	マツフ。	ナテ。					淡灰褐色	淡灰褐色	
121	漆鉢	巻き貝塗底	ナテ。					淡灰褐色	淡灰褐色	
122	漆鉢	漆底。	漆底。					淡灰褐色	淡灰褐色	
123	漆鉢	漆底。	漆底。					淡灰褐色	淡灰褐色	
124	漆鉢	漆底→ナテ。	ナテ。					淡灰褐色	淡灰褐色	口縁面具押文。
125	漆鉢	マツフ。	巻き貝塗底→ナテ。					淡灰褐色	淡灰褐色	
126	漆鉢	巻き貝塗底。	マツフ。					黄褐色	黄褐色	I I 雜面目押文。
127	漆鉢	ケズリ→ナテ。	ケズリ→ナテ。					淡黄褐色	淡黄褐色	漆部磨化。
128	漆鉢	巻き貝塗底。	巻き貝塗底。					淡灰褐色	淡灰褐色	



番号	器種	測量		口様		穴等		色調		その他の
		外面	内面	端部形	刻み	断面形	刻み	内面	外面	
129	漆鉢	ナデ ₁	巻き貝呂縞洋江文。	巻き貝条状。				暗褐色	黒褐色	口縁外周付着。
130	漆鉢	巻き貝条状。	ナデ ₁					黑色	黑色	
131	漆鉢	条状 ₁ ナデ ₁ 。	巻き貝条状・ナデ ₁ 。					黑色	灰褐色	
132	漆鉢	ナデ ₁	巻き貝呂縞洋江文。	ナデ ₁				暗褐色	暗褐色	口縁淡灰褐色。
133	漆鉢	ミガキ ₁						黑色	黑色	
134	漆鉢	不明。	巻き貝条状・ナデ ₁ 。					黑色	黑色	口縁外周付着。
135	漆鉢	条状 ₁ ナデ ₁ 。	ナデ ₁					黑色	黑褐色	

図40 A区第9C層出土遺物実測図(8)

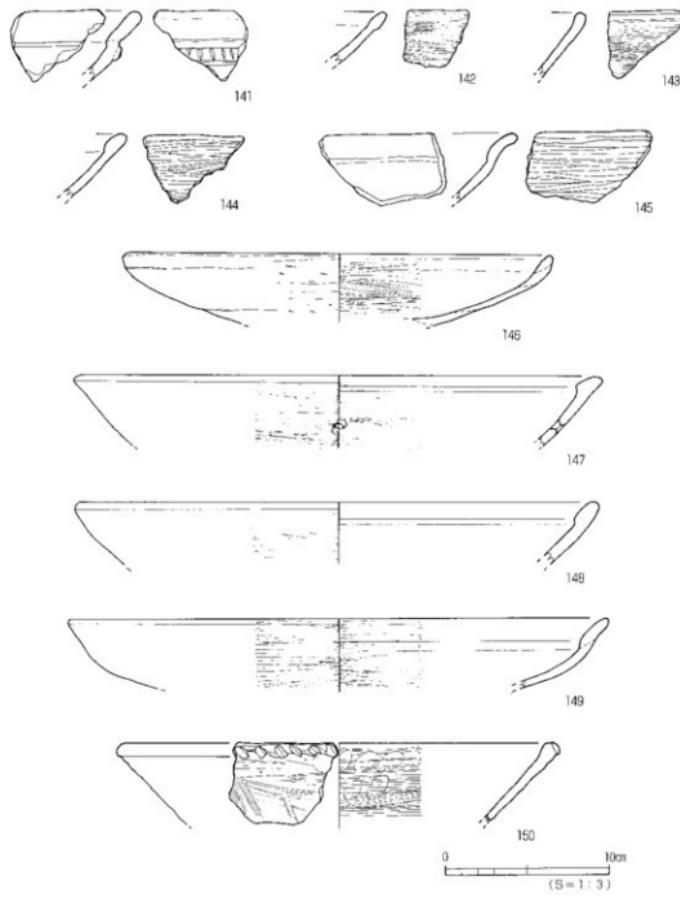
調査の概要



種別 番号	器種	内面		口縁		外縁		各部		色	測	その他の
		外面	内面	邊部形	縫み	新肉脛	削み	内面	外面			
136	深鉢	条痕→ミガキ。	面: 沈痕。	ミガキ。	面	—	—	褐色	褐色			
137	深鉢	条痕?	—	剥脱。	—	—	—	黒褐色	黒褐色	張都學孔(未完成)。		
138	深鉢	ケズリ→ナテ。口・脛: 2本沈痕。	ケズリ→ナテ。	面	—	—	—	黒褐色	暗茶褐色	口縁外側付着。		
139	深鉢	条痕→ナテ。	条痕→ナテ。	面	—	—	—	赤褐色	褐色	口縁外側付着。		
140	深鉢	条痕→ミガキ。	ミガキ。	面	—	—	—	褐色	暗褐色			

図41 A区第9C層出土遺物実測図(9)

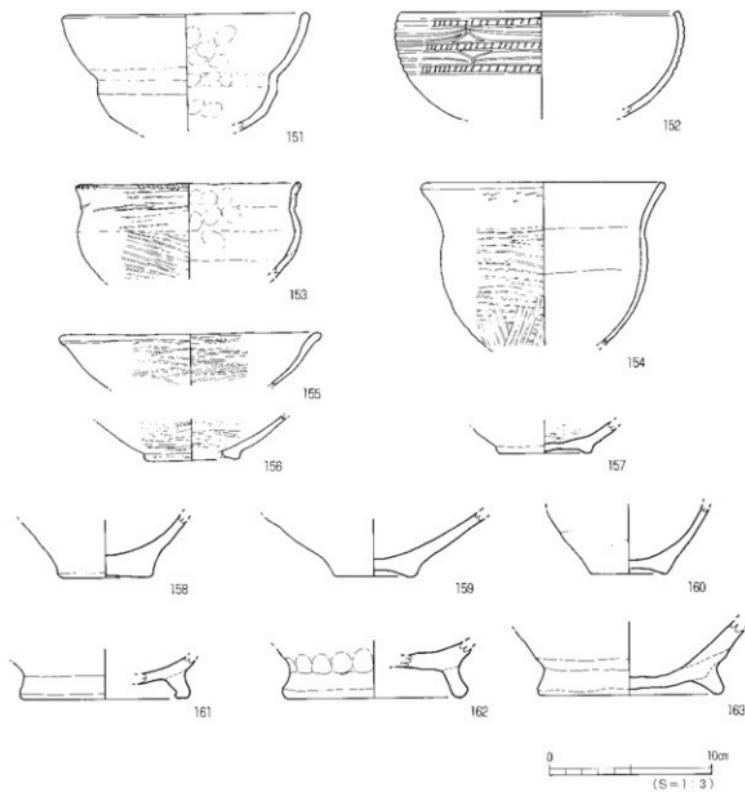
大洞遺跡



種類 番号	器種	調査		発見		工具		色調		その他の 特徴
		外 面	内 面	縫合部	別 み	前面	側 面	内 面	外 面	
141	洗鉢	朱板→ナゲ。		ナゲ。				褐褐色	棕褐色	
142	洗鉢	ミガキ。		ミガキ。				黑色	黑色	
143	洗鉢	ミガキ。		ミガキ。				灰色	黑色	
144	洗鉢	ミガキ。		ミガキ。				淡灰褐色	淡灰褐色	
145	洗鉢	朱板→ナゲ。		朱板→ナゲ。				淡灰褐色	淡灰褐色	
146	洗鉢	赤土目朱痕→ナゲ。		赤土目朱痕→ナゲ。				青褐色	暗灰褐色	11線外周朱付看。
147	洗鉢	赤土目朱痕→ナゲ。		ミガキ。				黑褐色	黑褐色	胸部穿孔。
148	洗鉢	ミガキ。		ナゲ。				淡灰褐色	淡灰褐色	
149	洗鉢	ミガキ。		ミガキ。				淡灰褐色	淡灰褐色	
150	洗鉢	墨書き朱痕。	墨書き朱痕→ナゲ。			横凹		灰色	灰色	

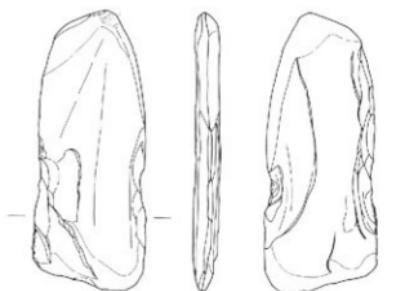
図42 A区第9C層出土遺物実測図(10)

調査の概要

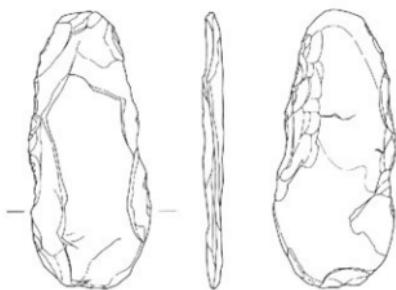


番号	器種	調		整		II		III		突		縫		色		その他の
		外	内	面	端部形	周	み	断面形	縫	み	内	面	外	面	その他の	
151	浅鉢	ナデ。		ナデ。							淡灰褐色	淡灰褐色	深灰褐色	深灰褐色		
152	浅鉢	ミガキ。櫛目式文様。		ミガキ。							淡灰褐色	中色	中色	中色	素面	
153	浅鉢	素面。		素面。							淡灰褐色	淡灰褐色	雪母灰褐色	雪母灰褐色		
154	浅鉢	II:ナデ。腹:二枚貝文模。		ナデ。							灰褐色	褐色				
155	浅鉢	ミガキ。		ミガキ。							淡褐色	灰褐色				
156	浅鉢	ミガキ。		ミガキ。							淡灰褐色	淡灰褐色				
157	浅鉢	ナデ。		素面。							中色	黄褐色				
158	深鉢	ナデ。		卷き貝文模。							棕褐色	棕褐色				
159	深鉢	ナデ。(ミガキ?)		卷き貝文模。							中色	黄褐色				
160	深鉢	ナデ。		ナデ。							棕褐色	棕褐色				
161	深鉢	ナデ。		卷き貝文模。							褐色	黑色				
162	浅鉢	ナデ。		ナデ。							暗褐色	淡灰褐色				
163	深鉢	腹:マメワ。底:ナデ。		ナデ。							灰褐色	黄灰褐色				

図43 A区第9C層出土遺物実測図(1)



164



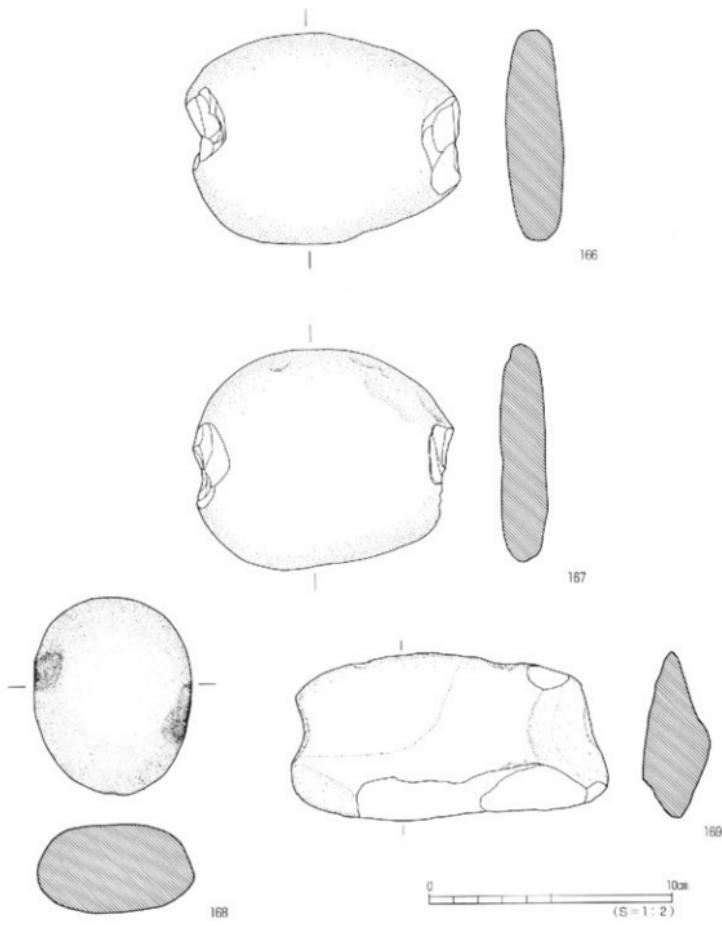
165



地図 番号	器 種	石 材	残 存 度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重 量(g)	そ の 他
164	打製石斧	緑色片岩	完形	11.5	4.6	1.0	90.0	
165	打製石斧	緑色片岩	完形	11.2	5.0	0.8	76.0	

図44 A区第9C層出土遺物実測図(12)

調査の概要



層番 番号	器種	石 材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	その他の 記述
166	石鉗	砂泥片岩	完形	11.3	8.7	2.3	394.0	
167	石鉗	砂泥片岩	完形	10.7	8.9	1.8	339.0	
168	石鉗	砂岩	完形	8.0	6.3	3.6	274.0	
169	石鉗	砂岩	完形	13.1	6.9	2.9	316.0	

図45 A区第9C層出土遺物実測図(13)

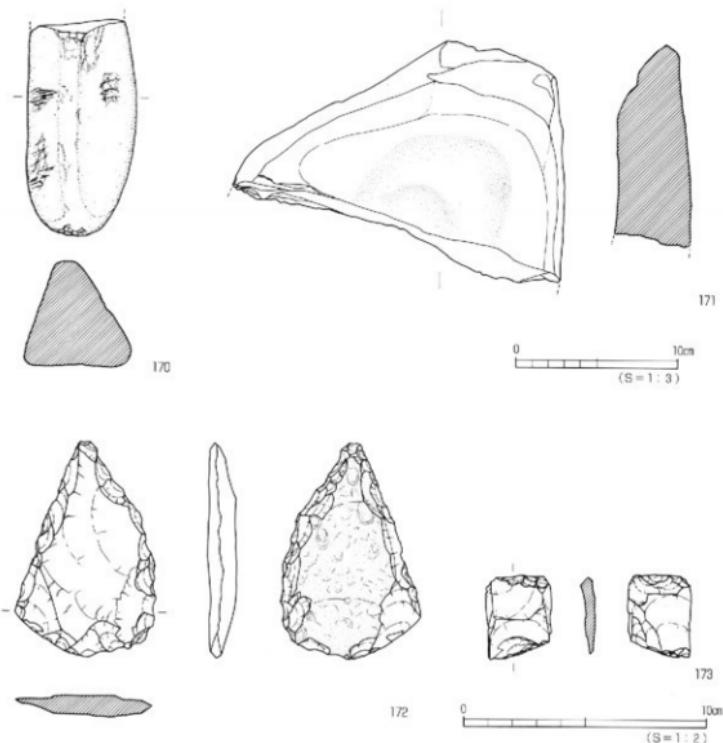


図46 A区第9C層出土遺物実測図(14)

② 第9A層出土遺物(図47~52)

腐蝕質の粘土および無遺物の砂層9B層を介して9C層の上位に存在する砂層で、9C層と同様縄文時代後期から晩期の遺物を包含しているが、後期の遺物が少ない点、晩期後半突帯文を含む点で9C層とは異なる。後期の土器としては、174・175の深鉢2点がある。175は9C層で一定量出土し、図40にまとめられた一群と同様、口縁部外面に巻き貝凹線文を施される後期後葉から末の深鉢である。また、小片であるため確定的ではないが、193も後期の粗製浅鉢と思われる。

晩期の深鉢では、中葉から後葉の突帯文に至るまでの資料がある。184は口縁部に鱗状突起と刻み目突帯を併せ持つもので、内面に肥厚した口端部端面や突起の上端面も突帯と同様の工具で刻まれて

調査の概要

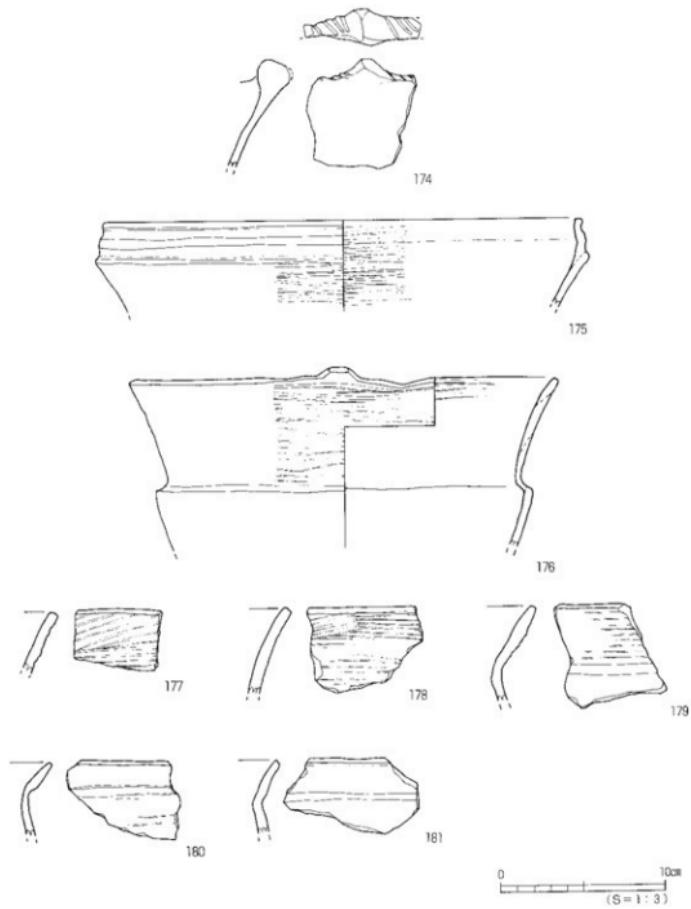
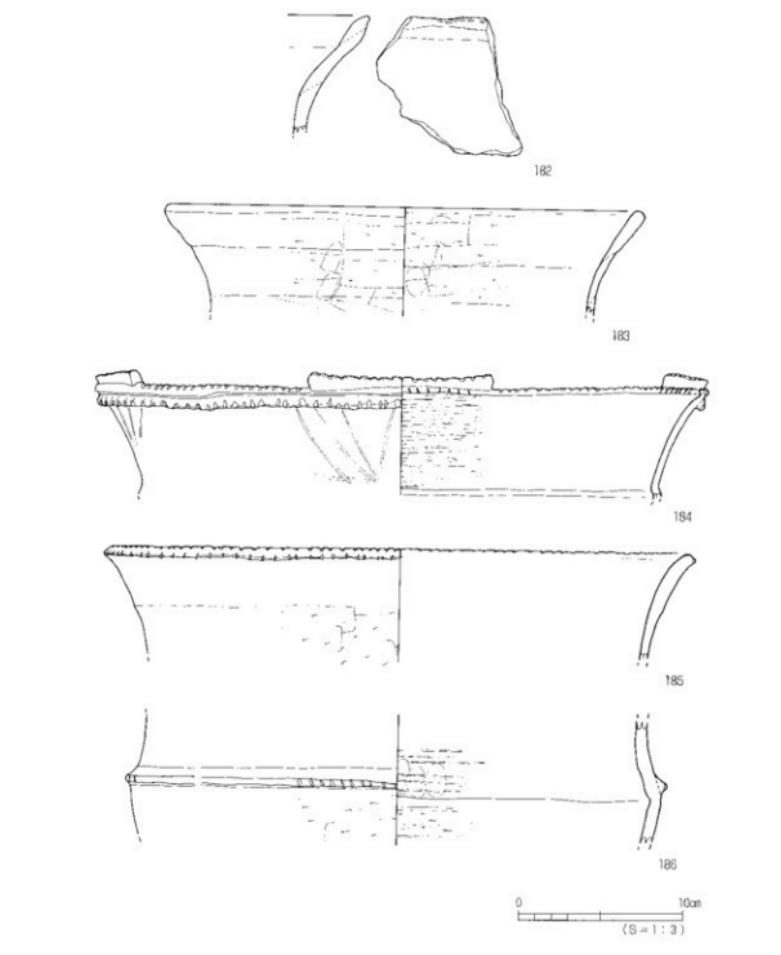


図47 A区第9A層出土遺物実測図(1)

博目番号	器種	周 長		II 縫	III 縫	突 帽		色 調		その他の
		外 面	内 面			縫部形	縫み	縫部形	縫み	
174	深鉢	マメフ。	マメフ。	面	V字形			淡灰褐色	淡灰褐色	
175	深鉢	ミガキ。	ミガキ。	面				黒褐色	黒褐色	想き貝による凹線。
176	深鉢	想き貝条痕。	想き貝条痕→ナデ。	面				黒褐色	黒褐色	方形状記。
177	深鉢	想き貝条痕。	ナデ。	面				淡灰褐色	淡灰褐色	
178	深鉢	想き貝条痕。	ナデ。	面				黒褐色	淡灰褐色	
179	深鉢	想き貝条痕。	ミガキ。	面				黒褐色	淡黄褐色	口縁外側縫付茎。
180	深鉢	想き貝条痕。	ナデ。	面				灰褐色	黒褐色	口縁外側縫付茎。
181	深鉢	想き貝条痕。	ナデ。	面				灰褐色	灰褐色	口縫外側縫付茎。

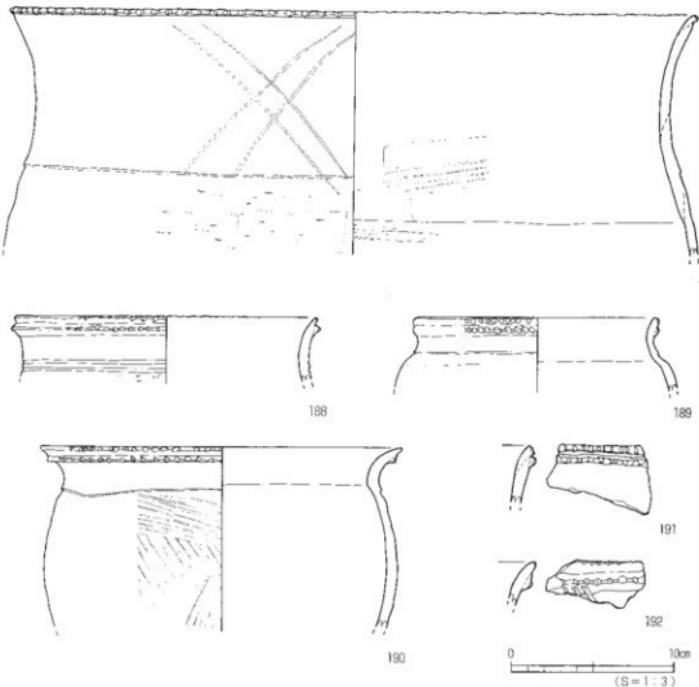
大河遺跡



番号	器種	調		縁部形	刃	刺	突	著	色		その他の
		外	内						面	面	
182	深鉢	ナデ。		ナデ。	尖	刺突	圓頭形	削み	内面	外面	
183	深鉢	柔軟→ナデ。		柔軟→ナデ。	丸	一	一	一	淡褐色	淡褐色	
184	深鉢	ケズリ→ナデ。		ミガキ。	丸	曲尺形	台形	削長形	黒褐色	黒色	ヒレ条突起、腹部施X。
185	深鉢	ケズリ→ナデ。		ナデ。	圓	D字形	一	一	黑色	淡黃褐色	
186	深鉢	第二柔軟→ナデ。第：ケズリ。	凸き且柔軟・ナデ。	一	右肩	小D字形	削み	黒色	淡黃褐色		

図48 A区第9A層出土遺物実測図(2)

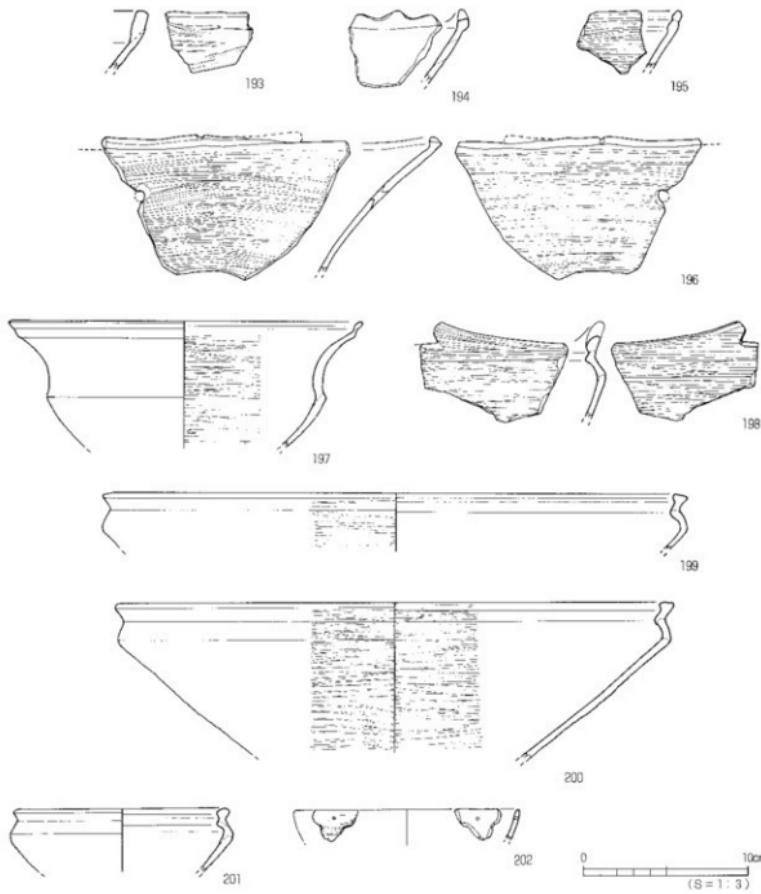
いる。また、頸部下位には横方向の沈線、この沈線と突帯間に3本単位の沈線による施文が行われている。内外面ともに磨かれており、浅鉢になる可能性もある。185の粗製深鉢の口端部内外面には刻み目が施されている。186は頸部の境に幅広の突帯を持ち、この突帯を刻まれているが、所謂二条突帯深鉢ではなく、瀬戸内谷尻式併行、当地では船ヶ谷遺跡で多くみられる深鉢と考えられる。187は頸部のX字状文と口端部刻み目を持つもので、外面撫での頸部と削りの胴部との境に段がある。突帯を持つものには188~192がある。いずれも突帯、口端部ともに刻み目を持つもので、口端部全面といいよりも口端部の外面を刻まれるものが多く、また188~190のような頸部が短い器型のものがある。188の頸部の横方向2本沈線は異例といえる。



標号	器種	調		夢		口	縁	突	帶	色	調	そ の 他
		外 面	内 面	端部形	刻 み	断面形	刻 み			内 面	外 面	
187	深鉢	頸:ケズリ+ナギ。側:ケズリ。	舟き貝余痕+ナギ。	圓	D+十形	断面形	刻み			黒褐色	灰褐色	粗製陶火外窓窯付。
188	深鉢	調:ナギ。頭:ケズリ。	ナギ。	丸	D字形	二角形	D字形			黒褐色	灰褐色	調削刃(沈2条)。
189	深鉢	ナギ。	ナギ。	圓	D+十形	半円形	D+十形			黒褐色	黒褐色	頭外窓保付。
190	深鉢	口一輪:ナギ。頭:朱成。	ナギ。	やや尖	D字形	三角形	D字形			黒褐色	黒褐色	口一列外窓保付。
191	深鉢	舟き貝余痕+ナギ。	ナギ。	丸	D字形	右形	D字形			黒褐色	灰褐色	口深削外窓保付。
192	深鉢	ナギ。	ナギ。	丸	D字形	二角形	D字形			淡灰褐色	灰褐色	頭部曲入。

図49 A区第9A層出土遺物実測図(3)

大洞遺跡



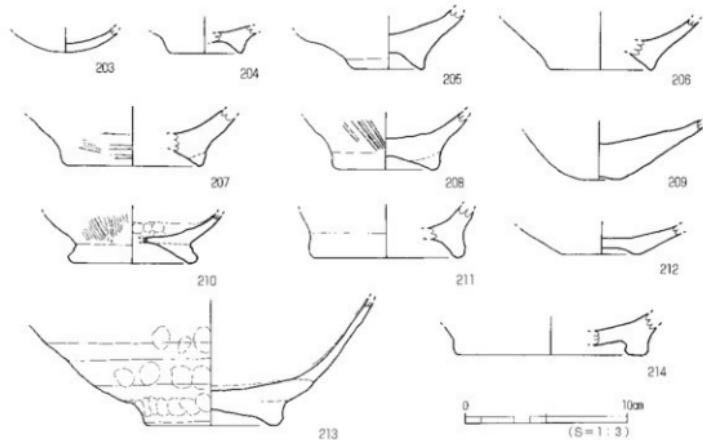
通括 番号	調 査		口 縁	縁 み	突 起	削 み	色 調		その 他
	外 面	内 面					内 面	外 面	
193	丸	丸	濃部影	薄部	断面形	削み	淡黄褐色	淡黃褐色	
194	丸	丸	濃部	薄部	圓	一	淡灰褐色	深褐色	
195	丸	丸	濃部	薄部	九	一	淡灰褐色	深褐色	
196	丸	丸	濃部	薄部	圓	一	淡灰褐色	淡灰褐色	
197	丸	丸	濃部	薄部	圓	一	黑褐色	黑褐色	ヒレ状突起、口縁浮出
198	丸	丸	濃部	薄部	圓	一	黑褐色	黑褐色	口縁内凹缺り、ヒレ状突起
199	丸	丸	濃部	薄部	圓	一	褐色	黑褐色	ヒレ状突起
200	丸	丸	濃部	薄部	圓	一	褐色	黑褐色	
201	丸	丸	濃部	薄部	圓	一	灰白色	灰白色	
202	丸	丸	濃部	薄部	圓	一	黑色	黑色	朱付着、口縁穿孔

図50 A区第9A層出土遺物実測図(4)

調査の概要

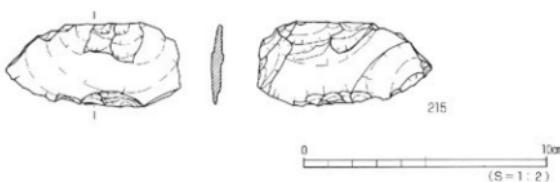
晩期の浅鉢にも前半から中葉のものがある。197は脇部から稜を介して頸部が大きく外反するもので、外上方に立ち上がった口縁部は内外に肥厚される。九州古闊式、近畿滋賀里Ⅲa式に併行するものである。196は長い頸部が外反気味に外上方に開くもので、口端部には内面に肥厚した低いリボン状の突起が付されるものである。突起以外の部分の端部は生きていないので定かではないが、内面肥厚するのは突起部分のみのようである。九州黒川式、瀬戸内谷尻式併行のものか。その他、口縁部で二段に屈曲して口端部を内面に玉筋状に肥厚する195や198～201があり、198のように鱗状突起を持つものもある。形態的には2とおりあって、200のように底部付近まで単純にすぼまるもの、この層では確認できないが、二段屈曲部以下が頸部として一旦外反して脇部が張った後、底部まですぼまるものとがある。いずれの場合も口縁部あるいは口頭部の外面が磨かれ、脇部以下に条痕調整が施される。したがって、199のような口縁部のみの破片では器型の判断がつかないことが多い。これらも大きな意味で黒川式、谷尻式の範疇に入り、当地方では船ヶ谷式として理解されている浅鉢の一群である。なお、202のような椀形態のもの出土もある。

底部は図51に示した。203は晩期椀形態の浅鉢底部。その他は深鉢と考えられるが、後晩期の区別ができない。その他サスカイトのスクレイパーの出土がある。



器名 番号	器種	形		口		種		穴		色		その他の
		外 面	内 面	底部形	筋 み	断面形	筋 み	内 底	外 底	内 底	外 底	
203	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。							淡灰褐色	淡灰褐色	
204	深鉢	ナダ。	マツフ。							無褐色	無色	外底炭化物付着。
205	深鉢	ナダ。	工具によるナダ。							墨灰色	墨灰色	胎土色。
206	深鉢	ナダ。	ナダ。							灰褐色	褐色	
207	深鉢	丸軋?→ナダ。	ナダ。							褐色	淡橙褐色	内底炭化物付着。
208	深鉢	削・ケズリ。底:ナダ。	ナダ。							淡青褐色	淡黄褐色	
209	深鉢	ケズリ。	ナダ。							灰褐色	褐色	
210	深鉢	頭:二枚貝貝殻。底:ナダ。	不明。							黑色	暗褐色	内底炭化物付着。
211	深鉢	マツフ。	マツフ。							淡灰褐色	褐色	
212	深鉢	ミガキ。	ナダ。							淡褐色	褐色	
213	深鉢	ナダ。	ミガキ?							褐色	褐色	
214	深鉢	ナダ。	ナダ。							褐色	淡褐色	

図51 A区第9A層出土遺物実測図(5)



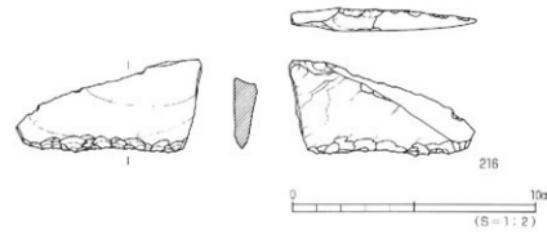
種類 番号	器　種	石　材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その　他
215	スクレイパー	サスカイト		3.3	7.0	0.5	18.4	

図52 A区第9A層出土遺物実測図(6)

(3) 第9層出土遺物 (図53~55)

第9層出土ではあるが、採り上げ時の湧水などのために詳細な所属層位が不明になった遺物がある。これらを第9層出土遺物として一括して取り扱う。

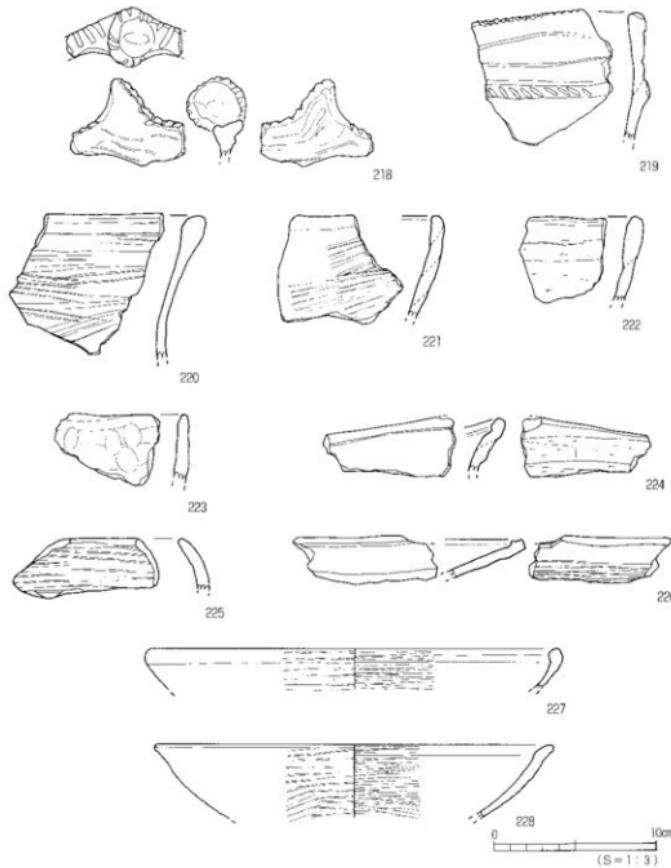
図54には後期と考えられるものを示した。218~225の深鉢のうち、218は瘤状突起と口端部刻み目を持つ粗製のもの、その他も無文粗製のものが多いため、219は波状口縁で、口端面や口縁をやや下が



種類 番号	器　種	石　材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その　他
216	スクレイパー	サスカイト		3.7	7.5	0.9	25.2	
217	塗み石	砂岩	完形	12.1	9.6	3.8	786.0	

図53 A区第9層出土遺物実測図(1)

調査の概要



種別 番号	圖		口 縫	縫 合	内 面	外 面	色 調	圖	その 他
	外 面	内 面							
218 深鉢 全底。		ナデ。			暗褐色	暗褐色			
219 浅鉢 マメフ。		マメフ。			灰白色	桃灰色			
220 深鉢 全底。		全底。			灰褐色	灰褐色			
221 深鉢 全底。		全底。			黑褐色	灰褐色			
222 深鉢 ケズリ。		ケズリ→ナデ。			灰褐色	灰褐色			
223 深鉢 泡き貝垂直→ナデ。		ナデ。			灰褐色	灰褐色			
224 深鉢 ケズリ。		ナデ。			灰褐色	黑褐色			
225 深鉢 全底→ナデ。		全底。			黑褐色	黑褐色			
226 浅鉢 二枚貝垂直。		ナデ。			黑色	黑褐色			
227 深鉢 全底→ナデ。		泡き貝垂直→ナデ。			灰褐色	灰色	口縫灰化物付着。		
228 深鉢 全底。		ミガキ。			淡黄色	淡黄色			

図54 A区第9層出土遺物実測図(2)

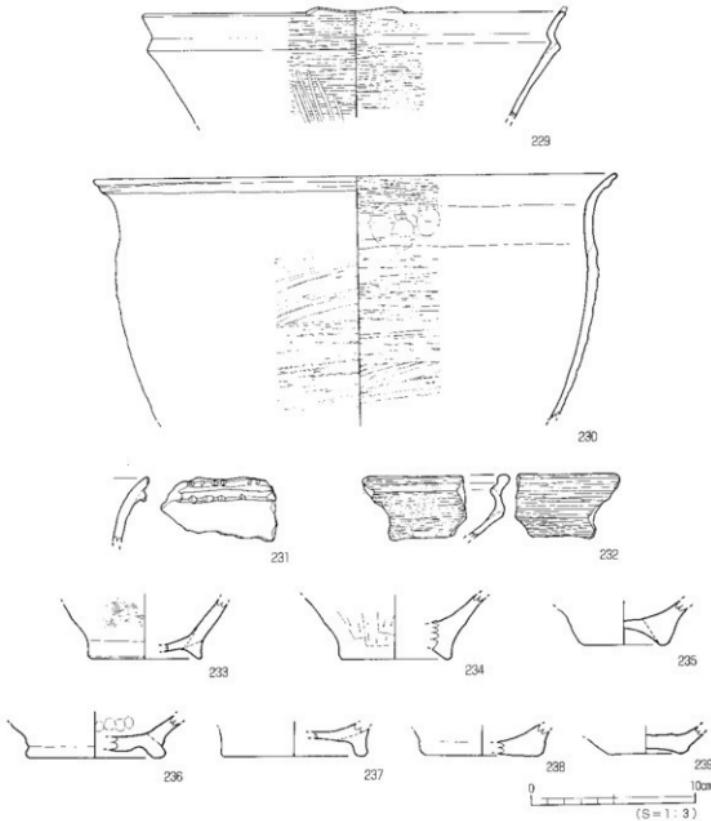


図55 A区第9層出土遺物実測図(3)

った位置の薄い隆帯上を刻まれる。また、この隆帯と口端部との間に3本の横位の沈線を施されている。摩滅のため定かでないが、沈線間に縄文は施されていないようである。後期中頃のものか。浅鉢と考えたものは226~228の、いずれも外面に条痕を残すものの、内面を磨きあるいは入念に撫でられているものである。

晩期の遺物は図55に示されている。229は浅鉢、内外面ともに磨かれ、口端部には鱗状の突起を持つ。晩期中葉の浅鉢である。230も晩期中葉の深鉢、短く外反する口頭部は入念に撫でられ、頭部の強い撫でにより、口縁部外面には後を持った薄い膨らみがある。この口頭部や内面の入念な撫でに対して、胴部外面は横方向の条痕をそのまま残している。その他、突帯文深鉢片231や所謂船ヶ谷式の浅鉢片232の出土がある。

石製品にはサヌカイト製のスクレイバーや砂岩の産み石がある。

④ 第8~9層出土遺物（図56）

基本的に第8層も9層も砂であるので、出土遺物のなかには8・9層の区別ができなかったものがあるのでここで扱う。240~247が後期と考えられるもの、240は縁帶文波状口縁深鉢の片で、幅広の沈線による区画文や波頂部から蛇行状に垂下する巻き貝殻頂による刺突文を施している。241は内外方に拡張した口縁端面に棒状工具による1条の沈線と刻み目を組み合わせた施文を施している。その他粗製のもののうち、242には貫通した補修孔のはか穿孔途中で放棄された産みがある。皿状の浅鉢245・246はいずれも口縁内面に粘土帶を貼り付け、外面は条痕を残すが内面は磨きで仕上げられている。247は頭部の屈曲部に巻き貝殻頂の押し引きによる刻み目を施している。

晩期の遺物は249・250の2点、いずれも小片である。249は壺の胴張り部と考えられる破片で、外面には朱彩が施されている。250は深鉢口縁部の破片で、面取りした口端部に刻み目、頭部沈線施文を持つものである。

⑤ 第8層出土遺物（図57~66）

この層でも下層と同様に縄文後期中葉から晩期の遺物が混在しているが、晩期後半突帯文深鉢の比率が高くなったり、逆「く」の字口縁の浅鉢が出土するところが9層と異なる点である。

後期の深鉢には粗製のものが多く、251のように瘤状突起を持っていたり、258のような波状口縁のものなどもあるが、大抵の場合口端面に刻み目を施している。また、254・260の口縁直下に施された刺突列点文は巻き貝殻頂を用いたものである。有文のものには縁帶文系の259や、直口縁の261などがあるが、どちらも沈線による施文のみで縄文は施されない。

266・267の胴部2点は晩期前半と考えられるもので、胴部で稜あるいは段を持って屈曲し長い頭部が上方あるいは外方に立ち上がる形態である。266では頭部に縱方向の細沈線による施文が確認できる。

図59には主に晩期後半、突帯文深鉢の一群を載せている。形態的には外反して開く口縁部をやや下がった位置に突帯が貼り付けられ、突帯と口端部に刻み目を施すものがほとんどであるが、種に275のように口端部・突帯ともに刻まれないものがある。口縁部形状は水平のものと波状を呈するものがあり、波状口縁の277では口縁部内面に沈線が巡っている。また、この277や270では頭部に沈線による施文が行われている。口端部は程度の大小はある面を持っており、端面を刻まれる場合が多いが、

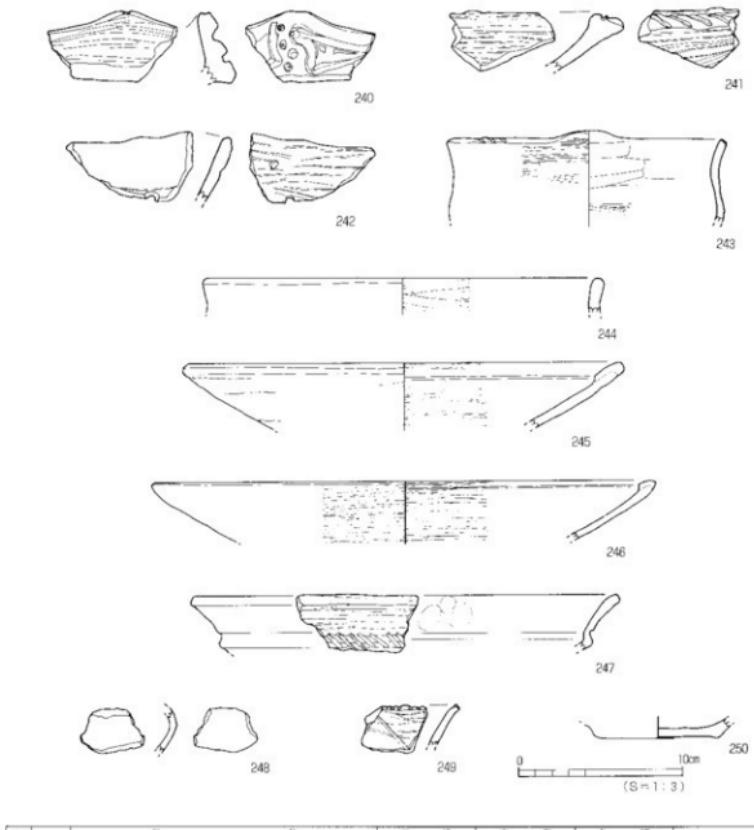


図56 A区第8～9層出土遺物実測図

調査の概要

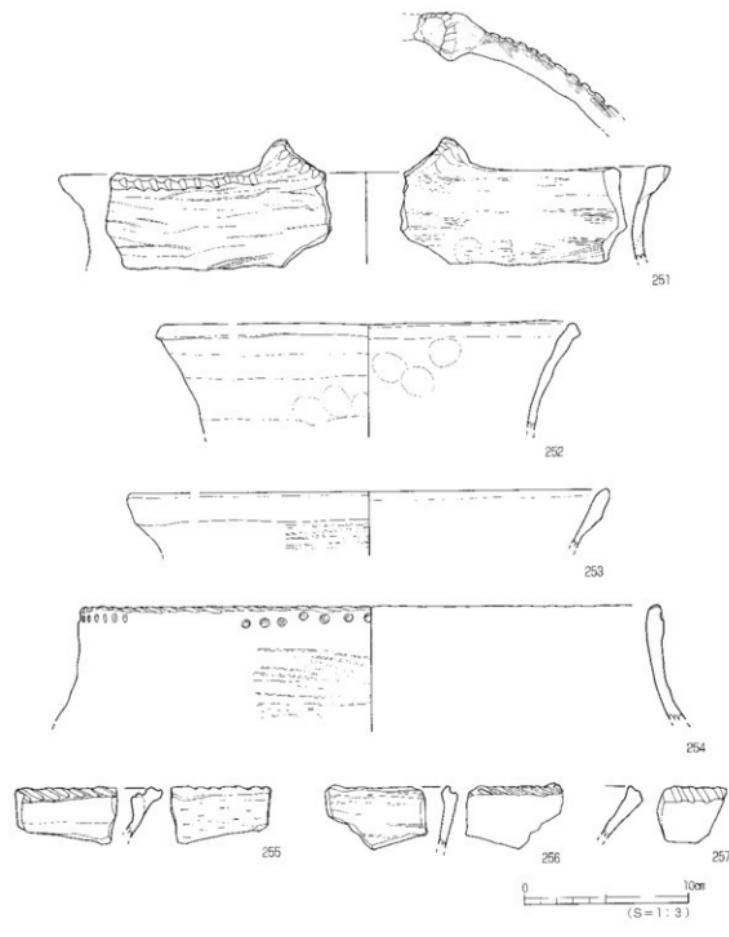
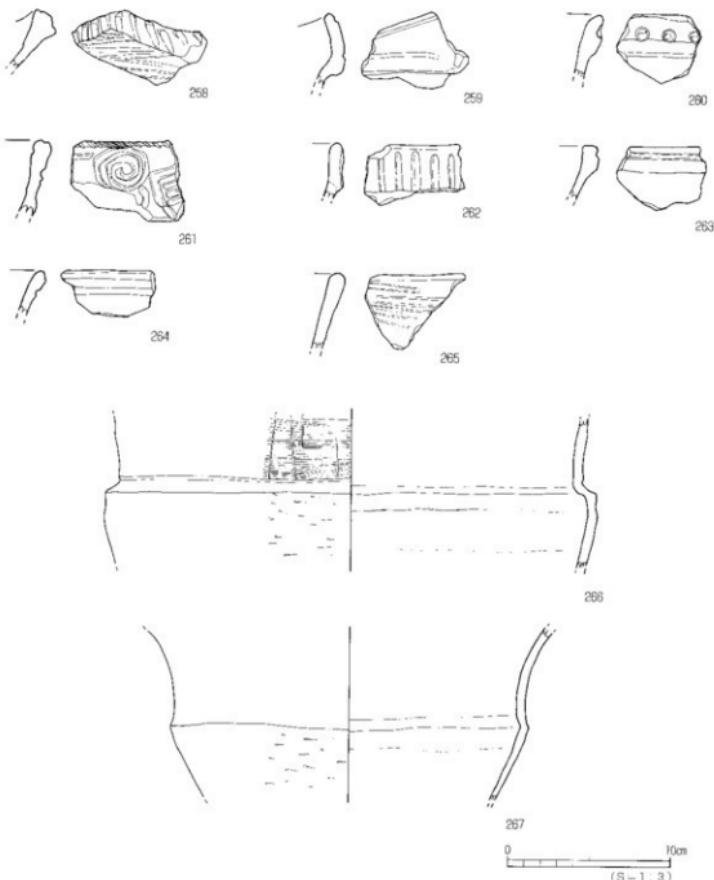


図57 A区第8層出土遺物実測図(1)

番号	器種	測 定 部 分	外 面	内 面	口 縁	突 起	凹 部	唇 部	色	調 べ 方	その 他
251	漆鉢	巻き貝塗底。	巻き貝塗底→ナゲ。						灰褐色	灰褐色	
252	漆鉢	ナゲ。	ナゲ。						棕褐色	灰褐色	
253	漆鉢	漆底。	マメツ。						淡灰褐色	淡灰褐色	
254	漆鉢	朱灰・ナゲ。	ナゲ。						黑色	棕褐色	1) 漆外面巻き貝剥片。
255	漆鉢	巻き貝塗底。	ナゲ。						黑色	黑灰色	
256	漆鉢	漆灰・ナゲ。	朱灰。						黑色	黑灰色	
257	漆鉢	マメツ。	朱灰。						灰褐色	灰褐色	

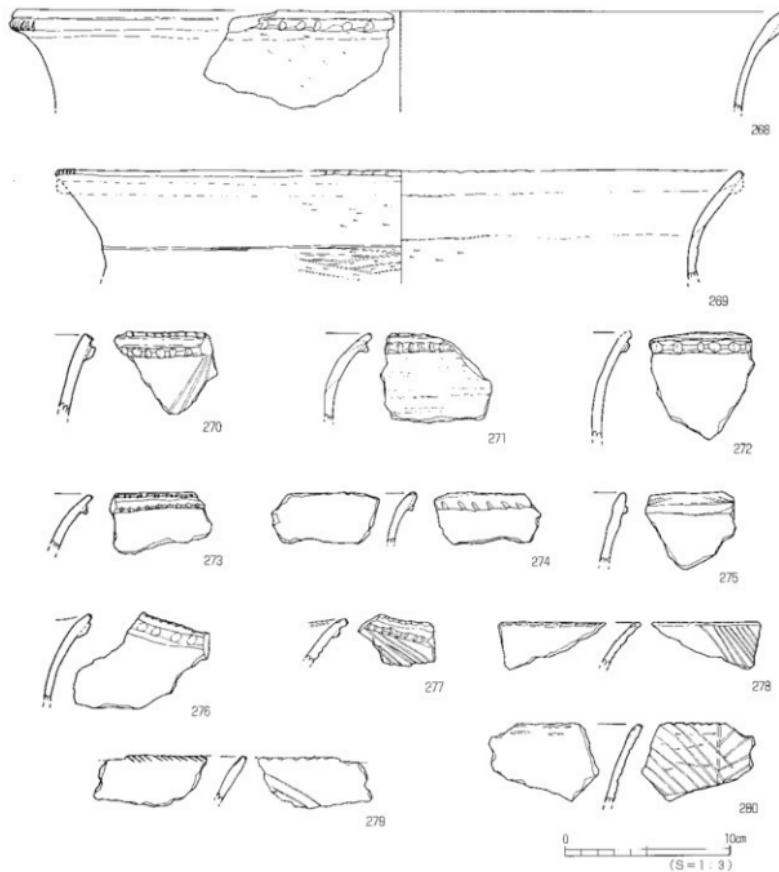
大湊遺跡



種別 番号	器種	周		盤		II		縫		突		色		質		その他の 特徴
		外 面	内 面	直	曲	短	長	鋸	鋸	鋸	鋸	内 面	外 面	内 面	外 面	
258	深鉢	マメワ.	マメワ.	直	曲	短	長	鋸	鋸	鋸	鋸	淡黄褐色	淡黄褐色	淡黄褐色	淡黄褐色	
259	深鉢	マメワ.	マメワ.	直	曲	短	長	鋸	鋸	鋸	鋸	淡黄褐色	淡黄褐色	淡黄褐色	淡黄褐色	
260	深鉢	マメワ.	マメワ.	直	曲	短	長	鋸	鋸	鋸	鋸	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	
261	深鉢	マメワ.	マメワ.	直	曲	短	長	鋸	鋸	鋸	鋸	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	
262	深鉢	ナゲ.	ナゲ.	直	曲	短	長	鋸	鋸	鋸	鋸	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	
263	深鉢	マメワ.	マメワ.	直	曲	短	長	鋸	鋸	鋸	鋸	淡黄褐色	淡黄褐色	淡黄褐色	淡黄褐色	
264	深鉢	マメワ.	マメワ.	直	曲	短	長	鋸	鋸	鋸	鋸	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	
265	深鉢	ナゲ.	ナゲ.	直	曲	短	長	鋸	鋸	鋸	鋸	淡黄褐色	淡黄褐色	淡黄褐色	淡黄褐色	
266	深鉢	ナゲ.	ナゲ.	直	曲	短	長	鋸	鋸	鋸	鋸	淡黄褐色	淡黄褐色	淡黄褐色	淡黄褐色	
267	深鉢	ナゲ.	ナゲ.	直	曲	短	長	鋸	鋸	鋸	鋸	黑褐色	黑褐色	黑褐色	黑褐色	胎上紫青多し。
268	深鉢	ナゲ.	ナゲ.	直	曲	短	長	鋸	鋸	鋸	鋸	黑褐色	黑褐色	黑褐色	黑褐色	内外壁行青。

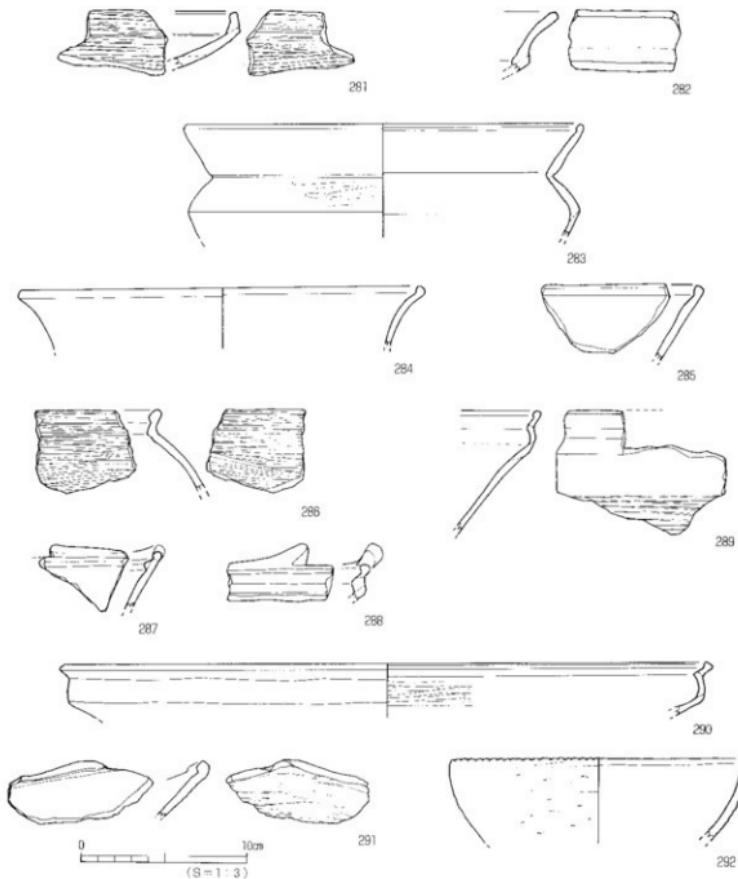
図58 A区第8層出土遺物実測図(2)

調査の概要



編號 番号	器種	形		口		縁		底		壁		色		調 査 面
		外 面	内 面	縁	形	縁	形	内 面	外 面	色	調 査 面	内 面	外 面	
268	漆鉢	ケズリ→ナダ。	ナダ。	圓	マツラ	合形	D字形	黒色	黒色	—	—	—	—	—
269	漆鉢	圓:ケズリ→ナダ。脇:ケズリ。	ケズリ→ナダ。	圓	D字形	尖形	—	黒褐色	褐色	褐色	—	—	—	—
270	漆鉢	ナダ。	ナダ。	圓	小D字形	台形	D字形	黒色	淡褐色	淡褐色	東部施文。	—	—	—
271	漆鉢	喬根→ナダ。	ナダ。	圓	小D字形	三角形	D字形	黒色	淡褐色	淡褐色	—	—	—	—
272	漆鉢	マメツ。	マメツ。	マメツ	マツラ	台形	D字形	黒色	淡褐色	淡褐色	—	—	—	—
273	漆鉢	ナダ。	ナダ。	圓	小D字形	三角形	D字形	黒色	淡褐色	淡褐色	—	—	—	—
274	漆鉢	ナダ。	ナダ。	圓	D字形	—	—	—	—	—	—	—	—	—
275	漆鉢	ケズリ→ナダ。	ケズリ→ナダ。	圓	D字形	三角形	D字形	黒色	淡褐色	淡褐色	—	—	—	—
276	漆鉢	マメツ。	マメツ。	マメツ	マツラ	台形	D字形	黒色	淡褐色	淡褐色	—	—	—	—
277	漆鉢	ナダ。	ナダ。	圓	D字形	—	—	—	—	—	—	—	—	—
278	漆鉢	喬根→ナダ。	マメツ。	圓	D字形	—	—	—	—	—	—	—	—	—
279	漆鉢	マメツ。	マメツ。	圓	D字形	—	—	—	—	—	—	—	—	—
280	漆鉢	ナダ。	ナダ。	丸	D字形	—	—	—	—	—	—	—	—	—
281	漆鉢	ケズリ→ナダ。	ナダ。	圓	D字形	—	—	—	—	—	—	—	—	—
282	漆鉢	ケズリ。	ナダ。	圓	D字形	—	—	—	—	—	—	—	—	—

図59 A区第8層出土遺物実測図(3)



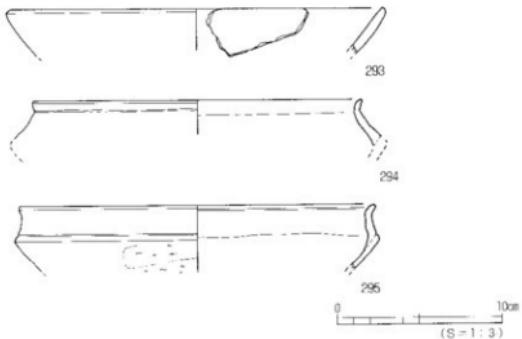
標号	器種	測量	型	口	縁	穴	唐	色	圖	その他の
番号		外 面	内 面	縁形	別 み	新面形	別 み	内 面	外 面	
281	浅鉢	直腹→ナデ。	丸き貝皿底。	面				黒褐色	黒褐色	
282	浅鉢	ケズリ→ナデ。	ナデ。	面				淡青褐色	褐色	
283	浅鉢	ミガキアコ。	マメツ。	丸				暗褐色	暗褐色	
284	浅鉢	ミガキアコ。	ミガキ。	丸				黒褐色	褐色	
285	浅鉢	ミガキアコ。	ミガキ。	丸				褐色	褐色	
286	浅鉢	ミガキアコ。	ミガキ。	丸				黒褐色	黒褐色	
287	浅鉢	ミガキアコ。	ミガキ。	丸				暗褐色	暗褐色	ヒレ状突起。
288	浅鉢	ミガキアコ。	ミガキ。	縁形				暗褐色	暗褐色	ヒレ状突起。
289	浅鉢	上位:ミガキアコ。下位:条痕。	ミガキ。	縁形				黒褐色	黒褐色	
290	浅鉢	ミガキアコ。	ミガキ。	縁形				暗褐色	暗褐色	
291	浅鉢	二段貝皿底。	ナデ。	面				灰褐色	深灰褐色	
292	浅鉢	ケズリ。	ナデ。	D字形				褐色	褐色	

図60 A区第8層出土遺物実測図(4)

273のように端面というよりは口端外面を刻まれているといったほうがよいものがある。また、頸部外面は削り、あるいは条痕調整の後撫でられる場合が多い。以上の突帯文深鉢のほか、突帯を持たない有文深鉢がある。いずれも口縁部から頸部に沈線施文をもつもので、ある程度文様構成がわかる280は羽状文のような施文になっている。これらの深鉢口縁内面には刺突などの施文がある。278の内面口端部直下はヘラ状工具による横長の連続刺突文で、罐面に刻みはない。他の2点には内面のみならず端面にも刻みを持つ。279の内面は刻みや刺突というよりは斜線文といったほうがよいような施文である。

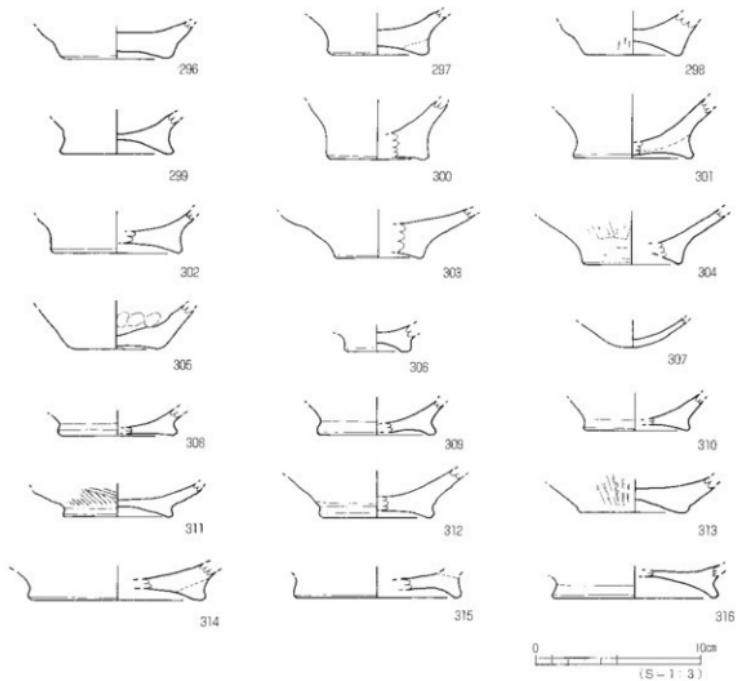
図60・61に示した浅鉢のうち281は後期に属すると考えられるもの、282は晩期前半、その他は晩期中～後半のものである。283～285は張った胴部からやや長いめの頸部が「く」の字状に屈曲して外上方に開き、口端部を内面に丸く肥厚させるもの、286は丸く内面に肥厚した端部を持つ短いL型縁部から屈曲して胴部が大きく張るものである。288～290は口縁部が2段に屈曲して、L型縁部を内面に丸く肥厚する所謂鍵形口縁のもの、289では胴部の条痕が確認できるので、底部に向かって単純にすばまる器型であることがわかる。290はその屈曲の度合いから、一旦頸部を形成する器型になるものと考えられる。288は鋸状突起を持つ。287も鋸状の突起を持つが、口縁部は屈曲せず、内面に突帯のような肥厚帯を持つのみである。291は波状口縁で、方形になると考えられるもの、楕円のもの292・293は両者ともに外面は削りのままであるが、内面は入念な撫でを施されたりしている。292は口端面に浅い刻み目を持ち、また293の内面には赤色顔料の付着がみられる。294・295は逆「く」の字口縁の浅鉢で、294では胴部と口縁部の境や口端部直下の内面にそれぞれ1条の沈線が巡る。295では口端部を強く外方に折り曲げている。

深鉢底部には296～305の多くにみられるような分厚い窪み底や、318～320のような丈の高い高台状のものがあり、浅鉢は薄い窪み底で外方にふんばるような形態のものが多い。



件名 番号	器種	外 周		内 面		口 縁	突 帯	色 調	そ の 他
		幅	高	幅	高				
293	浅鉢	ケズリ→ナデ。		ナデ。		丸	原面形	削み	赤褐色　淡灰褐色　丹画り。
294	浅鉢	ナデ。		ケズリ→ナデ。		丸	—	—	暗褐色　灰褐色
295	浅鉢	口：ナデ　腹：ケズリ。		ナデ。		丸	—	褐色　褐色	口縁内外面深浮彫

図61 A区第8層出土遺物実測図(5)



種別 番号	器種	調査 外観	内観	形	II 種類	III 種類	突 き	色	調 査 内観	外観	その他の 記述
					施 工	施 工	施 工	施 工			
296	漆鉢	ナヂ。		マメツ。					淡灰褐色	淡灰褐色	
297	漆鉢	底:ナヂ。		工房によるナヂ。					淡灰褐色	淡灰褐色	
298	漆鉢	削:ケズリ。底:ナヂ。		ナヂ。					灰褐色	淡灰褐色	
299	漆鉢	削:ケズリ。底:ナヂ。		工房によるナヂ。					淡褐色	淡褐色	
300	漆鉢	ナヂ。		マメツ。					灰褐色	淡灰褐色	
301	漆鉢	ナヂ。		ナヂ。					褐色	淡灰色	
302	漆鉢	ナヂ。		ナヂ。					黑色	淡灰褐色	
303	漆鉢	上肩によるナヂ。		ナヂ。					黑褐色	系褐色	
304	漆鉢	削:ケズリ。底:ナヂ。		ナヂ。					淡灰褐色	灰褐色	
305	漆鉢	ナヂ。		ナヂ。					黑褐色	淡灰褐色	
306	漆鉢	マメツ。		ナヂ。					淡灰褐色	淡灰褐色	
307	漆鉢	ナヂ。		ナヂ。					黑褐色	黑褐色	
308	漆鉢	マメツ。		マメツ。					灰褐色	褐色	
309	漆鉢	ナヂ。		ナヂ。					黑褐色	黑褐色	
310	漆鉢	マメツ。		マメツ。					淡灰色	淡褐色	
311	漆鉢	縁:二枚貝塗底。底:ナヂ。		ナヂ。					褐色	淡青褐色	
312	漆鉢	ナヂ。		ナヂ。					黑褐色	淡青褐色	
313	漆鉢	縁:貝塗→ナヂ。		工房によるナヂ。					黑色	深褐色	
314	漆鉢	ナヂ。		ナヂ。					淡青褐色	淡青褐色	
315	漆鉢	ナヂ。		ナヂ。					褐色	淡灰褐色	
316	漆鉢	ナヂ。		ミガキ。					淡灰褐色	淡灰褐色	

図62 A区第8層出土遺物実測図(6)

調査の概要

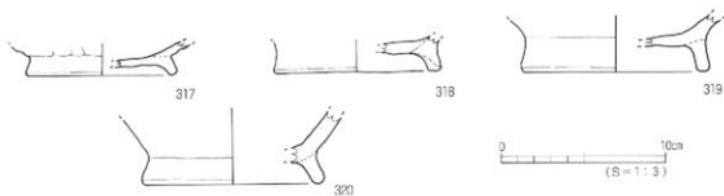


図63 A区第8層出土遺物実測図(7)

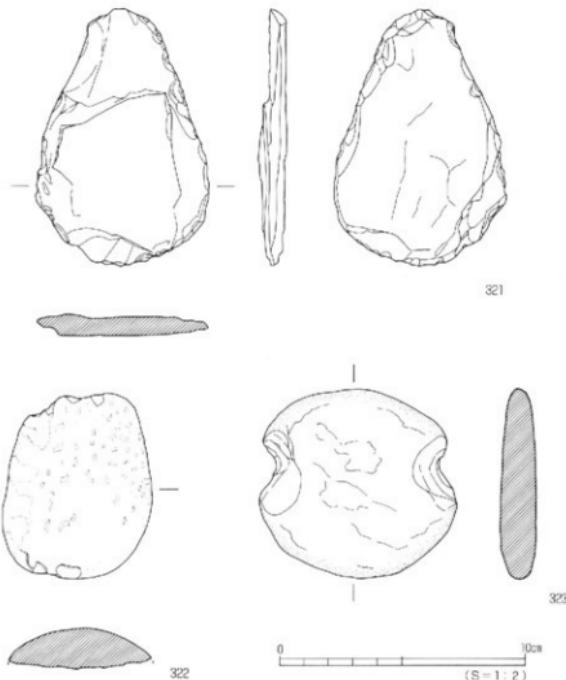
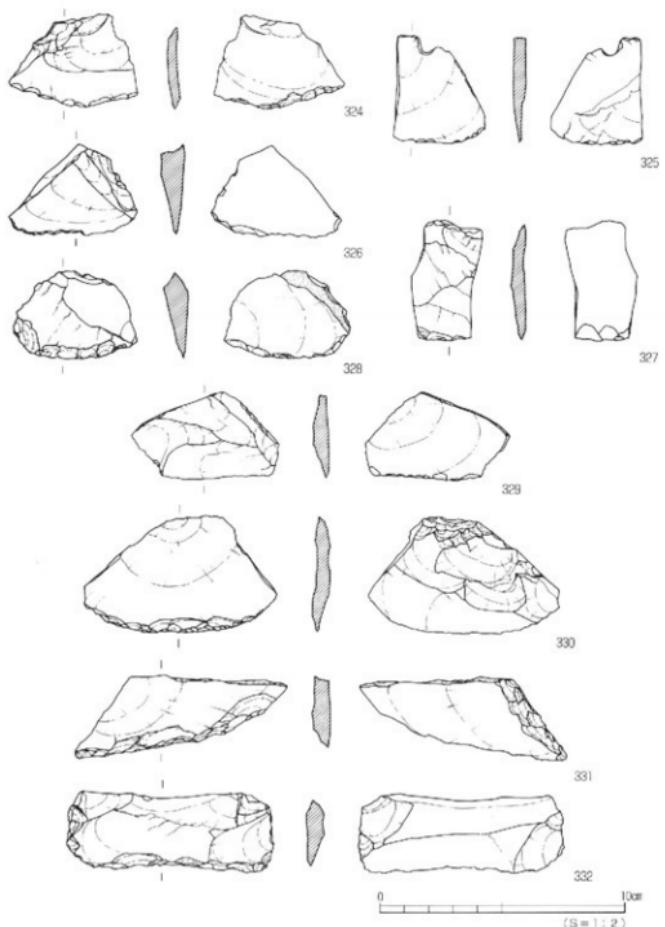


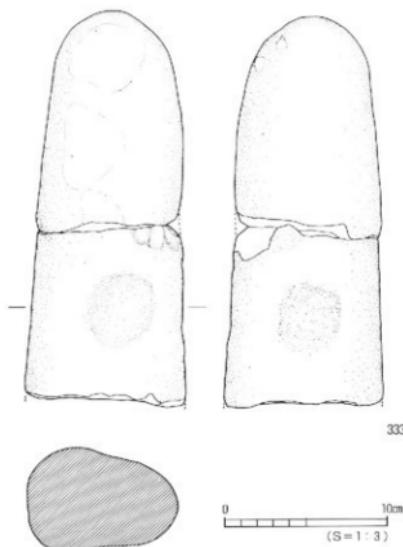
図64 A区第8層出土遺物実測図(8)

番号 番号	器 種	石 材	残 存 度	長 さ(cm)	幅 (cm)	厚 さ(cm)	重 量(g)	その 他
321	打製石斧	綠色片岩	完形	50.5	6.9	1.1	102.0	
322	磨製石斧	綠色片岩	欠損	7.4	5.8	1.6	103.0	
323	石錐	綠色片岩	完形	8.0	1.8	1.5	154.0	



標本名	器種	石材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他
324	スクリイバー	サスカイト		3.8	5.2	0.4	10.9	
325	スクリイバー	サスカイト		4.3	5.7	0.5	8.8	
326	スクリイバー	サスカイト		3.7	5.2	0.9	14.7	
327	スクリイバー	サスカイト		4.9	2.5	0.6	10.9	
328	スクリイバー	サスカイト		3.6	5.0	0.9	13.7	
329	スクリイバー	サスカイト		3.5	5.9	0.6	13.6	
330	スクリイバー	サスカイト		4.7	7.8	0.5	25.1	
331	スクリイバー	サスカイト		3.3	8.5	0.2	23.1	
332	スクリイバー	サスカイト		3.2	8.4	0.7	29.7	

図65 A区第8層出土遺物実測図(9)



地図 番号	器種	石 材	残 存 度	長 さ(cm)	幅 (cm)	厚 さ(cm)	重 量(g)	そ の 他
333	角石	安山岩	欠損	[26.0]	[10.0]	[6.4]	1065.0	

図66 A区第8層出土遺物実測図 (10)

石製品には緑色片岩を素材とした打製土掘り具、磨製石斧、魚網鍤のほか敲石や擦り石として利用したと考えられる324やサヌカイトの剥片を利用したスクレイパーがある。

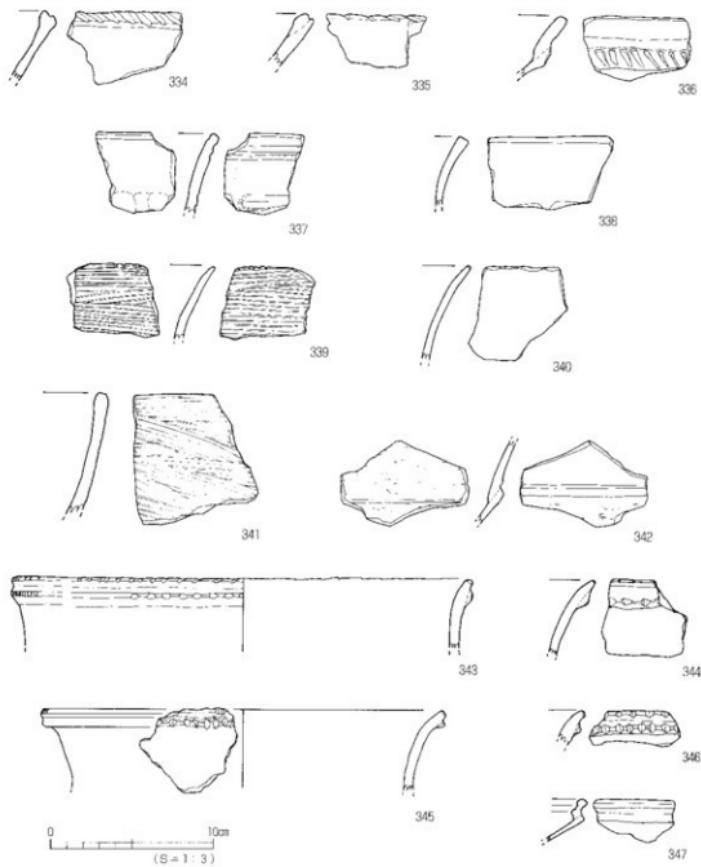
⑥ 第7層出土遺物 (図67~71)

第7層からも量的にはさほど多くはないが、若干の遺物が出土している。334~337が後期と考えられる土器で、これらのうち337の内外面に施された凹線は巻き貝によるもので、後期末頃のものと考えられる。粗製の341も後期のものか。338~340、342は晩期前半から中葉のものであろう。深鉢340の口端部刻みは指おさえによる浅い窪みである。

343~347は晩期後半突帯文深鉢、344は幅広の薄い突帯を持つ、口端部も突带上も軽く刻まれる。これとは対照的に345では、突帯を下方から強く撫で上げ、深い刻み目を施している。346の突帯は低く薄いが刻みそのものはしっかりしている。また、口端部の刻みも深くしっかり施されるが、端面全体を刻まれるのではなく外面向意識した刻みとなっている。底部はいずれも深鉢のもので、窪み底になるが、外方にふんばった安定感のあるものと、351のようにすばまつた安定感のないものとがある。

石製品のうち折損した磨製石斧352は、その基部寄りの破片に刃部を形成するような打ち欠きを施

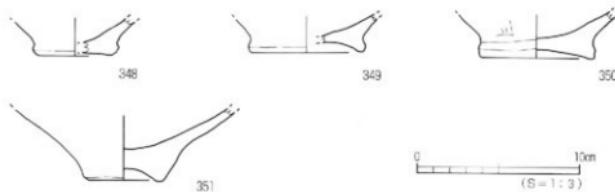
大 调 遗 跡



序号 番号	器種 器種	圓 外 面		圓 内 面		口 縁 面	縁 丸	突 起	等 色	調 色	その 他
		面	面	面	面						
334	漆鉢	アメヅ。	ナデ。	面	面	丸	丸形	面	灰白色	黑色	
335	漆鉢	アメヅ。	ナデ。	面	面	丸	丸形	面	灰白色	灰白色	
336	漆鉢	カズリ→ナデ。	カズリ→ナデ。	面	面	丸	丸	面	黑色	黑褐色	
337	漆鉢	ナデ。	ナデ。	面	面	丸	丸形	面	黑色	黑褐色	
338	漆鉢	ナデ。	ナデ。	面	面	丸	丸形	面	黑色	黑褐色	
339	漆鉢	一枚貝条痕+ナデ。	一枚貝条痕。	面	面	丸	貝殻?	面	黑色	黑色	口縁剥みは部分的。
340	漆鉢	ナデ。	ナデ。	面	面	丸	指揮丸	面	黑色	漆褐色	
341	漆鉢	巻き貝条痕。	巻き貝条痕。	面	面	丸	丸	面	灰色	黑色	
342	漆鉢	巻:ナデ。刷:ケズリ。	ミガキ。	面	面	丸	丸	面	暗褐色	灰褐色	
343	漆鉢	アメヅ。	アメヅ。	面	面	V字形	V字形	面	黑色	深褐色	
344	漆鉢	ナデ。	ナデ。	面	面	D字形	D字形	面	黑色	深褐色	
345	漆鉢	ナデ。	ナデ。	面	面	丸形	三角形	D字形	黑色	深褐色	外側に炭化物付着。
346	漆鉢	ナデ。	ナデ。	面	面	D字形	三角形	D字形	黑色	深褐色	
347	漆鉢	ナデ。	ナデ。	面	面	丸	丸	面	浅灰褐色	浅灰褐色	

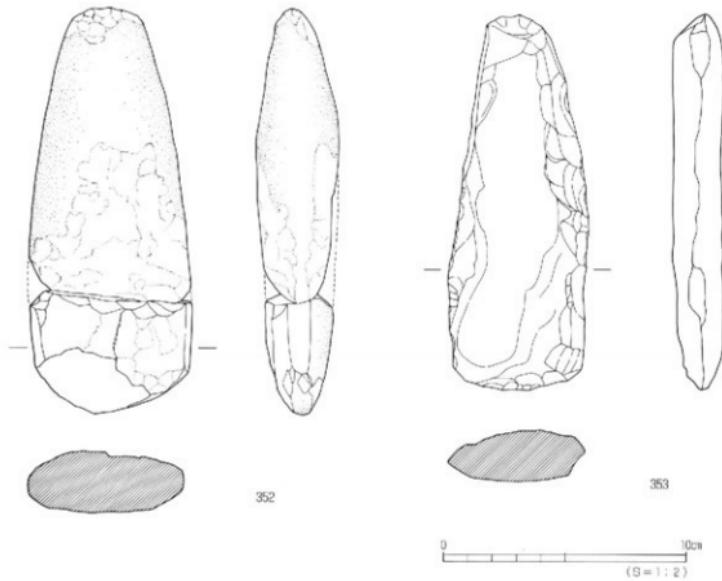
図67 A区第7層出土遺物実測図(1)

調査の概要



種類	器種	測定	口縁	突起	色調	その他の	
番号		外側面	内側面	形状	形	内面	外面
348	深鉢	剥:ケズリ。底:ナデ。	ナデ。			黒色	褐色
349	深鉢	ナデ。	ナデ。			褐褐色	灰褐色
350	深鉢	剥:ケズリ。底:ナデ。	ナデ。			茶褐色	茶褐色
351	深鉢	工具によるナデ。	マメフ。			灰褐色	灰褐色

図68 A区第7層出土遺物実測図(2)

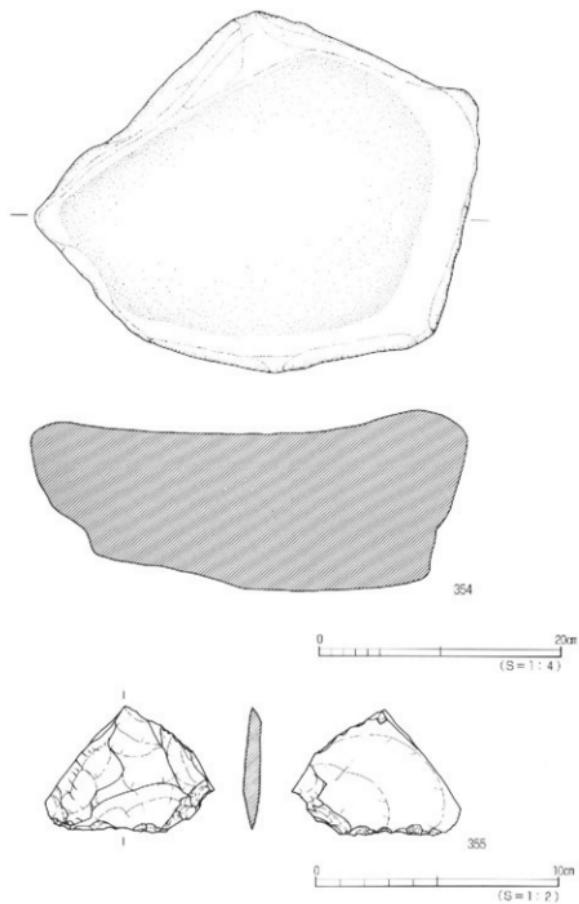


種類	器種	石 材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他の
352	磨製石斧	安山岩	一部欠損	36.6	6.4	(3.5)	464.0	
353	打製石斧	安山岩	完形	25.4	5.6	2.0	281.0	

図69 A区第7層出土遺物実測図(3)

し再加工している。このほか打製石斧、砂岩製の石皿、サヌカイトのスクレイパー1点の出土がある。

さらにこの層では2点の朱塗り結歯式堅歯の出土をみている(図71)。357でその構造をみてみると、現況で長さが9cm、最大幅1.6cm、厚さ1.3cm、この歯には歯が残ってはいないが、抜け落ちた痕が穴となって10個所確認できる。穴と穴を繋うようにクロスした紐状の構造材が観察でき、歯を結わ



器物 番号	器種	石 材	残 存度	長 さ(cm)	幅 (cm)	厚 さ(cm)	重 量(g)	そ の 他
354	石皿	砂岩	完形	26.8	22.2	14.1	7,800	
355	スクレイパー	サヌカイト		5.0	6.8	0.7	25.5	

図70 A区第7層出土遺物実測図(4)

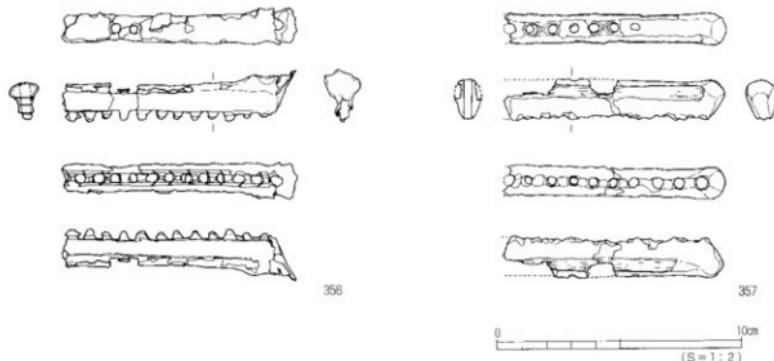


図71 A区第7層出土遺物実測図(5)

えていた部材の一部であることがわかる。また、両側面の漆欠落部分から観察すると長軸方向に竹と思われる材が通っており、これらの部材で歯を挟んで固定し、漆を塗り重ねて成形したものであろう。この櫛は片方の端部が生きており、この端部から数えて4番目と7番目の穴が背部にまで貫通している。おそらく、歯を背部まで貫通させ装飾あるいは把手のようなものを加えていたものと考えられる。したがって、5番目、6番目の穴の中間で折り返せば全形を復元できることになり、そうすると全長10cm弱、歯の总数は10本ということになる。なお、この櫛に使われた赤漆の顔料は水銀朱である。356も同様の構造であると考えられるが、この櫛には現況で12本の歯の基部が遺存している。

⑦ 第6層出土遺物（図72～93）

この層で出土するものは晩期中～後半のものである。器種は深鉢、浅鉢であり、壺、高壺の出土はない。深鉢には、口縁部突帯を持つものと持たないものがある。突帯を持たないもののうち354・355・361・363のように口縁部内面になんらかの施文を施されるものがある。358は直口縁の単純な器型で、外面が削りっぱなしの粗製土器であるが、口端面を軽く刻まれるとともに、口端部直下の内面に浅い凹線を2条施されている。その他のものは端部に刻み目を持たず内面に刺突を施されるもの、359の2列平行の刺突は巻き貝のいっぽ状突起を利用した押し引きによるものと考えられる。波状口縁の361・363のうち363は頸部と胸部の境にも口縁内面と同様の巻き貝殻頂を用いたと思われる刺突がある。その他の突帯を持たないものには一様に口端部に刻み目が施されている。波状口縁の362の刻み目は波頭部付近を大きめ、その他を小さめと部位によって刻み目を使いわけているようである。364は端部刻み目とともに頸部下位に半截竹管状工具による刺突を施されている。366・367は2～2.5cm幅の粘土輪積みの単位が明確にわかる程度の粗製土器である。368は復元口径38cm、他の個体とは異なり口径が頸部径を大きく凌ぐ形態をなしている。これらの突帯を持たない土器のうち、口縁部内面施文といった特徴は突帯文期を遡る要素である。

突帯文深鉢には水平口縁と波状口縁があり、頸部がくびれる器型のもののみである。多くが口端部

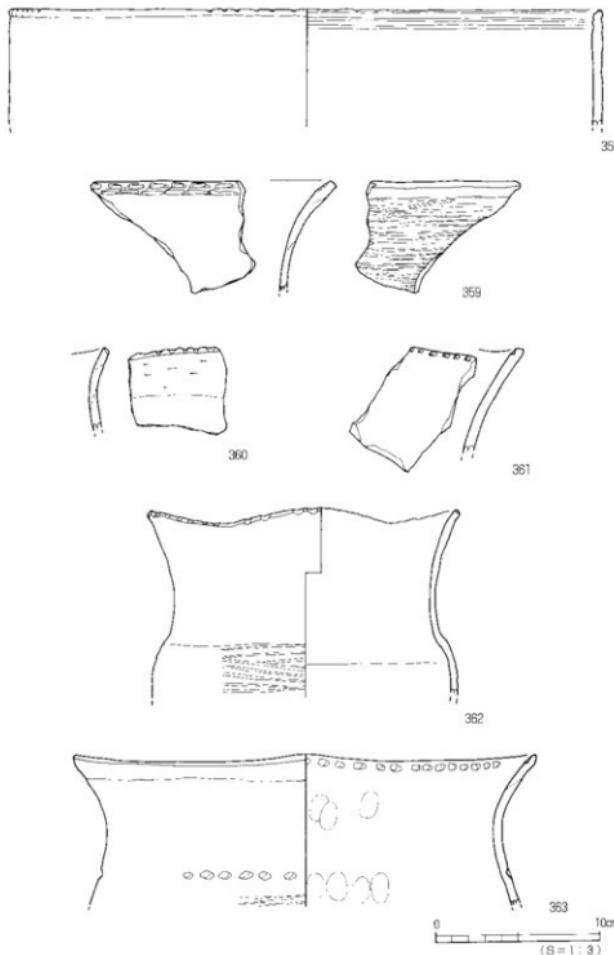
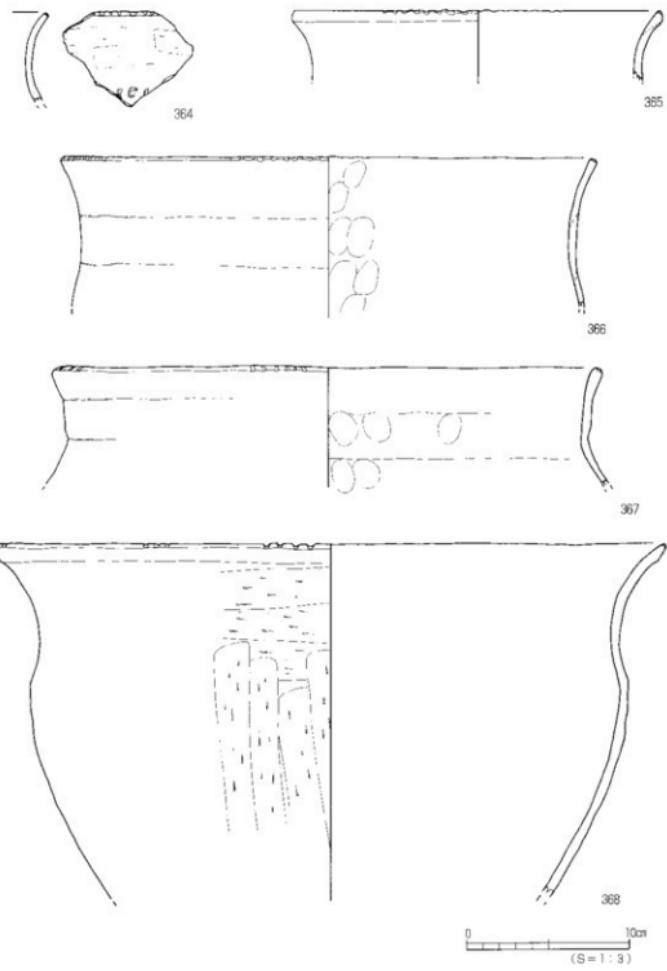


図72 A区第6層出土遺物実測図(1)

件番 番号	器種	調 整		口 縁	次 第	色	調 色	その 他
		外 面	内 面					
358	深鉢 丸足	ケズリ・ナギ。	ケズリ・ナギ。 一枚負余底。	面	D字形	淡茶褐色	淡茶褐色	
359	深鉢 ナギ。		一枚負余底。	面		淡茶褐色	淡茶褐色	口縁内面剥落。
360	深鉢 「ナギ」		ケズリ。	面	O字形	褐色	褐色	
361	深鉢 ケズリ→ナギ。		ナギ。	尖		淡棕褐色	系褐色	口縁内面剥落。
362	深鉢 「ナギ」・ナギ。 脚:一枚負余底。		ナギ。	面	O字形	淡黄褐色	系褐色	
363	深鉢 口:ナギ。 脚:一枚負余底。	ナギ。	面	面		淡褐色	淡褐色	口縫内面・脚部外面剥落。

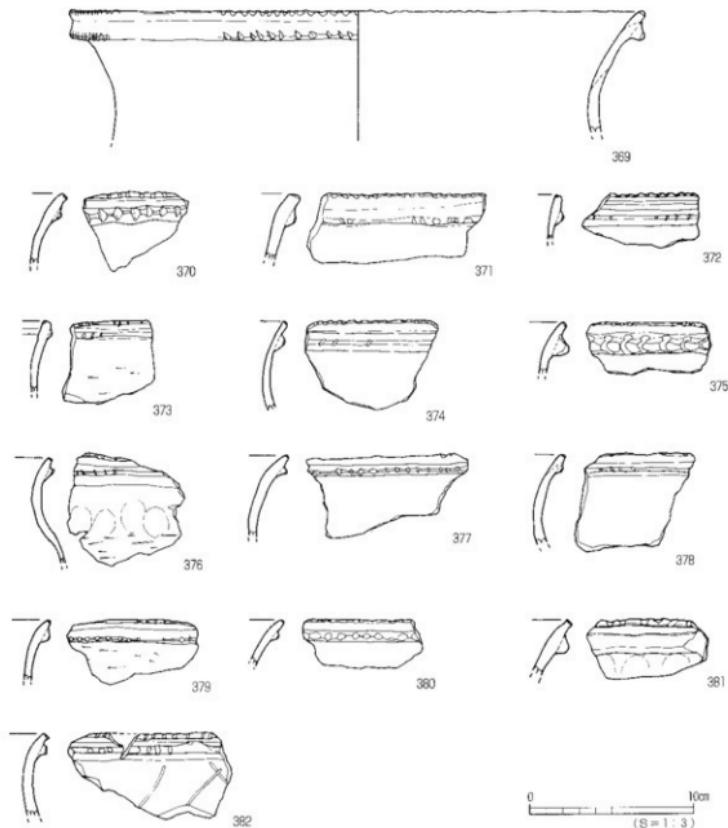
調査の概要



番号	器種	構造	内面		口縁		次第		背面		色調		その他の
			外観	内面	周部形	幅み	断面形	網み	内面	外面	内面	外面	
364	漆鉢	ケズリ。		ナゲ。	直		D字形				黒褐色	黒褐色	漆削界割突。
365	漆鉢	ナゲ。		ナゲ。	直		D字形				灰黄色	淡黄褐色	漆高保付着。
366	漆鉢	ケズリ。		ケズリ・ナゲ。	直		U字形				黑色	明灰褐色	漆剥落か剥。
367	漆鉢	ケズリ・ナゲ。		ケズリ・ナゲ。	直		D字形				黑色	深褐色	
368	漆鉢	ナゲ。		ケズリ。	丸		U字形				黒褐色	淡黄褐色	

図73 A区第6層出土遺物実測図(2)

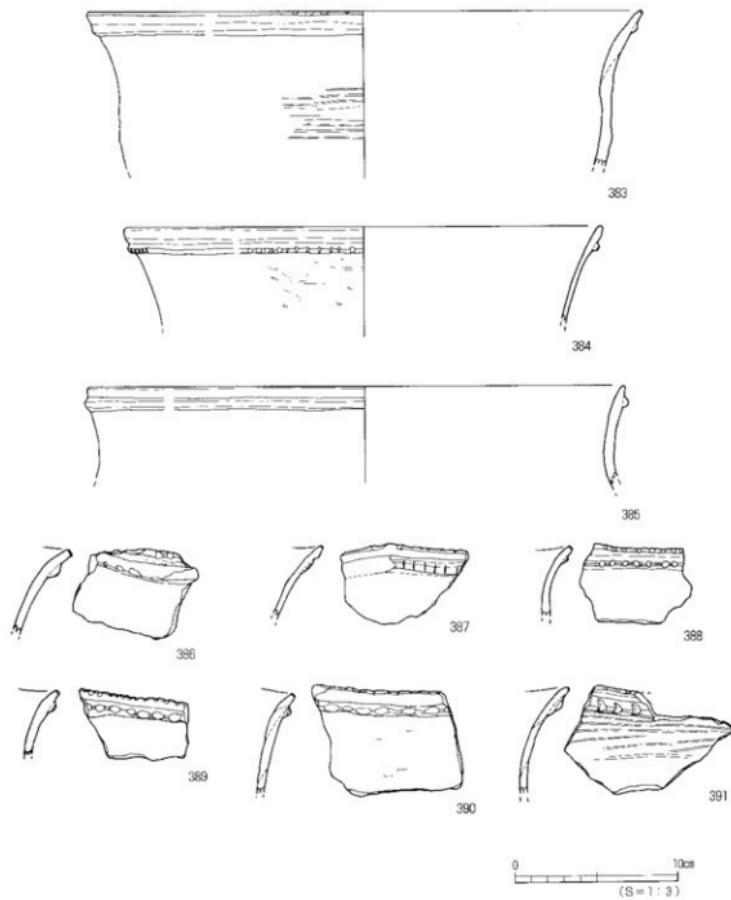
大溝遺跡



器形	器種	溝		縁		窓		帶		負		その他の
		外	内	面	縁	み	窓	帶	内	外		
369	深鉢	マメツ。	マメツ。	丸	O字形	三角形	D字形	灰褐色	褐褐色	褐色		
370	深鉢	二段具垂張。	ナゲ。	面	O字形	三角形	D字形	褐色	褐色	褐色		
371	深鉢	マメツ。	ナゲ。	面	O字形	凸形	マメツ	黒褐色	黑褐色	褐色		
372	深鉢	脚；ケズリ→ナゲ。	ナゲ。	面	D字形	三角形	D字形	長褐色	深褐色	褐色		
373	深鉢	ナゲ。	ナゲ。	面	D字形	三角形	マメツ	黒褐色	黑褐色	褐色		
374	深鉢	マメツ。	マメツ。	面	D字形	三角形	マメツ	灰褐色	褐色	褐色		
375	深鉢	マメツ。	ナゲ。	面	O字形	二角形	C字形	褐色	褐色	褐色		
376	深鉢	口；ナゲ。底；ケズリ。	ナゲ。	面	D字形	三角形	小U字形	黒褐色	黑褐色	褐色		
377	深鉢	マメツ。	マメツ。	面	D字形	合形	D字形	灰褐色	灰褐色	褐色		1) 褐褐色灰褐色。
378	深鉢	マメツ。	ナゲ。	面	O字形	マメツ	マメツ	黑色	黑色	黑色		
379	深鉢	マメツ。	ナゲ。	丸	D字形	内形	D字形	灰褐色	灰褐色	褐色		
380	深鉢	ナゲ。	ナゲ。	面	O字形	合形	O字形	灰褐色	黑褐色	褐色		
381	深鉢	ナゲ。	ナゲ。	面	指押し	合形	小U字形	灰褐色	灰褐色	褐色		
382	深鉢	ケズリ→ナゲ。	ナゲ。	面	小U字形	台形	小U字形	黑色	黑色	褐色		形態論。

図74 A区第6層出土遺物実測図(3)

調査の概要



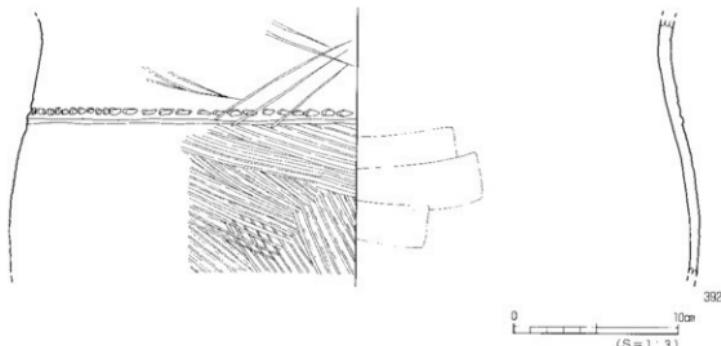
機関 分類	器種	調 査 形		口 寸	縁 形	突 き	内 面	外 面	色 調	其 他
		外 面	内 面							
283	漆鉢 ミガキ。	白口輪；マメツ。剥：有。	面	端部形	突 き	断面形	突 き	内 面	外 面	
284	漆鉢 ケズリ・ナデ。	ナデ。	面	不規	月形			赤褐色	碧褐色	
285	漆鉢 ナデ。	ナデ。	面			U字形		淡灰褐色	淡灰褐色	
286	漆鉢 ナデ。	マメツ。	面	D字形	台形	マメツ		無褐色	碧褐色	
287	漆鉢 ナデ。	ナデ。	面	D字形	輪平	小D字形		褐色	褐色	
288	漆鉢 ナデ。	ナデ。	面	D字形	三角形	D字形		灰褐色	黑褐色	
289	漆鉢 マメツ。	マメツ。	面	V字形	マメツ	マメツ		黑褐色	黑褐色	
290	漆鉢 ケズリ・ナデ。	ナデ。	底	爪形	三角形	爪形		黑褐色	碧褐色	
291	漆鉢 面：二枚貝条痕。	ナデ。	丸	マメツ	三角形	D字形		黑褐色	灰褐色	

図75 A区第6層出土遺物実測図(4)

と突帯に刻み目を持っているが、稀にどちらかの刻み目を欠く場合がある。381・383は突帯、384は口端部また385では両部位ともに刻み目を欠いている。口端部に刻み目を持つものは端部が面をなしているものが多く、大抵の場端面全体を刻まれるが、372・373では内端を刻まれている。なお、373の口縁部内面には浅い凹線が1条巡っている。外面調整は376・383・392にみられるように、胴部に削りあるいは条痕を残し、頸部を撫でるといった具合に調整を使いわけている。頸部施文を持つものには382・392がある。392では頸部と胴部を沈線と刺突を組み合わせた横位の施文で区画し、頸部に3本単位の沈線でX字状の文様を施している。

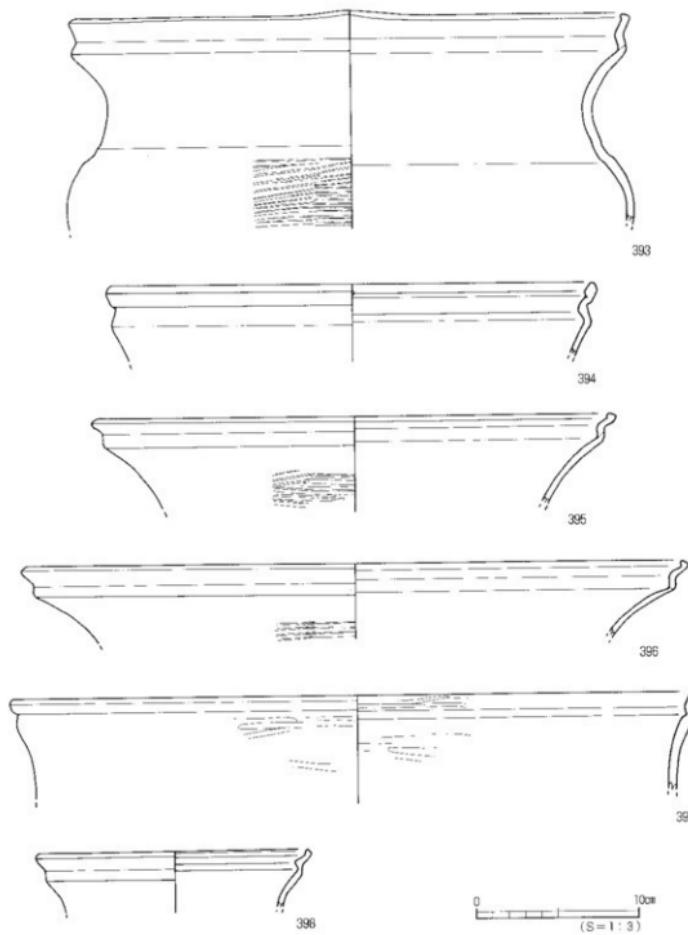
浅鉢には健形口縁のものと、口縁部が逆「く」の字状に外上方に開き波状を呈するものが多い。前者には第8層の項でも述べたが、395・396・404のように口縁部から底部にかけて単純にすぼまる形態のものと403が典型であるが、くびれた頸部を持ち胴が張るものがあり、さらにこの層では405のようなボウル状の器型をなすものも確認できる。これらの浅鉢は口縁が軽い波状を呈していたり、蟠状あるいはリボン状突起をもつことが多いと考えられる。さらに、波頂部や突起の中央部に焼成前的小孔を持つものもある。外面調整は口頸部あるいは口縁部から胴部上半にかけてを磨きや入念な撫でで平滑に仕上げるのに対して、胴部あるいは胴部下半には条痕をそのまま残すのが特徴である。後者も外面調整には同様の特徴を持っている。これらの浅鉢は口縁部を刻まれることが多いが、刻みが口縁を周囲することは少なく、波頂部周辺のみに施されることが多い。なお、この口縁形態のものの中には419~422のように俯鏡形が隅丸方形になる方形浅鉢がある。その他口縁部に無刻み自突帯を施される424やボウル状の器型の425なども、口頸部、胴部の調整法に関しては以上のものと共通している。また、楕状になるものの中には428・429のようなきわめて小型のものがある。

底部には窪み底、上げ底、丸底のものがあり、器種の別は必ずしも明確ではないが、概ね華奢なつくりで胎土の比較的精良なものを浅鉢として扱っている。丸底の442は壺になるかもしれないが、この層で確實に壺と判断できるものの出土をみてないので、一応浅鉢としておくのが適当であろう。



番号	器種	調	型	口	縁	突	帶	色	國	その他の
392	深鉢	強：（カキ。弱：一枚貝条痕。一枚貝条弘→ナテ。	外回内回	浦部形	刻み	断面形	削み	内面	外底	

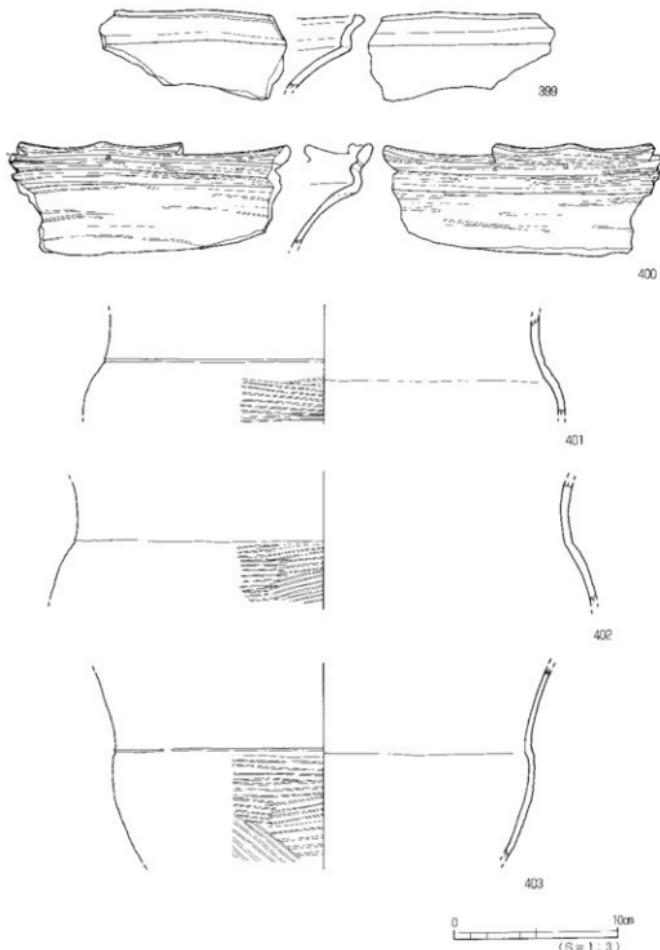
図76 A区第6層出土遺物実測図(5)



番号	器種	外一面図		内一面図		口	縁	内面		色	外一面図	その他の
		横形	縦形	横形	縦形			斜面	斜面			
393	浅鉢	口一縁:ミガキ。腹:朱側。	ミガキ。	縦形	縦形			暗褐色	暗褐色	白	隅丸方頭。	
394	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	縦形	縦形			暗褐色	暗褐色	白	縫空孔(未完)。	
395	浅鉢	口:マメワ。頸:一枚貝委製。	ミガキ。	縦形	縦形			暗褐色	暗褐色	白		
396	浅鉢	口:ミガキ。腹:一枚貝委製。	ミガキ。	縦形	縦形			灰褐色	灰褐色	白		
397	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	縦形	縦形			黒褐色	黒褐色	白		
398	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	縦形	縦形			黒褐色	黒褐色	白		

図77 A区第6層出土遺物実測図(6)

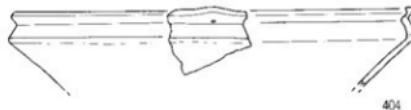
大洞遺跡



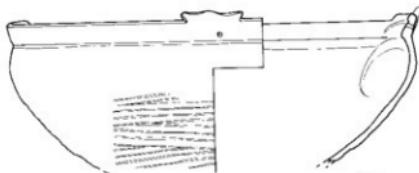
標印 番号	器種	調		形	縁	縫	内	外	色	調	その 他
		外 面	内 面								
399	西鉢	ミガキ。	ナデ?	面部形	縁形	断面形	縫み	内面	外面	赤褐色	茶褐色
400	西鉢	ミガキ。	ミガキ。	縁形	縁形	断面形	縫み	内面	外面	赤褐色	茶褐色
401	浅鉢	縁:ミガキ。腹:一枚貝塗痕。	ケズリ?	済角輪台	済青輪台	済青輪台	無	内面	外面	リボン状突起。口縁穿孔。	
402	浅鉢	縁:ナデ。腹:一枚貝各面。	ナデ。	柱輪台	柱輪台	柱輪台	無	内面	外面	灰褐色	茶褐色
403	浅鉢	縁:ナデ。腹:一枚貝塗痕。	ナメツ。	柱輪台	柱輪台	柱輪台	無	内面	外面	灰褐色	茶褐色

図78 A区第6層出土遺物実測図(7)

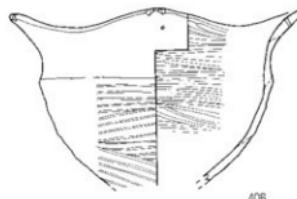
調査の概要



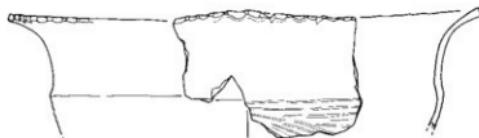
404



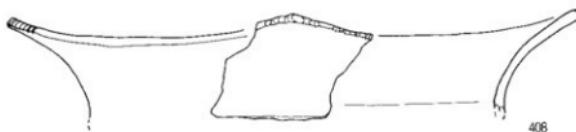
405



406



407



408

0 10cm
(S=1:3)

図面 番号	器種	擴 張 部		口	縁	突 起	側	色 調		その 他
		外 面	内 面					内 面	外 面	
404	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	鍔形	鋸み	断面形	鋸み	淡黄褐色	茶褐色	口縁穿孔。
405	浅鉢	口：ミガキ。側：一枚貝条痕。	ミガキ。	丸				暗灰褐色	灰褐色	リボン状突起。口縁穿孔。
406	浅鉢	口：ミガキ。側：一枚貝条痕。	ミガキ。	直	O字形			淡黄褐色	稻壳色	口縁穿孔。
407	浅鉢	口：ナメ。側：一枚貝条痕。	ナメフ。	直	O字形			茶褐色	淡褐褐色	
408	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	直	D字形			黑褐色	黑褐色	

図79 A区第6層出土遺物実測図(8)

大河遺跡

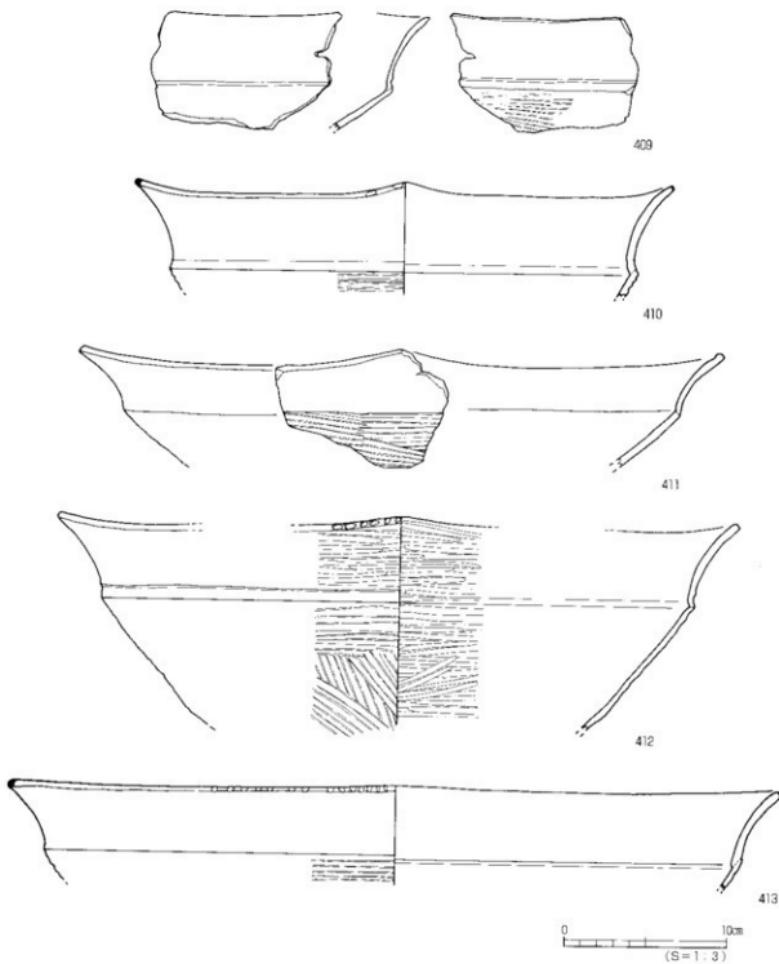
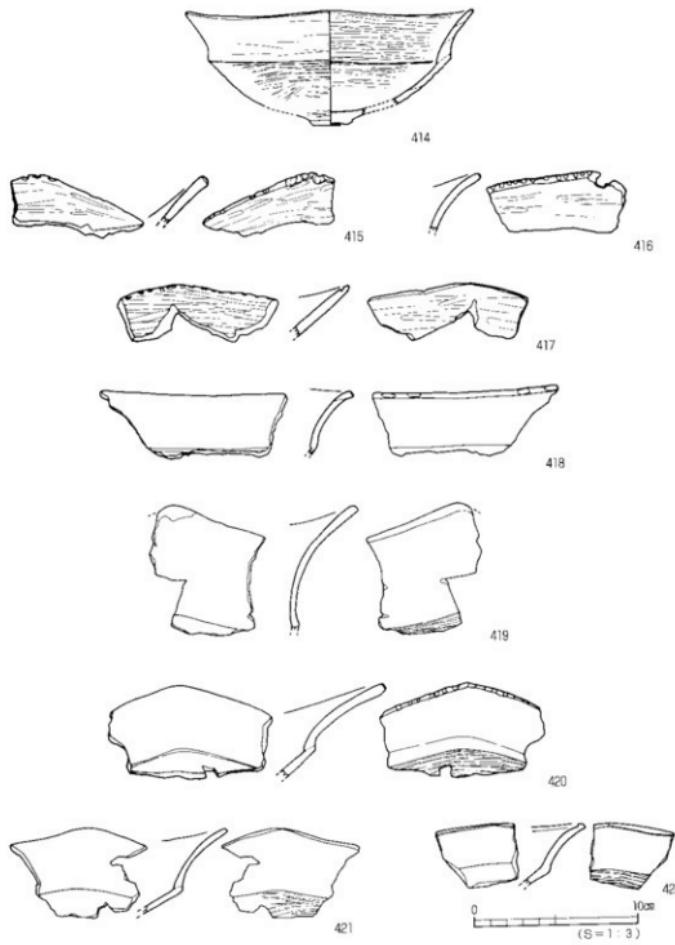


図80 A区第6層出土遺物実測図(9)

器種 番号	外 面	内 面	口 縁	縦 溝	突 起	削 み	色 調		その 他
							内 面	外 面	
409 浅鉢	□: 1ガキ。縁: 二枚貝条痕。ミガキ。		縁部形	削み	断面形	削み	内面	外面	
410 浅鉢	□: 2ガキ。縁: 一枚貝条痕。ナガ?		面				灰褐色	灰褐色	
411 浅鉢	□: 3ガキ。縁: 一枚貝条痕。ミガキ。		面	O字形			灰褐色	灰褐色	
412 浅鉢	□: 3ガキ。縁: 一枚貝条痕。ミガキ。		面	縫合跡	削み		暗茶褐色	暗茶褐色	
413 浅鉢	□: ナア。縁: 一枚貝条痕。ミガキ。		面	D字形			墨褐色	暗茶褐色	

調査の概要



番号 器種 器形	種 種類	調 度		度		口 口	深 深	突 突	手 手	内 内	外 外	その 其の他
		外 外 面	内 内 面	邊 邊 形	附 附 み							
414 浅鉢	口:ケズリ・ナデ:腹:ケズリ。 ミガキ。	ミガキ。	ミガキ。	圓		圓		弧形		黑褐色	黑褐色	
415 浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	ミガキ。	圓	O字形	圓		棱		褐色	褐色	
416 浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	ミガキ。	圓	O字形	圓		洪灰褐色	洪灰褐色	黑褐色	黑褐色	
417 浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	ミガキ。	尖		尖		黑褐色	黑褐色	黑褐色	黑褐色	II様内面刺突。
418 浅鉢	マメツ。	マメツ。	マメツ。	圓	細拌え	圓		洪灰褐色	洪灰褐色	黑褐色	黑褐色	
419 浅鉢	口:ミガキ。腹:二枚貝条痕。 ミガキ。	ミガキ。	ミガキ。	圓	D字形	圓		洪灰褐色	洪灰褐色	黑褐色	黑褐色	
420 浅鉢	口:ミガキ。腹:二枚貝条痕。 ミガキ。	ミガキ。	ミガキ。	圓	O字形	圓		暗褐色	暗褐色	黑褐色	黑褐色	
421 浅鉢	口:マメツ。腹:二枚貝条痕。 マメツ。	マメツ。	マメツ。	圓		圓		洪灰褐色	洪灰褐色	黑褐色	黑褐色	
422 浅鉢	口:ミガキ。腹:一枚貝条痕。 ミガキ。	ミガキ。	ミガキ。	圓		圓		黑褐色	黑褐色	黑褐色	黑褐色	

図81 A区第6層出土遺物実測図(10)

これらの土器のほか、この層では図84のような土偶が出土している。444はヘルメットのような形状のパーツと平面形がおむすび形の土板のようなものと構成されている。上部のパーツの下縁は1条の沈線を巡らせた突帯状に縁どられ、これに直交して同様の意匠がパーツの中軸ラインを縦断するよう施されている。下部の土板状の部分は外縁を1条の沈線で縁どり、貫通する小孔を横位に3個配置している。この土偶が何を表現したものかは不詳であるが、上部のパーツに酷似した木製品が船ヶ谷遺跡の出土品中にみられる。445は、人面表現と思われる土偶で、平面が不整円形、断面がおお

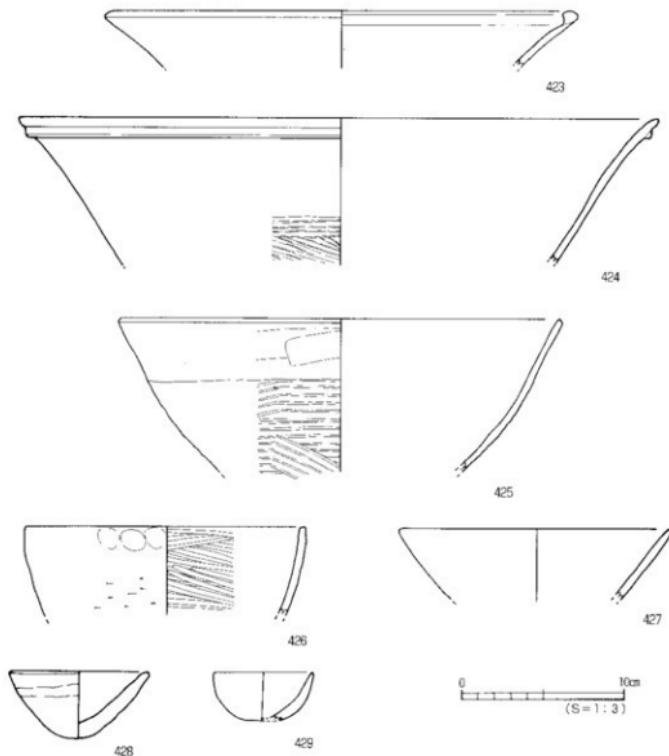
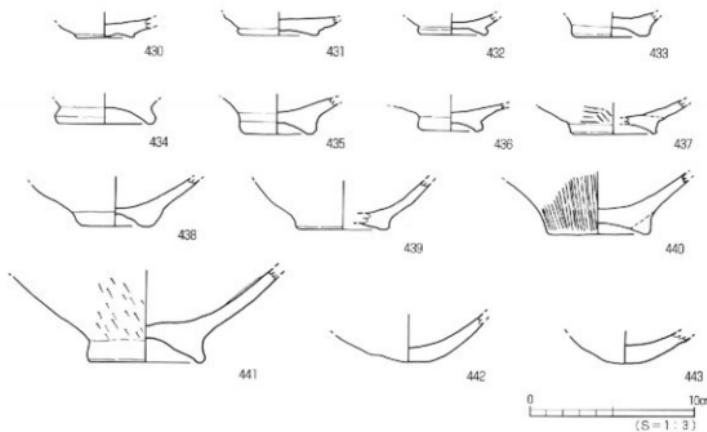


図82 A区第6層出土遺物実測図(1)

標記 番号	器種	調 査 集		口 様	縫 合	突 起	色 調	その 他の 特徴
		外 面	内 面					
423	マメツ。	ミガキ。	ミガキ。	圓	縫合	縫合	褐色	灰褐色
424	洗鉢	□:ミガキ。縫:二枚貝塗。	ミガキ。	丸	縫合	台形	褐色	褐色
425	洗鉢	□:ナデ。縫:二枚貝塗。	ナデ。	圓	縫合	—	褐色	褐色
426	洗鉢	ケズリ。	ミガキ。	圓	縫合	—	褐色	褐色
427	洗鉢	ナデ。	ナデ。	丸	縫合	—	淡灰褐色	褐色
428	洗鉢	ナデ。	ナデ。	丸	縫合	—	褐色	褐色
429	洗鉢	ナデ。	マメツ。	丸	縫合	—	灰褐色	淡黃白色

調査の概要



登号	器種	圖		整面		口縁		突葉		角溝		その他の
		外面	内面	端部形	斜み	唇面形	斜み	内面	外面	内面	外面	
430	浅鉢	ナデ。								褐色	茶褐色	
431	浅鉢	底:ケズリ。								褐色	淡褐色	
432	浅鉢	マメヅ。								深褐色	褐色	
433	浅鉢	マメヅ。		マメヅ。						淡褐色	褐色	
434	浅鉢	ナデ。		欠損。						淡褐色	褐色	
435	浅鉢	ケズリ。				ナデ。				深褐色	淡灰褐色	
436	浅鉢	マメヅ。				ナデ?				茶褐色	棕褐色	
437	浅鉢	ナデ。				ケズリ。				茶褐色	淡灰褐色	
438	浅鉢	ナデ。				ナデ。				褐色	棕褐色	
439	浅鉢	ナデ。				マメヅ。				棕褐色	条褐色	
440	浅鉢	側:一枚貝集成。底:ナデ。				ナデ。				淡灰褐色	淡灰褐色	
441	浅鉢	側:ケズリ。底:ナデ。		工具によるナデ。						深褐色	深棕褐色	内底 淡化物付着。
442	浅鉢?	ケズリ?				ナデ。				淡灰褐色	淡灰褐色	
443	浅鉢?	ケズリ?				ナデ。				淡灰褐色	淡灰褐色	

図83 A区第6層出土遺物実測図(12)

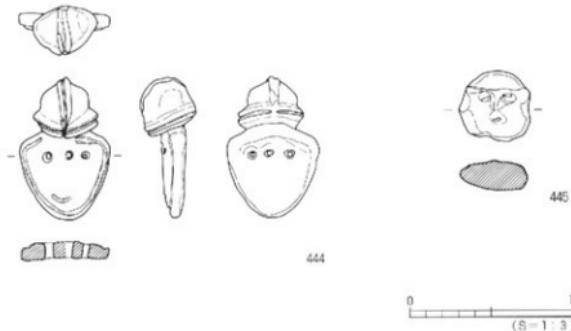
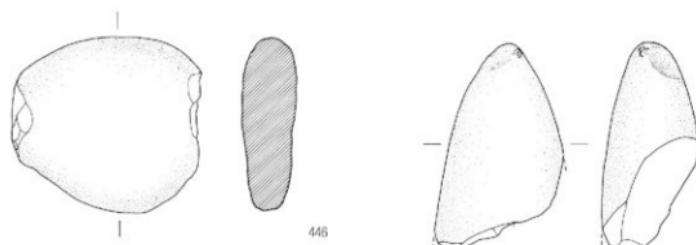
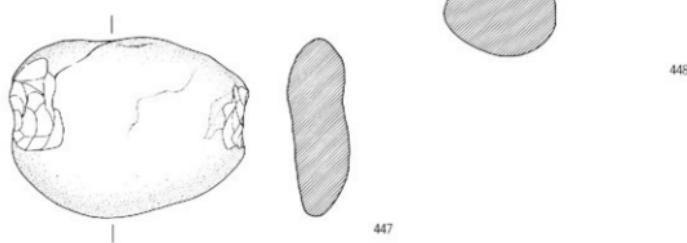


図84 A区第6層出土遺物実測図(13)

大洞遺跡

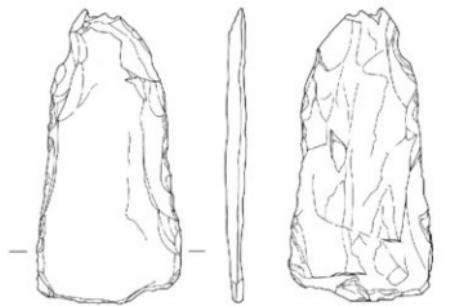


446



447

448



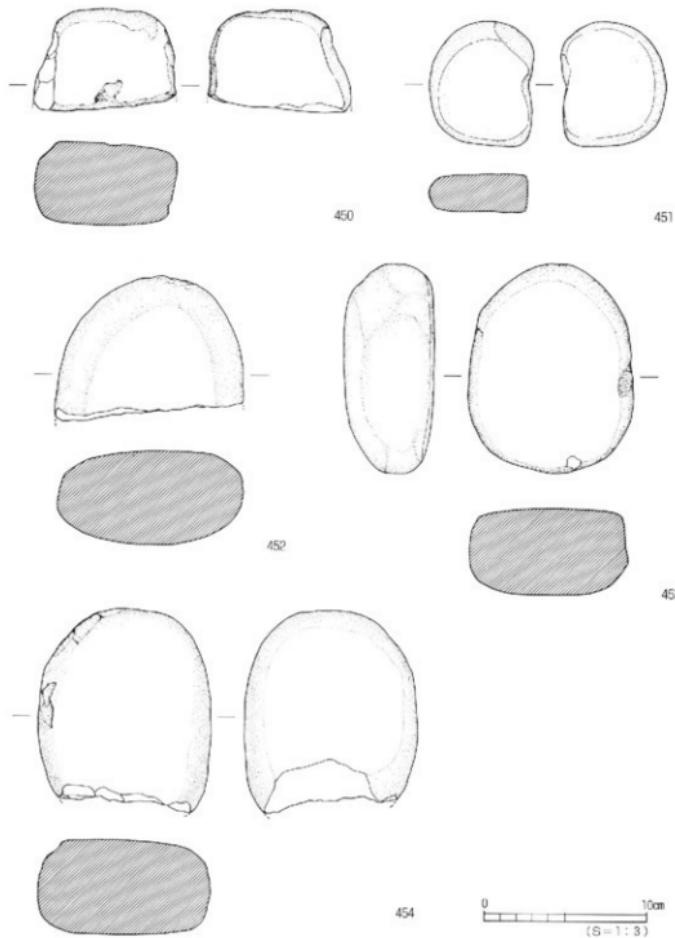
449

0 10cm
(S=1:2)

編號 番号	器種 器種	石材 石材	残存度 残存度	長さ(cm) 長さ(cm)	幅(cm) 幅(cm)	厚さ(cm) 厚さ(cm)	重量(g) 重量(g)	その他 その他
446	石鍬	流紋岩	残形	7.5	7.1	2.2	186.7	
447	石錐	流紋岩	完形	9.6	7.3	2.3	337.0	
448	砸擊石斧	安山岩	欠損	(8.5)	(5.3)	(3.9)	170.0	
449	磨平石製石斧	緑色片岩	完形	12.0	5.8	0.7	87.0	

図85 A区第6層出土遺物実測図(14)

調査の概要



編號 番号	器 種	石 材	残 存 度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重 量(g)	その 他
450	磨石	安山岩	欠損	(6.2)	(8.6)	(5.0)	455.0	
451	用途不明品	砂岩	完形	7.8	6.3	2.3	205.0	
452	磨石	流紋岩	欠損	(7.9)	(11.5)	(5.7)	879.0	
453	磨石	安山岩	完形	12.8	10.1	5.5	1300.0	
454	磨石	安山岩	欠損	(11.6)	10.5	5.8	1229.0	

図86 A区第6層出土遺物実測図 (15)

よそ紡錘形に近い土板状のものに巻き貝を利用したと思われる刺突による窪みがある。おそらく、両眼と口を表現したものであろう。

石製品には、安山岩、流紋岩、あるいは砂岩などの転石を利用した打ち欠き魚網錘、磨石、窪み石、台石などがあり、その他伐採斧の破損品や、土掘り具がある。449は緑色片岩を打ち欠いて製作された土掘り具と考えているが、使用痕のようなものが認められないので、剥片もしくは未製品であるか

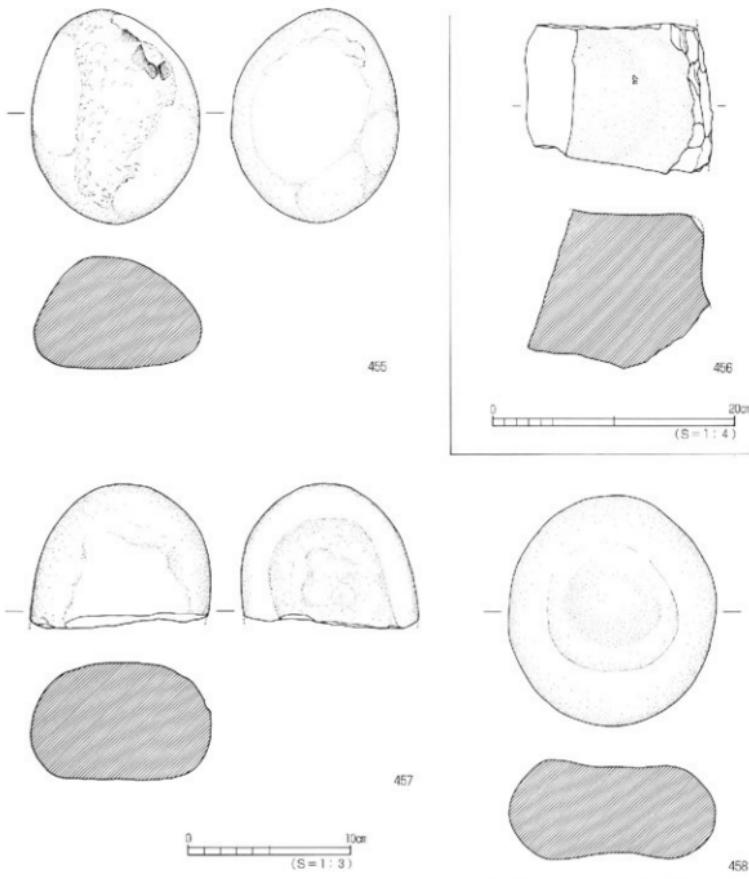
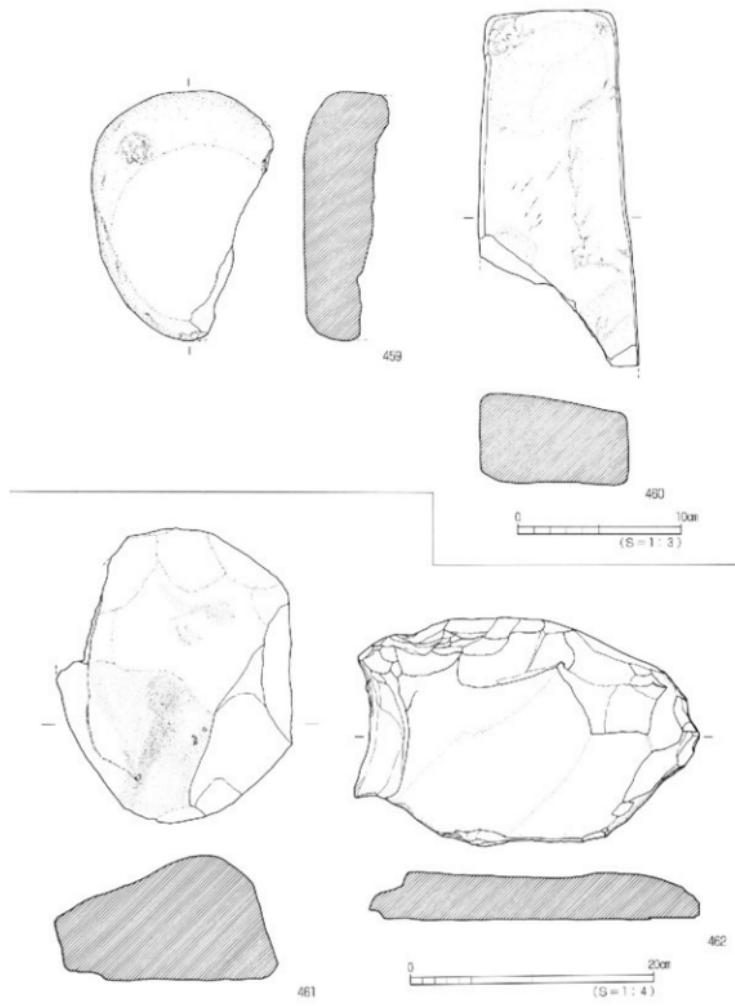


図87 A区第6層出土遺物実測図(16)

件名 番号	器種	石材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他
455	磨石	砂岩	完形	13.1	10.2	6.9	1324.0	
456	石器	安山岩	欠損	(15.0)	(12.5)	(11.3)	3800.0	
457	磨む石	花崗岩	欠損	(8.7)	(10.7)	(7.1)	1033.0	
458	磨む石	安山岩	完形	14.1	12.6	6.0	1628.0	

調査の概要



埋藏層 番号	器種	石材	埋在度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他
459	台石	砂岩	欠損	15.3	(11.1)	(5.7)	1065.0	
460	台石	砂岩	欠損	(22.2)	(9.2)	(5.3)	1795.0	新熟。
461	台石	安山岩	欠損	(24.3)	(19.1)	(10.3)	6850.0	
462	台石	安山岩	完形	17.8	28.1	4.0	3150.0	

図88 A区第6層出土遺物実測図(17)

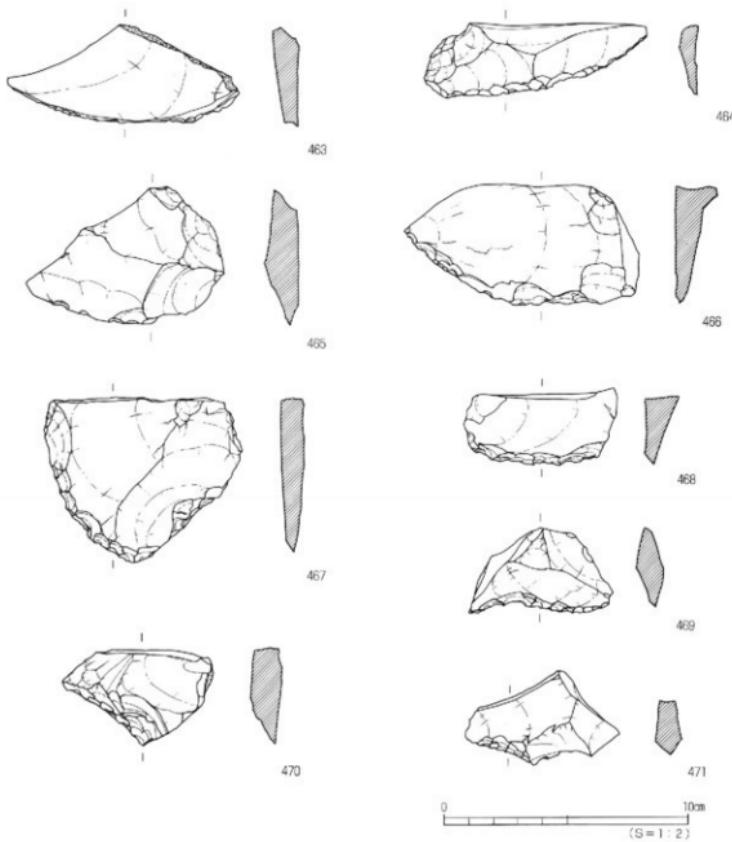
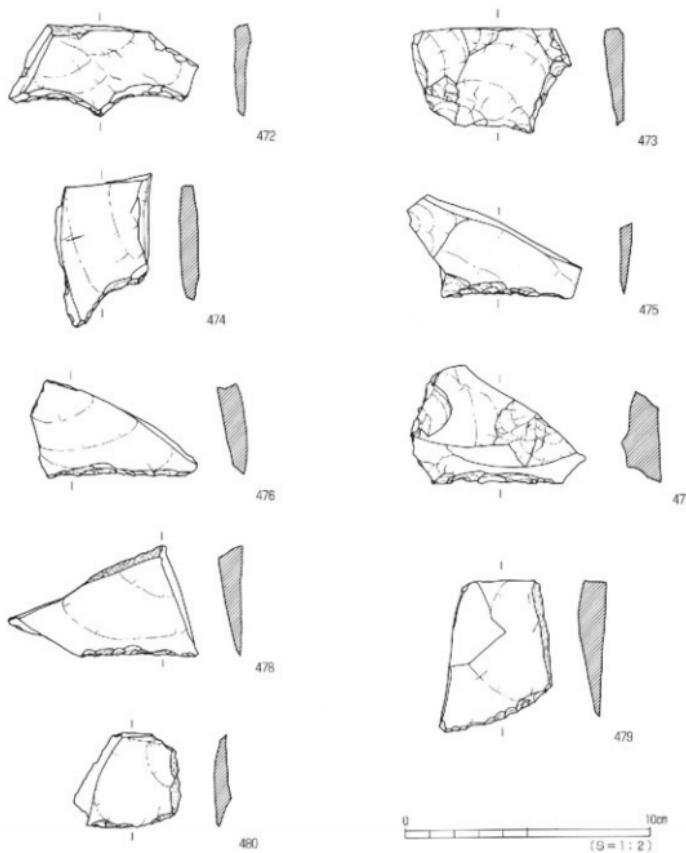


図89 A区第6層出土遺物実測図(18)

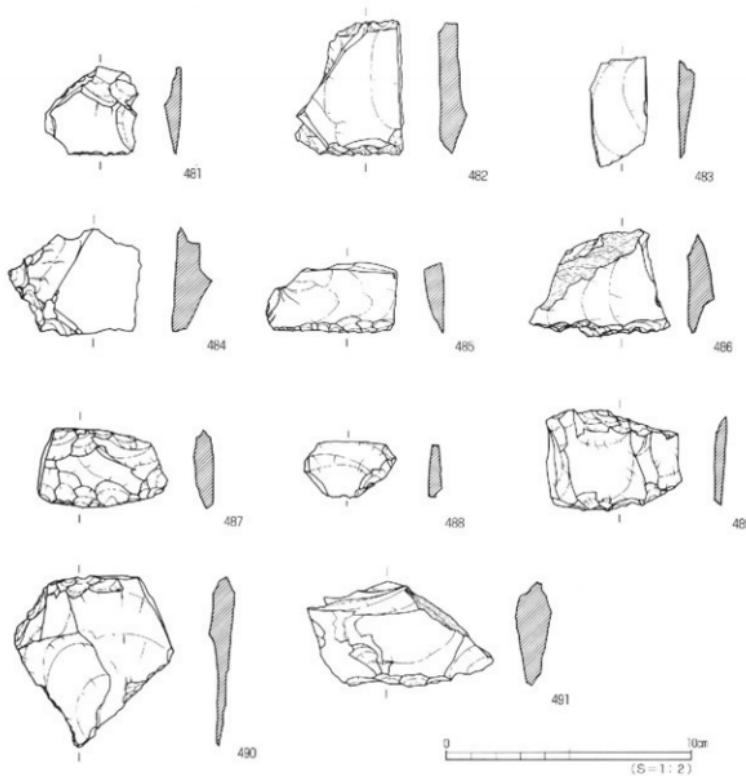
調査の概要



編図 番号	器種	石 材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他の 記述
472	スクレイパー	サヌカイト		3.8	7.8	0.6	18.9	
473	スクレイパー	サヌカイト		4.3	6.4	0.8	29.6	
474	スクレイパー	サヌカイト		6.3	3.7	0.7	22.7	
475	スクレイパー	サヌカイト		4.1	7.1	0.5	13.6	
476	スクレイパー	サヌカイト		4.0	6.5	1.0	23.9	
477	スクレイパー	サヌカイト		4.8	7.0	1.5	45.3	
478	スクレイパー	サヌカイト		4.5	7.7	1.0	30.2	
479	スクレイパー	サヌカイト		6.1	4.6	1.0	33.6	
480	スクレイパー	サヌカイト		3.8	4.3	0.6	12.1	

図90 A区第6層出土遺物実測図(19)

もしれない。また、台石のなかには460のように被熱して破損しているものもある。剥片利用の石製品にはサヌカイトのスクレイパー多数と石鏃1点があり、製品ではないが数点の黒曜石の剥片や石核の出土もある。



編目 番号	器種	石 材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その 他
481	スクレイパー	サヌカイト		5.6	3.7	0.6	7.7	
482	スクレイパー	サヌカイト		5.5	4.3	1.0	31.8	
483	スクレイパー	サヌカイト		4.5	2.3	0.7	8.6	
484	スクレイパー	サヌカイト		4.4	5.2	1.5	29.9	
485	スクレイパー	サヌカイト		2.7	5.3	0.8	15.9	
486	スクレイパー	サヌカイト		4.7	5.7	1.0	26.8	
487	剥片	サヌカイト		3.2	4.9	0.7	19.8	
488	剥片	サヌカイト		2.3	3.7	0.5	6.5	
489	剥片	サヌカイト		4.1	5.4	0.4	17.3	
490	剥片	サヌカイト		6.9	6.4	0.9	32.2	
491	剥片	サヌカイト		4.1	7.4	1.4	41.4	

図91 A区第6層出土遺物実測図 20

調査の概要

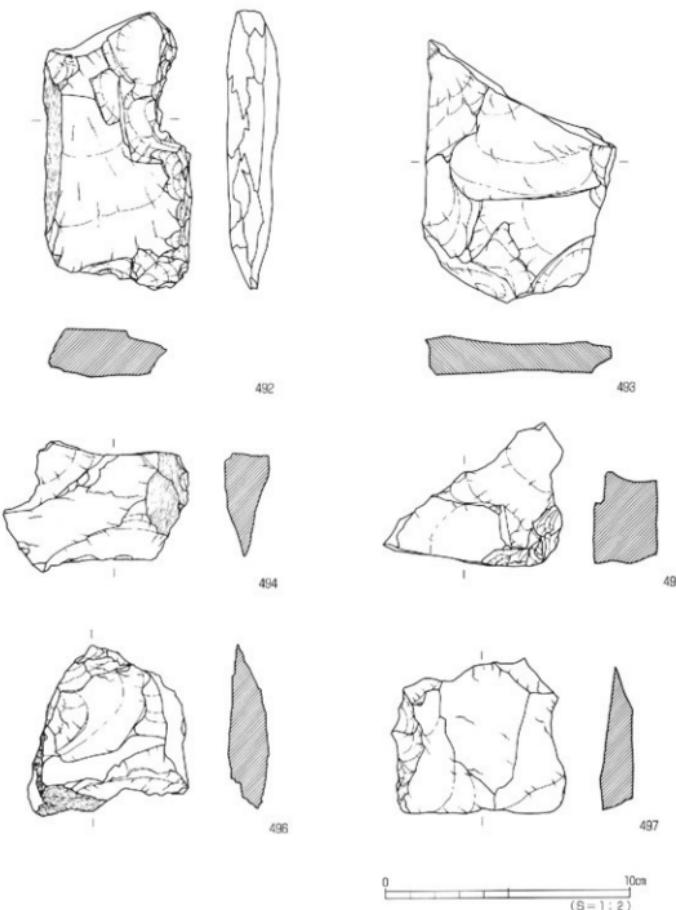


図92 A区第6層出土遺物実測図(2)

地番 番号	器種	石種	性状	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他
492	石核	ナスカイト		11.5	5.8	2.2	157.3	
493	石核	ナスカイト		7.7	10.8	1.6	168.5	
494	石核	ナスカイト		5.3	7.4	1.8	52.0	
495	石核	ナスカイト		6.9	7.2	2.5	98.7	
496	石核	ナスカイト		7.9	6.5	1.7	96.4	
497	石核	ナスカイト		6.4	7.0	1.3	74.1	

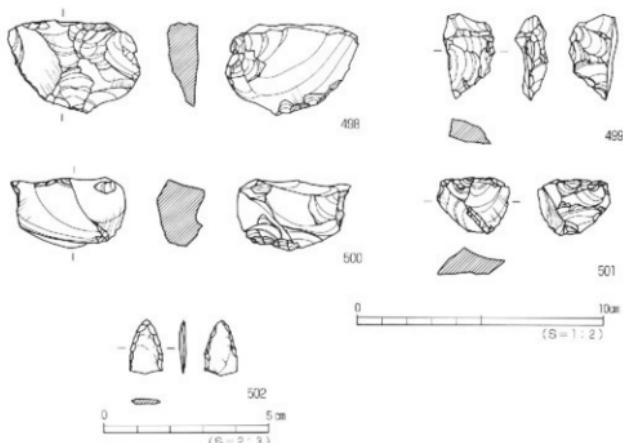


図93 A区第6層出土遺物実測図(2)

⑧ 第5層出土遺物 (図94~137)

第5層は、湿地の最上位に位置する層であり、かつ北東部で検出された土坑群を覆う包含層で、晚期後半の遺物が含まれている。

深鉢の多くが突帯文深鉢で、わずかに無文粗製のもの、あるいは有文無突帯のものが存在する。突帯文深鉢のうち器型として最も多いのは、図94~102に示されたような頸部で緩やかにくびれて口縁部が外反するものである。ただし、これらの器型のものにもいくつか種類があって、典型例でいうと、453のように胴部があまり張らずに口縁部が外反するもの、508や509のように頸部で強くくびれて外上方に口縁部が大きく外反するもの、さらに510・513のように胴部から内傾気味に頸部がすぼまり口縁部が直立よりもやや外方に外反するものがある。また、これらの器型のそれぞれに頸部の長短がある。そして、ほとんどすべてのものが突帯および口端部の双方に刻み目を施される。したがって、569のような無刻み目のものは例外である。口縁部から底部に至るまでの全容を知ることのできる個体は、小型の505しかないが、第6層の突帯文深鉢でもみたように胴部に削りや条痕の痕跡を残し、頸部より上を撫でたり場合によっては磨きを施したり、調整を使いわけている。さらに503~506にみられるように頸部と胴部の境に凹線や沈線を施したり、509のように境の部分の胴部側を強く削って段を形成して、明確に頸部と胴部を区画する場合がある。図100・101はこの区画された頸部に施が行われる有文のもので、基本的には550のような2本以上の沈線を用いた連続X字状文を施される場合が多く、551のような縦と斜めの沈線とを組み合わせるような例は稀である。口端部は面を持って

調査の概要

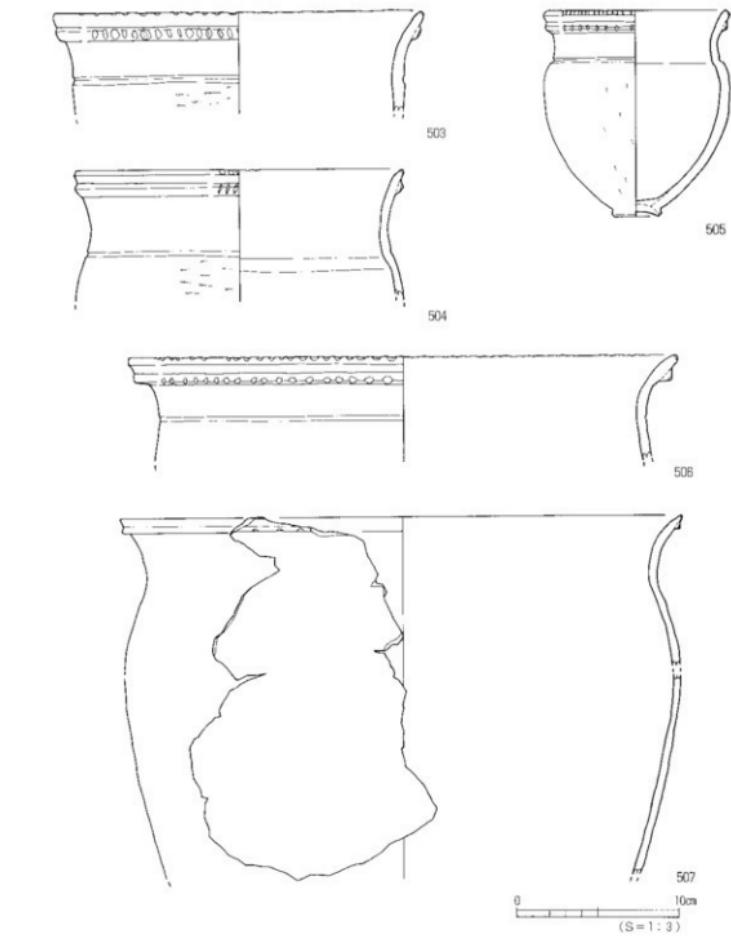
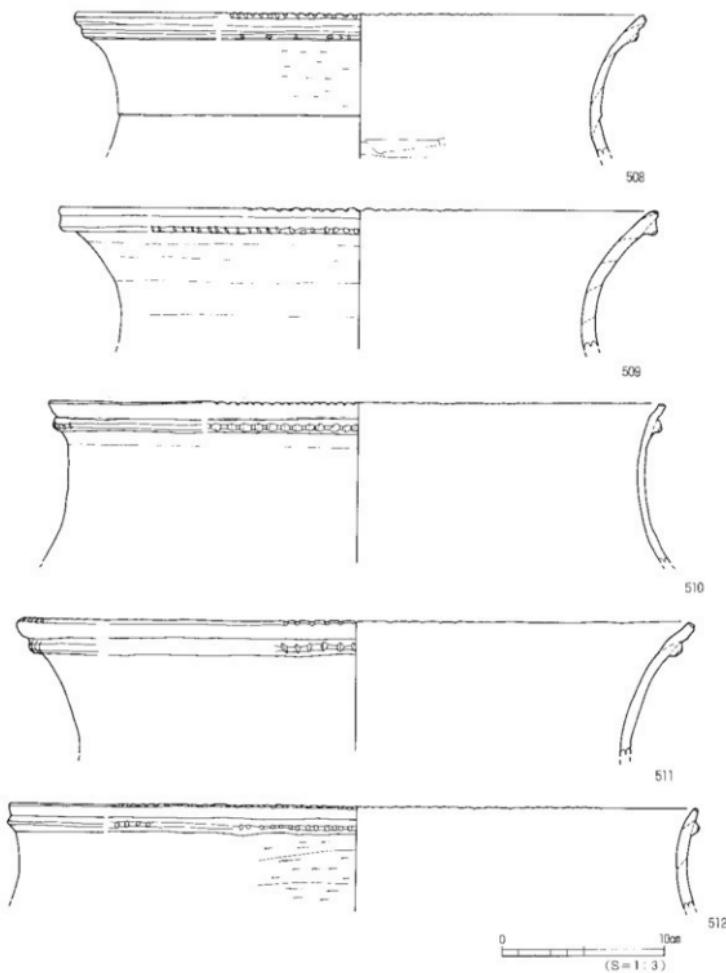


図94 A区第5層出土遺物実測図(1)

種別 分類	名 備	質		口	縁	穴	帶	色	調	そ の 他
		外 面	内 面							
503	泥鉢 口へ葉：ナゲ。腹へケズリ。	丸形	丸形	丸	丸形	直角形	刺 み	D字形	黒色	暗青褐色
504	泥鉢 口へ葉：ナゲ。腹へケズリ。	丸形	丸形	丸	丸形	二角形	細末粒	小D字形	黒褐色	暗褐色
505	泥鉢 口へ葉：ナゲ。腹へケズリ。	丸形	丸形	丸	丸形	直角形	小尖粒	暗青褐色	暗青褐色	暗青褐色
506	泥鉢 マメヅ。	丸形	丸形	丸	丸形	三角形	細末粒	D字形	暗灰褐色	暗青褐色
507	泥鉢 マメヅ。	マメヅ。	マメヅ。	マメヅ	マメヅ	三角形	マメヅ	D字形	灰褐色	灰褐色



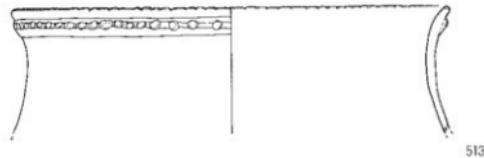
番号	器種	圖		口	縁	突	寺	色	質	その他の
		外	内							
508	漆鉢	ナデ。	ケズリーナデ。	面	丸太形	台形	小D字形?	黒色	淡黄褐色	
509	漆鉢	ナデ。	ナデ。	丸	D字形	台形	小D字形?	黒灰色	淡黄褐色	
510	漆鉢	ナデ。	ナデ。	面	A形	台形	D字形	黒色	淡黄褐色	
511	漆鉢	マメフ。	マメフ。	面	D字形	台形	D字形	黒褐色	淡黄褐色	
512	漆鉢	口:ナデ。腹:ケズリ。	ナデ。	面	D字形	三角形	小丸形	黒色	乳白色	

図95 A区第5層出土遺物実測図(2)

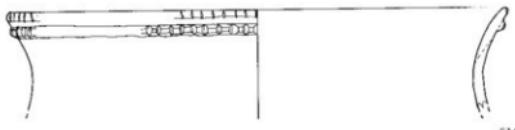
調査の概要

いたり、丸みを帯びていたり、尖り気味に仕上げられたり様々で端部全面を刻まれることが多いが、558や560のように端部の外側を刻まれるものもある。560では断面三角形の突帯の頂部を刻むのではなく、三角形の上辺と口縁部の外面とを同時に刻む特異な例である。なお、粘土帯の接合が確認できるものはすべて内傾接合である。

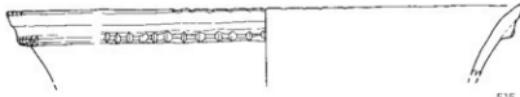
波状口縁のものも基本的には水平口縁のものと同様の特徴を持っている。突帯の貼り方には2種類あって、ひとつには571のような突帯の正面観が口縁と同様のうねりをみせるものと、570のように口縁のみ波状で突帯の正面観が水平になるものとがある。これらの中にも577のような無刻み目のもの



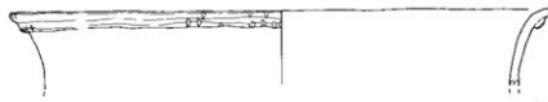
513



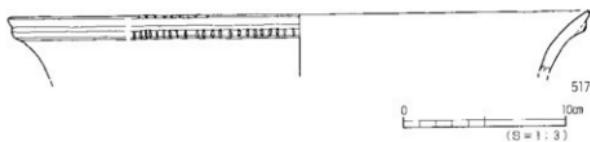
514



515



516

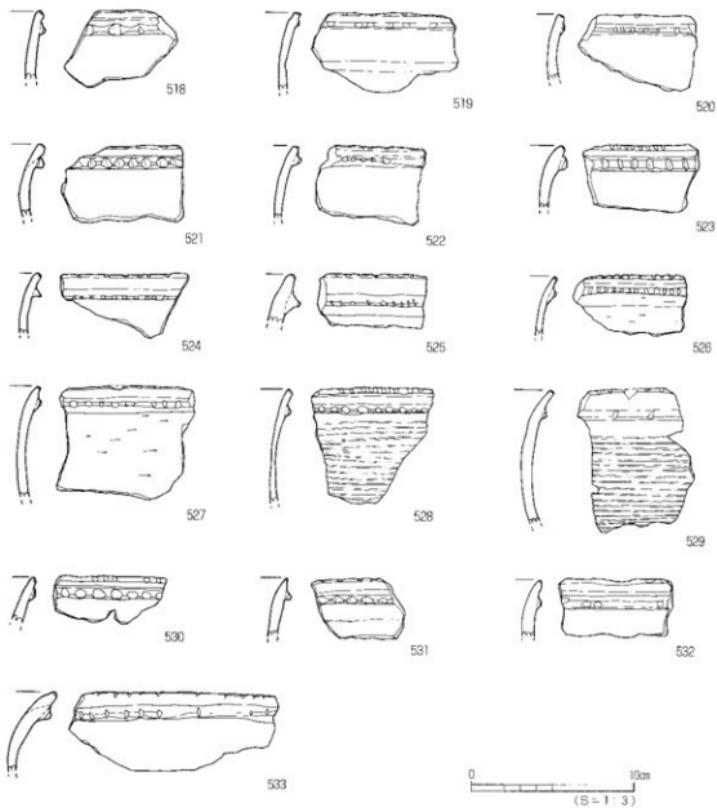


517

0 10cm
(S = 1 : 3)

種別 番号	器種	周		裏		L1	縁 み	突 き 帶 の 形	色 調	その 他
		外 周	内 周	裏	底					
513	深鉢	口：ナデ ₂ 脚：ケズリ ₂	マメツ ₂	白	小D字形	三角形	丸形	黒色	暗青褐色	
514	深鉢	マメツ ₂	マメツ ₂	丸	小D字形	台形	D字形	黒褐色	赤褐色	
515	深鉢	マメツ ₂	マメツ ₂	丸	D字形	三角形	D字形	黒褐色	茶褐色	
516	深鉢	ナデ ₂	ナデ ₂	丸	D字形	半円形	D字形	黒褐色	灰褐色	
517	深鉢	マメツ ₂	マメツ ₂	白	D字形	二角形	マツ ₂	黒灰色	暗褐色	

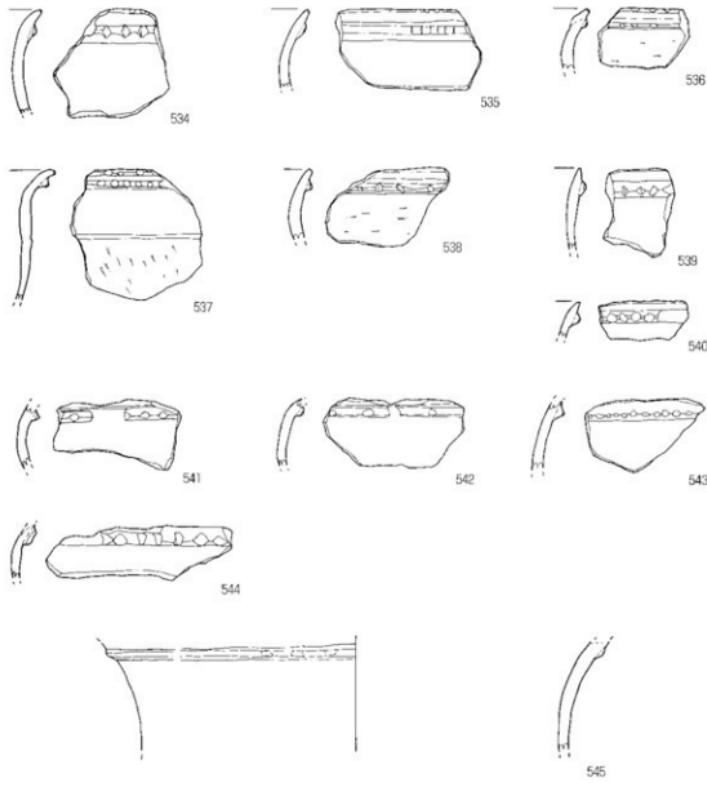
図96 A区第5層出土遺物実測図(3)



標番	器種	調		縁部形	剖	内面形	外	内	高	その他の
		外	内							
518	盆鉢	ナデ。	ナデ。	丸	D字形	台形	D字形	丸	底色 黒褐色	
519	圓鉢	ナデ。	ナデ。	丸	小D字形	台形	マツツ	黒色	黒褐色	
520	盆鉢	マツツ。	マツツ。	曲	丸形	二角形	米粒形	田色	淡褐色	
521	圓鉢	マツツ。	マツツ。	丸	小D字形	台形	D字形	米粒形	黄褐色	
522	深鉢	ミガキ。	ミガキ。	丸	D字形	三角形	小D字形	黑褐色	黑色	
523	深鉢	マツツ。	ナデ。	丸	小D字形	台形	D字形	米粒形	米粒色	口縁内外に進行青。
524	深鉢	マツツ。	マツツ。	丸	D字形	二角形	D字形	米粒形	黄褐色	
525	深鉢	マツツ。	マツツ。	丸	D字形	二角形	D字形	米粒形	米粒色	
526	深鉢	マツツ。	マツツ。	丸	D字形	二角形	D字形	米粒形	米粒色	
527	深鉢	マツツ。	マツツ。	丸	D字形	二角形	D字形	米粒形	米粒色	
528	深鉢	マツツ。	マツツ。	丸	D字形	二角形	D字形	米粒形	米粒色	
529	深鉢	マツツ。	マツツ。	丸	D字形	二角形	D字形	米粒形	米粒色	
530	深鉢	マツツ。	マツツ。	丸	D字形	二角形	D字形	米粒形	米粒色	
531	深鉢	マツツ。	マツツ。	丸	D字形	二角形	D字形	米粒形	米粒色	
532	深鉢	マツツ。	マツツ。	丸	D字形	二角形	D字形	米粒形	米粒色	
533	深鉢	マツツ。	マツツ。	丸	D字形	二角形	D字形	米粒形	米粒色	

図97 A区第5層出土遺物実測図(4)

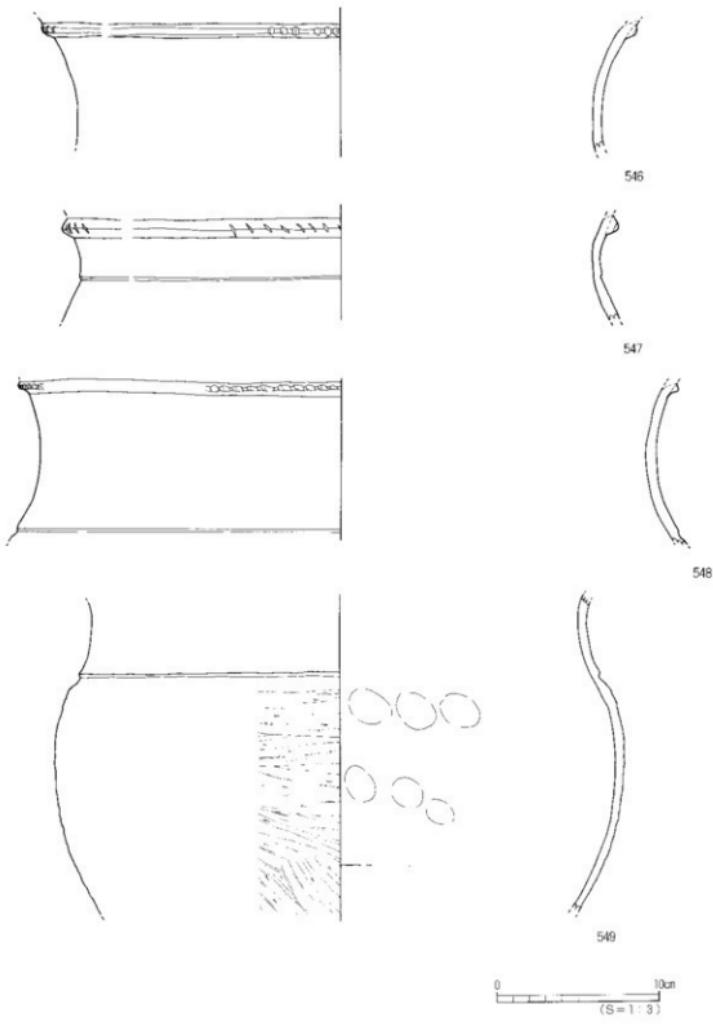
調査の概要



件番 器種	構 造	蓋		口 縁	縁 み	穴 帶	色	周 囲	そ の 像
		外 面	内 面						
534 深鉢 底:ケズリ。		ナド。		圓	D字形	△形	黒褐色 淡黃褐色		
535 深鉢 マメフ。		マメフ。		丸	マメフ	マメフ	黒褐色 淡褐色		
536 深鉢 ケズリ?		ミガキ。		丸	丸形	△形	黒色 淡黃灰褐		
537 深鉢 頂:ナギ。底:ケズリ。		ナド。		丸	O字形	△形	丸形 茶褐色		
538 深鉢 底:ケズリ。		ナド。		四	D字形	△形	灰褐色 黃褐色		
539 深鉢 マメフ。		マメフ。		尖	マメフ	台形	赤褐色 茶褐色		
540 深鉢 マメフ。		マメフ。		丸	マメフ	台形	小D字形 D字形	黒褐色 茶褐色	
541 深鉢 頂:二枚貝痕。		ナド。				△形	D字形	茶褐色 黃褐色	
542 深鉢 不明。		不明。				△形	△形	黑色 褐色	
543 深鉢 ミガキ。		マメフ。				△形	D字形	黑色 褐色	
544 深鉢 ナド。		マメフ。				△形	D字形	茶褐色 黃褐色	
545 深鉢 マメフ。		マメフ。				台形	マメフ	茶褐色 淡黃褐色	

図98 A区第5層出土遺物実測図(5)

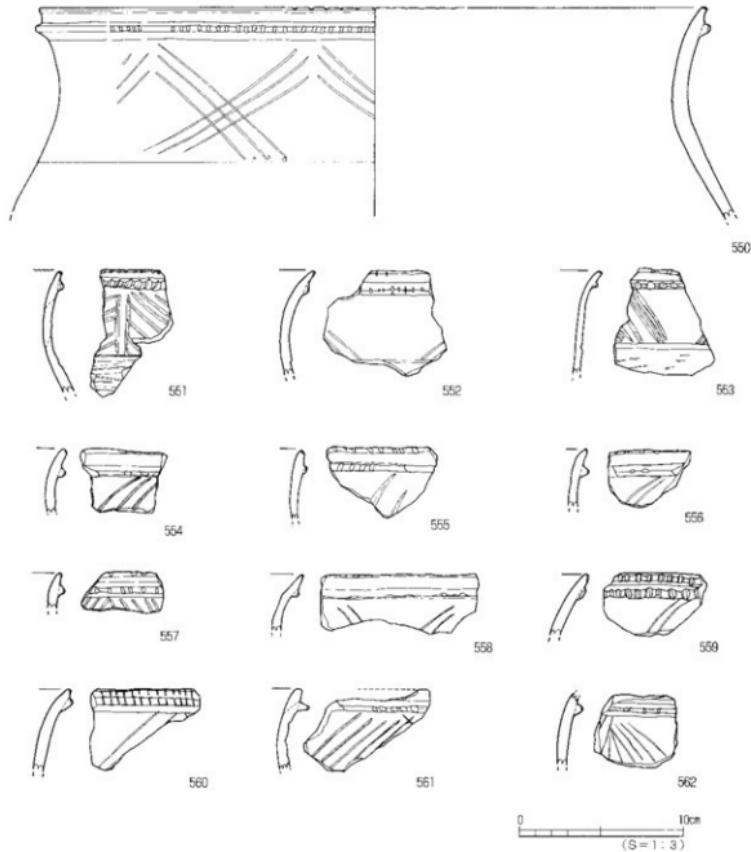
大溝遺跡



件名 番号	器種	質		口様	突沿	色		その他の
		外面	内面			端部形	糊み	
546	深鉢 ナデ。		ナデ。			台形	マメフ	黒褐色 茶褐色
547	深鉢 マメフ。		マメフ。			三角形	小D字形	灰褐色 茶褐色
548	深鉢 ナデ。		マメフ。			三角形	D字形	黑色 茶褐色
549	深鉢 頭:ナデ。側:ケズリ。		ナデ。					淡灰黄色 灰黄褐色

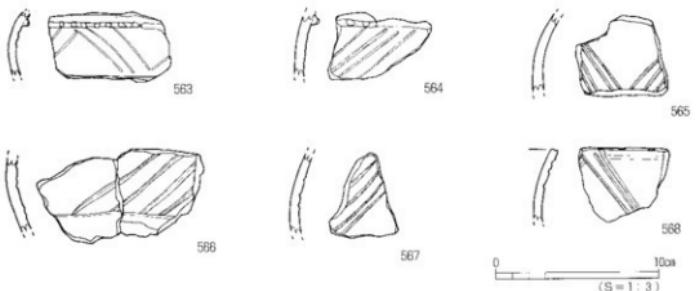
図99 A区第5層出土物実測図(6)

調査の概要



標印番号	器種	調査		寸		文	有	色	調	その他の
		外 面	内 面	幅	高 さ					
550	深鉢	口・底：ナデ。刷：ケズリ。	ナデ。	丸	小V字形	台形	刷 み	黒色	黄褐色	頭部施文。
551	深鉢	口・底：ナデ。刷：ケズリ。	ナデ。	丸	小D字形	台形	長丸形	黒色	黒褐色	頭部施文。
552	深鉢	口・底：ナデ。	マメツ。	尖	マメツ	三角形	縦施文	褐色	褐褐色	頭部施文。
553	深鉢	口・底：ナデ。刷：ケズリ。	ナデ。	丸	小D字形	台形	D字形	黒色	黑褐色	頭部施文。
554	深鉢	ナデ。	ナデ。	丸	小D字形	台形	丸形	茶褐色	黄褐色	頭部施文。
555	深鉢	マメツ。	ミガキ。	丸	マメツ	台形	丸形	茶褐色	褐色	頭部施文。
556	深鉢	ナデ。	ナデ。	丸	マメツ	台形	マメツ	淡褐色	黄褐色	頭部施文。
557	深鉢	ナデ。	ナデ。	丸	小D字形	台形	D字形	灰褐色	淡褐色	頭部施文。
558	深鉢	ナデ。	ナデ。	曲	マメツ	三角形	マメツ	茶褐色	黄褐色	頭部施文。
559	深鉢	ナデ。	ナデ。	丸	D字形	半円形	D字形	深褐色	深褐色	頭部施文。
560	深鉢	ナデ。	ナデ。	丸	細長形	三角形	縦長形	黒色	淡灰褐色	頭部施文。
561	深鉢	ナデ。	ナデ。	丸	台形	O字形	新褐色	黑色	頭部施文。	
562	深鉢	底：ケズリ。	ナデ。	—	—	—	マメツ	淡褐色	淡褐色	頭部施文。

図100 A区第5層出土遺物実測図(7)



16国 番号	器種	廣		窄		U		縫		突		帶		色		圖		その 他
		外 面	内 面	輪部形	剖 み	剖 面形	剖 み	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面		
563	深鉢	ナテ。				台形	小D字形	黒色	淡黄灰褐色	無部施文。								
564	深鉢	マメツ。				台形	小D形	黒褐色	淡黄褐色	無部施文。								
565	深鉢	ナテ。						黒褐色	淡黄褐色	無部施文。								
566	深鉢	ナテ。						黒褐色	淡黄褐色	無部施文。								
567	深鉢	ナテ。						黒褐色	淡黄褐色	無部施文。								
568	深鉢	ナテ。						黒褐色	淡黄褐色	無部施文。								
569	深鉢	ナテ。						黒色	茶褐色	無部施文。								

図101 A区第5層出土遺物実測図(8)

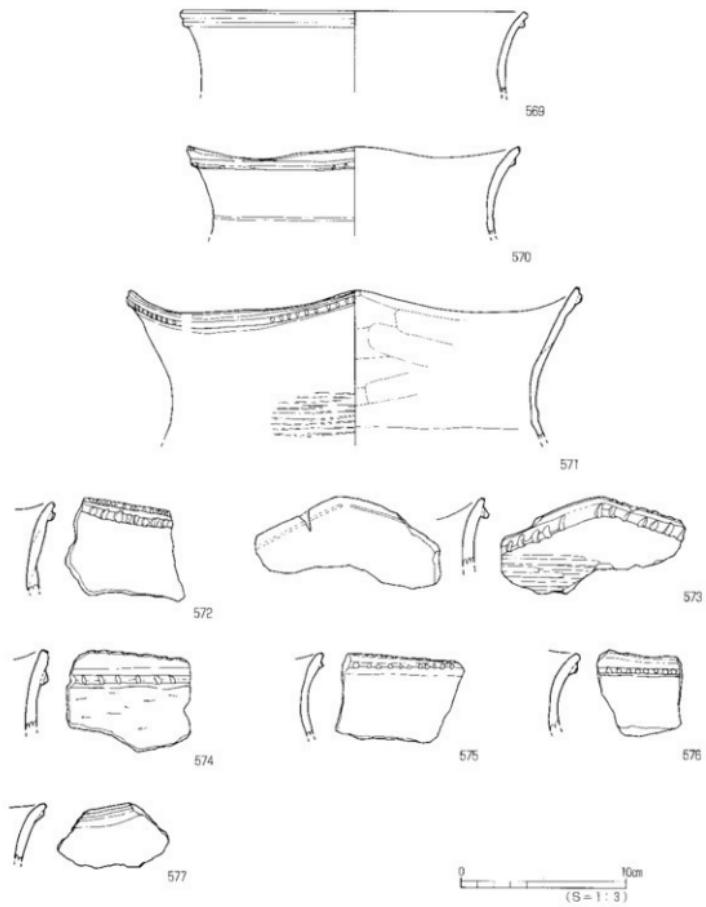
が一例だけ特異な例としてみられる。

図103には単純なバケツ形の器型のものを示してある。これらの中にも上述の一群と同様に胴部と口頸部との調整を使いわける582のようなものもみられるが、多くは撫で仕上げる突蒂直下まで削りや条痕を残している。578以外のものは口端部、突帯の両部位を刻まれる。578の口端部無刻目とともにボッテとした突蒂に大きな刻み目と、搬入品と思われる異質な土器である。583では口端直下の内面に凹線が1条巡っている。異質という意味では、図104の584の逆「く」の字に屈曲する胴部も同様で、東北部九州の影響を受けたものであろう。

同じく図104に胴部突帯を持つものを示しておいた。585は二条突蒂深鉢で、実際に口縁部と胴部の双方に突蒂が確認できるものはこの1点のみである。当地では突蒂文を巡る瀬戸内谷尻式併行期に、口縁部に突蒂を持たず、胴部に突蒂を有する有文深鉢が存在するので、これらの胴部片のすべてを二条突蒂深鉢と断定することはできない。

浅鉢のうち図106に示したのは、口端部が内面に丸く肥厚したり、鍵形をなすもので、594は胴部で縦を持って屈曲し、口頸部が直線的に外上方に開くもの。口端部は内面に丸く肥厚し、鰐状突起を伴う。この層の浅鉢のうち最も遅るもので混入の可能性がある。鍵形口縁のものは頸部で一旦くびれて胴が張るものと、592や593のような単純な器型のものとがある。図107の頸～胴部はこれら鍵形口縁のうち前者に伴うものである。図108・109は波状口縁のもの、このうちには605～608、611のような小型の方形浅鉢がある。また、603も口縁部、胴部ともに俯瞰形が隅丸方形となっている。602は刻み目突蒂と口端部刻み目を持つもので、深鉢としたほうがよいかもしれないが、若干浅く、内面を磨いたり手法が浅鉢なのでここに含めている。

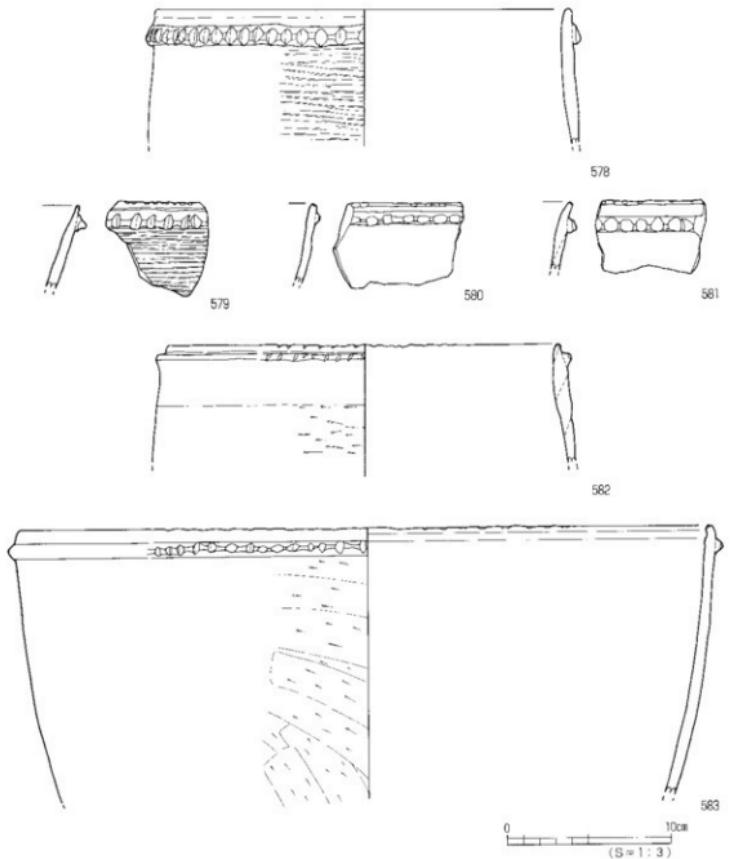
図110～113は逆「く」の字口縁、あるいはその系列？に含まれるものであるが、口縁部の形態で数種に分類することができる。図110は口縁部の立ち上がりが極端に短いもので、極端な場合、断面三



堆段 番号	器種	輪		口		縁		内		外		その 他
		外 面	内 面	直 角形	切 み	折 断形	削 み	内 面	外 面	内 面	外 面	
569	深鉢 ナデ。	ナデ。	ナデ。	直		直角形	削み	黒褐色	灰褐色	黒褐色	灰褐色	
570	浅鉢 不明。	不明。	丸	メツフ		△内船	マメフ	赤褐色	褐色	石英(大)	多角	
571	深鉢 口:替面茶れ網;一枚目朱裏。 番:ケズリ+ナデ? 网:ケズリ。	口:替面茶れ網;一枚目朱裏。 番:ケズリ+ナデ? 网:ケズリ。	丸	丸形	合形	D字形	波程簡色	淡褐色	褐色	褐色		
572	浅鉢 ナデ。	ナデ。	直	D字形	台形	C字形	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色		
573	深鉢 番:二枚目朱→ナデ。 ネジ。	二枚目朱→ナデ。 ネジ。	直	D字形	台形	D字形	赤褐色	深褐色	深褐色	深褐色	深褐色	(S=1:3)
574	深鉢 口:ナデ。 番:ケズリ。	ナデ。	直	D字形	平形	D字形	赤褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	
575	深鉢 ナデ。	ナデ。	丸	メツフ	△内船	マメフ	赤褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	
576	深鉢 マメフ。	マメフ。	直	マメフ	合形	D字形	灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色	
577	深鉢 ナデ?	マメフ。	直		三角形							

図102 A区第5層出土遺物実測図(9)

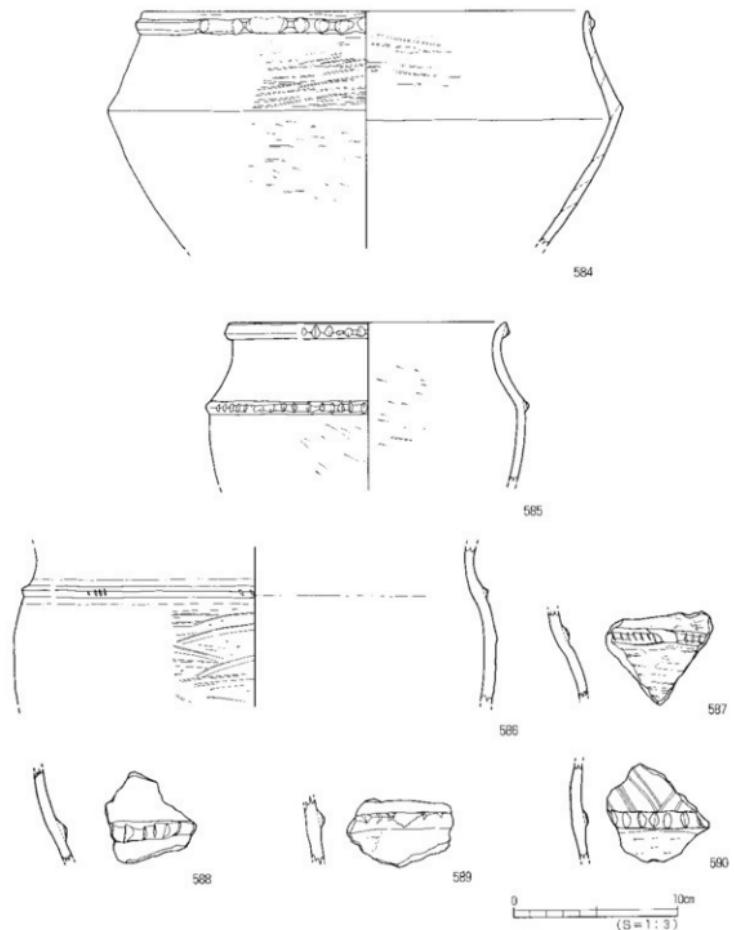
大河遺跡



種類 番号	器種	圖		縁	縁	突	凹	色	面	その他の
		外	内							
578	深鉢	口：ナデ。縁：一枚貝条飾。	ナデ。	丸	平円形	刀字形	黒褐色	黄赤褐色	内	
579	深鉢	口：ナデ。縁：二枚貝条飾。	ナデ。	尖	三角形	小刀字形	黒褐色	黄褐色	外	
580	浅鉢	マメツ。	マメツ。	圓	マメツ	台形	D字形	黄褐色	黄褐色	
581	深鉢	口：ナズリ→ナデ。	ナデ。	圓	丸形	下凹形	D字形	茶褐色	黑褐色	
582	深鉢	口：ナデ。縁：ナズリ。	ナデ。	丸	小D字形	台形	小D字形	暗褐色	暗褐色	
583	深鉢	口：ナデ。縁：ナズリ。	ナデ。	面	丸形	三角形	丸形	暗褐色	淡褐色	

図103 A区第5層出土遺物実測図(10)

調査の概要



番号	器種	測定	内面	背面	II	縁	内面	背面	色	内面	背面	その他の
			内面	背面	断面形	組み	内面	背面	内面	背面		
584	漆鉢	一枚貝地板。	第：一枚貝地板。刷：ナデ。	尖	台形	D形	暗褐色	暗褐色				
585	漆鉢	底：ナデ。刷：ケズリ。	ケズリ→ナデ。	尖	三角形	菱形	深褐色	褐色				
586	漆鉢	底：一枚貝地板。	ケズリ。		二角形	菱形	深褐色	褐色				
587	漆鉢	底：二枚貝地板。	不規。		二角形	小D字形	黑色	褐色				
588	漆鉢	底：ナデ。	ナデ。		台形	小D字形	黑色	褐色				
589	漆鉢	底：ケズリ。	ケズリ。		三角形	D字形	灰褐色	褐色				
590	漆鉢	底：ナデ。刷：ケズリ。	ナデ。		台形	D字形	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	右矢多合。

図104 A区第5層出土遺物実測図(11)

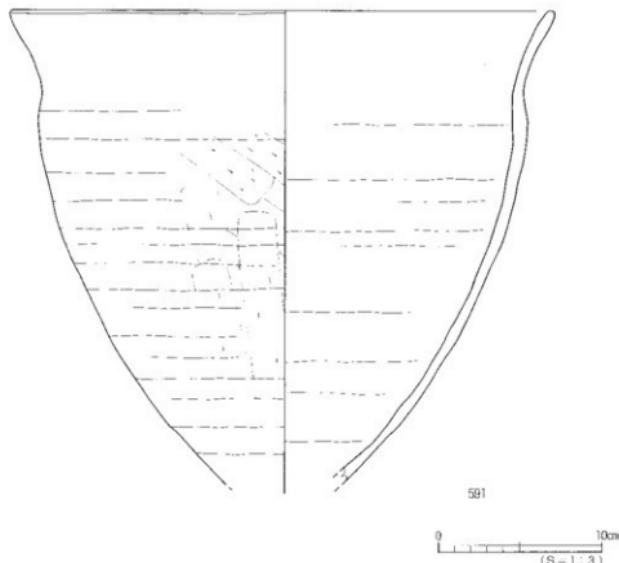


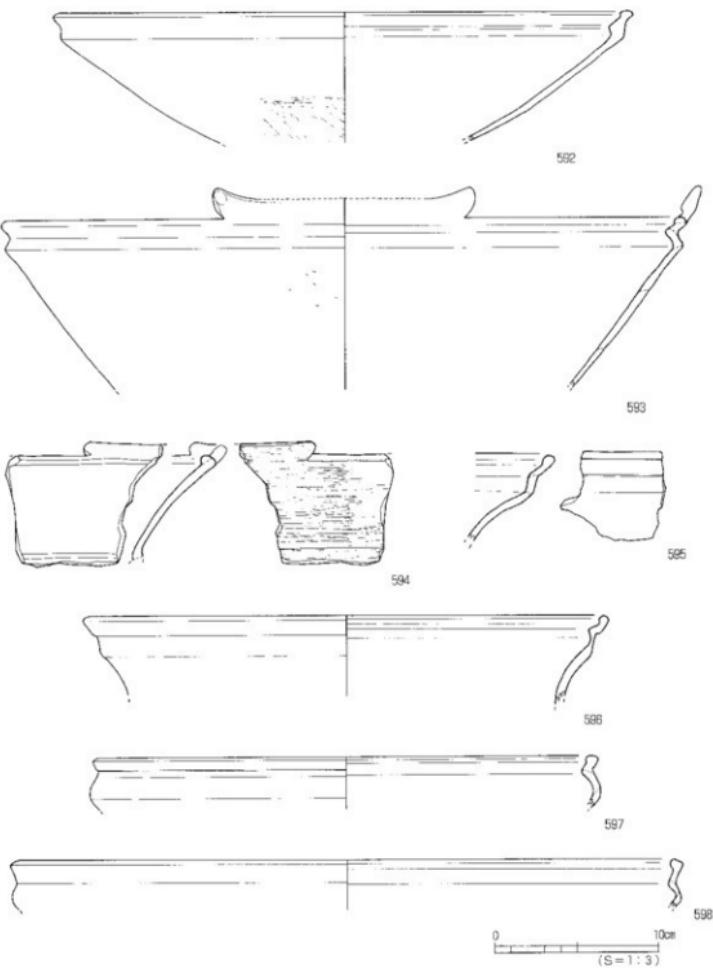
図105 A区第5層出土遺物実測図(2)

角形の粘土帯を突帶状に載せただけといったものもある。図111は立ち上がりが若干長く、内傾気味のもの、図112は長めの口頸部が直立気味に立ち上がるもので、立ち上がりの部分に沈線を伴う。このような形態のものの中には、図113の635・636のように口端部の折り曲げが極端に強いものがある。637~639は口縁部の内傾度が非常に強く、若干器型が深めになるものである。その他、内湾しながら内傾する口縁部の破片が2点ある。外面の口端部をやや下がった位置に削り出したような段があり、また腹部との境と考えられる位置に1条の沈線が巡る。逆「く」の字口縁浅鉢の一種になるのか、砲弾形のような器型になるのか判然としない。

図114は楕円形のもの、これらの中にも内外面ともに磨きないし撫でで調整するものと、内面のみを入念に仕上げて外面には条痕を残すものとがある。内外面とも入念に仕上げられたものには644のように丹塗りが施されるもの、646のような朱塗りがされるもの、さらに650のように朱漆が塗られるものなどがある。

この層では壺が何個体か出土しており、口頸部の形態で大きく2つのタイプに分けることができる。ひとつは、653・654のような直立気味の筒状の頸部で口端部を少し外反させるもの、いまひとつは655~657のように内傾する頸部から口端部が外反するもので、656や657をみていると頸部の長短、内傾の度合い、さらに口端部の折り返しの強弱などのバリエーションがあるようである。658や660では

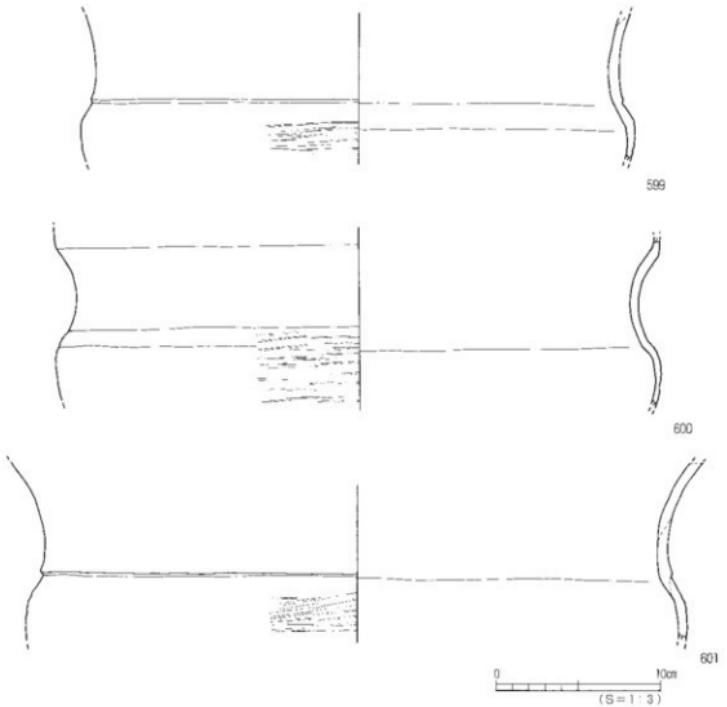
調査の概要



博物 番号	器種	圖		口	溝	突	帶	色	調	その 他
		外 面	内 面							
592	浅鉢	口：ミガキ。腹下平、素底。	ミガキ。	縦形				暗茶褐色	黒灰褐色	ヒレ状突起。
593	浅鉢	口：マメツ。腹：ケズリ。	マメツ。	面				暗茶褐色	暗黃褐色	ヒレ状突起。
594	浅鉢	口：ミガキ。	マメツ。	面				灰褐色	灰褐色	
595	浅鉢	ナド。	ナド。	縦形				暗茶褐色	暗茶褐色	
596	浅鉢	口：ミガキ。腹：マメツ。	口：ミガキ。腹：マメツ。	縦形				灰茶褐色	灰茶褐色	
597	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	縦形				乳白色	乳白色	
598	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	縦形				暗茶褐色	褐色	

図106 A区第5層出土遺物実測図 (13)

頸部と肩部の境に若干の段を持ち、特に660では凹線風の段となっている。658では肩が少し張るが極端な張りを持つものはない。また、662のように段も肩部の張りも持たないものもある。これらの壺のうち、658・659・663には丹塗りが施されており、胴部の形態がほとんど球体に近い659の肩部には黒色の「八つ手の葉」状の施文が施されている。この施文は顔料を用いたものではなく、黒斑のように炭素を吸着させて施されたもので、器表面の研磨の方向が観察できる部位はあまりないが、観察できる範囲では縦から斜めである。658における器表面の摩滅、あるいは663の残存部位がやや肩部より下がった部位であることから確定的なことは言えないが、これらの壺も同様の施文を持っていた可能性がある。658は赤色塗彩部分そのものがほとんど剥落しているが、肩部にやはり似通った黒斑が看取



標印番号	器種	輪		縁		縫		突起部		色		その他
		外面	内面	縫紙形	縫み	縫紙形	縫み	内面	外面	内面	外面	
599	壺	縁:マメフ、腹:二枚口条腹。ナデ?								灰褐色	橙色	金型目混入。
600	壺	縁:不明。腹:一枚口条腹。ナデ?								暗褐色	茶褐色	
601	壺	縁:ナデ? 腹:一枚口条腹。ナデ。								黑色	米褐色	

図107 A区第5層出土遺物実測図(14)

調査の概要

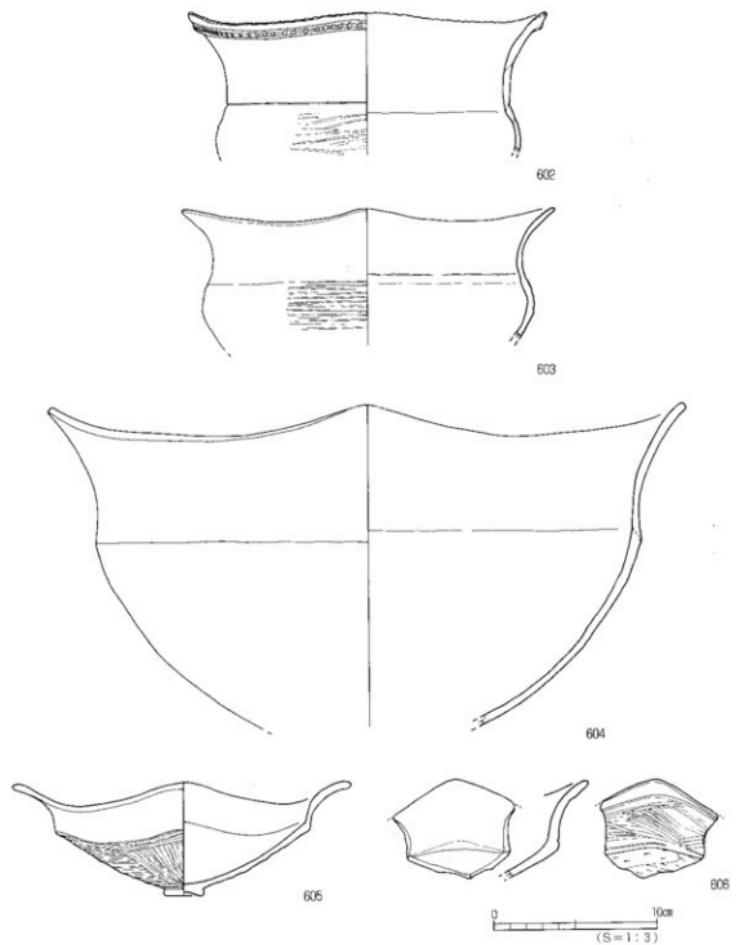
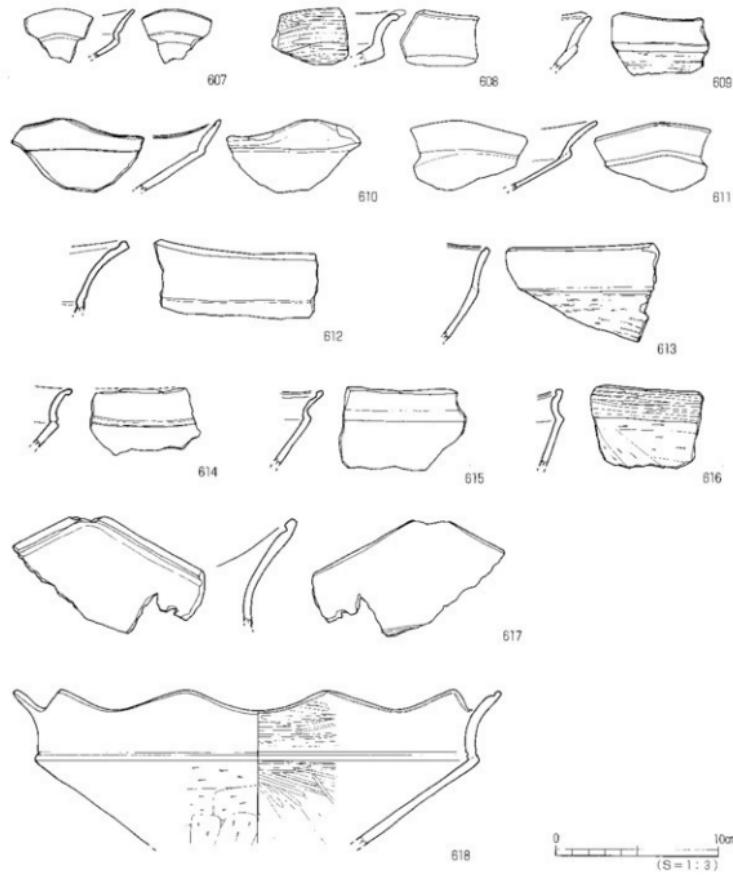


図108 A区第5層出土遺物実測図(15)

番号	器種	調 整		口 縁	突 起	帶	色 調	その 他
		外 面	内 面					
602	浅鉢	口一無; ナギ。側: 一枚貝条痕。ナギ。		丸	O字形	平円形	U字形	黒色 褐色
603	浅鉢	口一無; ナギ。側: 一枚貝条痕。ナギ?		面				灰青色 褐色
604	浅鉢	口一無; ミガキ。側: マメフ。口一無; ミガキ。側: マメフ。		面				灰青色 褐色
605	浅鉢	口一無; ミガキ。側: 一枚貝条痕。マメフ。		丸			褐色	方形浅鉢。
606	浅鉢	口一無; ミガキ。側: ケズリ。ミガキ。		面			褐色	方形浅鉢。

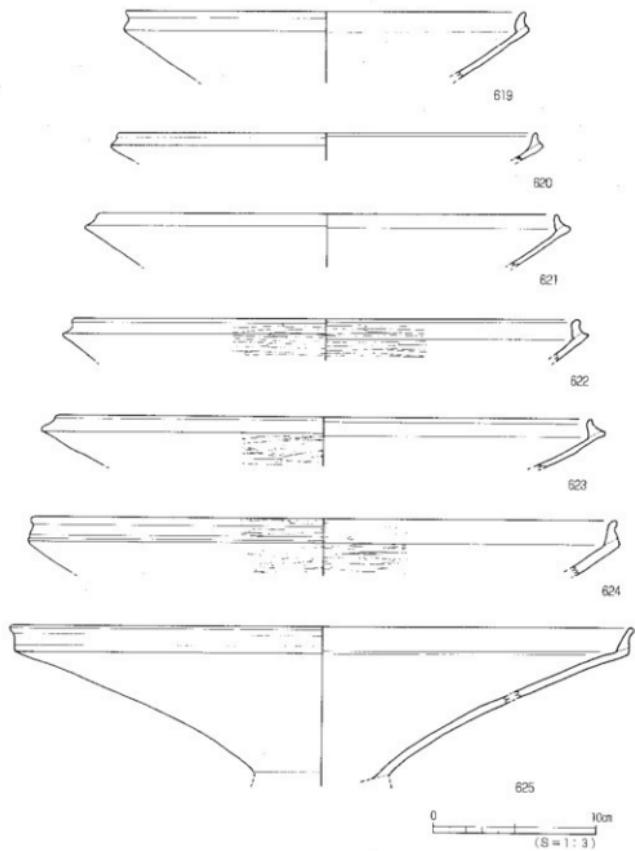
大河遺跡



器種 番号	圓 盤		口 縁 形	突 起 部 形	内 面 色	外 面 色	その 他
	外 面	内 面					
607 浅鉢	口：ナガリ。底：ケズリ。	ミガキ。			灰褐色	褐色	方形浅鉢。
608 浅鉢	口：ミガキ？ 底：ケズリ。	ミガキ。	丸		暗灰色	褐色	方形浅鉢。
609 浅鉢	口：ミガキ。底：ケズリ。	マメツ。	丸		淡褐色	暗褐色	
610 浅鉢	マメツ。	ミガキ？	丸		褐色	灰褐色	
611 浅鉢	口：ミガキ？ 底：マメツ。	マメツ。	圓		灰褐色	灰褐色	方形浅鉢。
612 浅鉢	ケズリ＝ナデ。	ミガキ？	圓		灰褐色	深褐色	
613 浅鉢	口：マメツ。底：ケズリ。	マメツ。	圓		褐色	灰褐色	
614 浅鉢	口：マメツ。底：ケズリ。	ミガキ。	丸		灰色	灰褐色	
615 浅鉢	マメツ。	ミガキ。	圓		灰褐色	灰褐色	
616 浅鉢	口：ミガキ。底：ケズリ。	ミガキ？	圓		褐色	灰褐色	
617 浅鉢	不明。	ナデ。	圓		褐色	灰褐色	
618 浅鉢	口：ミガキ。底：ケズリ。	ミガキ。	圓		灰色	褐色	

図109 A区第5層出土遺物実測図 (16)

調査の概要



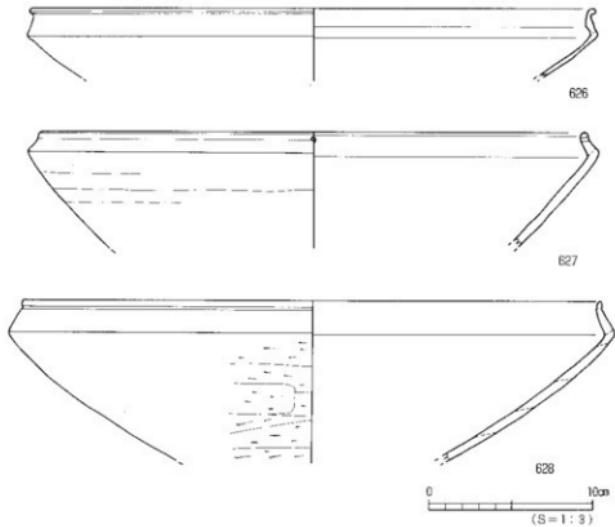
件番 番号	器種	測量		寸		測量		色調		その他の
		外一面	内一面	端部形	射み	断面形	射み	内一面	外一面	
619	浅鉢	口：ナデ。肩：ケズリ？	マメツ。	尖				暗灰褐色	暗灰褐色	
620	浅鉢	ナデ。	ナデ。	尖				淡黄色	褐色	
621	浅鉢	口：ミガキ。腹：ケズリ？	不明。	尖				黑褐色	深褐色	
622	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	丸				黑褐色	深褐色	
623	浅鉢	口：マメツ。肩：ケズリ→ナデ。	マメツ。	尖				灰褐色	黑色	
624	浅鉢	口：ミガキ。腹：ケズリ。	ミガキ。	丸				黑褐色	黑褐色	
625	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	丸				黑褐色	深褐色	

図110 A区第5層出土遺物実測図(17)

される。663では最も上位に近い部分の4個所にやはり黒斑がある。なお、この個体の黒斑の付き方から、丹塗りは焼成前であることがわかる。

底部は図118～121に掲載してある。深鉢は分厚い窪み底のものが多いが、686・688のように輪高台状になるものや平底のものも若干あるほか、丸底になる694が1点だけある。浅鉢または壺と考えられるものを図120・121に示している。浅鉢は胎土が比較的精良で、入念な調整が施された薄手のつくりのもので、輪高台状になるものが多いが、実際には浅鉢と壺の区別は底部だけでは判断し難いので、一応ほとんどのものを浅鉢として扱っている。これらのうち、713は外底面まで磨かれていたりするので、壺の可能性が高いと考えている。732は小型の壺か？また、図121のうち、特に大型のものは壺でよいのかもしれない。

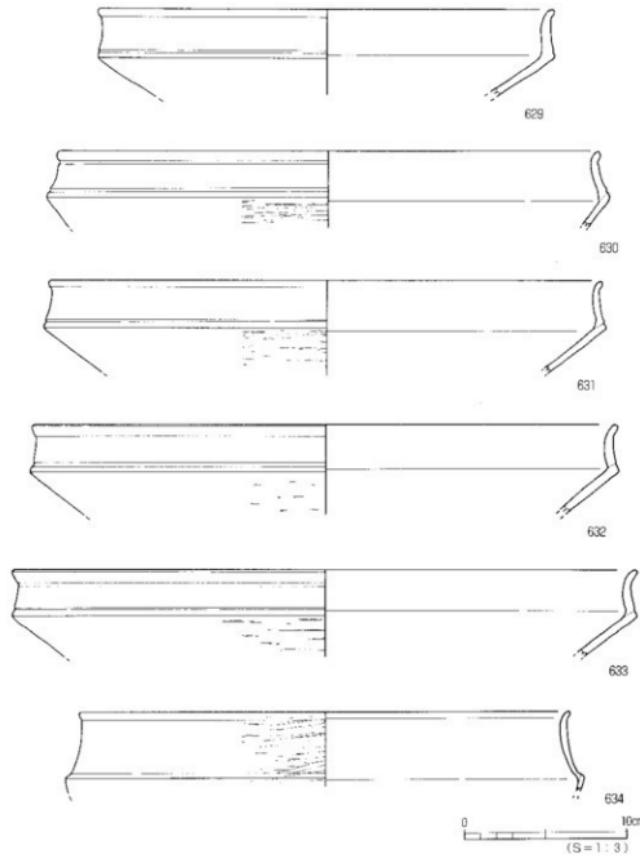
転石利用の石製品には伐採斧・加工斧などの工具、敲石・磨石・窪み石・石皿などの調理具、漁労具として打ち欠き漁網錐がある。伐採斧739・740ともに刃部付近の破片であるが、比較的厚みのない斧である。加工斧741は幅狭で扁平な小型斧で、刃部の研ぎは偏ってはいるが片刃というほどのものではない。これらのほか収穫具として石庵丁742が1点出土している。かなり風化しているが緑色片岩を素材とする外湾刃半月形のもので、両側縁に打ち欠きによる抉りを持つ。長さ12.2cm、幅3.5cm、厚さ1.6cmと比較的小型のものである。各部の研ぎについては風化によって明確ではない。祭祀具に



種類 番号	器種	廣 告		II 種		空 壇		色 廣		そ の 他
		外 面	内 面	断面形	削 み	内 面	削 み	内 面	削 み	
626	浅鉢	ミガキ。	ミガキ?	扇形	削 み	扇形	削 み	赤褐色	赤褐色	
627	浅鉢	口：マツ。脚：ケズリ。	口：ナテ。脚：マツ。	扇形	削 み	扇形	削 み	赤褐色	赤褐色	
628	浅鉢	口～脚：不明。脚：ケズリ。	ミガキ。	扇形	削 み	扇形	削 み	暗褐色	暗褐色	口縁穿孔

図118 A区第5層出土遺物実測図(18)

調査の概要



図面 番号	器種	周		口	縁	突	帶	色	調	その 他
		外 面	内 面							
629	浅鉢	マメフ。	マメフ。	丸	角み	直面形	刻み	内面	外面	無縫合 深褐色
630	浅鉢	口へ漸々ミガキ。腹：ケズリ。 11：ミガキ。腹：マメフ。	丸							灰褐色 深褐色
631	浅鉢	口へ漸々ミガキ。腹：ケズリ。 マメフ。	丸							灰褐色 褐色
632	浅鉢	腹：ミガキ？ 腹：ケズリ。 口へ漸々ナゲ。腹：ミガキ。	面							暗褐色 褐褐色
633	浅鉢	口へ漸々ミガキ。腹：ケズリ。 11-部：マメフ。腹：ナゲ？	丸							灰系褐色 深褐色
634	浅鉢	ミガキ。	丸							黒褐色 黒褐色

図112 A区第5層出土遺物実測図(19)

は数点の石棒と、有柄式磨製石剣の未製品かとも思えるもの745が1点ある。折損し、片面が剥離しているが、これも緑色片岩を素材としており、把部を作り出そうとしたものか、両側縁に敲打による緩やかなカーブを描く抉りがある。

剥片利用の製品としては石鎌、石錐、スクレイパーなどがある。図127の石鎌のうち姫島産黒曜石を素材とした787以外はすべてサメカイトを素材としている。すべて無茎式で凹基鎌と平基鎌がある。形態的には二等辺三角形に近い形態のものが多いが、なかには767のような変形の五角形のものや787のように正三角形に近い形態のものもある。重量は767の0.5gから777の2.8gまで、1.3gをやや超えたあたりに平均値がある。未製品には製作途中に破損したものの788・790や完成寸前で製作を放棄さ

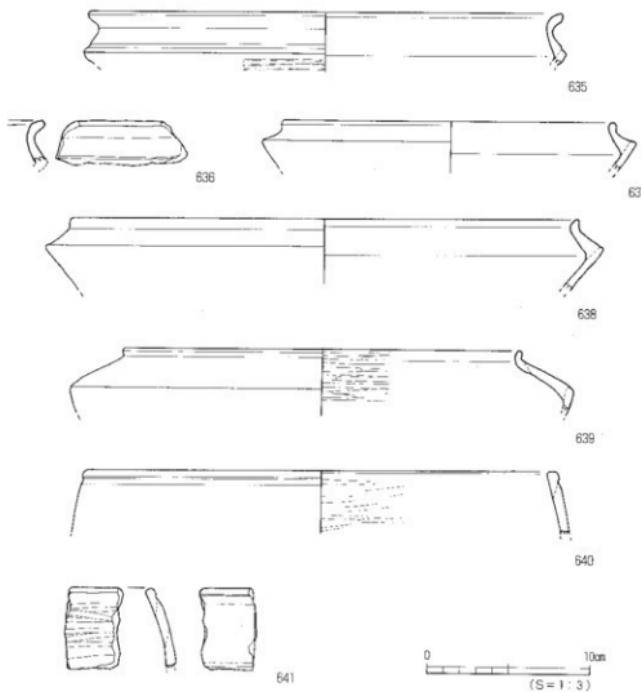
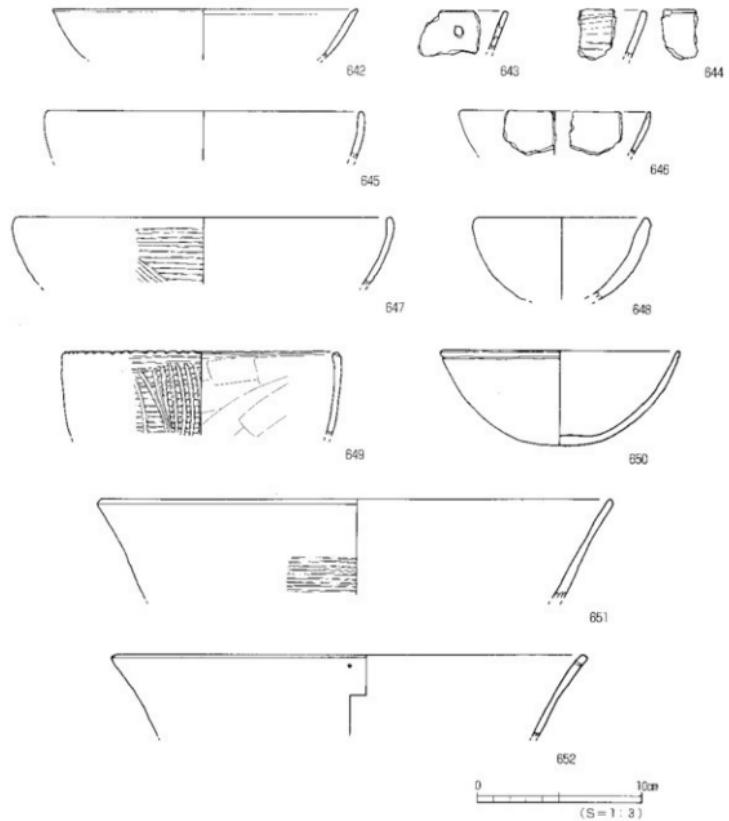


図113 A区第5層出土遺物実測図(2)

遺物 番号	器種	形		質		口		縫		突		等		色		その他の 記述
		外 面	内 面	滑滑	粗	圓形	鋸	刃	縫	圓形	鋸	刃	内 面	外 面		
635	浅鉢	11; ナゲ。附: 二枚貝系微。	マメツ。	丸									灰褐色	朱白色		
636	浅鉢	ナゲ。	ミガキ。	丸									褐色	淡褐色		
637	浅鉢	ナゲ。	ナゲ。	丸									黑褐色	黑色		
638	浅鉢	ナゲ。	ナゲ。	丸									深褐色	暗褐色		
639	浅鉢	ナゲ。	ミガキ。	丸									深褐色	黑色		
640	浅鉢	ナゲ。	ミガキ。	圓									墨褐色	深褐色		
641	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	面									墨褐色	黑色		



種別 番号	器種	圖		口	縁	底	帶	色	圖		その他の 記述
		外面	内面						内面	外面	
642	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	尖				淡灰白色	淡灰色		
643	浅鉢	マメフ。	マメフ。	面				灰白色	灰白色	(1)縫隙孔。	
644	浅鉢	条模?	一枚貝条模。	面				灰白色	淡褐色	舟型。	
645	浅鉢	マメフ。	ナデ?	丸				灰茶褐色	灰白色		
646	浅鉢	ナデ。	ナデ?	丸				淡灰褐色	淡灰褐色	朱付着。	
647	浅鉢	一枚貝条模。	ナデ?	丸				暗褐色	灰褐色		
648	浅鉢	不明。	ミガキ。	丸				茶褐色	淡黄褐色		
649	浅鉢	一枚貝条模(ヨコ→タテ)。	ケズリ+ナデ?	面				淡黄色	黑褐色		
650	浅鉢	ミガキ。	ミガキ?	丸				棕色	暗褐色	朱漆。	
651	浅鉢	口:ミガキ。胸:二枚貝条模。不明。	ミガキ。	面				黑褐色	从白色		
652	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	面				黑褐色	黑褐色	(1)縫隙孔。	

図114 A区第5層出土遺物実測図(2)



653



654



655



656



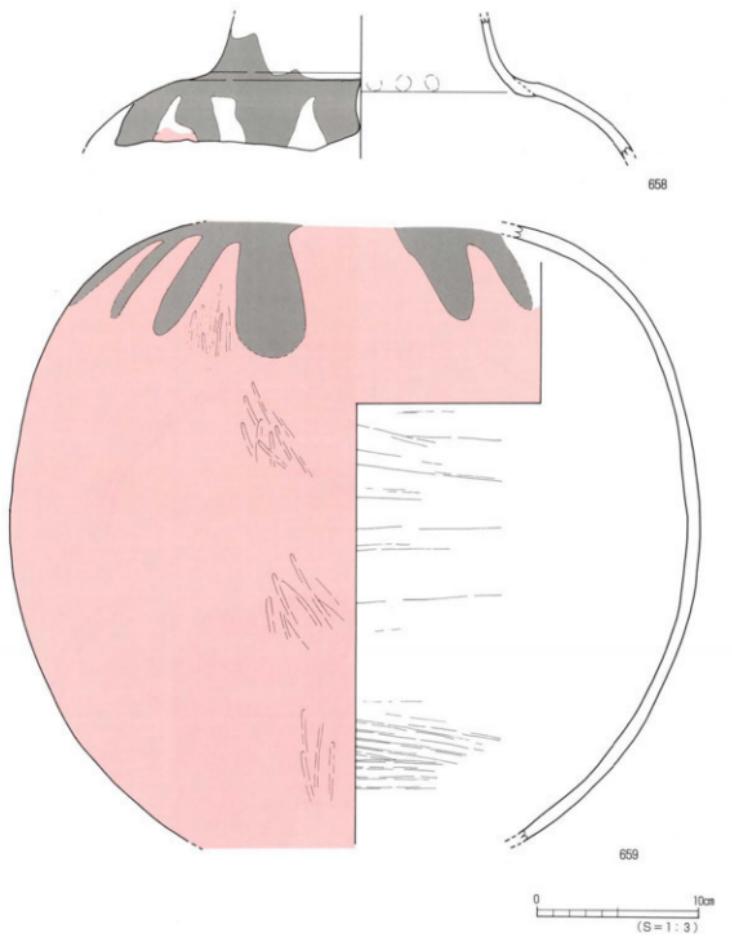
657

0 10cm
(S = 1:3)

器種 番号	窓		縁		口 縁 形	材 質	突 起 部	合 縫	内 縁 色	外 縁 色	色 調	その 他
	外 面	内 面	縁部形	附 み								
653 直 ミガキテ		ナゲ。	曲						黄灰色	暗褐色	1)緑青色	
654 直 ミガキテ		ナゲ。	丸						墨灰色	暗褐色		
655 立 小明	小明。		丸						暗茶褐色	灰白色		
656 帯 マメヅ	マメヅ。		やや尖						暗褐色	暗褐色		
657 直 ミガキテ	ミガキ。		丸						暗褐色	無孔白色		

図115 A区第5層出土遺物実測図(2)

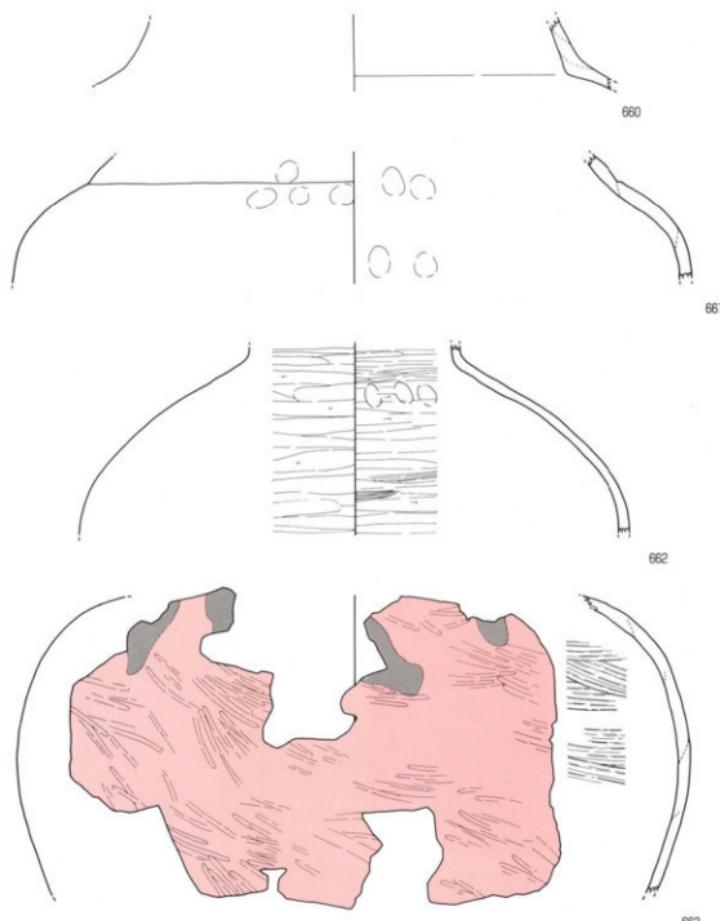
調査の概要



種類	調 整		口 線	突 帯	色 調		その他の特徴
	外 面	内 面			端部形	刺 み	
658 壺 縁:ナデ。		縁:ミガキ。柄:条曲→ナデ。					暗乳灰褐色 丹焼り。カジ文?
659 壺 縁:ミガキ。 ナデ。							灰褐色 赤褐色 丹焼り。カジ文。

図116 A区第5層出土遺物実測図(2)

大 潤 遺 跡

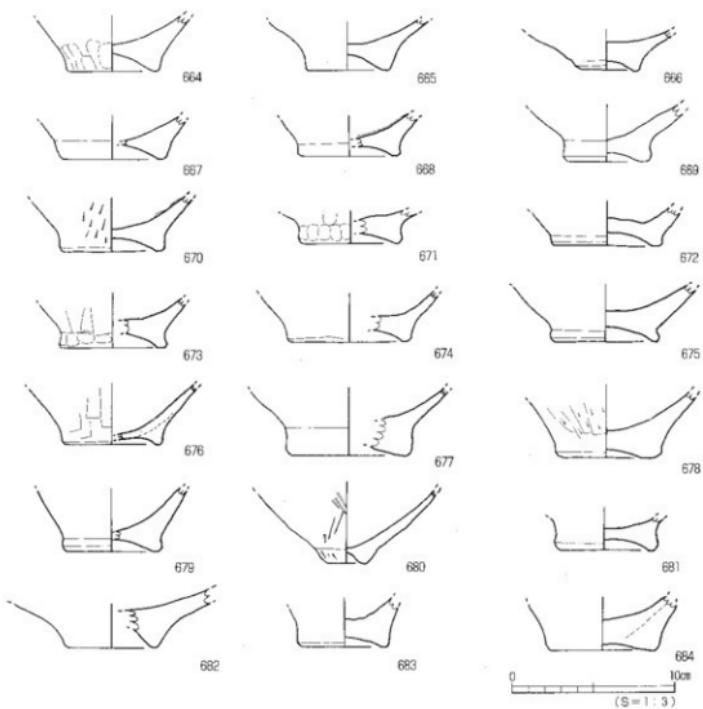


0 10cm
(S=1:3)

検出番号	器種	調		整		口		縁		突		帶		色		その他の	
		外	内	面	面	形	刺	み	断	面形	刺	み	内	面	外	面	
660	漆 マメ。			不明。									棕褐色	深褐色			
661	漆 不明。			不明。									茶褐色	暗褐色			
662	漆 ミガキ。			ミガキ。	調：他き貝条痕。								褐色	淡灰褐色			
663	漆 ミガキ。			二枚貝条痕→ナデ。									淡灰褐色	赤色	丹垂り。カジ文?		

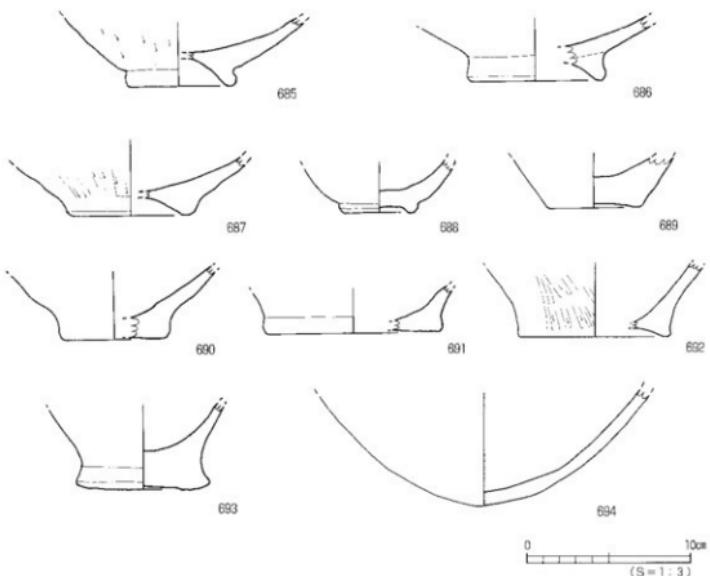
図117 A区第5層出土遺物実測図(24)

調査の概要



序号	器種	圖面		口縁形	縁脚形	断面形	突起	凹	縫合	内面	外面	調色	その他の	
		外	内											
664	深鉢	ナメ。		マメフ。						灰黄色	淡灰橙色			
665	深鉢	マメフ。		ナデ。						灰褐色	褐色			
666	深鉢	ナデ。								黒褐色	淡褐色			
667	深鉢	マメフ。		マメフ。						淡青褐色	灰褐色			
668	深鉢	マメフ。		ケズリ。						黒色	淡褐色			
669	深鉢	マメフ。		マメフ。						淡灰褐色	淡灰橙色	内底、灰化物付着。		
670	深鉢	マメフ。		マメフ。						黑色	淡褐色	内底、灰化物付着。		
671	深鉢	マメフ。		マメフ。						淡灰褐色	淡灰褐色			
672	深鉢	マメフ。		マメフ。						灰褐色	淡褐色			
673	深鉢	ケズリ。		ナデ。						黑色	淡褐色			
674	深鉢	マメフ。		マメフ。						淡灰褐色	淡褐色			
675	深鉢	マメフ。		ケズリ。						灰褐色	淡褐色			
676	深鉢	マメフ。		マメフ。						淡灰褐色	淡灰橙色	内底、灰化物付着。		
677	深鉢	マメフ。		マメフ。						黑色	淡褐色	内底、灰化物付着。		
678	深鉢	マメフ。		ケズリ。						淡灰褐色	淡褐色			
679	深鉢	マメフ。		ナデ。						淡灰褐色	淡褐色			
680	深鉢	マメフ。		マメフ。						淡灰褐色	淡褐色			
681	深鉢	マメフ。		ケズリ。						黑色	淡褐色			
682	深鉢	マメフ。		マメフ。						淡灰褐色	淡褐色			
683	深鉢	マメフ。		マメフ。						褐色	暗褐色			
684	深鉢	マメフ。		ナデ。						褐色	暗灰色			

図118 A区第5層出土遺物実測図(25)



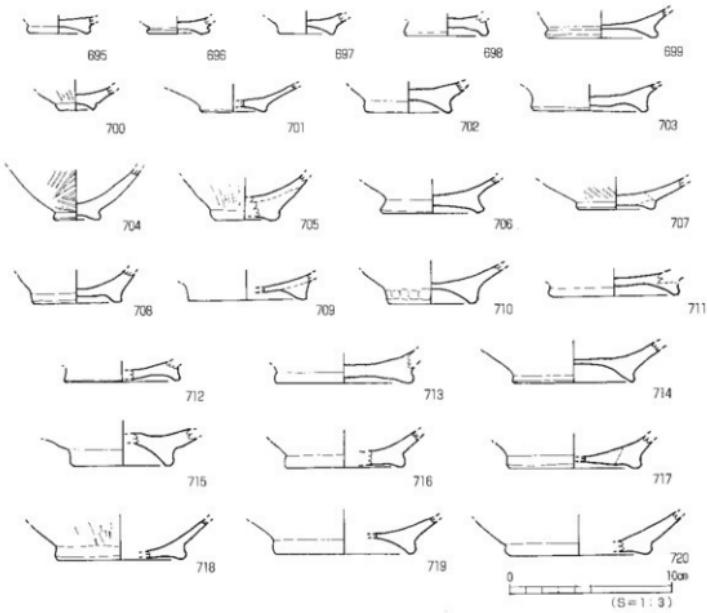
博団 番号	器種	圓		口		刃		色		その他の 特徴
		外 面	内 面	縁部形	剥 片	断面形	頭 部	内 面	外 面	
685	深鉢	頭:ケズリ。底:ナデ。	ナデ。					淡灰褐色	暗色	
686	深鉢	頭:ケズリ? マメツ。	ナデ。					褐色	淡褐色	
687	深鉢	頭:ケズリ。底:ナデ。	ナデ。					淡灰褐色	淡褐色	
688	深鉢	ナデ。	ナデ。					褐色	褐色	
689	深鉢	マメツ。	マメツ。					淡黄色	淡褐色	
690	深鉢	マメツ。	ナデ。					褐色	褐色	
691	深鉢	マメツ。	マメツ。					淡黄色	淡褐色	
692	深鉢	ケズリ。	ナデ。					褐色	淡褐色	
693	深鉢	マメツ。	マメツ。					褐色	褐色	
694	深鉢	ズリーナデ。	マメツ。					淡灰褐色	淡褐色	

図119 A区第5層出土遺物実測図(2)

れた789がある。794はナイフ形石器と呼んでいいのかどうかわからないが、ナイフ様の石器、795の石錐は不定形の剥片の先端部にだけ簡単な調整を行っている。その他サヌカイト製のスクレイパーや素材剥片、石核、図化はしなかったが多量のフレークがある。なお、これらサヌカイトに混って黒曜石のスクレイパー、石核やフレークが少量出土している。

これら、土器、石器のほかに土製品として土錐が1点、石製品として玉1点の出土がある。土錐894は長さ3.4cm、幅1.3cm、厚さ1.8cmの隅丸の直方体に近い粘土塊に十字の紐かけ用の溝を施したもので、重量13.8gを量る小型品である。玉895は硬玉製、太めの工具を用いて片面から穿孔されていて、断面形がドーム状を呈している。

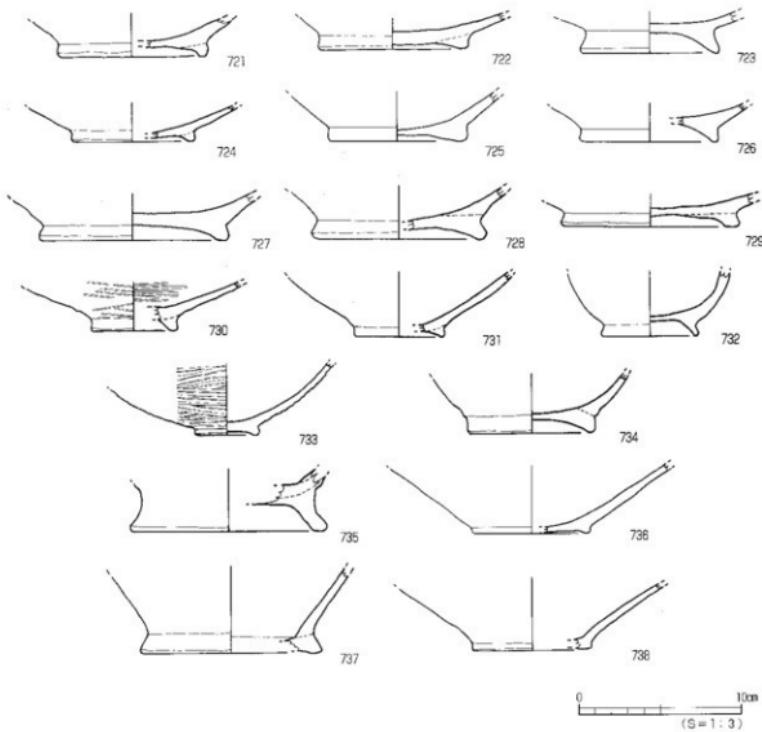
調査の概要



標 番 号	器 種	開 口		裏 面		口 縁		突 起		各 部		そ の 他
		外 面	内 面	縫合部	崩 落	断面形	崩 落	突 起	各 部	内 面	外 面	
695	浅鉢	ケズリ。	ミガキ。							黒褐色	黒褐色	
696	浅鉢	マメツ。	ナデ。							黒褐色	黒褐色	
697	浅鉢	ナデ。	ナデ。							黄灰褐色	黄灰褐色	
698	浅鉢	ナデ。	マメツ。							灰褐色	褐色	
699	浅鉢	マメツ。	不明。							褐色	灰褐色	
700	浅鉢	崩:一枚具条痕。底:ナデ。	ナデ。							褐色	褐色	
701	浅鉢	マメツ。	ナデ。							淡灰褐色	淡灰褐色	
702	浅鉢	マメツ。	マメツ。							褐色	褐色	
703	浅鉢	マメツ。	ナデ。							褐色	褐色	
704	深鉢	ケズリ。	ミガキ。							褐色	褐色	
705	深鉢	マメツ。	ミガキ。							褐色	褐色	
706	深鉢	ケズリ。	マメツ。							褐色	褐色	
707	深鉢	マメツ。	ミガキ。							褐色	褐色	
708	深鉢	崩:一枚具条痕。底:ナデ。	ナデ。							褐色	褐色	
709	深鉢	マメツ。	ナデ。							褐色	褐色	
710	深鉢	マメツ。	ナデ。							褐色	褐色	
711	深鉢	マメツ。	ナデ。							褐色	褐色	
712	深鉢	マメツ。	ナデ。							褐色	褐色	
713	深鉢	マメツ。	ナデ。							褐色	褐色	
714	深鉢	マメツ。	ナデ。							褐色	褐色	
715	深鉢	マメツ。	ミガキ。							褐色	褐色	
716	深鉢	マメツ。	ミガキ。							褐色	褐色	
717	深鉢	マメツ。	ミガキ。							褐色	褐色	
718	深鉢	マメツ。	ミガキ。							褐色	褐色	
719	深鉢	マメツ。	ミガキ。							褐色	褐色	
720	深鉢	マメツ。	ミガキ。							褐色	褐色	

図120 A区第5層出土遺物実測図(2)

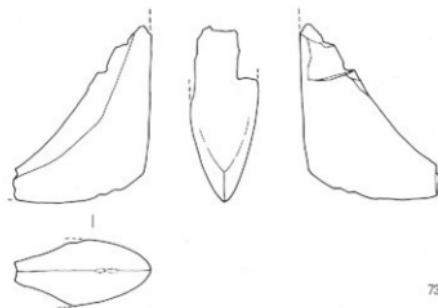
大洞遺跡



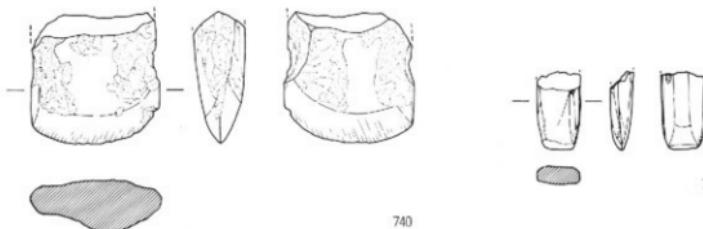
分類 番号	器種	周		形		口		縁		突		垂		色調	その他の
		外 面	内 面	海部形	刺 み	断面形	刺 み	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面		
721	浅鉢	マメフ。	マメフ。									灰褐色	褐色		
722	浅鉢	マメフ。	ミガキ。									褐色	褐色		
723	浅鉢	マメフ。	ナデ。									灰褐色	褐色		
724	浅鉢	マメフ。	ナデ。									灰褐色	褐色		
725	浅鉢	マメフ。	マメフ。									褐色	褐色		
726	浅鉢	マメフ。	ナデ。									褐色	褐色		
727	浅鉢	マメフ。	マメフ。									褐色	褐色		
728	浅鉢	マメフ。	ミガキ。									褐色	褐色		
729	浅鉢	ナデ。	ミガキ。									褐色	褐色		
730	浅鉢	ミガキ?	ミガキ。									黑色	黑色		
731	浅鉢	マメフ。	マメフ。									褐色	褐色		
732	鉢?	ナデ。	ナデ。									褐色	褐色		
733	浅鉢	一枚貝多溝。	ミガキ。									淡灰褐色	淡灰褐色		
734	浅鉢	マメフ。	マメフ。									淡灰褐色	淡灰褐色		
735	深鉢	マメフ。	マメフ。									褐色	褐色		
736	深鉢	ケズリーナア。	ナデ。									淡灰褐色	淡灰褐色		
737	深鉢	マメフ。	マメフ。									淡灰褐色	淡灰褐色		
738	浅鉢	マメフ。	ナデ。									褐色	褐色		

図121 A区第5層出土遺物実測図 (28)

調査の概要

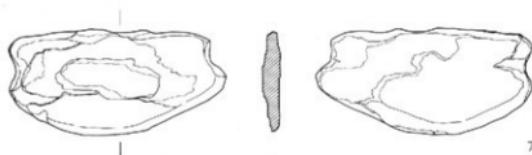


739



741

740

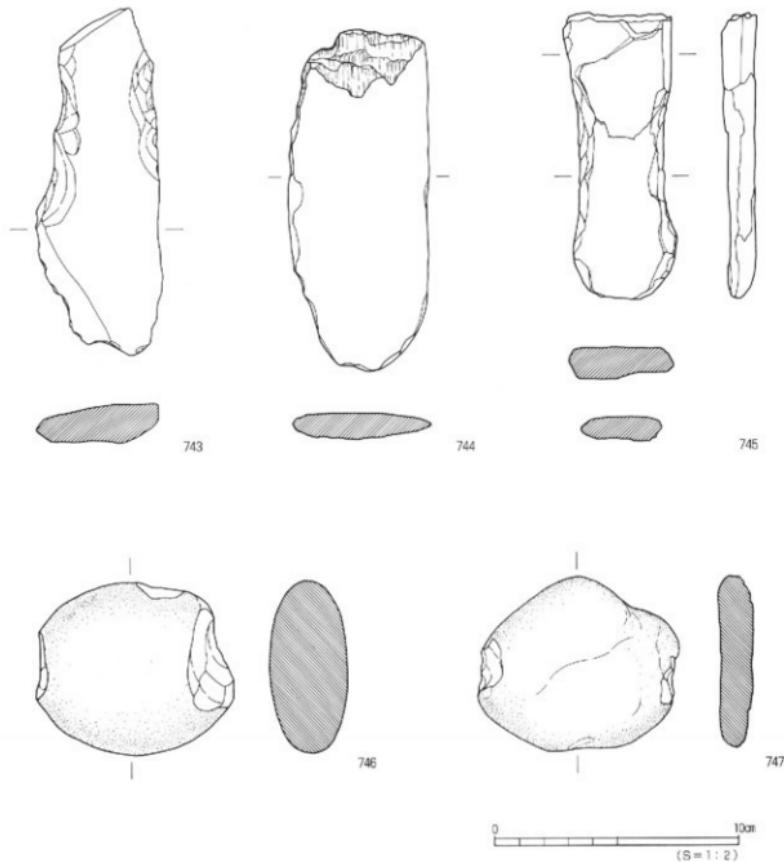


742



学名 器 番 号	器 種	石 材	残 存 度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重 量(g)	その 他
739	磨製石斧	安山岩	欠損	(7.3)	(5.6)	(2.6)	77.0	
740	磨製石斧	黒色片岩	欠損	(5.2)	(5.3)	(2.1)	91.0	
741	磨製石斧	黒色片岩	欠損	(3.2)	(18.0)	(0.8)	8.5	
742	石盤丁	緑色片岩	完形	12.2	3.9	0.7	11.2	

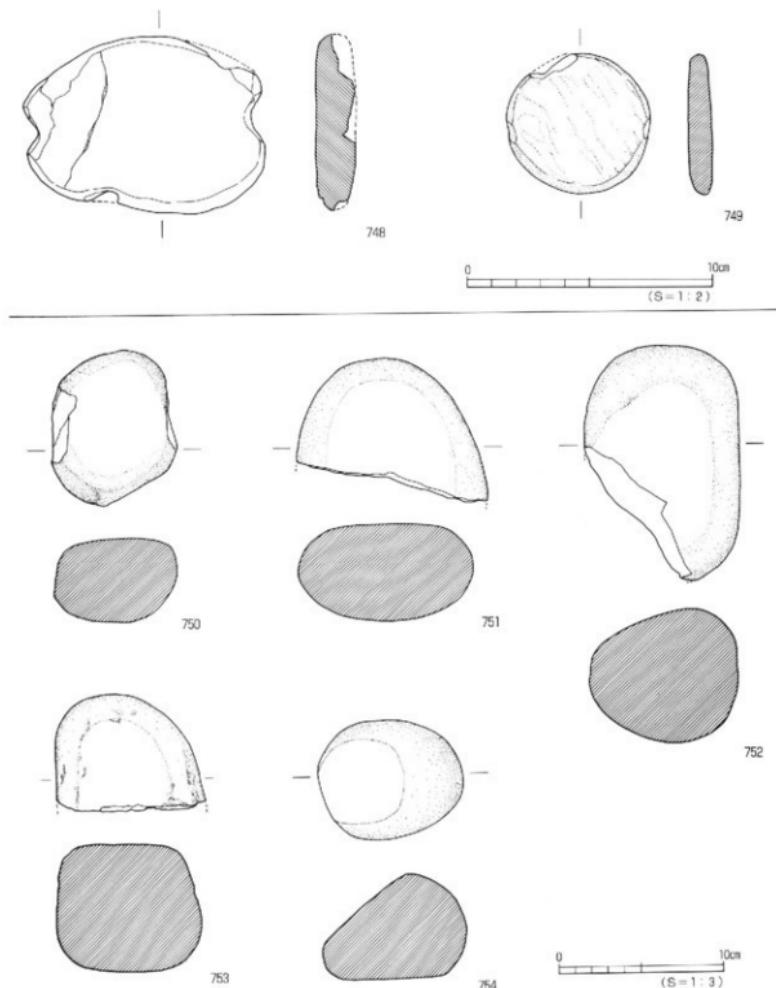
図122 A区第5層出土遺物実測図(2)



層位 番号	器種	石材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他の 記述
743	扁平打製石斧未製品	砂岩		14.2	4.9	1.5	133.0	
744	扁平打製石斧	緑色片岩	欠損	(14.1)	(5.6)	(1.1)	160.0	
745	磨製石削未製品?	緑色片岩		11.6	4.2	1.3	112.8	
746	石鏟	砂岩	一部欠損	8.0	7.0	3.1	222.0	
747	石鏟	安山岩	完形	8.0	7.1	1.3	120.8	

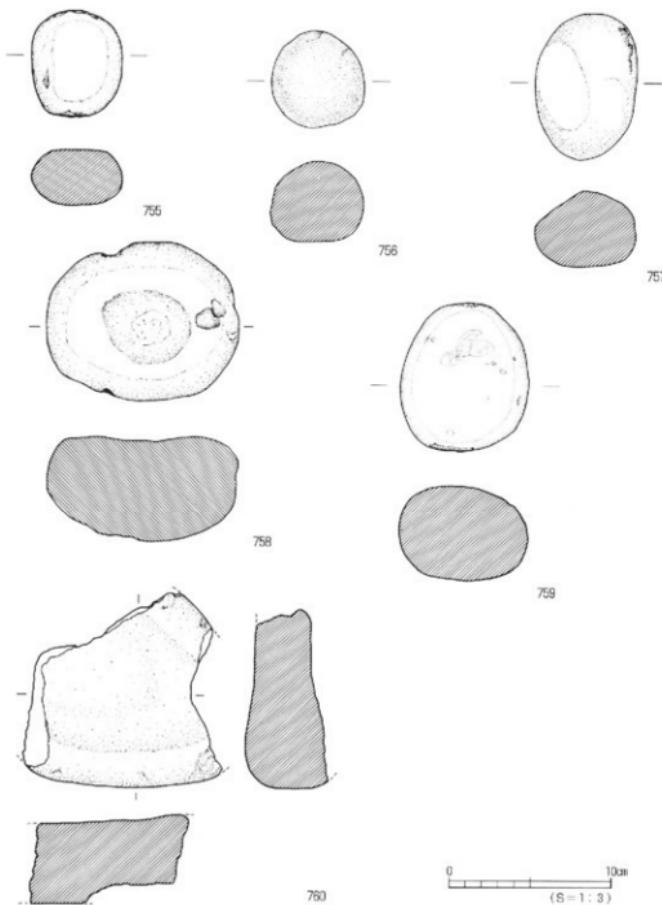
図123 A区第5層出土遺物実測図(30)

調査の概要



番号 No.	器種 Type	石材 Material	残存度 Degree of survival	長さ(cm) Length (cm)	幅(cm) Width (cm)	厚さ(cm) Thickness (cm)	重量(g) Weight (g)	その他 Others
748	石錐	隕石片岩	一部欠損	9.6	7.3	1.6	169.0	
749	石錐	石英片岩	一部欠損	5.8	5.7	0.8	57.3	
750	磨石	砂岩	一部欠損	9.5	7.1	5.1	522.0	
751	磨石	安山岩	欠損	(8.8)	(11.5)	(5.6)	755.0	
752	磨石	安山岩	一部欠損	(14.4)	(9.3)	(8.0)	1600.0	
753	磨石	砂岩	欠損	(7.0)	(9.1)	(7.8)	820.5	
754	磨石	砂岩	完形	8.7	7.5	6.3	570.0	

図124 A区第5層出土遺物実測図(31)



種別 番号	器種	石材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他
755	擦り石	鈴岩	完形	6.5	5.4	3.4	170.8	
756	敲石	安山岩	完形	5.9	5.6	4.9	241.0	
757	磨石	安山岩	完形	9.0	6.1	4.7	370.0	
758	震み石	砂岩	完形	11.6	9.7	6.6	1090.0	
759	敲石	砂岩	完形	9.2	7.9	5.8	645.0	
760	石錠	砂岩	欠損	(16.1)	(11.5)	(6.5)	2150.0	

図125 A区第5層出土遺物実測図(2)

調査の概要

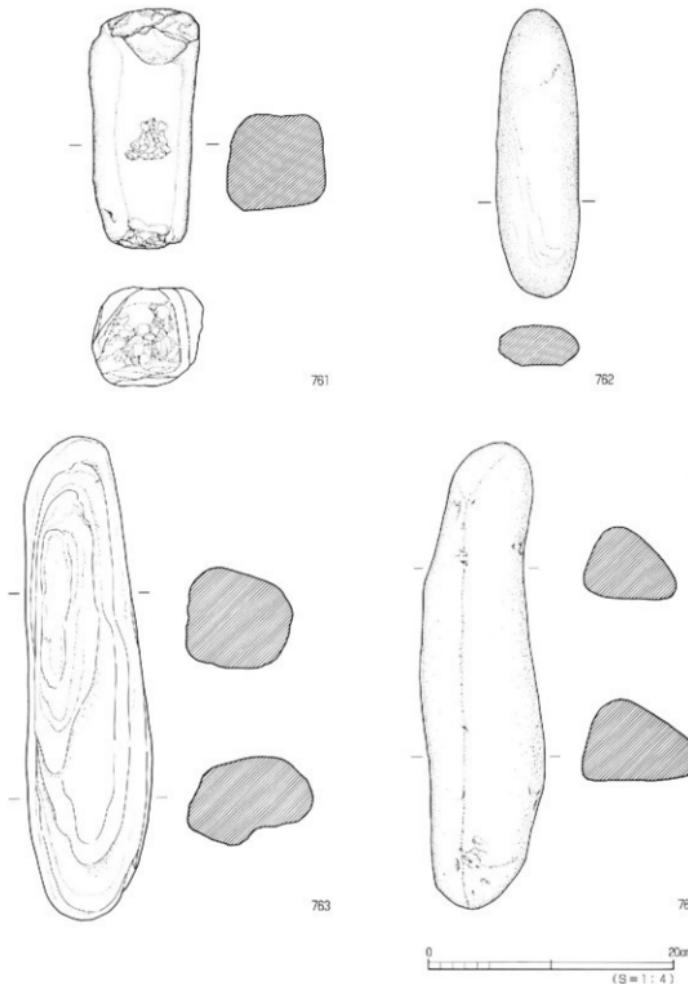
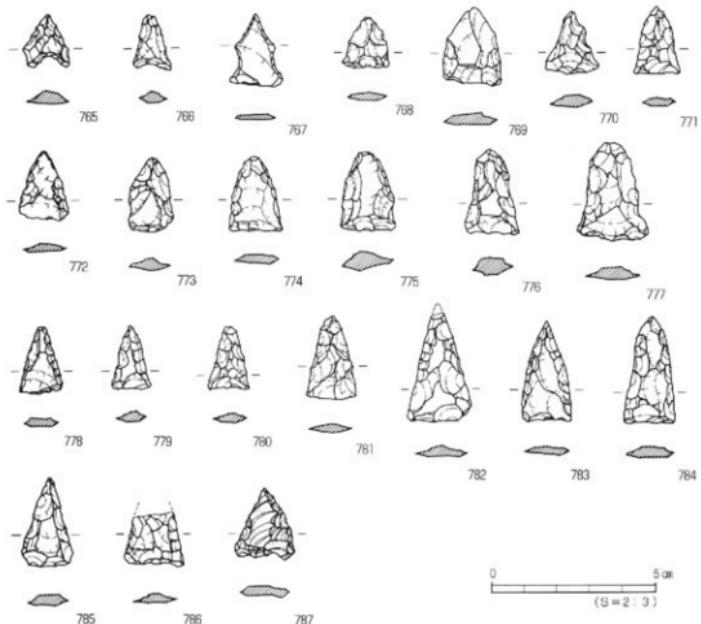


図126 A区第5層出土遺物実測図(33)

種類 番号	器 種	石 材	残 存 状	長 さ(cm)	幅 (cm)	厚 さ(cm)	重 量(g)	その 他
761	鐵石	砂岩	完形	19.9	9.0	8.2	2400.0	
762	石棒	綠色片岩	完形	23.4	6.6	3.3	825.0	
763	石棒	綠色片岩	完形	40.0	10.2	8.5	5450.0	
764	石棒	砂岩	完形	38.4	10.1	6.7	3150.0	



件番 番号	器種	石 材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他の 記述
765	打製石頭	サヌカイト	完形	1.7	1.37	0.4	0.6	
766	打製石頭	サヌカイト	完形	1.8	1.15	0.4	0.6	
767	打製石頭	サヌカイト	完形	1.7	1.6	0.2	1.0	
768	打製石頭	サヌカイト	完形	1.6	1.45	0.25	0.7	
769	打製石頭	サヌカイト	完形	2.4	1.8	0.4	1.8	
770	打製石頭	サヌカイト	完形	1.94	1.7	0.4	1.1	
771	打製石頭	サヌカイト	完形	2.1	1.9	0.3	0.9	
772	打製石頭	サヌカイト	完形	2.1	1.5	0.25	0.8	
773	打製石頭	サヌカイト	完形	2.4	1.4	0.4	1.4	
774	打製石頭	サヌカイト	完形	2.3	1.68	0.3	1.4	
775	打製石頭	サヌカイト	完形	2.4	1.7	0.7	2.3	
776	打製石頭	サヌカイト	完形	2.6	1.7	0.6	2.0	
777	打製石頭	サヌカイト	完形	3.1	2.15	0.4	2.7	
778	打製石頭	サヌカイト	完形	2.1	2.4	0.3	0.7	
779	打製石頭	サヌカイト	完形	2.0	1.28	0.35	0.7	
780	打製石頭	サヌカイト	完形	1.95	1.3	0.3	0.7	
781	打製石頭	サヌカイト	完形	2.63	1.5	0.25	1.0	
782	打製石頭	サヌカイト	一部欠損	(3.7)	2.0	0.32	2.5	
783	打製石頭	サヌカイト	完形	3.15	1.55	0.3	1.5	
784	打製石頭	サヌカイト	完形	3.3	1.5	0.32	2.2	
785	打製石頭	サヌカイト	完形	1.75	1.6	0.4	1.7	
786	打製石頭	サヌカイト	欠損	(1.5)	1.8	0.3	1.4	
787	打製石頭	黒曜石(經島産)	完形	2.1	1.8	0.3	1.5	

図127 A区第5層出土遺物実測図(34)

調査の概要

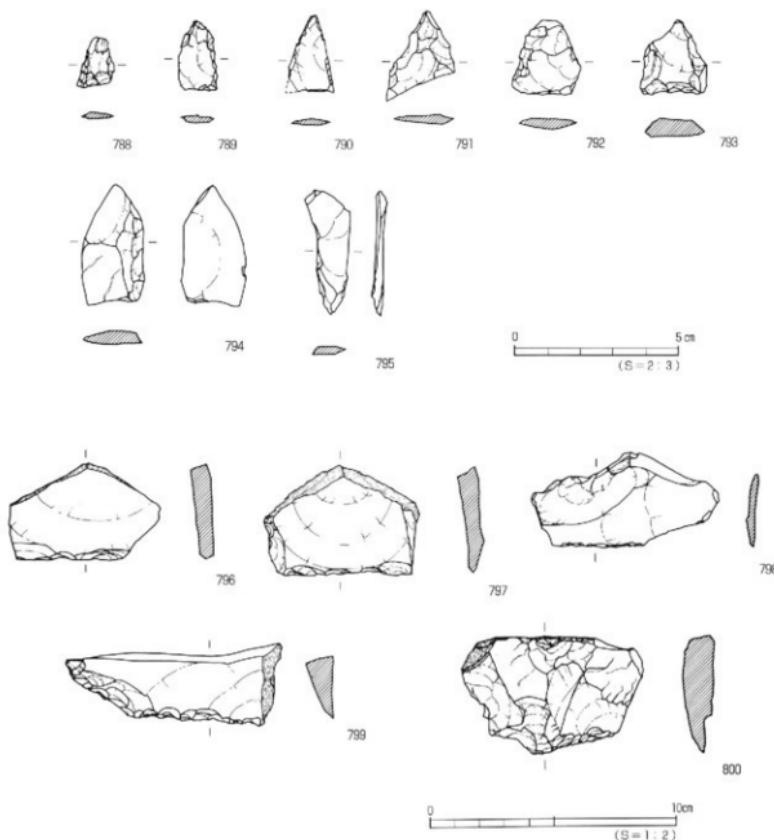
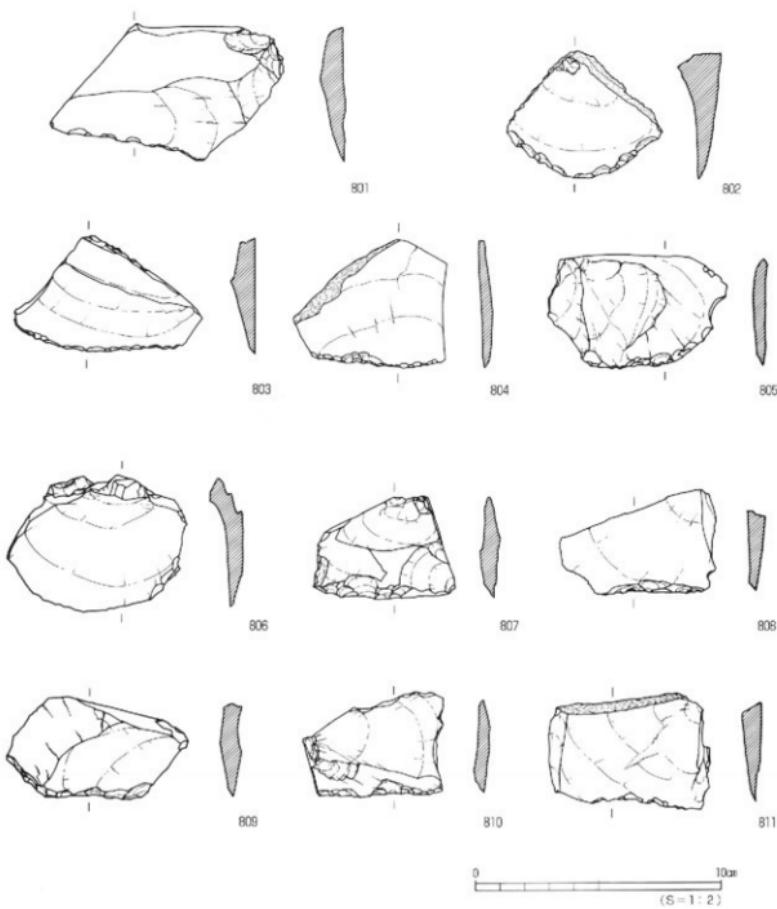


図128 A区第5層出土遺物実測図(39)

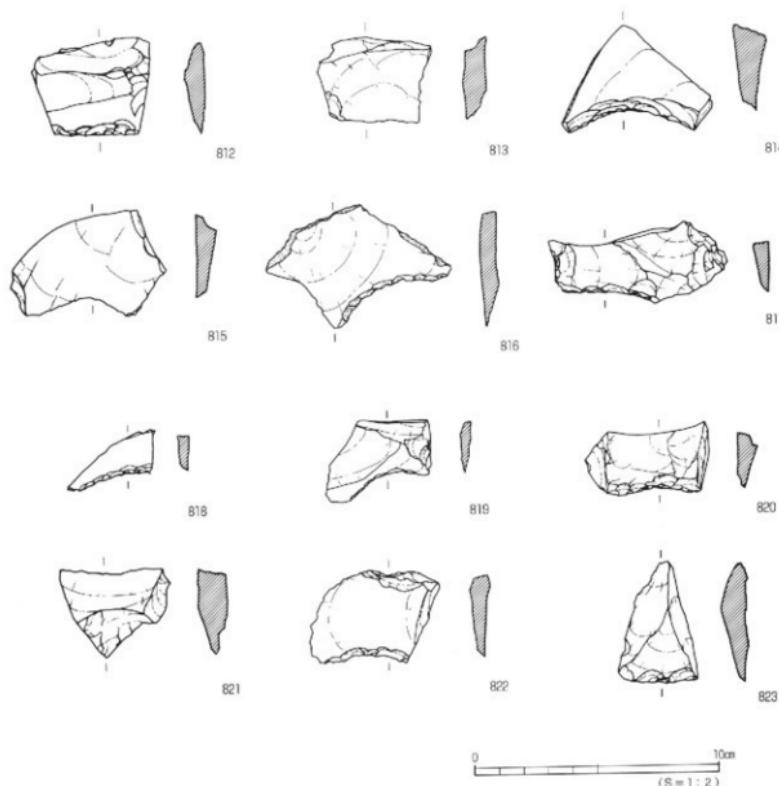
大洞遺跡



編目 番号	器種	石材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他
801	スクレイバー	サヌカイト		5.4	9.5	1.0	49.8	
802	スクレイバー	サヌカイト		5.2	6.2	1.8	34.4	
803	スクレイバー	サヌカイト		4.7	7.7	0.9	29.5	
804	スクレイバー	サヌカイト		5.3	6.1	0.4	18.4	
805	スクレイバー	サヌカイト		4.7	7.2	0.5	26.6	
806	スクレイバー	サヌカイト		5.5	7.7	0.7	31.2	
807	スクレイバー	サヌカイト		4.2	5.8	0.8	21.4	
808	スクレイバー	サヌカイト		4.3	6.3	0.7	23.5	
809	スクレイバー	サヌカイト		7.5	4.1	0.8	29.2	
810	スクレイバー	サヌカイト		4.2	5.7	0.5	19.1	
811	スクレイバー	サヌカイト		4.7	6.6	0.8	31.1	

図129 A区第5層出土遺物実測図(36)

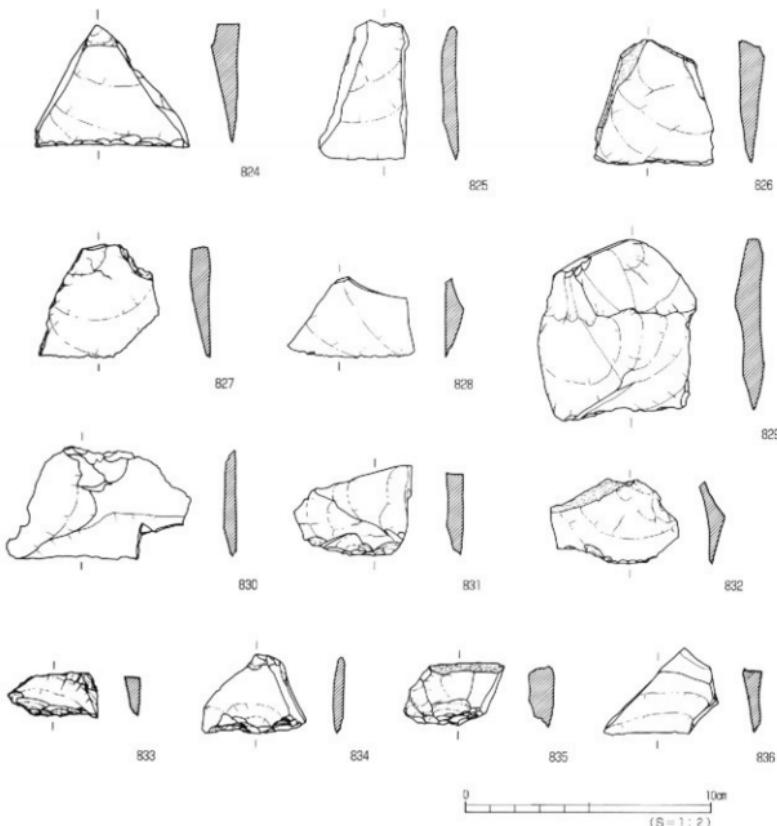
調査の概要



種類 番号	器種	石材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他
812	スクレイパー	サヌカイト		3.9	4.7	0.8	221	
813	スクレイパー	サヌカイト		3.6	4.7	0.9	222	
814	スクレイパー	サヌカイト		4.4	6.1	1.2	223	
815	スクレイパー	サヌカイト		4.3	6.1	0.8	193	
816	スクレイパー	サヌカイト		5.0	7.5	0.65	218	
817	スクレイパー	サヌカイト		3.3	7.3	0.6	14.0	
818	スクレイパー	サヌカイト		1.7	3.4	0.4	3.1	
819	スクレイパー	サヌカイト		3.4	4.2	0.4	18.6	
820	スクレイパー	サヌカイト		3.0	5.1	0.8	13.0	
821	スクレイパー	サヌカイト		3.5	4.5	1.2	13.0	
822	スクレイパー	サヌカイト		3.7	5.2	0.7	16.0	
823	スクレイパー	サヌカイト		5.0	3.3	1.0	13.5	

図130 A区第5層出土遺物実測図(37)

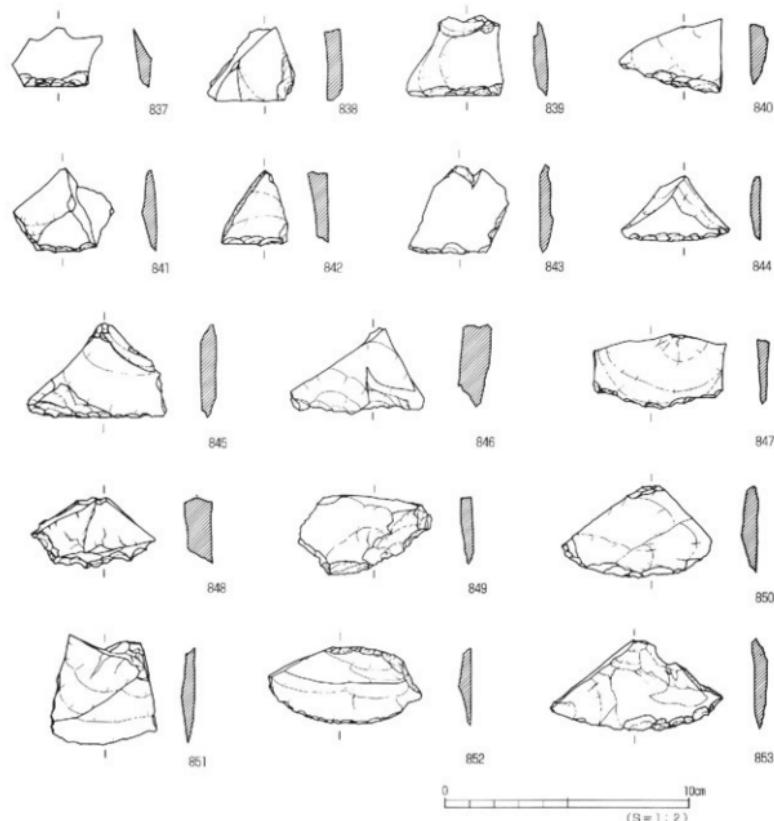
大 洞 遺 踪



件目 番号	器種	石材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他
K24	スクレイバー	サヌカイト		4.9	6.2	1.0	23.9	
K25	スクレイバー	サヌカイト		5.7	3.5	0.6	15.8	
K26	スクレイバー	サヌカイト		5.0	4.9	1.0	27.7	
K27	スクレイバー	サヌカイト		4.7	4.9	0.8	18.4	
K28	スクレイバー	サヌカイト		3.3	5.1	0.7	69.6	
K29	スクレイバー	サヌカイト		7.5	6.3	1.0	53.1	
K30	スクレイバー	サヌカイト		4.5	7.4	0.5	16.8	
K31	スクレイバー	サヌカイト		3.6	4.8	0.6	16.8	
K32	スクレイバー	サヌカイト		3.5	5.2	0.7	13.5	
K33	スクレイバー	サヌカイト		1.8	3.7	0.6	5.1	
K34	スクレイバー	サヌカイト		3.2	4.2	0.4	9.1	
K35	スクレイバー	サヌカイト		2.6	4.0	1.0	11.7	
K36	スクレイバー	サヌカイト		3.5	4.7	0.8	10.9	

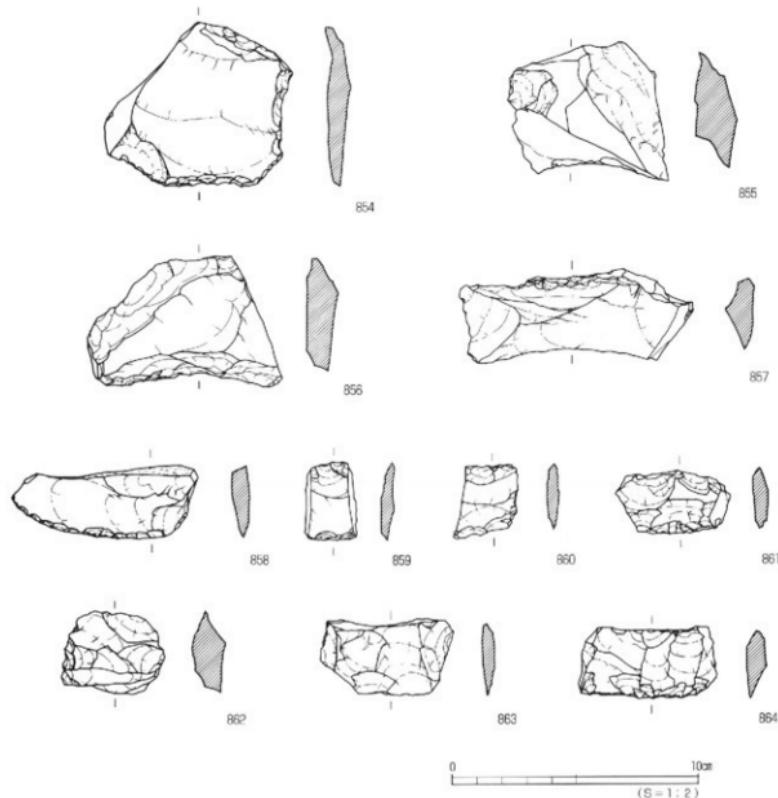
図131 A区第5層出土遺物実測図(30)

調査の概要



番号	器種	石材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	その他
837	スクレイパー	サヌカイト		2.4	3.5	0.5	5.4	
838	スクレイパー	サヌカイト		3.0	3.5	0.6	8.1	
839	スクレイパー	サヌカイト		3.2	3.9	0.5	10.0	
840	スクレイパー	サヌカイト		3.0	4.1	0.7	9.8	
841	スクレイパー	サヌカイト		3.4	4.0	0.6	6.5	
842	スクレイパー	サヌカイト		3.1	2.6	0.8	5.7	
843	スクレイパー	サヌカイト		3.6	3.9	0.5	8.0	
844	スクレイパー	サヌカイト		2.6	4.4	0.4	4.1	
845	スクレイパー	サヌカイト		3.8	5.5	0.6	14.7	
846	スクレイパー	サヌカイト		3.4	5.3	1.1	18.4	
847	スクレイパー	サヌカイト		3.0	5.4	0.5	9.9	
848	スクレイパー	サヌカイト		2.8	2.2	1.1	14.4	
849	スクレイパー	サヌカイト		3.2	5.3	0.4	10.3	
850	スクレイパー	サヌカイト		3.7	6.1	0.6	15.0	
851	スクレイパー	サヌカイト		4.4	4.2	0.5	12.2	
852	スクレイパー	サヌカイト		3.2	6.2	0.5	12.4	
853	スクレイパー	サヌカイト		3.7	6.9	0.5	14.0	

図132 A区第5層出土遺物実測図(39)



博物館番号	器種	石 材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他の
854	スクレーパー	サスカイト		6.7	7.4	1.0	59.6	
855	スクレーパー	サスカイト		5.6	6.4	1.7	56.9	
856	スクレーパー	サスカイト		5.3	7.8	1.2	58.9	
857	スクレーパー	サスカイト		3.8	9.5	1.1	38.7	
858	スクレーパー	サスカイト		2.9	7.4	0.7	20.8	
859	素材削片	サスカイト		3.2	2.0	0.5	5.4	
860	素材削片	サスカイト		2.9	2.6	0.5	5.3	
861	素材削片	サスカイト		2.5	4.6	0.6	11.7	
862	素材削片	サスカイト		3.3	4.2	1.3	20.0	
863	素材削片	サスカイト		3.1	5.4	0.5	15.9	
864	素材削片	サスカイト		2.8	5.6	0.8	14.8	

図133 A区第5層出土遺物実測図(40)

調査の概要

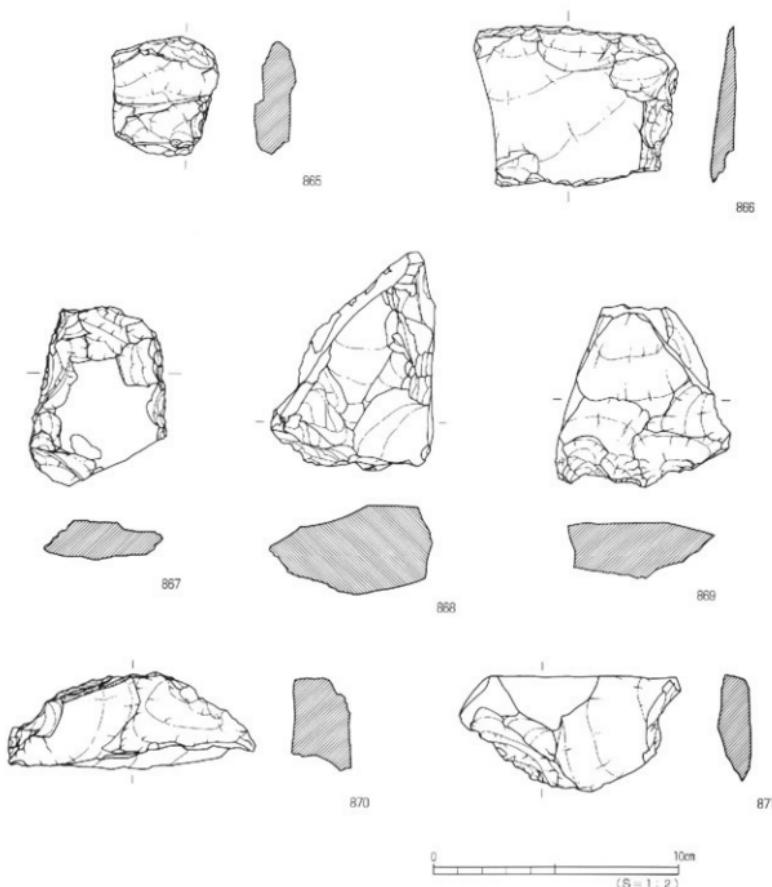
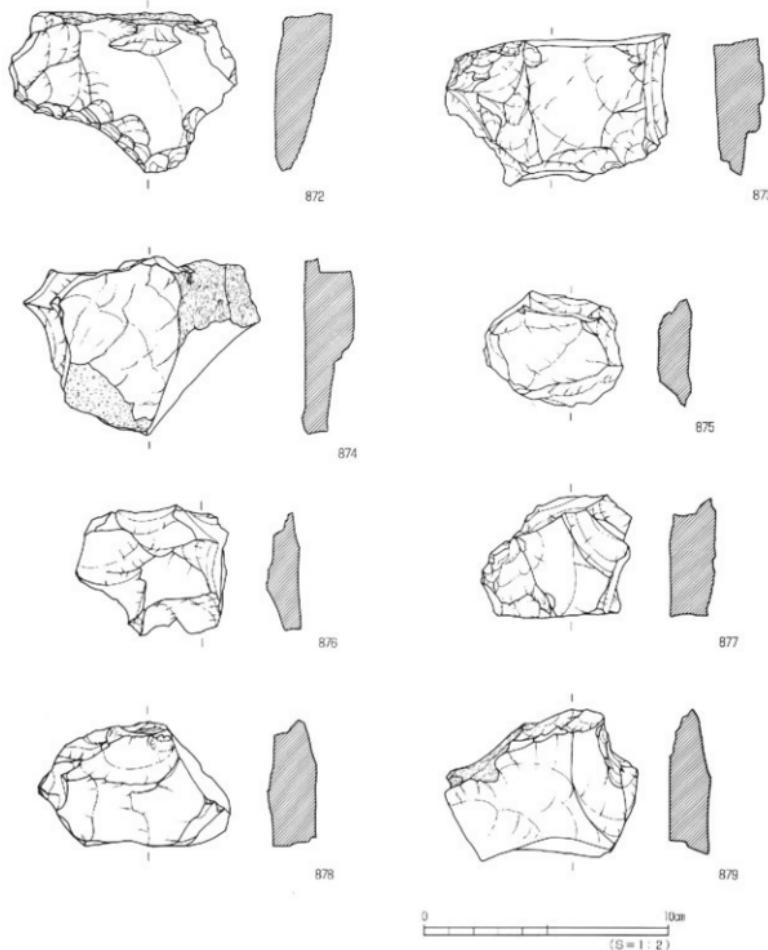


図134 A区第5層出土遺物実測図(4)

辨別 番号	形 様	石 材	残 存 度	長 さ(cm)	幅 (cm)	厚 さ(cm)	重 量(g)	そ の 他
865	素材剥片	サヌカイト		4.8	4.4	1.4	44.6	
866	素材剥片	サヌカイト		8.2	6.5	0.8	71.9	
867	素材剥片	サヌカイト		7.3	5.5	1.6	71.0	
868	石核	サヌカイト		6.5	9.0	3.7	255.5	
869	石核	サヌカイト		7.2	7.1	2.6	127.1	
870	石核	サヌカイト		3.9	9.9	2.2	95.0	
871	石核	サヌカイト		4.7	8.9	1.3	67.3	

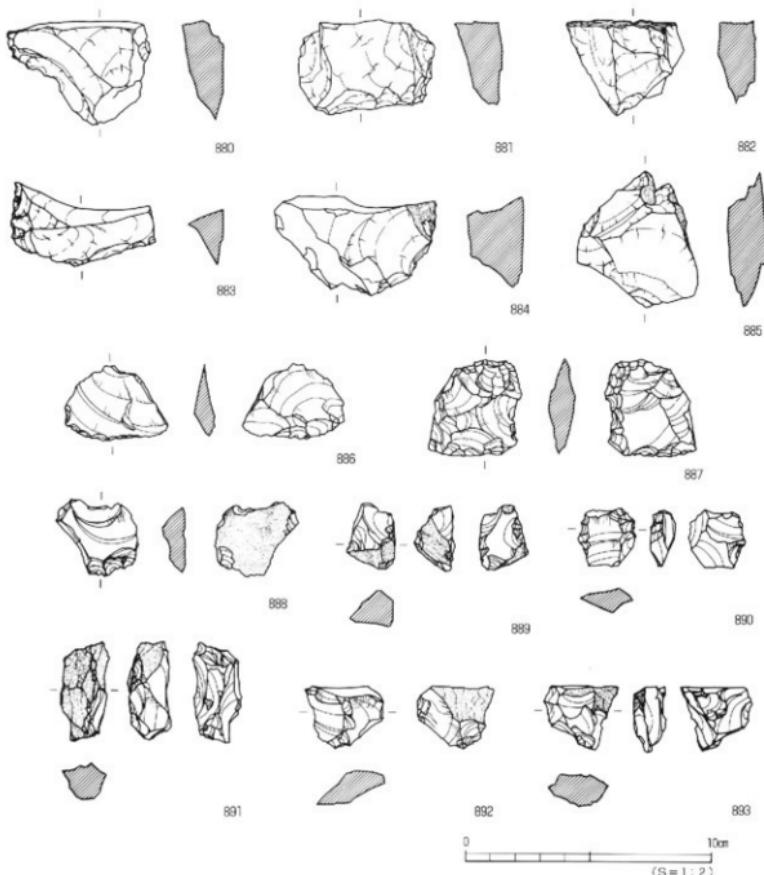
大淵遺跡



博采 番号	器 種	石 材	残 存 度	長 さ(cm)	幅 (cm)	厚 さ(cm)	重 量(g)	そ の 他
872	石核	サヌカイト		6.6	9.1	2.0	142.9	
873	石核	サヌカイト		6.1	9.2	1.9	160.2	
874	石核	サヌカイト		7.2	9.5	1.9	127.5	
875	石核	サヌカイト		4.7	5.8	1.3	96.1	
876	石核	サヌカイト		5.2	6.0	1.3	44.9	
877	石核	サヌカイト		4.8	7.0	1.9	70.3	
878	石核	サヌカイト		5.1	7.7	2.0	99.2	
879	石核	サヌカイト		6.2	7.8	1.6	111.3	

図135 A区第5層出土遺物実測図(2)

調査の概要



絞り番号	器種	石種	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他
880	石核	サヌカイト		4.2	5.7	1.5	39.2	
881	石核	サヌカイト		3.8	5.5	1.7	38.2	
882	石核	サヌカイト		3.9	4.7	1.5	28.6	
883	石核	サヌカイト		3.6	5.7	1.3	19.4	
884	石核	サヌカイト		4.1	6.5	2.2	50.3	
885	石核	サヌカイト		5.5	5.0	1.8	45.3	
886	スクレイパー	黒曜石(絞島産)		3.1	4.2	0.8	7.4	
887	スクレイパー	黒曜石(絞島産)		4.1	3.6	1.0	16.5	
888	スクレイパー	黒曜石		3.2	3.3	0.8	8.4	
889	石核	黒曜石		2.7	1.9	1.3	6.9	
890	石核	黒曜石		2.3	2.4	1.0	5.0	
891	石核	黒曜石		4.1	2.0	1.5	11.9	
892	石核	黒曜石(絞島産)		2.5	3.1	1.4	9.2	
893	石核	黒曜石(絞島産)		2.6	3.0	1.3	8.9	

図136 A区第5層出土遺物実測図(43)

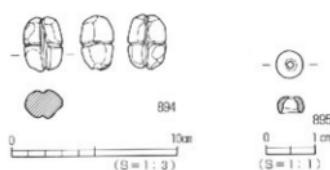


図137 A区第5層出土遺物実測図(4)

⑧ 第5～7層出土遺物(図138～143)

第5層から7層の間の出土であることはわかっているが、層位が特定できない石製品を主とした遺物が若干あるので、ここでとりあげておく。剥片素材の石製品にはサヌカイトの石鏃、石錐、スクレイパーがある。石鏃には凹基のものと平基のものがあり、比較的入念に成形された898のようなものもあるが、897や900のような縁辺部だけの剥離によって成形されたものもある。特に正三角形に近い凹基の897は両面ともに縁

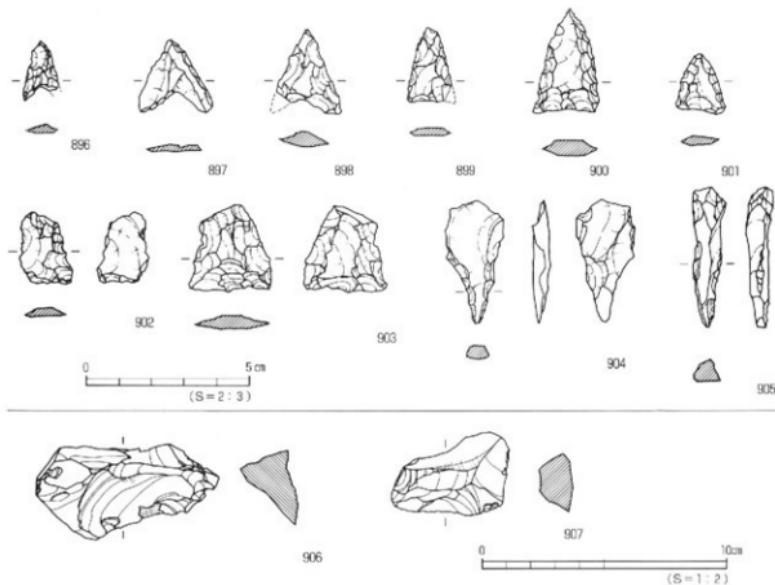
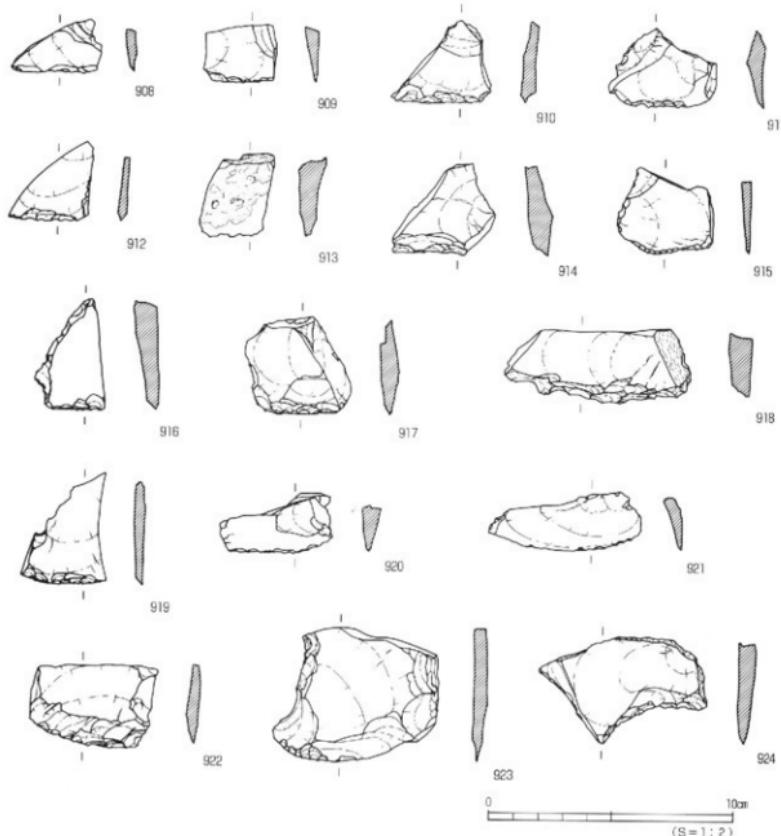


図138 A区第5～7層出土遺物実測図(1)

地層 番号	器 種	石 材	残 存 度	長 さ(cm)	幅 (cm)	厚 さ(cm)	重 量(g)	そ の 他
896	打削石器	サヌカイト	一部欠損	1.65	(1.2)	0.25	0.4	
897	打削石器	サヌカイト	完形	2.3	2.3	0.2	1.2	
898	打削石器	サヌカイト	一部欠損	2.6	(2.0)	0.5	1.4	
899	打削石器	サヌカイト	部分欠損	2.2	(1.9)	0.2	0.9	
900	打削石器	サヌカイト	完形	3.3	2.0	0.5	3.2	
901	打削石器	サヌカイト	完形	1.9	1.5	0.3	0.8	
902	石鏃未製品	サヌカイト		2.2	1.6	0.3	1.3	
903	石鏃未製品	サヌカイト		2.7	2.6	0.4	3.1	
904	石核	サヌカイト	完形	3.8	1.8	0.4	2.8	
905	石核	サヌカイト	完形	4.4	0.9	0.7	4.0	
906	石核	黒曜石(斑島産)		7.5	3.8	2.3	61.6	
907	石核	黒曜石(斑島産)		3.4	4.7	1.4	21.2	

調査の概要



番号	器種	石材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他
908	スクレーパー	サヌカイト		2.2	3.7	0.4	4.0	
909	スクレーパー	サヌカイト		2.4	2.9	0.5	4.7	
910	スクレーパー	サヌカイト		3.3	4.0	0.5	10.1	
911	スクレーパー	サヌカイト		3.2	4.4	0.7	9.0	
912	スクレーパー	サヌカイト		3.3	3.2	0.3	4.11	
913	スクレーパー	サヌカイト		3.4	3.0	1.0	10.9	
914	スクレーパー	サヌカイト		3.8	4.1	1.0	14.9	
915	スクレーパー	サヌカイト		3.6	3.9	0.4	6.6	
916	スクレーパー	サヌカイト		4.5	2.8	0.9	11.0	
917	スクレーパー	サヌカイト		4.0	4.3	0.7	13.0	
918	スクレーパー	サヌカイト		3.0	7.6	1.0	34.2	
919	スクレーパー	サヌカイト		4.5	3.4	0.4	8.5	
920	スクレーパー	サヌカイト		2.4	4.4	0.8	7.6	
921	スクレーパー	サヌカイト		2.3	6.1	0.5	7.4	
922	スクレーパー	サヌカイト		3.3	5.1	0.5	15.7	
923	スクレーパー	サヌカイト		5.4	6.6	0.5	29.6	
924	スクレーパー	サヌカイト		4.3	7.0	0.7	20.7	

図139 A区第5～7層出土遺物実測図(2)

大測遺跡

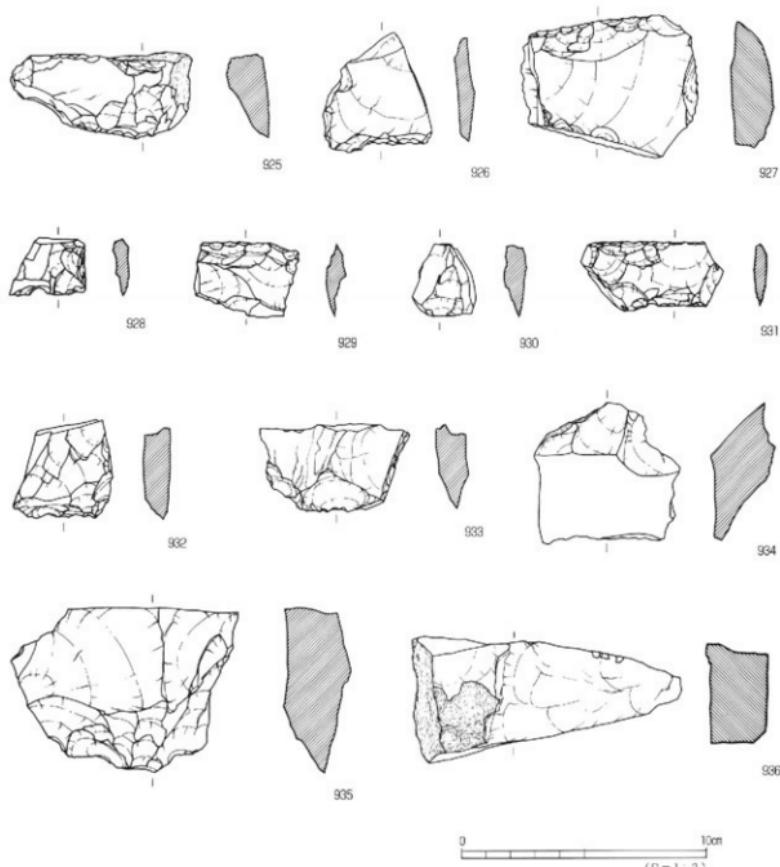


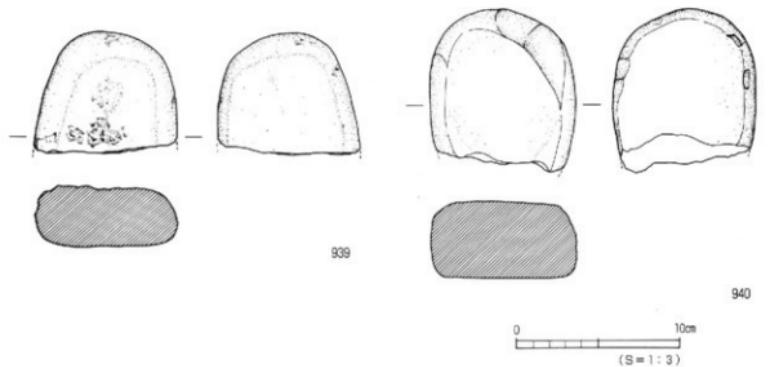
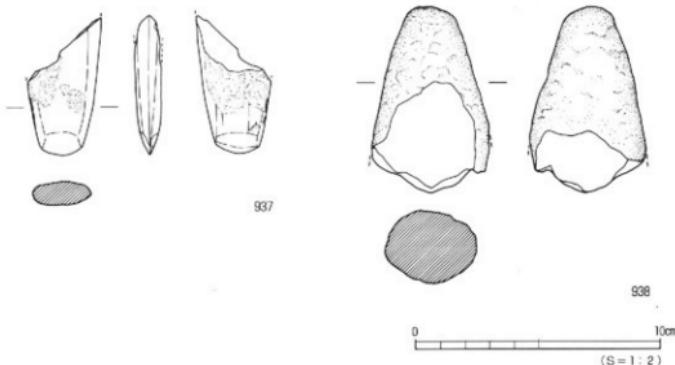
図140 A区第5～7層出土遺物実測図(3)

組番 登号	器種	石 材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他の
925	スクレイパー	サヌカイト		3.4	7.2	1.5	35.1	
926	スクレイパー	サヌカイト		4.9	4.3	0.7	16.2	
927	スクレイパー	サヌカイト		7.0	5.8	1.6	84.6	
928	素材削片	サヌカイト		2.4	3.1	0.6	5.1	
929	素材削片	サヌカイト		4.1	3.5	0.8	11.9	
930	素材削片	サヌカイト		3.0	2.5	0.8	7.4	
931	素材削片	サヌカイト		2.9	5.9	0.5	16.4	
932	石核	サヌカイト		4.0	4.0	1.1	21.9	
933	石核	サヌカイト		3.6	6.0	1.2	36.8	
934	石核	サヌカイト		5.6	5.9	2.6	76.5	
935	石核	サヌカイト		6.7	9.2	2.5	167.1	
936	石核	サヌカイト		10.9	5.3	2.8	172.7	

調査の概要

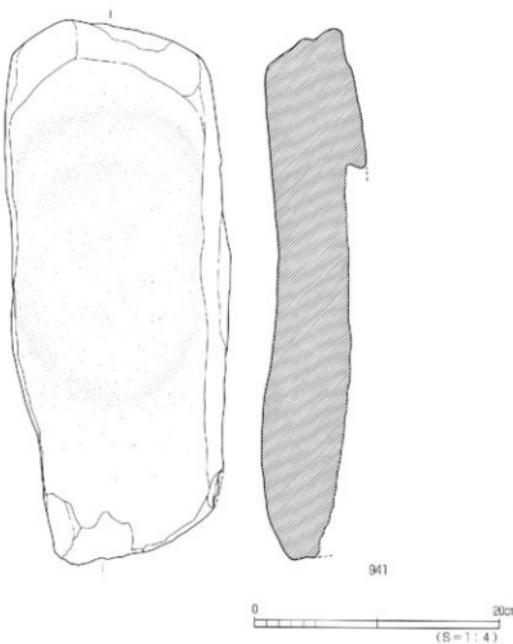
刃部の限られた範囲以外のほとんどの部分が一次剥離面のままである。902・903は石鎚未製品と考えられるもの、906・907は姫島産黒曜石の石核である。転石利用のものには砂岩の伐採斧や磨石、窪み石、安山岩の加工斧、緑色片岩の石皿などがある。

土製品では5層出土の土錘894と同形、同大の小型品942が1点と、晩期の浅鉢脇部片を再利用した紡錘車943がある。



標号 番号	器種	石材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他
907	磨製石斧	安山岩	欠損	(5.7)	(2.5)	(1.0)	21.0	
908	磨製石斧	砂岩	欠損	(7.6)	(4.6)	(2.9)	125.7	
899	窪み石	花崗岩	欠損	(7.4)	(8.7)	(3.7)	400.6	
940	磨石	砂岩	欠損	(10.1)	8.8	4.6	780.0	

図141 A区第5～7層出土遺物実測図(4)



器物 番号	器 種	石 材	残 存 度	長 さ(cm)	幅(cm)	厚 さ(cm)	重 量(g)	そ の 他
941	石鉈	緑色片岩	欠損	44.7	18.3	(8.3)	12000.0	

図142 A区第5～7層出土遺物実測図(5)

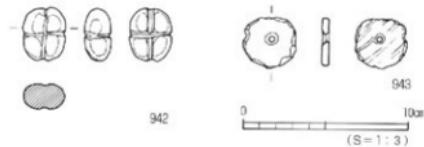


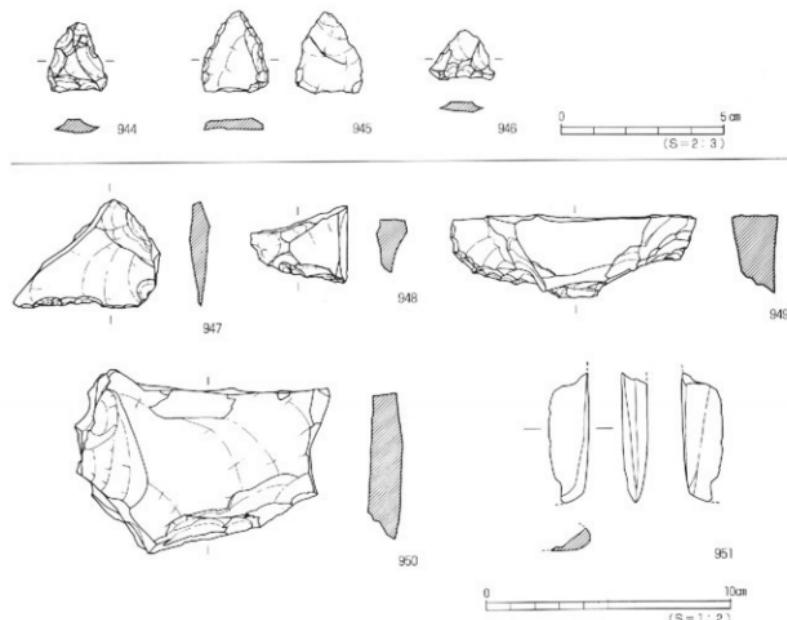
図143 A区第5～7層出土遺物実測図(6)

世までのものがある。図144は縄文時代のものと考えられる石器類、図145は弥生時代の壺と石庵丁である。壺952は小破片のため判断しづらいが、前期の口縁部か？緑色片岩の石庵丁953は穿孔部周辺の破片、かなりローリングを受けて摩滅が著しい。古墳時代以降の遺物を図146に掲載している。須恵器は蓋のみで、古いところではTK23から新しいところではTK217段階のものがある。その他古代～中世のものには、円盤高台や輪高台の土師器坏962・椀963、和泉型瓦器椀964、土師器鍋968～970、亀山焼甕966、備前焼掘り鉢971・972など13世紀代から15世紀代を中心としたものである。

3) A区のその他の遺物(図144～146)

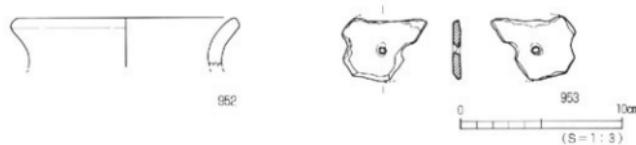
A区の遺構や湿地検出に至るまでの第1～4層の間で採集された遺物が若干あり、量の多寡はともかく縄文時代から中

調査の概要



番号	器種	石材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(mm)	重量(g)	その他
944	石核	サヌカイト	完形	2.1	1.8	0.5	1.7	
945	石核	サヌカイト	完形	2.5	2.0	0.3	2.4	
946	打製石核	サヌカイト	完形	1.5	2.0	0.3	1.0	
947	スクレイパー	サヌカイト		4.4	5.9	0.8	16.9	
948	スクレイパー	サヌカイト		3.1	3.9	1.2	14.2	
949	石核	サヌカイト		3.5	10.0	1.9	67.6	
950	石核	サヌカイト		7.5	10.2	1.3	122.5	
951	磨製石斧	緑色片岩	欠損	(5.3)	(1.6)	(0.9)	7.1	

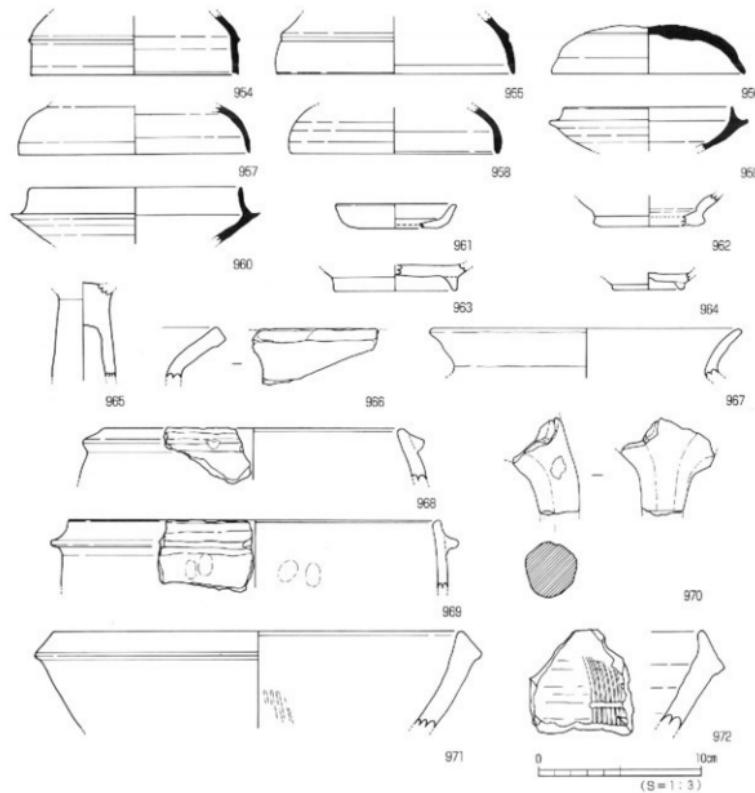
図144 A区表採遺物実測図(1)



番号	器種	調査要		口縫		突起		色調		その他
		外面	内面	端部形	縫み	端部形	縫み	内面	外面	
952	器 マメツ。		マメツ。					赤褐色	淡褐色	
953	石核	緑色片岩	欠損	(5.3)	(3.9)	(0.5)	13			

図145 A区表採遺物実測図(2)

大河遺跡



標目 番号	器種	外 面		内 面		口 縁	突 起	部 分	色 調	内 面 外 面	その 他
		外 面	内 面	縫合形	附 み						
954	环盖	ヨコナデ。	ヨコナデ。						青褐色	黄褐色	
955	环盖	ヨコナデ。	ヨコナデ。						灰褐色	灰褐色	
956	环盖	天：羽輪ヘラケズリ。	ヨコナデ。						灰白色	灰白色	
957	环盖	ヨコナデ。	ヨコナデ。						灰白色	灰白色	
958	环盖	ヨコナデ。	ヨコナデ。						灰色	灰色	
959	环身	ヨコナデ。	ヨコナデ。						灰白色	灰白色	
960	环身	ヨコナデ。	ヨコナデ。						灰白色	灰白色	
961	小瓶	マメフ。	マメフ。						灰褐色	深褐色	
962	瓶	マメフ。	マメフ。						淡黄色	淡黄色	
963	瓶	マメフ。	マメフ。						灰白色	灰白色	
964	瓶	マメフ。	マメフ。						淡黄色	淡黄色	
965	瓶	マメフ。	マメフ。						淡黄色	淡黄色	和瓶型瓦唇。
966	瓶	マメフ。	マメフ。						孔口部	孔口部	
967	瓶	マメフ。	マメフ。						黄白色	黄白色	
968	瓶	ナデ。	ナデ。						淡褐色	淡褐色	龟山。
969	瓶	ナデ。	ナデ。						淡褐色	淡褐色	
970	瓶	ナデ。	ナデ。						灰褐色	灰褐色	
971	想跡	ヨコナデ。	ヨコナデ。						灰褐色	灰褐色	瘤。
972	想跡	ヨコナデ。	ヨコナデ。						淡棕色	淡棕色	瘤。

図146 A区表採遺物実測図(3)

調査の概要

(2) B区の調査

B区はA区の南方80m付近に設定された調査区で、調査区北端ではA区の湿地から続いていると考えられる汀が北側を落ちて東西方向に検出されたが、湧水のため充分に層位的な調査が行われていない。この調査区で主に調査されたのは不整形の土器溜まりB区SX-1である。



図147 B区全測図

1) 土器溜まり S X-1 出土遺物 (図148~160)

B 区南西部で検出された長さ11m、最大幅5mの不整形の平面形で、最も深い部分で0.3m程度の窪みである。埋積している土はA区の第5層と同質の暗茶褐色シルトで、人為的な造構ではなくやはり湿地の一部と考えられる。

突帯文深鉢の器型や口端部の形態、刻み目等のバリエーションはA区第5層に準じるが、なかには刻み目の施しかたがイレギュラーなものが僅かに存在する。976の口唇部刻み目はしっかりした平坦面をなす口唇の内壁、外端の双方を刻まれている。986では断面三角形のはてつとした突帯が口端部に接するように貼り付けられ、突帯は三角形の頂点を刻まれるのではなく、その上辺をなす面に刺突が加えられる。また、口端部も刻まれず、端部をやや下った内面に刺突が施されている。これらのようないくつかの口唇内外縫刻みや口縁部内面刺突は、通常刻み目突帯を持たない深鉢に伴うもので、A区6層以下や、SK-6などに例があるところからみれば若干古い要素といえる。

頸部施文には複数条の沈線によるX字状文、あるいは山形文がある。991のように沈線による頸部施文と頸胴界に半截竹管状工具による刺突を組み合わせたものがある。このような例は図示されたようにいくつかみられるが、図151に掲載されたような例があるのでこれらのすべてが刻み目突帯を伴っていたものかどうかは不詳である。無突帯深鉢のうち、1006・1007は口縁部内面施文の粗製深鉢、1008~1019は頸胴界刺突、頸部施文、口端部刻み目のいずれかを施されるもので、1009のようにそのすべてが揃っているものもある。

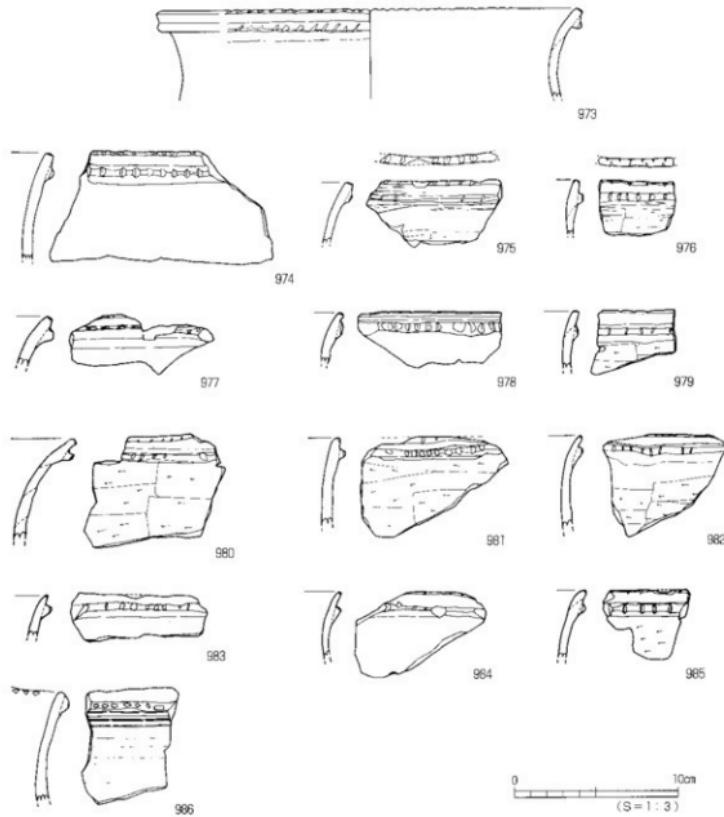
浅鉢には1025~1027のような胴部が扁球形に強く張り、頸部でくびれて短い口頸部が外上方に開くもので、口端部を内面に突出あるいは肥厚させるものと、鍵形口縁のものがある。前者を残りのよい1027でみてみると、口縁部の1個所にリボン状と鰐状突起を組み合わせた突起を付加し、肩部には段を巡らせており、鍵形口縁のものには、口縁部の屈曲がほとんどなく、内面突帯のようになっている1032~1034のようなものもある。1035は浅鉢もしくは深鉢の胴部に貼り付けられる櫻ネクタイ状の突起の剥離したものである。

この土器溜まりでは壺の出土が1点だけみられた。1036は復元口径30.4cmの大型品口縁部で、緩く折り曲げられた口端部は鈍い面をなしている。器面は荒れているが、外面の一部に磨かれたような痕跡がみられる。

底部は深鉢が概ね分厚い窪み底、浅鉢が薄い窪み底あるいは平底になるが、丸底もしくは丸みをおびた尖り底になるものが3点あり、器壁が薄く内面の調整が丁寧なものを浅鉢と判断した。

石製品で注目されるものには石庖丁未製品と考えられる1052が1点ある。緑色片岩を素材とするもので、縦横9×4.7cm、厚さ0.5cmの隅丸長方形状の板状素材の一方の短辺を打ち欠き、抉りを入れた段階で片面が板状剥離したため、製作を放棄したものと思われる。黒色片岩の伐採斧1055は破損品であるが、身幅は薄いようである。緑色片岩の小破片1054には研磨による抉りが明瞭に観察でき、抉入柱状片刃石斧の可能性が高い。サヌカイトの剥片利用の製品には石鏃、スクレイバーがあり、その他素材剥片や石核がある。石鏃のなかには3点の未製品が含まれている。

調査の概要



番号	器種	外観		内面		口縁		縁		突起部		その他	
		前面	背面	面	面	形	形	角	角	色	色	内面	外面
973	深鉢	縁:ナギ?		ナギ。		面	D字形	新曲形	鋸み	D字形	茶褐色	灰褐色	
974	深鉢	縁:ナギ。		ナギ。		面	マメツ	三角形	V字形	D字形	褐褐色	灰褐色	
975	深鉢	マメツ。		マメツ。		面	D字形	半円形	D字形	褐褐色	淡灰褐色		
976	深鉢	縁:ケズリ。		ナギ。		面	D字形	コ字形	D字形	灰茶褐色	淡灰褐色		
977	深鉢	縁:ナギ。		ナギ。		面	U字形	口字形	裏口角	黑色	深褐色		
978	深鉢	マメツ。		マメツ。		面	マメツ	半円形	D字形	褐色	棕褐色		
979	深鉢	縁:ケズリ。		ナギ。		面	D字形	三角形	D字形	茶褐色	灰褐色		
980	深鉢	マメツ。		マメツ。		面	D字形	三角形	D字形	茶褐色	灰褐色		
981	深鉢	縁:ケズリ。		ナギ。		面	マメツ	三角形	D字形	茶褐色	灰褐色		
982	深鉢	ナギ。		マメツ。		面	D字形	三角形	D字形	茶褐色	灰褐色		
983	深鉢	マメツ。		マメツ。		面	D字形	三角形	D字形	茶褐色	灰褐色		
984	深鉢	マメツ。		マメツ。		丸	D字形	三角形	D字形	茶褐色	灰褐色		
985	深鉢	縁:ケズリ。		マメツ。		丸	D字形	三角形	D字形	茶褐色	灰褐色		
986	深鉢	縁:ナギ→ナギ。		ナギ。		丸	マメツ	三角形	D字形	茶褐色	棕褐色		

図148 B区S X-1出土遺物実測図(1)

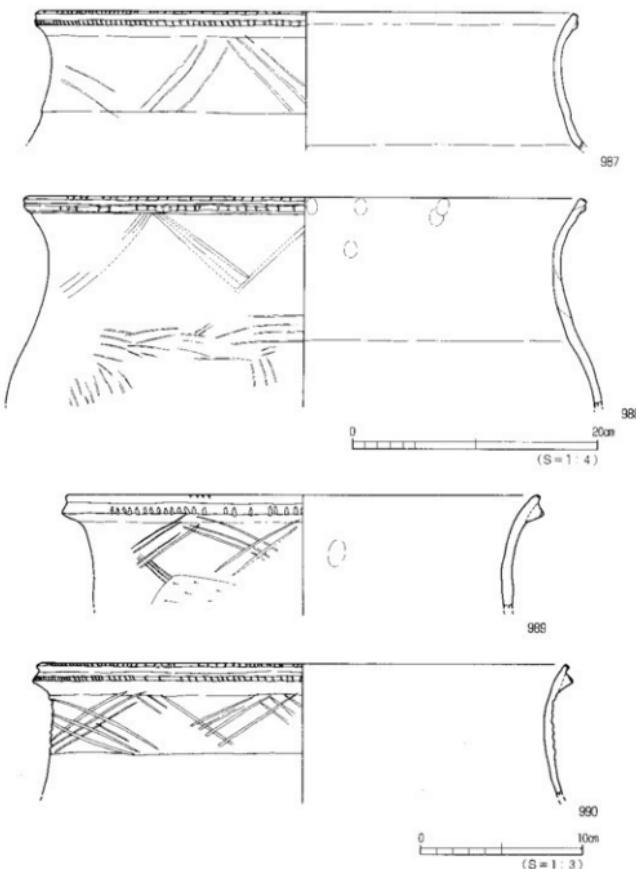
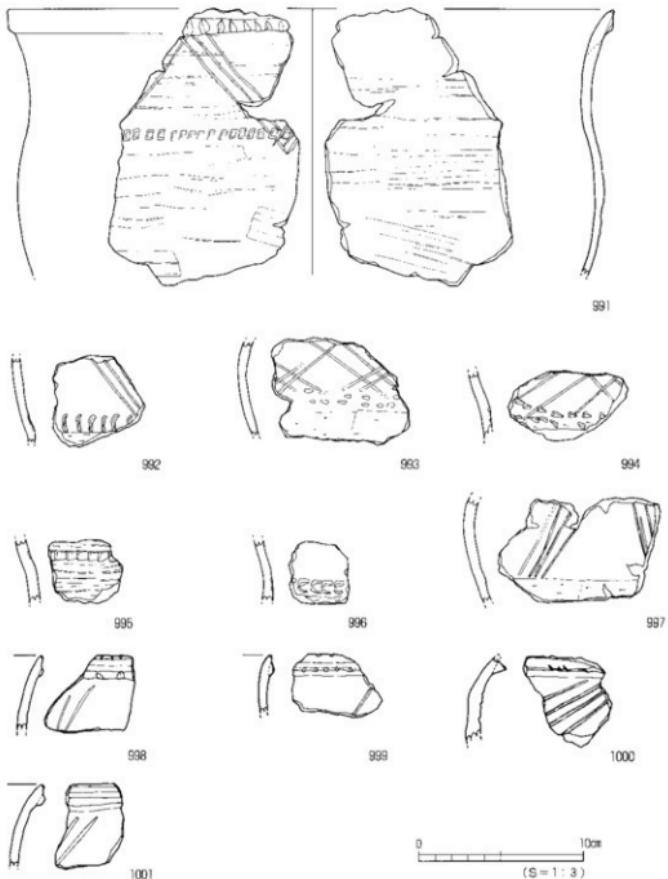


図149 B区SX-1出土遺物実測図(2)

序号	器種	内面		外面		口	縁	窓		色	質	その他の
		外 面	内 面	窓	縁			内 面	外 面			
987	漆鉢	腹：ケズリ→ナデ。縁：ケズリ。	ナデ。	面	縫合形	圓	縫合形	圓	内面	黒色	淡灰褐色	漆部施文。
988	漆鉢	腹：ナメツ？ 縁：ケズリ。	ナデ。	面	小D字形	コ字形	小D字形	ひ字形	黒色	朱	淡灰褐色	漆部施文。
989	漆鉢	腹：ナデ。縁：ケズリ。	ナデ。	丸	小D字形	コ字形	小D字形	三角形	黒色	橙褐色	漆部施文。	
990	漆鉢	腹：ナデ。縁：ケズリ。	ナデ。	面	小D字形	三角形	小D字形	小D字形	黒褐色	淡灰褐色	漆部施文。	

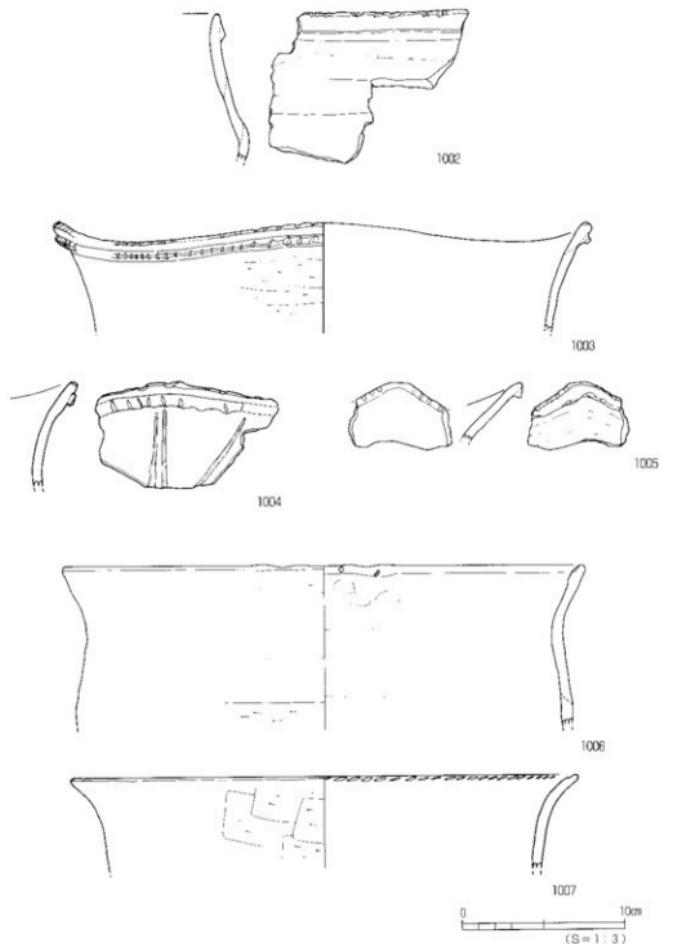
調査の概要



検査番号	器種	周 長		口 檻	突 端	内 面	外 面	その他の
		外 面	内 面					
991	深鉢	底:ナゲ。胸下半:ケズリ。	底:ナゲ。	尖	V字形	断面形	斜面形	腹部施文。
992	深鉢	底:ナゲ。胸:ケズリ。		マメツ。		三角形	D字形	黒灰褐色 腹部施文。
993	深鉢	底:ナゲ。胸:ケズリ。		ナゲ。				灰褐色 腹部施文。
994	深鉢	ナゲ。		ナゲ。				灰褐色 腹部施文。
995	深鉢	朱模。		マメツ。				灰褐色 腹部模様。
996	深鉢	ナゲ。						灰褐色 腹部模様。
997	深鉢	底:ナゲ。胸:ケズリ。		ナゲ。				灰褐色 腹部模様。
998	深鉢	マメツ。		丸	D字形	丁字形	D字形	淡褐色 腹部施文。
999	深鉢	マメツ。		マメツ	マメツ	マメツ	マメツ	淡褐色 腹部施文。
1000	深鉢	ナゲ。		欠損	欠損	三角形	D字形	淡褐色 腹部施文。
1001	深鉢	マメツ。		尖	マメツ	半円形	マメツ	黑色 腹部施文。

図150 B区SX-1出土遺物実測図(3)

大洞遺跡



標 名 番 号	器 種	圓 盤		口 縫		突 起		色 調		その 他
		外 面	内 面	縦帶形	胡 み	渾田形	削 み	内 面	外 面	
1002	深鉢	ナデ。	ナデ。	丸	D字形	三角形	削み	茶褐色	淡灰褐色	
1003	深鉢	無・ケズリ。	ナデ。	面	D字形	三角形	D字形	淡灰褐色	棕褐色	
1004	深鉢	ナデ。	ナデ。	丸	D字形	半円形	D字形	黑色	淡灰褐色	腹部施文。
1005	深鉢	工具によるナデ?	ミガキ。	面	小D字形	三角形	横切丸形	灰褐色	灰褐色	
1006	深鉢	口・ケズリ・ナデ、崩・ケズリ。	ナデ。	丸				灰褐色	灰褐色	口縫内面削突。
1007	深鉢	ケズリ。	ナデ。	丸				淡灰褐色	褐色	口縫内面削突。

図151 B区SX-1出土遺物実測図(4)

調査の概要

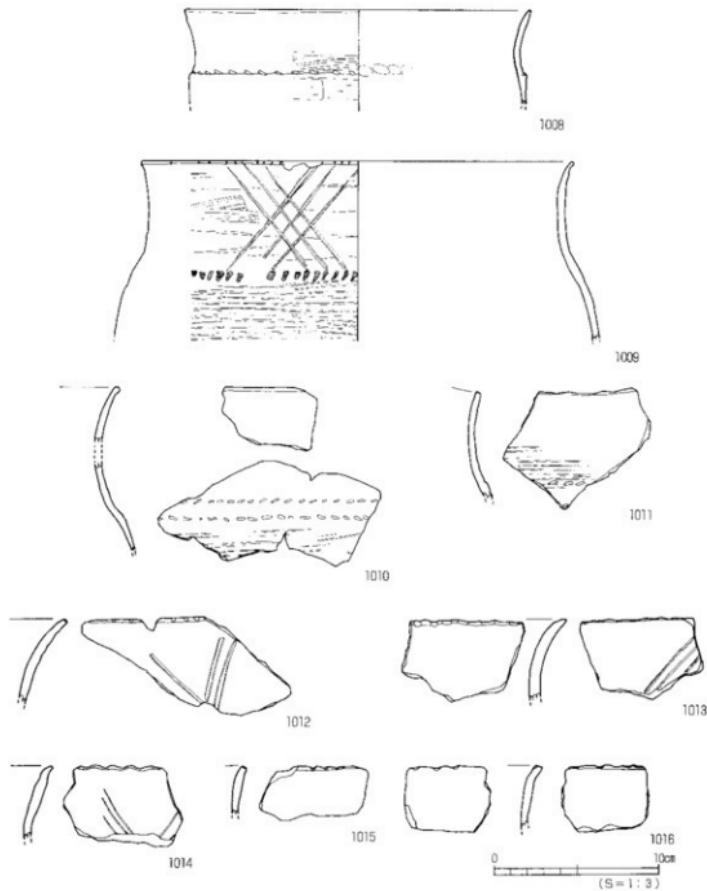
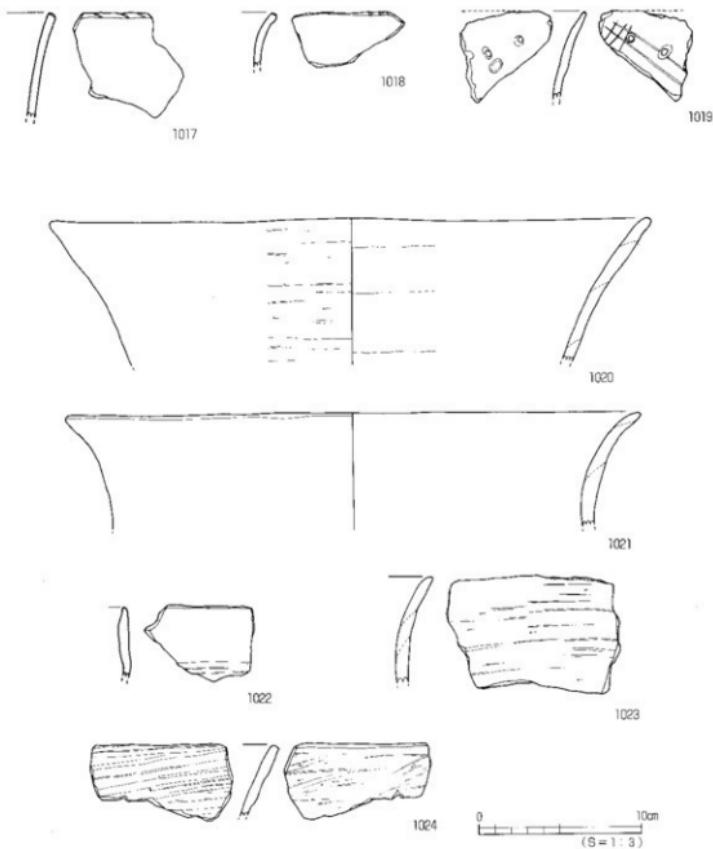


図152 B区SX-1出土遺物実測図(5)

博団 番号	器種	面		縁		突		帶		色調		その他の 特徴
		外 面	内 面	直 角	斜 角	曲 形	直 角	斜 角	内 面	外 面	内 面	外 面
1008	深鉢	頭：上貝によるナデ。頭：ケズリ。	ナデ。	丸	D字形				黒灰色	淡灰褐色	輪郭界線突。	
1009	深鉢	頭：工具によるナデ。頭：柔張。	ナデ。	丸	圓				黒色	赤褐色	貝殻による施文。	
1010	深鉢	頭：マメツ。頭：ケズリ。	ナデ。	圓	マメツ				黒色	灰褐色		
1011	深鉢	頭：柔張。頭：ナデ。	マメツ。	圓	マメツ				灰褐色	赤褐色		
1012	深鉢	ナデ。	ナデ。	圓	じ字形				黒色	灰褐色	輪郭施文。	
1013	深鉢	マメツ。	ナデ。	尖					黒褐色	淡灰褐色	口縁内側突。頭部施文。	
1014	深鉢	マメツ。	ナデ。	丸	O字形				淡灰褐色	淡灰褐色	口縁内側突。頭部施文。	
1015	深鉢	ナデ。	ナデ。	圓	D字形				淡灰褐色	黑色	口縁内側突。	
1016	深鉢	ナデ。	ナデ。	圓	O字形				淡灰褐色	淡灰褐色	口縁内側突。	
1017	深鉢	人字型。	人字型。	圓	O字形				淡灰褐色	淡灰褐色	口縁内側突。	

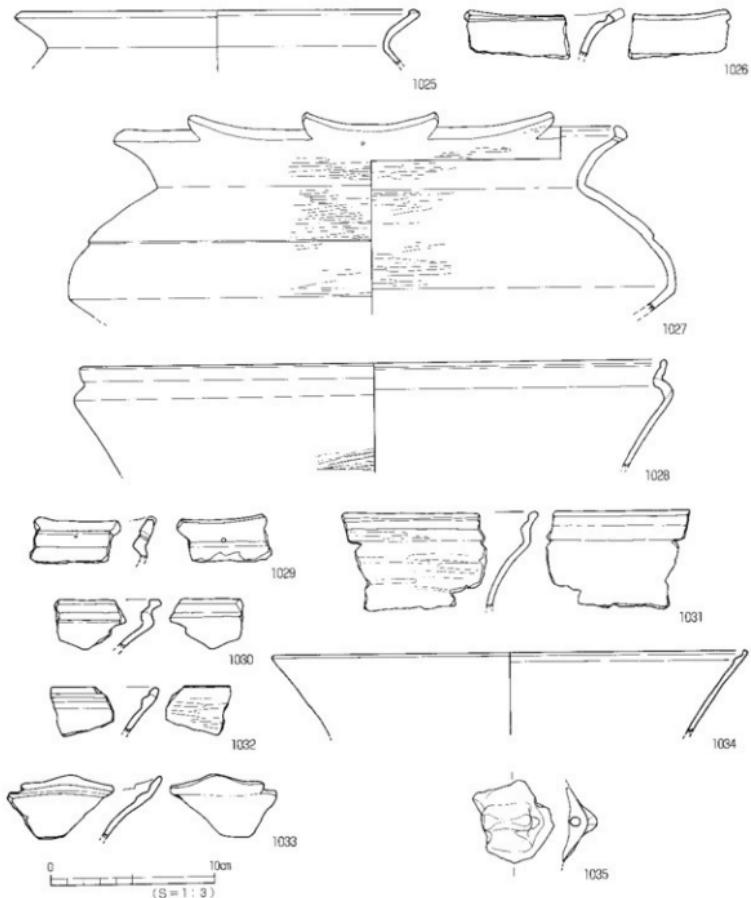
大湖遺跡



標号	器種	圓盤		U縁		内縁		色調		その他の
		外面	内面	端部形	剥み	断面形	剥み	内面	外面	
1017	深鉢	マメツ。	マメツ。	面	マメツ。	面	マメツ。	棕褐色	灰褐色	
1018	深鉢	マメツ。	マメツ。	丸	マメツ。	丸	マメツ。	黑灰色	灰色	
1019	深鉢	マメツ。	ナゲ。	丸	マメツ。	丸	マメツ。	灰褐色	灰色	穿孔。縫合施文。
1020	深鉢	工具によるナゲ。	ナゲ。	丸	ナゲ。	丸	ナゲ。	黑色	黑色	
1021	深鉢	マメツ。	マメツ。	丸	マメツ。	丸	マメツ。	灰褐色	灰色	
1022	深鉢	白漆:ナゲ。側:ケズリ。	ナゲ。	丸	マメツ。	丸	マメツ。	淡灰色	黑色	
1023	深鉢	ケズリ。	マメツ。	丸	マメツ。	丸	マメツ。	灰褐色	黑色	
1024	深鉢	ケズリ。	下底によるナゲ。	面				黑色	灰褐色	

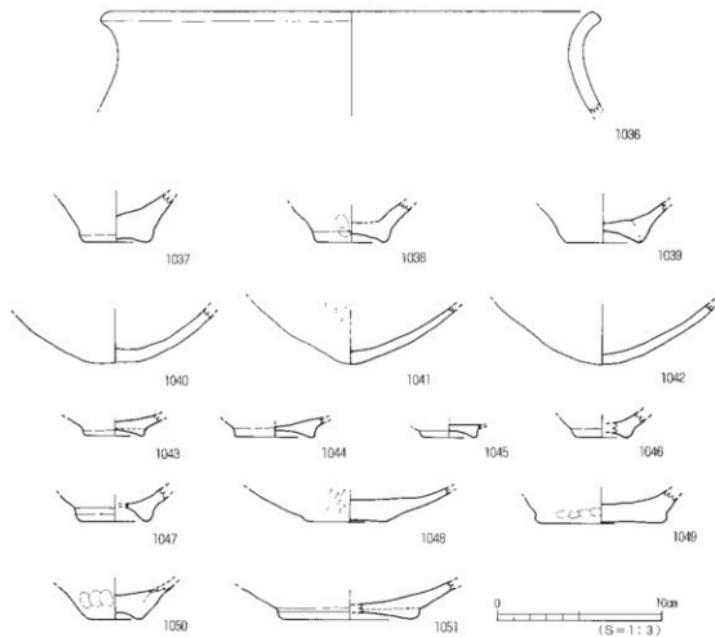
図153 BX-SX-1出土遺物実測図(6)

調査の概要



器種	外 面	内 面	口 縁	腹 部	側 面	色 面	その 他
1025 浅鉢	マメフ。	マメフ。	無	無	無	灰白色	玉縁状内凹肥厚。
1026 浅鉢	ミガラ。	マメフ。	圓	無	無	淡灰褐色	基部色。口唇内凹缺。
1027 浅鉢	ミガラ。	ミガラ。	圓	無	無	灰褐色	基部色 リボン状突起。穿孔。
1028 浅鉢	II:マメフ。腹:二枚貝余痕。	マメフ。	壁形	無	無	深褐色	灰褐色。
1029 浅鉢	マメフ。	不明。	壁形	無	無	深褐色	灰褐色。
1030 浅鉢	ミガラ。	マメフ。	壁形	無	無	深褐色	灰色。
1031 浅鉢	マメフ。	ミガラ。	壁形	無	無	深褐色	灰褐色。
1032 浅鉢	ミガラ。	マメフ。	丸	無	無	深褐色	内面凹面2条。
1033 浅鉢	マメフ。	マメフ。	丸	無	無	淡灰褐色	橙褐色。ヒレ状突起。
1034 浅鉢	マメフ。	マメフ。	丸	無	無	淡灰褐色	内凹肥厚。
1035 浅鉢	マメフ。	不明。	無	無	無	灰色	淡灰褐色 網目状粘土塊。

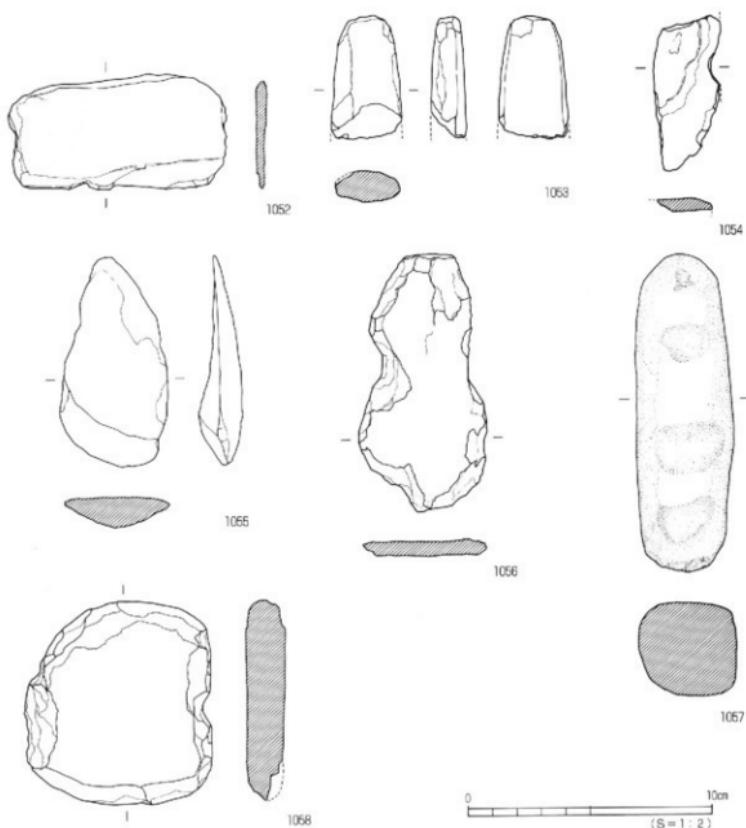
図154 B区SX-1出土遺物実測図(7)



件号 番号	器種 器種	調 査 移		口 縁		突 部		色 調		その 他
		外 面	内 面	端形	剥 み	断面形	剥 み	内 面	外 面	
1036 1036	碗 マツフ	マツフ						乳白色	乳白色	
1037 深鉢	マツフ	マツフ						淡灰褐色	淡褐灰色	
1038 深鉢	マツフ	マツフ						褐褐色	灰褐色	
1039 深鉢	マツフ	マツフ						淡灰色	淡褐色	
1040 深鉢	ケズリ	ナデ						黑色	淡灰褐色	
1041 浅鉢	ケズリ	ナデ						淡灰褐色	淡灰褐色	
1042 浅鉢	マツフ	マツフ						淡灰褐色	淡灰褐色	
1043 浅鉢	ナデ	マツフ						茶褐色	褐色	
1044 浅鉢	マツフ	マツフ						淡灰褐色	淡灰褐色	
1045 浅鉢	ナデ	マツフ						黑灰色	棕褐色	
1046 深鉢	マツフ	マツフ						淡灰褐色	淡褐褐色	
1047 深鉢	マツフ	マツフ						淡灰色	淡褐灰色	
1048 浅鉢	ケズリ	ナデ						灰褐色	棕褐色	
1049 浅鉢	マツフ	マツフ						茶褐色	山褐色	
1050 深鉢	マツフ	マツフ						灰褐色	棕褐色	
1051 浅鉢	マツフ	ナデ						灰褐色	棕褐色	

図155 B区S-X-1出土遺物実測図(8)

調査の概要



博認 番号	器種	石 材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他の 記述
1052	石槌 <small>丁未製品</small>	緑色片岩		8.9	4.7	0.4	34.4	
1053	磨製石斧	緑色片岩	欠損	(5.0)	(2.9)	(1.3)	27.4	
1054	磨製石斧?	緑色片岩	欠損	(6.5)	(2.7)	(0.5)	13.8	
1055	磨製石斧	緑色片岩	欠損	8.6	4.4	1.5	55.0	
1056	扁平打製石斧	緑色片岩	完形	10.5	5.2	0.6	57.2	
1057	敲石	緑色片岩	完形	13.0	4.1	4.0	375.0	
1058	石錐	緑色片岩	一部欠損	7.6	8.2	1.6	117.3	

図156 B区SX-1出土遺物実測図(9)

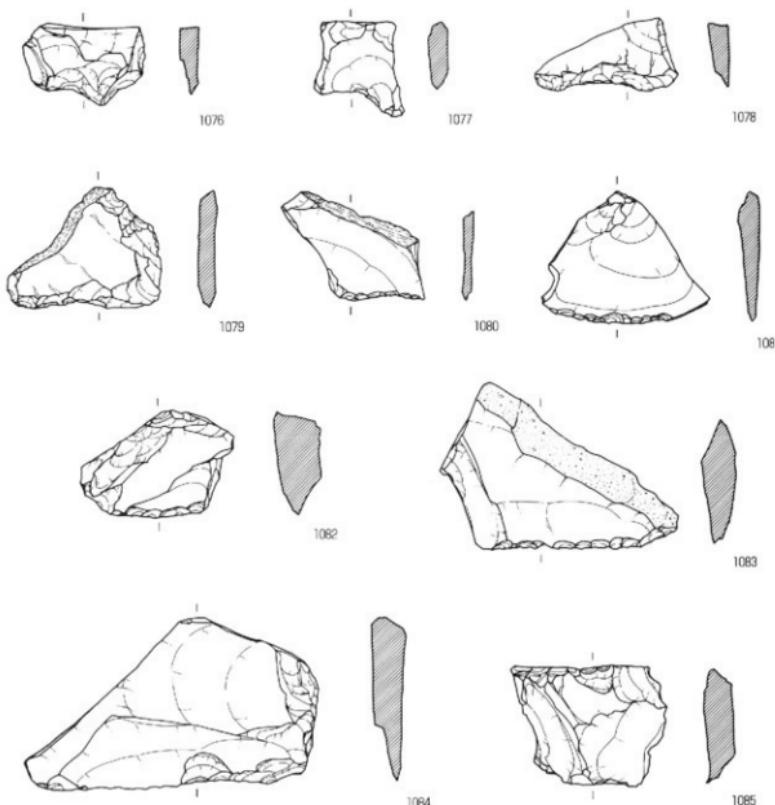
大洞遺跡



博物館 登号	器種	石材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他
1059	打製石器	サヌカイト	完形	2.1	1.9	0.2	0.9	
1060	打製石器	サヌカイト	完形	2.3	1.5	0.2	0.8	
1061	打製石器	サヌカイト	完形	2.4	2.0	0.3	1.5	
1062	打製石器	サヌカイト	完形	3.1	1.2	0.5	0.9	
1063	打製石器	サヌカイト	完形	2.7	1.5	0.4	1.6	
1064	打製石器	サヌカイト	一部欠損	2.1	(1.9)	0.5	2.1	
1065	打製石器未製品	サヌカイト		2.4	1.5	0.5	1.6	
1066	打製石器未製品	サヌカイト		2.2	1.8	0.3	2.0	
1067	打製石器未製品	サヌカイト		3.1	1.8	0.5	1.6	
1068	スクレイパー	サヌカイト		5.5	6.1	0.6	21.7	
1069	スクレイパー	サヌカイト		4.0	6.6	0.6	14.0	
1070	スクレイパー	サヌカイト		3.3	5.9	1.35	35.3	
1071	スクレイパー	サヌカイト		5.7	5.9	1.4	42.3	
1072	スクレイパー	サヌカイト		2.8	5.0	0.9	14.8	
1073	スクレイパー	サヌカイト		3.2	5.0	0.4	8.6	
1074	スクレイパー	サヌカイト		3.6	4.7	1.6	26.8	
1075	スクレイパー	サヌカイト		3.1	3.0	0.7	5.2	

図157 B区SX-1出土遺物実測図(10)

調査の概要

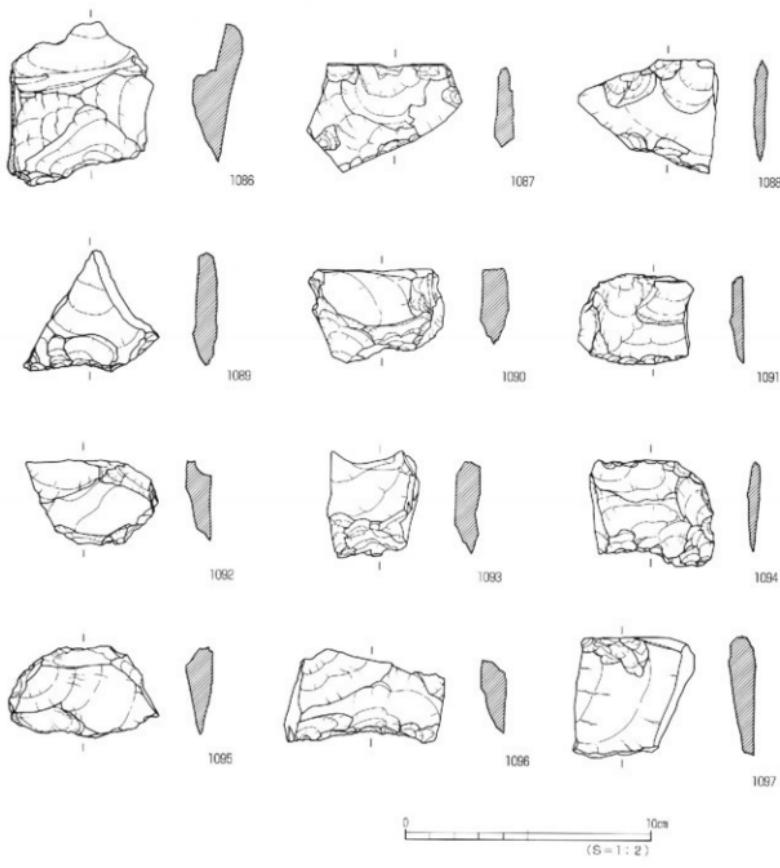


0
10cm
(S=1:2)

種類	器種	石材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他
1076	スクレイバー	サヌカイト		3.2	4.9	0.75	13.2	
1077	スクレイバー	サヌカイト		4.0	3.6	0.85	15.2	
1078	スクレイバム	サヌカイト		3.1	5.8	0.9	16.4	
1079	スクレイバム	サヌカイト		4.9	6.2	0.7	25.4	
1080	スクレイバム	サヌカイト		4.4	5.8	0.4	11.6	
1081	スクレイバム	サヌカイト		5.4	6.8	0.9	26.8	
1082	スクレイバム	サヌカイト		4.4	6.2	1.9	48.9	
1083	スクレイバム	サヌカイト		6.8	9.6	1.4	76.6	
1084	スクレイバム	サヌカイト		6.9	11.9	1.4	120.3	
1085	石核	サヌカイト		5.0	6.3	1.2	49.5	

図158 B区S X-1出土遺物実測図(1)

大洞遺跡

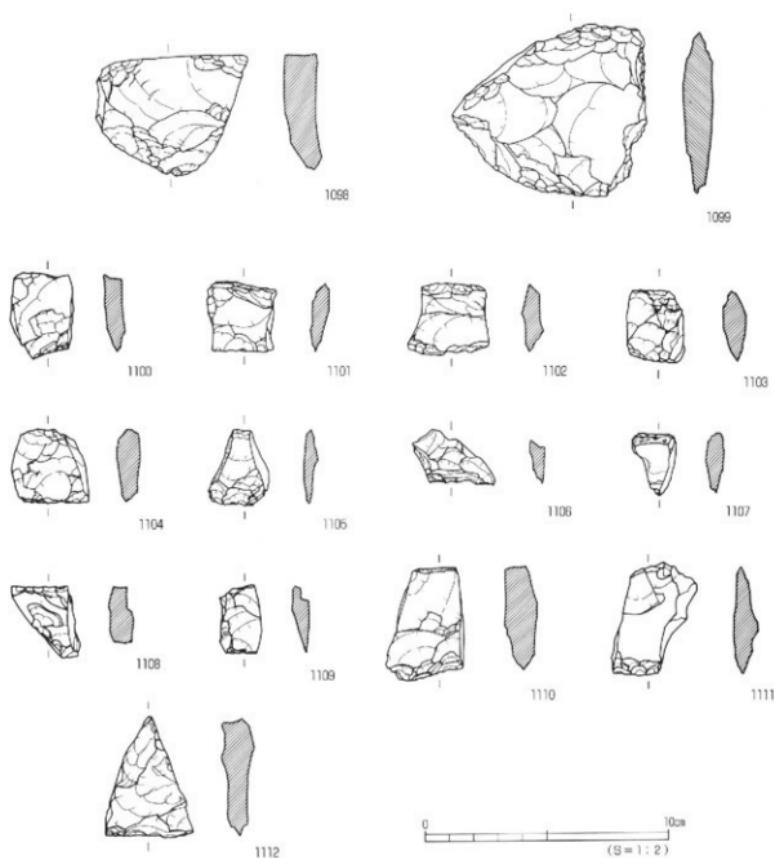


10cm
(S=1:2)

出因 番号	器種	石 材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その 他
1086	石核	サヌカイト		5.9	6.6	1.6	69.5	
1087	素材削片	サヌカイト		4.5	6.2	0.8	29.3	
1088	素材削片	サヌカイト		4.7	5.6	0.5	17.8	
1089	素材削片	サヌカイト		4.9	5.5	1.0	25.7	
1090	素材削片	サヌカイト		3.8	5.4	1.2	29.6	
1091	素材削片	サヌカイト		3.7	4.6	0.6	12.2	
1092	素材削片	サヌカイト		3.5	5.2	1.0	20.3	
1093	素材削片	サヌカイト		4.4	3.6	1.0	24.3	
1094	素材削片	サヌカイト		4.7	5.0	0.5	15.4	
1095	素材削片	サヌカイト		3.8	6.0	1.1	22.3	
1096	素材削片	サヌカイト		3.8	6.6	1.1	31.2	
1097	素材削片	サヌカイト		4.8	4.9	1.1	34.8	

図159 B区SX-1出土遺物実測図(12)

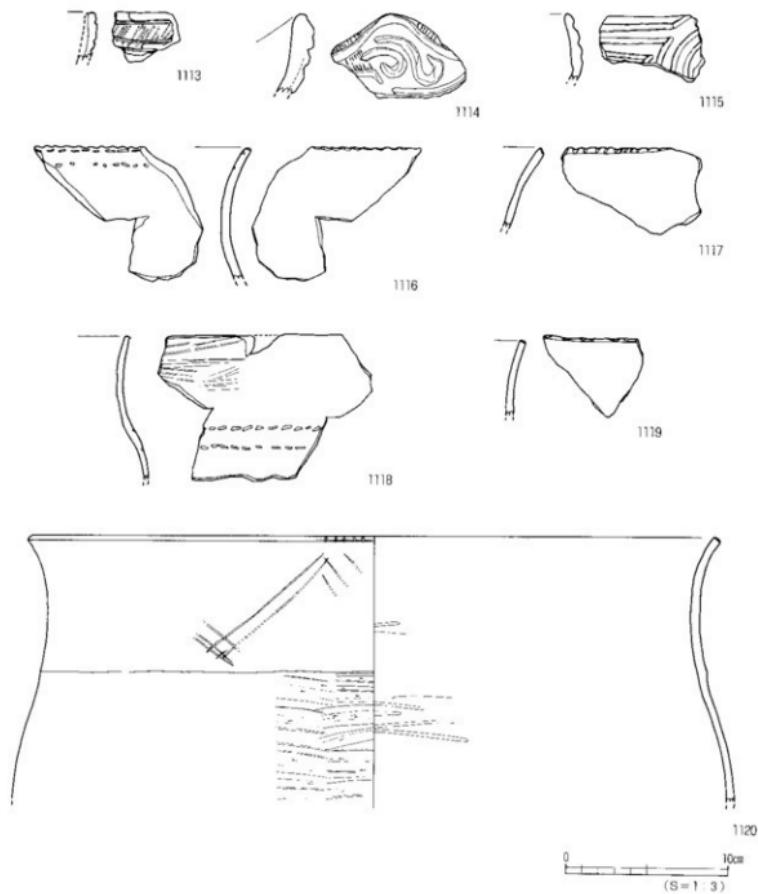
調査の概要



件番	器種	石 材	残存度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他の
1098	素材削片	サヌカイト		4.9	6.2	1.5	59.8	
1099	素材削片	サヌカイト		8.0	7.0	1.2	88.6	
1100	素材削片	サヌカイト		3.5	2.6	0.8	10.7	
1101	素材削片	サヌカイト		2.9	2.8	0.8	9.0	
1102	素材削片	サヌカイト		3.0	3.3	0.9	11.4	
1103	素材削片	サヌカイト		3.0	2.4	1.0	9.4	
1104	素材削片	サヌカイト		3.0	3.2	1.0	13.4	
1105	素材削片	サヌカイト		3.1	2.5	0.6	4.0	
1106	素材削片	サヌカイト		2.25	3.3	0.6	3.9	
1107	素材削片	サヌカイト		2.1	1.8	0.7	3.3	
1108	素材削片	サヌカイト		2.9	2.8	1.0	7.8	
1109	素材削片	サヌカイト		2.8	1.7	0.7	4.3	
1110	素材削片	サヌカイト		4.7	3.2	1.3	25.8	
1111	素材削片	サヌカイト		4.6	3.5	1.0	15.4	
1112	素材削片	サヌカイト		4.9	3.6	1.3	21.6	

図160 B区SX-1出土遺物実測図(13)

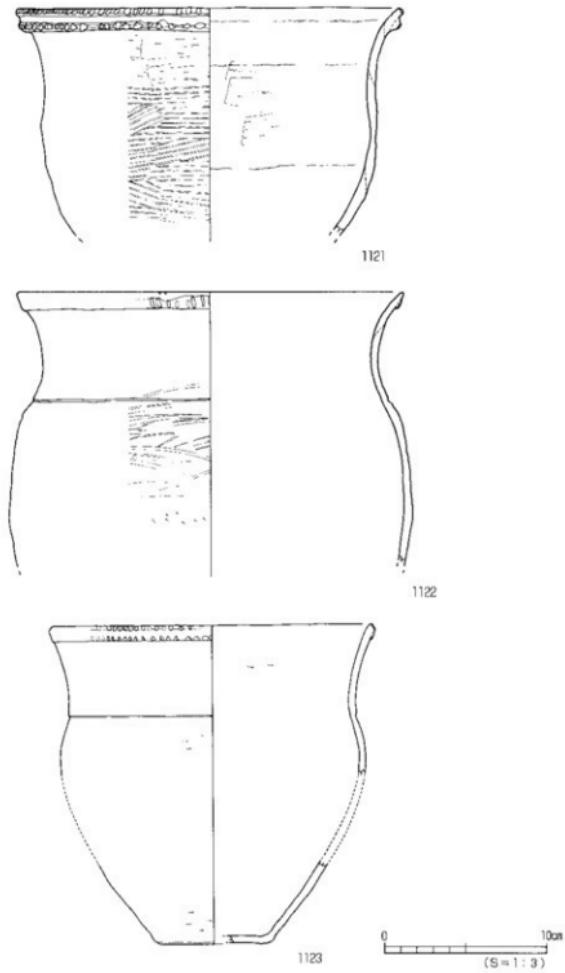
2) 濡地出土の遺物 (図161~167)



探査 番号	部 種	圓 形		II 縁		突 起		色 調		そ の 他
		外 面	内 面	輪部形	刺 み	断面形	刺 み	内 面	外 面	
1113	漆鉢	無文。	マメフ。					黒褐色	褐色	沈縞無文。
1114	漆鉢	丸文。	ナゲ。					淡灰褐色	褐色	沈縞丸文。
1115	漆鉢	ナゲ。	ナゲ。					淡灰褐色	灰褐色	沈縞丸文。
1116	漆鉢	ナゲ。	ナゲ。	面	網突			黒褐色	黒褐色	口縁内面漆面剥突。
1117	漆鉢	マメフ。	マメフ。	面	米粒形			黒褐色	褐色	
1118	漆鉢	マメフ。	ナゲ。	面	オサエ			褐色	灰褐色	底網界剥突。
1119	漆鉢	マメフ。	マメフ。	面	オサエ			褐色	褐色	
1120	漆鉢	口:ナゲ。面:ケズリ。	ナゲ。	面	V字形			黒色	褐色	頭底無文。

図161 B区湿地出土遺物実測図(1)

調査の概要



件名	器種	測定		縁		内面		外面		その他
		外面	内面	端部形	縁み	断面形	縁み	内面	外面	
1121	漆杯	底:ケズリ。肩:二枚貝条彫。ナデ。	丸	D字形	斜面形	三角形	D字形	灰褐色	灰褐色	
1122	漆杯	底:ナデ。肩:一枚貝条彫。ナデ。	丸	マメフ	半円形	D字形	褐色	灰褐色	病態炭化物有り。	
1123	漆杯	底:ナデ。肩:ケズリ。	マメフ		D字形	半円形	D字形	褐色	褐色	

図162 B区湿地出土遺物実測図(2)

大潤遺跡

前述のようにB区で検出された湿地の一部では湧水のためほとんど層位的な調査は行われず、遺物採集に終わっているので、ここでは年代順に遺物をあげておく。

深鉢1113は撚糸地文に横位の沈線や二条平行の弧状沈線を施す口縁部の剥離片、中期後葉里木II式に属するものと考えられる。1114・1115は後期縁帶文形深鉢の口縁部である。

1116～1120は晩期後半無突帯有文深鉢、口端部刻み目、口縁内面刺突、頸脣界刺突、頭部沈線施文などを持つ一群である。1116の口縁内面の刺突は2段にわたって行われており、このうち上段の刺突は深く鋭いのに対して下段は圧痕のように浅く不明瞭である。また、口端部は面をなしているが、この面にも刻みというよりは刺突といったほうが適切な施文が行われている。図162・163は突帯文深鉢で、ある程度器型が復元できるもの、図162の3点をみてみると、口径が胴部径を凌ぐ1121・1123とほぼ同等になる1122がある。1123では接合するわけではないが、同一個体の可能性が高い上半部と平底の底部とを組み合わせている。この鉢では口唇部に接して非常に薄い粘土帯を貼り付け、このほと

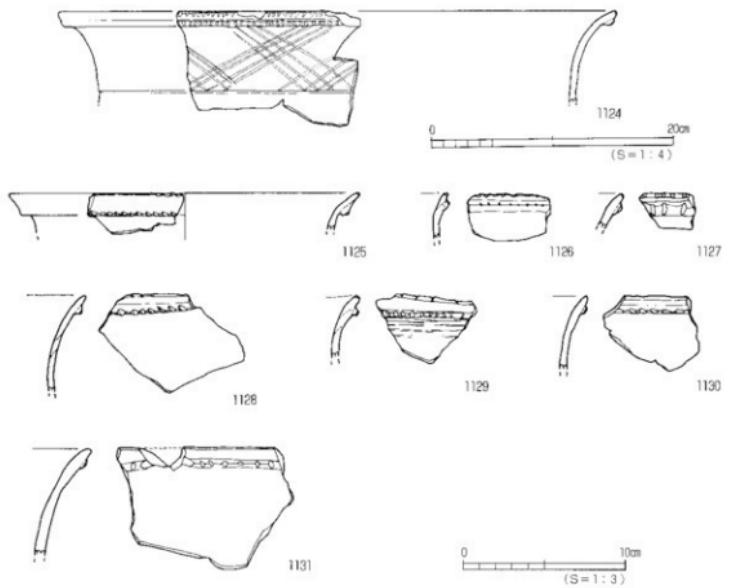


図163 B区湿地出土遺物実測図(3)

属 名	種 名	胸		翅		足		尾		色		其 他
		外 面	内 面	前部	后部	前脚	后脚	内脚	外脚	上 面	下 面	
1124	深鉢 種	ナデ。	ナデ。胸：ケズリ。	ナア。	丸 ナデ。	小△形 ナデ。	台形 △形。	小△形 △形。	前脚 後脚	淡灰褐色 暗褐色	淡灰褐色 暗褐色	細胞論。
1125	深鉢 種	ナデ。	ナデ。	ナア。	丸 ナデ。	△形 ナデ。	△形 △形。	D字形 △形。	前脚 後脚	暗褐色 暗褐色	暗褐色 暗褐色	細胞論。
1126	深鉢 種	ナデ。	ナデ。	ナア。	丸 ナデ。	D字形 ナデ。	△形 △形。	△形 △形。	前脚 後脚	暗褐色 暗褐色	暗褐色 暗褐色	細胞論。
1127	深鉢 種	ナデ。	ナデ。	ナア。	丸 ナデ。	D字形 ナデ。	△形 △形。	△形 △形。	前脚 後脚	褐色 褐色	褐色 褐色	細胞論。
1128	深鉢 種	ナデ。	ナデ。	ナア。	丸 ナデ。	△メツ ナデ。	△形 △形。	△形 △形。	前脚 後脚	褐色	褐色	細胞論。
1129	深鉢 種	ケズリ ₃	ナデ。	ナア。	圓 ナデ。	小△形 ナデ。	台形 △形。	D字形 △形。	前脚 後脚	暗褐色 暗褐色	暗褐色 暗褐色	無定形化物質。
1130	深鉢 種	マメツ	マメツ。	ナア。	丸 ナデ。	△メツ ナデ。	台形 △形。	D字形 △形。	前脚 後脚	暗褐色 暗褐色	暗褐色 暗褐色	無定形化物質。
1131	深鉢 種	ナデ。	ナデ。	ナア。	丸 ナデ。	△メツ ナデ。	△形 △形。	△形 △形。	前脚 後脚	暗褐色 暗褐色	暗褐色 暗褐色	無定形化物質。

調査の概要

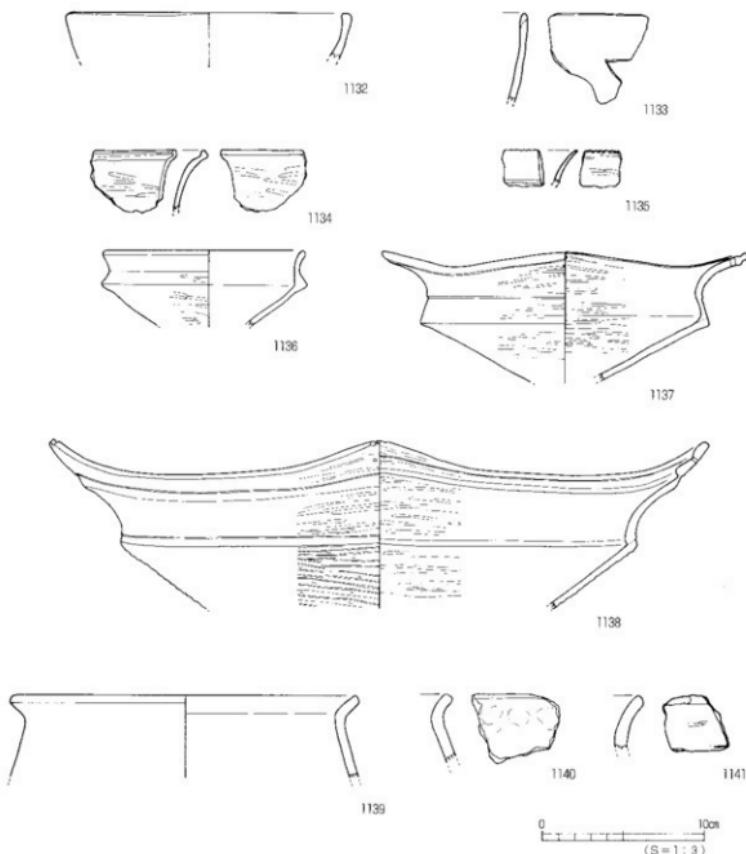
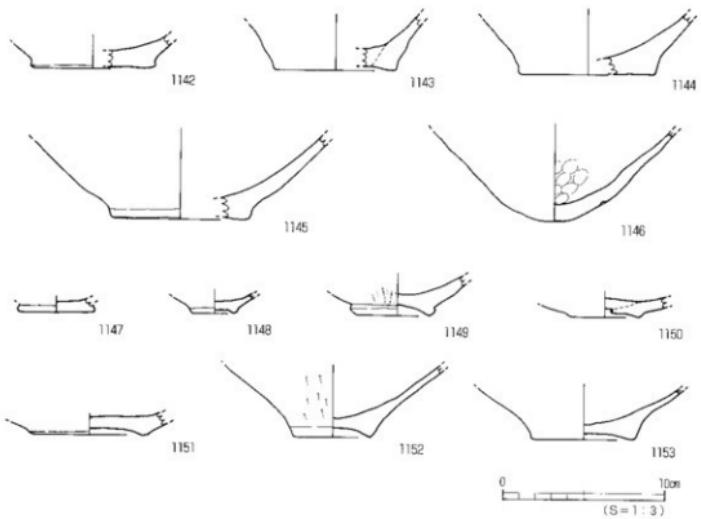


図164 B区湿地出土遺物実測図(4)

種類 番号	調 査		口 縁 幅 角 部 形	横 幅 角 部 形	突 起 部 形	色 調	其 他
	外 面	内 面					
1132	骨鉢	ナテ。	ナテ。	丸	...	灰褐色	
1133	骨鉢	マメツ。	マメツ。	丸	...	灰褐色	
1134	灰鉢	ミガキ。	ミガキ。	圓	...	灰褐色	
1135	骨鉢	ミガキ。	ミガキ。	圓	...	灰褐色	口縁内凹抉り。
1136	骨鉢	ミガキ。	ミガキ。	圓	O字形	灰褐色	灰褐色
1137	骨鉢	ミガキ。	ミガキ。	丸	...	灰褐色	褐色
1138	骨鉢	口一頭:ミガキ。柄:ケズリ。	ミガキ。	丸	...	無褐色	暗褐色 口縫穿孔:内外面抉り。
1139	蓋	マメツ。	マメツ。	圓	...	灰褐色	口縫穿孔。
1140	蓋	マメツ。	マメツ。	圓	...	淡黃褐色	暗褐色
1141	蓋	ミガキ。	ミガキ。	圓	...	淡褐色	灰褐色

んど肥厚帯といったほうがよいような突帯と口縫部の外面を浅く刻んでいる。また、頸部と胴部で調整を使い分けるのは3点ともに共通しているが、1122と1123の頸部と胴部の境には段が認められる。その他口縫部の破片で特徴的なものがある。1125は口縫部に接して垂れ下がった三角形状の幅広の粘土帯を貼り付け、その下端に刻みを加えている。口縫部の刻みは通常の刻み目突帯深鉢のように全周する刻みではなく、ちょうど波状口縫の波頂部の刻みにしばしばみられるように部分的に施されるものである。

浅鉢には楕形になるものと胴部で強く屈曲して、口縫部が外上方に開くものがある。後者のうち、1137は口縫部内外面に沈線を持つ波状口縫で、口縫部の俯瞰形が方形に、胴部が円形になるものである。なお波頂部の小円孔は焼成前に穿たれたものである。同じく波状口縫の1138は、口縫部、胴部とともに隅丸方形になるもので、刻みを持つ波頂部に1137と同様焼成前の小円孔を施されている。なお、いずれも小破片であるが壺と考えられる口縫部片が3点認められる。



標印 番号	器種	周 長		口 縫	突 起	色 調	そ の 他
		外 面	内 面				
1142	深鉢	ナデ。	ナデ。	端部形 刻み	割削形 刻み	淡青褐色	
1143	深鉢	マノフ。	マノフ。			灰褐色	淡黄褐色
1144	深鉢	ナゲ。	ナゲ。			黒褐色	褐色
1145	深鉢	ナゲ。	ナゲ。			淡灰褐色	淡灰褐色
1146	浅鉢	アスリ→ナデ。	ミガキ。			灰褐色	淡灰褐色
1147	浅鉢	ナデ。	ナデ。			褐色	淡灰褐色
1148	浅鉢	マノフ。	マノフ。			淡黄褐色	茶褐色
1149	浅鉢	胴直→マノフ。	ナデ?			灰褐色	所褐色
1150	深鉢	ナゲ。	ナゲ。			灰褐色	淡青褐色
1151	浅鉢	マノフ。	小崩。			褐色	淡灰褐色
1152	深鉢	マノフ。	不明。			褐色	褐色
1153	浅鉢	ナデ。	ナデ。			淡青褐色	淡黄褐色

図165 B区湿地出土遺物実測図(5)

調査の概要

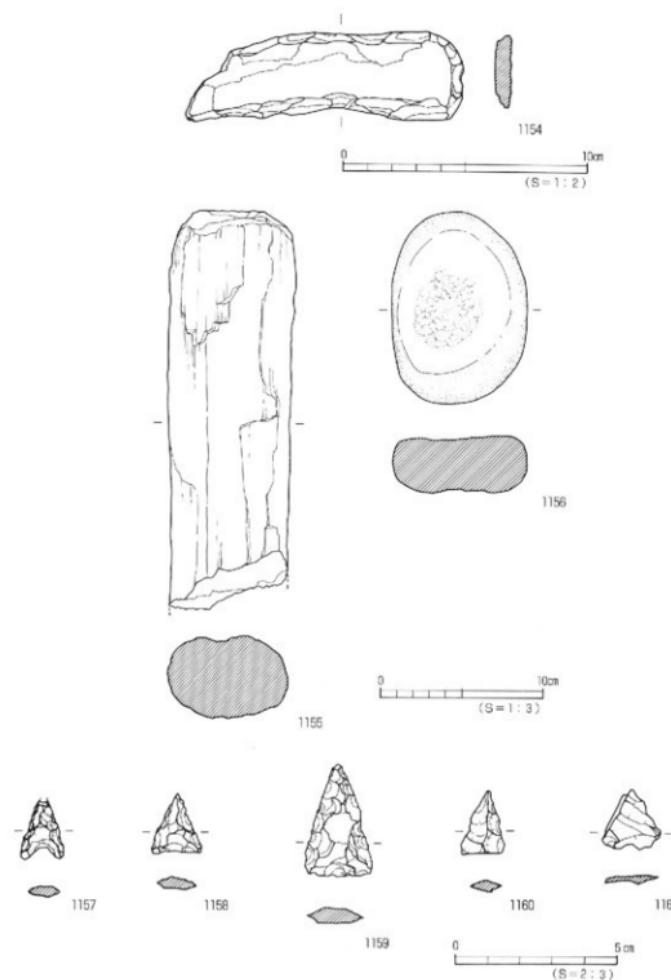
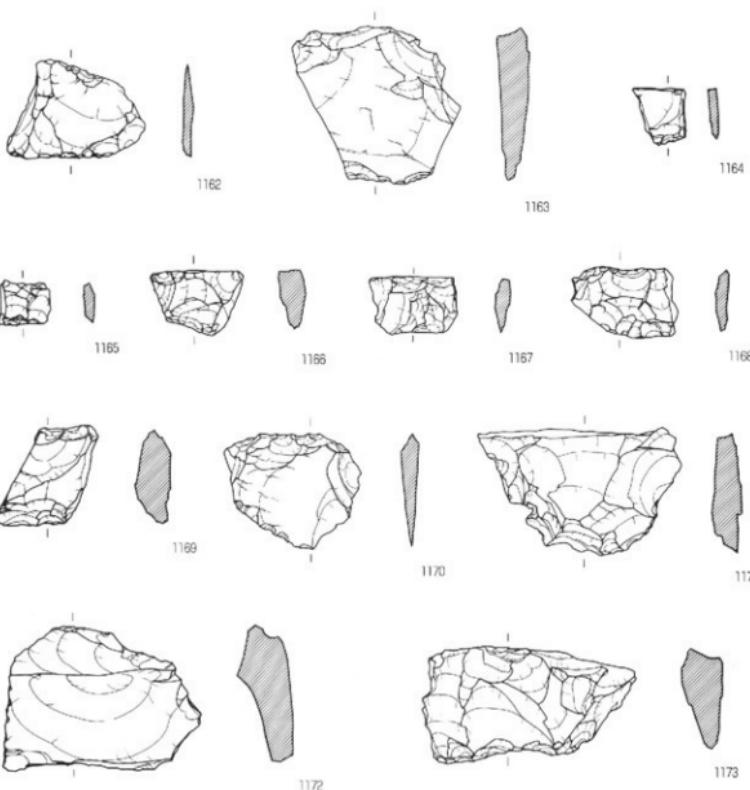


図166 B区湿地出土遺物実測図(6)

標印 番号	器種	石 材	残 存 度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その 他の 記
1154	石總	褐色片岩	欠損	(11.4)	(3.7)		45.9	
1155	石總	石英片岩	欠損	(26.4)	7.6	(5.0)	1655.0	
1156	巖石	安山岩	完形	11.8	8.3	3.4	595.0	
1157	打撲石總	サヌカイト	薄欠損	(1.7)	1.4	0.3	0.5	
1158	打撲石總	サヌカイト	完形	1.8	1.5	0.4	0.9	
1159	打撲石縋	赤熱チャート	完形	3.4	2.0	0.5	3.4	
1160	石縄本質品	サヌカイト		2.0	1.3	0.4	0.7	
1161	石縄本質品	サヌカイト		1.9	1.8	0.3	0.7	

大洞遺跡



0 10cm
(S=1:2)

器 番 号	器 種	石 材	残 存 度	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重 量(g)	その 他
1162	スクレーパー	サヌカイト		4.6	5.6	0.4	30.0	
1163	スクレーパー	サヌカイト		6.9	6.5	1.3	61.5	
1164	素材剥片	赤色チャート		2.2	2.4	0.4	3.8	
1165	素材剥片	ナヌカイト		1.9	2.1	0.4	2.6	
1166	素材剥片	ナヌカイト		2.7	3.8	1.1	32.0	
1167	素材剥片	サヌカイト		2.4	3.5	0.7	7.7	
1168	素材剥片	リクガイト		3.0	4.4	0.6	10.8	
1169	素材剥片	サヌカイト		4.1	4.1	1.5	26.8	
1170	素材剥片	サヌカイト		4.7	5.6	0.63	18.3	
1171	石核	サヌカイト		5.2	8.5	1.3	59.6	
1172	石核	サヌカイト		5.9	8.1	2.3	97.2	
1173	石核	サヌカイト		4.8	8.7	1.7	78.6	

図167 B区湿地出土遺物実測図(7)

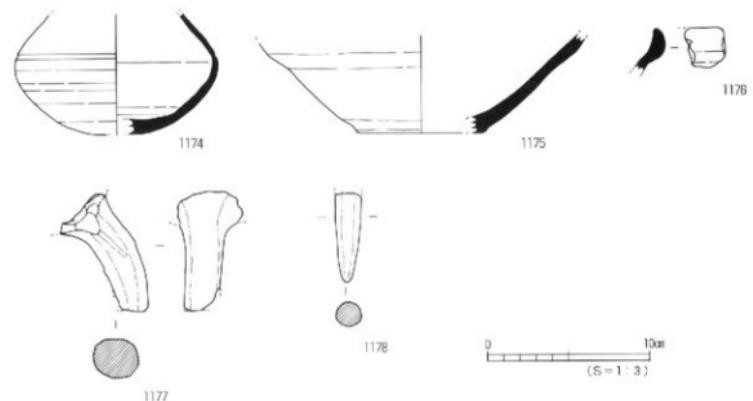
調査の概要

底部には、尖り気味の丸底になるもの1146があり、外面の調整は雑であるが、内面を磨かれたりしているのでおそらく浅鉢の底部であると思われる。また、若干の窪み底1153は内外面、外底面のいずれの部位も入念に調整されているので、蓋の可能性がある。

石製品で注目されるものには石鎌1154が1点ある。緑色片岩を素材とするもので、片面の周縁に打ち欠きを施し形態を整えている段階のもので研磨には至っていない。製作途上で折損し、廃棄されたものと考えられる。剥片利用の石製品には石鎌、スクレイパーがある。石鎌1159が赤色チャートであるのを除けばすべてがサヌカイトを素材としている。

3) その他の表採遺物 (図168)

第1～3層までの間での採集遺物が数点ある。1174は須恵器短頸壺の胴部、1175・1176は東播系須恵器こね鉢のそれぞれ、下半部、口縁部である。土師器では鍋の足片が採集された。



種類 番号	器種	調		整		口	縁	突	帶	色	調	その 他
		外 面	内 面	端部	刷 み							
1174	壺	底：圓輪ヘラケズリ。	ヨコナデ。							明灰色	明灰色	
1175	こね鉢	ヨコナデ。	ヨコナデ。							灰色	灰色	
1176	こね鉢	ヨコナデ。	ヨコナデ。							灰白色	灰白色	
1177	土釜	ナデ。	ナデ。							黄褐色	黄褐色	
1178	土釜	ナデ。	ナデ。							青褐色	青褐色	

図168 B区表採遺物実測図

3. 自然科学分析

(1) 花粉化石による大渕遺跡の古環境復元

高知大学名誉教授 中村 純

大渕遺跡は、松山市太山寺町（北緯 $33^{\circ}53'$ 、東経 $132^{\circ}44'$ ）にあり、松山平野が北に開口する堀江湾岸から内陸部へ約2kmの地点で、海拔高度3.5m、付近は水田や畑となった沖積地である。遺跡の西方約100mには、高度100m前後の丘陵がせまっている。丘陵はかなりの部分が耕地化され、他にアカマツ、コナラなどの二次林が点在する。この地域の極相林とみなされる照葉樹林の一部が太山寺境内にわずかに残っているにすぎない。

今回の調査は、同遺跡を構成する堆積層中の花粉化石をもとに、当時の自然環境を復元することを目的としている。調査の機会を与えられた松山市教育委員会の方々に厚く感謝する。

分析試料とその分析法

提供された試料（堆積物）は、遺跡A区のトレンチ側壁より採取されたものである。これらの試料は、砂層を除いて約10cmの厚さのブロックとして採取され、アルミホイルに包み保存されていたものである。ただし、表層はトレンチの東約10mの地点の畦畔より別に採取したものである。このブロック試料については、その厚さに応じて2～3個に分割して個々の試料として取り扱った。ブロックとして採取できなかった砂層についてはそのまま一試料として扱い、これらの全試料に表層から下層は試料番号（1～25）を付した。これらの層序、その他の概要是表1にまとめて示した。表1に示すように、第1層から第5層の間は酸化鉄による褐色斑が多く、地下水位の変動のある、時に空気の流通もあった氾濫原の堆積物である。これに対して、第8層から最下層の間は、當時水面下の堆積であることを示している。また、出土した考古学的遺物からみて、縄文時代後期以降のものであることを示している。以上の25試料から花粉、シダ類、コケ類の胞子の分離を行った。これらのものは同時に分離できるので、本文では単に花粉の分離という言葉を用いることにする。

分離の方法は、

1. 10～20gの試料を10% KOH液で加熱の後、傾斜法で粗粒を除く。
2. この溶液を60メッシュの金属ふるいを通過させて、できるだけ夾雑物を除く。
3. これに比重1.65のZnCl₂液を加え、比重選別法で花粉を浮上分離させる。
4. 花粉とともに浮上した硅酸塩を溶解させるため、HF液処理を行う。
5. 脱水の後、これに無水錫酸と濃硫酸の混合液を加え、アセトトリス処理をする。

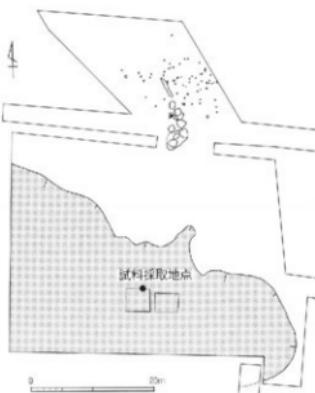


図169 試料採取地点図

6. 水洗、アルカリで中和させ分離完了。

7. その一滴をとり検鏡し、種類を同定する。

種類の同定の結果は、次の方法で算出する。

1. 木本花粉 (A P) を500個以上読みとり、これを基本数としてすべての種類の出現比率 (%) を求める。単に組成比率と呼ぶことにする。

2. 読みとられた全花粉胞子数を基本数として照葉樹林を構成する木本花粉群、その他の木本花粉群、草本花粉群、シダ・コケ類の胞子群の4群のそれぞれの比率 (%) を総合組成比率、または総合比率として算出した。

3. 栽培稻花粉については、他のイネ科花粉から区別するために、位相差顯微鏡を用いて識別し、全イネ科花粉数を基本数としてその比率 (%) を求めた^①。これは現代の水田では検出される全イネ科花粉の約30%以上を栽培稻花粉が占めることから、当時の稲作の集約度を推定する手段として特に行ったものである。

以上のような相対的な比率は、ある種類の%が他の種類の増減によって左右される恐れがあるから、眞の植生の変化を示さないこともある。そこで、比較のために主な試料の単位体積中に含まれた花粉の絶対数 (APF) を求めた。すなわち、

1. 正確に 1 cm³の試料をとり、さきに述べた花粉分離法で花粉濃縮液をつくり、その重量 (W) を量る。
2. 既知重量のスライドグラスとカバーガラスに (1) の花粉濃縮液を一滴 (C) のせ、プレバートをつくり、その重量を量り C の重量を知る。
3. このプレバートに含まれた全花粉の個数を読みとり N 個とする。
4. 1 cm³の試料中の花粉総数 (APF) は、 $APF = N \times W / C$ で示される。

ここで得られた値は、種類の同定が不可能な個体数も含まれている。これに対して、相対比率は同定できたものののみの値であるから、両者の直接の比較はできない。また、APF は当時の植物から供給された花粉のなかで、堆積中に消失したものと差し引いた残りの量を示している。したがって、A

表1 層位と試料番号

深さ(cm)	層名	試料番号	時代	土質
0	第1層	1		灰褐色シルト質粘土、酸化鉄褐斑あり
		2		タ
20	第2層	3		茶褐色シルト集積層
	第3層	4	中晩～	灰褐色シルト質粘土、酸化鉄褐斑あり
40		5	古墳	タ
		6		タ
	第4層	7		灰色シルト質粘土、酸化鉄褐斑あり
		8		タ
		9		タ
	第5層	10	繩文	暗褐色粘土
60		11	晩期	タ
	第8層	12	後半	灰褐色微砂質粘土
85		13		灰褐色砂質シルト
	第9層	14	绳文後～晩期	灰褐色シルトを交えた粗砂、植物破片多し
100		15		黒褐色シルト質泥炭
		16		タ
		17		タ
		18		黒褐色シルト質泥炭
		19		タ
130		20	绳文後～晩期	灰褐色シルト質粗砂
		21		黒褐色シルト質泥炭
		22		タ
		23		タ
		24		タ
160	第10層	25		青灰色シルトを交えた粗砂

PFから当時の植物量の大小が比較できるのは、消失量が同じであること、つまり堆積中に花粉の消失にはたらいた營力が同じであるとみなされる試料間に限ること、さらに本方法は単位体積を基準とするから、粒度組成が同じ試料間に限ることも必要である。以上のように、検出花粉の量的表示法にはそれぞれ多少の欠陥があることを念頭において分析結果の考察をしたい。なお、上に述べた方法による結果は表2・3、および図170・171に示してある。

分析結果とその考察

分離同定された花粉は木本類61種類、そのうち照葉樹林を構成するもの32種類、草本類71種類、シダ類その他の胞子11種類の計143種類に達した。

以下、下層から上層へ順次分析結果の概要を述べると：

第10層（試料番号25） 試料は粗砂を多く含んだ青灰色シルトで、土砂の流入の激しい不安定な堆積環境のものである。花粉量も上層に比べて少なく、総合比率でみると木本類は20%以下である。これに対してシダ類胞子は57%と最も多く、草本類も23.8%に達する。シダ類胞子は花粉に比して強固で分解されにくく、堆積環境の不良なところでは残存する割合が多くなるから、この比率が当時の植生を正確には反映していない可能性もある。いずれにしても、草本類ではイネ科、ヨモギ類が多く、草地が付近にかなりあったらしい。木本類では、常緑カシ類（アカガシ亜属の他にコナラ亜属のウバメガシを含むため、とくにこの名称を使用した）が全木本花粉（AP）の半数を占め優勢であり、ムクノキ、ヤマモモ、ハイノキ、マキ類の他にティカズラなども出現するから、照葉樹林が優勢な植生下にあったことを物語っている。また、マツ、モミ、ツガなどの針葉樹類も検出されるのは後述のように注目すべきである。

第9層（試料番号24~14） 層厚約80cm、砂層を挟んで5枚の泥炭層よりなる試料である。ここで泥炭というのは植物の残骸などの粗い残滓を含んだ有機性沈殿物を意味する。第10層から本層に移ると、急速に木本花粉（AP）が増加し、草本花粉（NAP）やシダ胞子（FS）の総合比率は減少し、中層部（試料番号20~16）では、90%以上はAPで占められる。とくに高率なのは常緑カシ類で、これに次いでエノキームクノキ、シイーマテバシイ、ムクロジ属が多い。また、比率は低いがエズリハ、モッコク、ヤマモモ、イスノキ、ホルトノキ、センダン、イイギリ、ツバキ、ミカン、カラスサンショウ、タイミニタチバナ、アオキなど暖帯林を構成するAPが出現する。また、カシ、ムクロジの花粉塊が多数みられるし、アオキも低率ながら常に出現する。この低木は照葉樹林やエノキームクノキ林の下生本として出現し、花粉生産量、散布範囲ともに小さい種類である。また、エノキ、ムクノキは、しばしば沖積平野に成林する落葉夏緑林で、ヤドリギを着生していることが多いが、本層中からもこれの花粉が検出されている。したがって、これら照葉樹林やエノキームクノキ林はともに堆積現場近くに存在していたとみなされる。また、トチノキが本層に限り連続して出現する。この高木は冷温帯下部から温暖帶上部の空気湿度の高い渓谷林の構成種であり、松山平野には現在は分布していない。また花粉の生産、散布とともに限られる種類であるが、遺跡内からこれの果実がかなり発見されている。したがって、この木は遺跡背後の丘陵山麓部や小谷筋に分布しており、その果実は流水または人力によって遺跡内に集積したのであろう。これに似た分析結果は滋賀県遺跡²から報告されているのみで、西日本低地部ではきわめて稀な例で、当時はかなり冷涼多湿な気候であったことが推測でき

る。また、同様な気候変化を示唆するいまと一つの花粉群がある。それは、モミ、ツガ、コウヤマキ、スギの4種類の針葉樹類で、第10層から第9層下部（試料番号25～22）にわたり一時的な増加を示している。これらの針葉樹類もトチノキと同様に冷温帶下部から温暖帶上部に分布する。とくにツガ、コウヤマキは急傾斜地などの流出の激しい所に多く自生する。反対に、スギ、モミはむしろ表土の深い所に多い。このように相反する土地の要求をもった樹種が同時に増加することは、雨量の増加にその原因を求めるを得ない。では、どの程度までこれらの樹木は降下したであろうか。トチノキは遺跡付近に存在したのであるから、これを基準にして推定すると、いまトチノキの現在の分布下限を暖帯林上部とみなすと、少なくとも500m以上は降下したことになる。気温減率を高度100mあたり 0.6° とすると 3° は低下した勘定になる。雨量に関してはさきの針葉樹類が松山平野まで下降したかどうか確証はない。したがって、合理的な推定はできないが、上述のようにトチノキの降下量が500mとすれば、現在の高度500mの地域の降雨量が当時の松山平野の降雨量に近い値を示しているかもしれない。その意味では、久万町（海拔高度490m）の年降雨量（約1900mm）は参考になる数値であろう。この冷涼多雨気候を示す試料からは、縄文後期中葉を示す出土品があることから、縄文後期の多雨期と呼ぶことにする。

また、草本類の総合比率をみると急速に減少しているが、出現する種類はかなり多彩である。水中植物のヒルムシロ、挺水性のハス、ガマ、浮葉性のガガブタなどが低比率ながら検出され、一時は數10cmの水深をもった沼が形成されていたことを物語っている。また、ティカカズラ、ナツズタ、サネカズラなど林内で着生生活をする「つる植物」、スズメウリ、ゴキヅル、ヘクソカズラ、スイカズラ、ノブドウ、エビヅル、ジャケツイバラなど林縁に多い「つる植物」が出現する。また、ギシギシ、サナエタデ、キンボウゲ、アイナエ、ゴマクサなど半湿地性の草本類もみられるが、前層で多かったヨモギなどの乾燥地に多い種類は影をひそめている。おそらく、現地では沼とそれを取り巻く湿地が存在し、さらにこれらを包むように、既に述べた多彩ななる植物で縁取られた照葉樹林や落葉夏緑林が繁茂していたのであろう。また、さきの針葉樹類の一時的な増加期（縄文後期の多雨期）も一応終わりをつけた後の沼地の堆積層（試料番号21～14）をみると、泥炭層で示された静穏な堆積環境も砂の流入によって中断されている。おそらく降雨量の増加した時期が断続的に繰り返され、トチノキも依然として出現することから、多湿冷涼な気候であったらしい。かくして沼の水深も次第に浅くなり、浮葉性のガガブタも上層（試料番号15、14）になると出現しなくなる。その後から総合比率で木本花粉は漸減、逆に草本花粉は増加はじめる。なかでもエノキ、ムクノキ林が縮小はじめると、アオキが出現するから、この林は沼の近くに残っていたらしい。しかし、トチノキは試料番号14を最後に姿を消してしまう。

第8層（試料番号13、12） 2試料ともに粗砂を含まず、細砂～シルトサイズの粒度組成で、氾濫原的な堆積物であるが、前層に比べてやや安定した堆積環境であったらしい。しかし、木本花粉はますます減少し、草本花粉、シダ類胞子の増加が目立ってくる。また、ガマ、ミクリ、ミズワラビなど、浅水域から湿地に生育する種類が出現し、沼はますます堆積されてきたことを示している。また、ヨモギ、イネ科雑草がアカザをともなって増加はじめ、乾燥地も拡がりはじめたことを示唆している。木本類ではアオキ、ムクロジがこの時代以降消失する。沼の周辺にまで広く進出していたカシ類を中心とする森林や、エノキ、ムクノキ林も第8層を最後に周辺から姿を消していくことを物語っている。

第5層（試料番号11、10） 今回提供された試料を採取されたトレンチ面では、第8層の上に第5層が不整合に堆積しており、第7、第6層を欠いている。これら同層が何故に削除されたかについては、第5層の花粉の消長によってある程度は推測することができる。さきに第10層から第9層下部にわたって、モミ、ツガ、コウヤマキなどの一時的な増加期がみとめられ、これを縄文後期の多雨期とみなした。これと同様な現象が、第5層から第3層下部にかけてみられることがある。ここで、降雨量の増加が始まる時期とその結果が花粉組成に反映するまでにはかなりの時間差があることはいうまでもない。とくに、樹木の場合はその時間差は大きい。例えば雨量の増加で表土が流失し、ツガに好適な土地ができる。これにツガの種子が飛来、発芽し、成木となり花粉を散布する。その結果が分析結果に反映する。このような過程に要した時間は少なくとも数10年、或いは100年以上を要するとみられる。したがって、ここで降雨量の増加は第5層より前から始まっており、そのために第6、第7両層は流失した可能性が高い。この多雨期を縄文晚期の多雨期と呼ぼう。また、総合比率が示すように木本類は第8層から目立って縮小する。おそらく第7～6層の時代に平地から背後の丘陵にまで後退したのかもしれない。このように縮小した森林は依然としてカシ類が優勢であるが、多少の組成のうえで変化がうかがえる。ヤマモモが上層に向かって増加することである。この傾向は西日本低地に多いシイ、カシ類を優占種とする照葉樹林で後氷期後半にしばしばみとめられることである。ヤマモモはこの森林の優占種ではなく、一従属種にすぎないが、優占種のある個体が伐採または枯死したりすると、長い目でみればその空間は優占種の子孫で埋め合わされるはずであるが、一時的にヤマモモが占有して繁茂する傾向がある。つまり、ヤマモモの増加は照葉樹林のカシやシイ類が伐採その他で損害を受けることが多くなつたことを示唆しているのであろう。次に花粉の絶対量（APF）についてみてみると、第8層以下の試料に比べて $1/20 \sim 1/10$ と少ない。これは当時の植物量が少なかつたことよりも、森林が遺跡内から後退したこと、堆積物中に酸化鉄を多く含むことから明らかなように、花粉の酸化分解が旺盛となつたことなどが原因であろう。いずれにしても、森林の後退した跡地や、水深の浅くなったかつての沼地は、イネ科、カヤツリグサ科、セリ科、ヨモギその他のキク科などの草本類によって占められていたらしい。また、浅いながらも沼の名残をとどめているところではミズワラビやガマが生育を続けていた。そのような植物景観を呈する試料番号10に至って稻花粉がはじめて出現する。全イネ科花粉の14%で、現代の水田土壤中の栽培稻花粉残留量の半分以下の値であるが、現地点で既に栽培されていた可能性はある。稻花粉の年間の水田残留率は非常に低く、熟田での残留量に達するには、新しく開田した場合は100年以上かかるとみなされているからである^④。また、既に述べたように、本層は縄文晚期の多雨期中の堆積層であるから、栽培稻の出現も勿論のこと、この多雨期に対比される。縄文晚期の稻作のみとめられている北部九州の板付^⑤、菜畑^⑥兩遺跡の分析結果と比較すると、板付では稻作開始直後に降雨量の増加にもとづく一時的な植生破壊期がみとめられ、菜畑では稻作開始直後に土砂流入により稻作は中断されている。これに対して、今回の遺跡では上述のように雨量の増加期中に稻は出現する。したがって、これら三遺跡で示された多雨期は同一時期のさきの縄文晚期の多雨期とみなすことができよう。なお、これら三遺跡での稻出現時期を比較すると、板付、菜畑では多雨期が花粉に反映される直前に、大河では反映されているさ中に対比される。その意味からは、大河では他よりもやや遅れて稻作は開始されることになる。しかし、多雨期の正確な時期と、それが花粉に反映される時期との間には多少の時間差があり、しかもこの時間差の长短はいろいろな要因により影響を受けるから、稻作開始時期の決定には花粉以外の面からの考察も待

表2 大河遺跡A区出土花粉化石一覧(1)

花粉番号	花粉量	第1層												第2層												第3層												第4層												第5層												第6層												第7層												第8層												第9層												第10層												第11層												第12層												第13層												第14層												第15層												第16層												第17層												第18層												第19層												第20層												第21層												第22層												第23層												第24層												第25層																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																					
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	101	102	103	104	105	106	107	108	109	110	111	112	113	114	115	116	117	118	119	120	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131	132	133	134	135	136	137	138	139	140	141	142	143	144	145	146	147	148	149	150	151	152	153	154	155	156	157	158	159	160	161	162	163	164	165	166	167	168	169	170	171	172	173	174	175	176	177	178	179	180	181	182	183	184	185	186	187	188	189	190	191	192	193	194	195	196	197	198	199	200	201	202	203	204	205	206	207	208	209	210	211	212	213	214	215	216	217	218	219	220	221	222	223	224	225	226	227	228	229	230	231	232	233	234	235	236	237	238	239	240	241	242	243	244	245	246	247	248	249	250	251	252	253	254	255	256	257	258	259	260	261	262	263	264	265	266	267	268	269	270	271	272	273	274	275	276	277	278	279	280	281	282	283	284	285	286	287	288	289	290	291	292	293	294	295	296	297	298	299	300	301	302	303	304	305	306	307	308	309	310	311	312	313	314	315	316	317	318	319	320	321	322	323	324	325	326	327	328	329	330	331	332	333	334	335	336	337	338	339	340	341	342	343	344	345	346	347	348	349	350	351	352	353	354	355	356	357	358	359	360	361	362	363	364	365	366	367	368	369	370	371	372	373	374	375	376	377	378	379	380	381	382	383	384	385	386	387	388	389	390	391	392	393	394	395	396	397	398	399	400	401	402	403	404	405	406	407	408	409	410	411	412	413	414	415	416	417	418	419	420	421	422	423	424	425	426	427	428	429	430	431	432	433	434	435	436	437	438	439	440	441	442	443	444	445	446	447	448	449	450	451	452	453	454	455	456	457	458	459	460	461	462	463	464	465	466	467	468	469	470	471	472	473	474	475	476	477	478	479	480	481	482	483	484	485	486	487	488	489	490	491	492	493	494	495	496	497	498	499	500	501	502	503	504	505	506	507	508	509	510	511	512	513	514	515	516	517	518	519	520	521	522	523	524	525	526	527	528	529	530	531	532	533	534	535	536	537	538	539	540	541	542	543	544	545	546	547	548	549	550	551	552	553	554	555	556	557	558	559	560	561	562	563	564	565	566	567	568	569	570	571	572	573	574	575	576	577	578	579	580	581	582	583	584	585	586	587	588	589	590	591	592	593	594	595	596	597	598	599	600	601	602	603	604	605	606	607	608	609	610	611	612	613	614	615	616	617	618	619	620	621	622	623	624	625	626	627	628	629	630	631	632	633	634	635	636	637	638	639	640	641	642	643	644	645	646	647	648	649	650	651	652	653	654	655	656	657	658	659	660	661	662	663	664	665	666	667	668	669	6610	6611	6612	6613	6614	6615	6616	6617	6618	6619	6620	6621	6622	6623	6624	6625	6626	6627	6628	6629	6630	6631	6632	6633	6634	6635	6636	6637	6638	6639	6640	6641	6642	6643	6644	6645	6646	6647	6648	6649	6650	6651	6652	6653	6654	6655	6656	6657	6658	6659	6660	6661	6662	6663	6664	6665	6666	6667	6668	6669	66610	66611	66612	66613	66614	66615	66616	66617	66618	66619	66620	66621	66622	66623	66624	66625	66626	66627	66628	66629	66630	66631	66632	66633	66634	66635	66636	66637	66638	66639	66640	66641	66642	66643	66644	66645	66646	66647	66648	66649	66650	66651	66652	66653	66654	66655	66656	66657	66658	66659	66660	66661	66662	66663	66664	66665	66666	66667	66668	66669	666610	666611	666612	666613	666614	666615	666616	666617	666618	666619	666620	666621	666622	666623	666624	666625	666626	666627	666628	666629	666630	666631	666632	666633	666634	666635	666636	666637	666638	666639	666640	666641	666642	666643	666644	666645	666646	666647	666648	666649	666650	666651	666652	666653	666654	666655	666656	666657	666658	666659	666660	666661	666662	666663	666664	666665	666666	666667	666668	666669	6666610	6666611	6666612	6666613	6666614	6666615	6666616	6666617	6666618	6666619	6666620	6666621	6666622	6666623	6666624	6666625	6666626	6666627	6666628	6666629	6666630	6666631	6666632	6666633	6666634	6666635	6666636	6666637	6666638	6666639	6666640	6666641	6666642	6666643	6666644	6666645	6666646	6666647	6666648	6666649	6666650	6666651	6666652	6666653	6666654	6666655	6666656	6666657	6666658	6666659	6666660	6666661	6666662	6666663	6666664	6666665	6666666	6666667	6666668	6666669	66666610	66666611	66666612	66666613	66666614	66666615	66666616	66666617	66666618	66666619	66666620	66666621	66666622	66666623	66666624	66666625	66666626	66666627	66666628	66666629	66666630	66666631	66666632	66666633	66666634	66666635	66666636	66666637	66666638	66666639	66666640	66666641	66666642	66666643	66666644	66666645	66666646	66666647	66666648	66666649	66666650	66666651	66666652	66666653	66666654	66666655	66666656	66666657	66666658	66666659	66666660	66666661	66666662	66666663	66666664	66666665	66666666	66666667	66666668	66666669	666666610	666666611	666666612	666666613	666666614	666666615	666666616	666666617	666666618	666666619	666666620	666666621	666666622	666666623	666666624	666666625	666666626	666666627	666666628	666666629	666666630	666666631	666666632	666666633	666666634	666666635	666666636	666666637	666666638	666666639	666666640	666666641	666666642	666666643	666666644	666666645	666666646	666666647	666666648	666666649	666666650	666666651	666666652	666666653	666666654	666666655	666666656	666666657	666666658	666666659	666666660	666666661	666666662	666666663	666666664	666666665	666666666	666666667	666666668	666666669	6666666610	6666666611	6666666612	6666666613	6666666614	6666666615	6666666616	6666666617	6666666618	6666666619	6666666620	6666666621	6666666622	6666666623	6666666624	6666666625	6666666626	6666666627	6666666628	6666666629	6666666630	6666666631	6666666632	6666666633	6666666634	6666666635	6666666636	6666666637	6666666638	6666666639	6666666640	6666666641	6666666642	6666666643	6666666644	6666666645	6666666646	6666666647	6666666648	6666666649	6666666650	6666666651	6666666652	6666666653	6666666654	6666666655	6666666656	6666666657	6666666658	6666666659	6666666660	6666666661	6666666662	6666666663	6666666664	6666666665	6666666666	6666666667	6666666668	6666666669	66666666610	66666666611	66666666612	66666666613	66666666614	66666666615	66666666616	66666666617	66666666618	66666666619	66666666620	66666666621	66666666622	66666666623	66666666624	66666666625	66666666626	66666666627	66666666628	66666666629	66666666630	66666666631	66666666632	66666666633	66666666634	66666666635	66666666636	66666666637	66666666638	66666666639	66666666640	66666666641	66666666642	66666666643	66666666644	66666666645	66666666646	66666666647	66666666648	66666666649	66666666650	66666666651	66666666652	66666666653	66666666654	66666666655	66666666656	66666666657	66666666658	66666666659	66666666660	66666666661	66666666662	66666666663	66666666664	66666666665	66666666666	66666666667	66666666668	66666666669	666666666610	666666666611	666666666612	666666666613	666666666614	666666666615	666666666616	666666666617	666666666618	666666666619	666666666620	666666666621	666666666622	666666666623	666666666624	666666666625	666666666626	666666666627	666666666628	666666666629	666666666630	666666666631	666666666632	666666666633	666666666634	666666666635	666666666636	666666666637	666666666638	666666666639	666666666640	666666666641	666666666642	666666666643	666666666644	666666666645	666666666646	666666666647	666666666648	666666666649	666666666650	666666666651	

表3 大湖遗址A区出土花粉化石一览(2)

ちたい。

第4層（試料番号9、8、7） 第5層で繁茂してきた草本類は、本層の当初（試料番号9）は前にも増して繁茂し、イネ科は全木本花粉の1.6倍になる。中層（試料番号8）になると急減するが、依然としてヨモギ類とともに優位を保っている。稻花粉は着実に増加の傾向を示し、ミズワラビも急速に減少する。ミズワラビと栽培稻は生育場所が互いに類似しているから、ミズワラビの生育場所が次第に水田化されてきたことが想像される。また、この頃（試料番号8）からソバが出はじめる。縄文時代の遺跡からソバが検出された例は、中部地方以北に限られ、ソバの分布は北方からと考えられてきた。ただ、例外として板付遺跡では 2880 ± 105 y.B.P. (Gak.4553) と 2810 ± 100 y.B.P. (Gak.4554) の間から検出されていた。今回、板付とはほぼ同時代に四国からも検出されたことになる。さらに、山口県宇生賀盆地では 6600 ± 75 y.B.P. (N-2916) 以降、ソバが検出されるという^⑩。これらも含めてソバの西日本における分布ルートについては再吟味が必要となっている。いずれにしても、第5層から第4層にかけて栽培稻やソバの出現は明らかに農耕がこの地で行われていたわけで、上に述べた草本花粉の減少は農耕地の拡大と関係ありそうである。また、木本類ではエノキームクノキ林はますますその影は薄くなるし、山地に後退した照葉樹林も常緑カシ、シイ類が比率の上では優位を保っているが、ヤマモモの比率も高く、シイ、カシ類も次第に優位を低下させつつあるとみるべきであろう。

第3層（試料番号6、5、4） 栽培稻花粉の比率は現代の水田なみとなり、水田雑草のコナギ、イボクサ、キカシグサなども検出され、稻作はいよいよ本格的に現地点で営まれてきたことを物語っている。また、ソバの他にマクワウリ類も出現するし、耕地雑草のタネツケバナ、ハコベ、ミチヤナギ、ギシギシ、アカザ類などもみられるし、以前からのヨモギ、オナモミ、イネ科雑草なども多く、農耕地、荒地が展開していたことを物語っている。また、優位を占めていた照葉樹林は衰退の一途をたどり、代わってマツが増加を始める。背後の山地では、森林の破壊が顕著になってきたことを示している。

第2層（試料番号3） 第1層の集積層とみなされるもので、花粉化石は含まれていない。

第1層（試料番号2、1） 山地では照葉樹林はほとんど姿を消し、マツ林が形成されたことを示している。マツの比率は圧倒的に多いが、花粉の生産量、散布範囲とともに他に比べて大きいこと、他の木本類が激減したことなどのためにマツの比率が過大に大きくなつたものである。また、遺跡内は完全に耕地化されたわけであるが、試料では畦畔や路傍に多いミチヤナギが多く検出されている。

本遺跡の存続した年代については表1に示したように、考古学的出土品から縄文時代後期中葉から中世に至る間である。これを花粉化石による縄年区分にあてはめると、RⅢa時代以降のものとみなすことができる。約8500年前に始まった後氷期の最暖期（RⅡ時代）も6000～5000年前をピークとして4000年前には終わりを告げ、冷涼化の傾向を示すRⅢ時代に入る。さらにRⅢ時代は気候の低温多湿化を示すRⅢa時代（4000～1500年前）と、人間の植生破壊が顕著になるRⅢb時代（1500年前から現在）に区分される。松山平野のRⅡ時代を示す試料はないが、西日本各地の例からみて暖帯林が繁茂をきわめていたことは間違いない、冷温帶林が存在した可能性はほとんどない。しかし今回の花粉分析の結果では、暖帯上部から冷温帶下部にわたるいわゆる中間帯の森林要素が増加していること、すなわちその分布域が下降拡大し、気候の低温、多湿化を示唆する時期が2回みとめられ、それぞれ縄文後期、晚期の多雨期とみなした。これらの時期は年代、気候変化の傾向などからみてRⅢa時代

大 沔 遺 跡

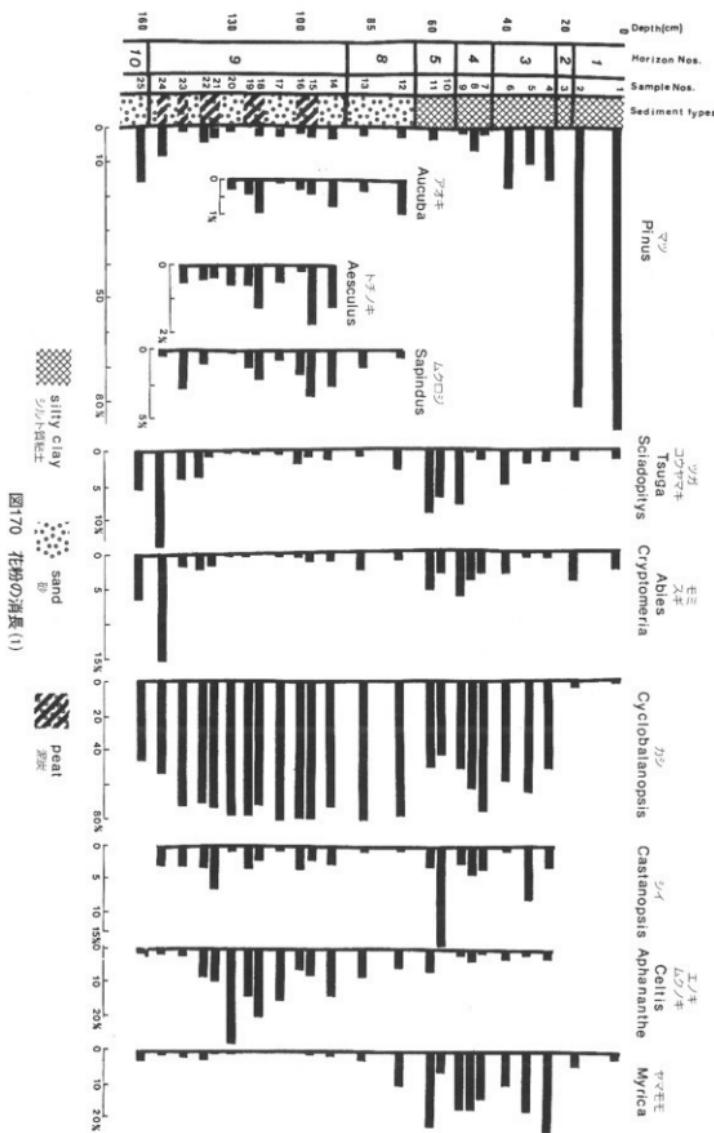


図170 花粉の消長(1)

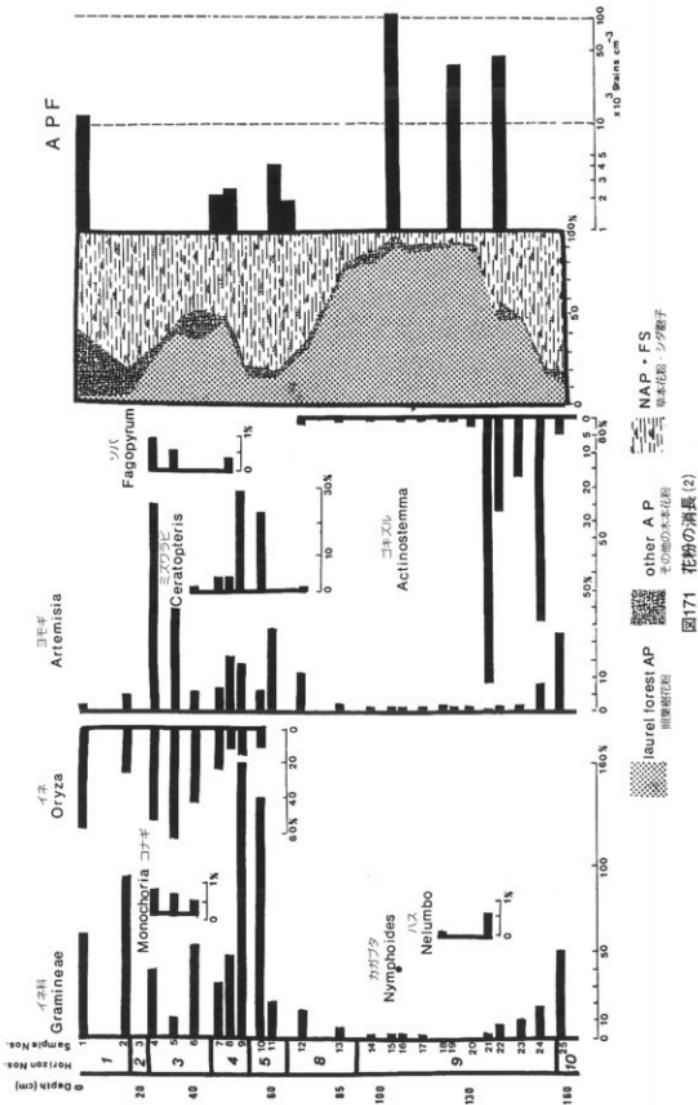


図171 花粉の消長(2)

図172 大渕遺跡A区出土花粉化石(1)

			試料番号
Fig. 1	Abies	モミ	× 500 16
Fig. 2	Tsuga	ツガ	タ 16
Fig. 3	Aesculus	トチノキ	×1000 15
Fig. 4	Platycarya	ノグルミ	タ 6
Fig. 5	Castanopsis	シイ	タ 15
Fig. 6	Zanthoxylum	カラスザンショウ	タ 19
Fig. 7	Cyclobalanopsis	常緑カシ	タ 15
Fig. 8	Aucuba	アオキ	タ 18
Fig. 9	タ	タ	タ 15
Fig. 10	Dendropanax	カクレミノ	タ 15
Fig. 11	Phellodendron	キハダ	タ 15
Fig. 12	Melia	センダン	タ 16
Fig. 13	Diospyros	カキ	タ 15
Fig. 14	Idesia	イイギリ	タ 19
Fig. 15	Citrus	タチバナ	タ 16
Fig. 16	Morus	クワ	タ 5
Fig. 17	Myrsine	タイミンタチバナ	タ 22
Fig. 18	Myrica	ヤマモモ	タ 5
Fig. 19	Clethra	リヨウブ	タ 20
Fig. 20	Sapindus	ムクロジ	タ 15
Fig. 21	タ	タ	タ 15
Fig. 22	Fagus	イヌブナ	タ 16
Fig. 23	Aphananthe	ムクノキ	タ 20
Fig. 24	Symplocos	ハイノキ	タ 6
Fig. 25	Rhus	ヌルデ	タ 15

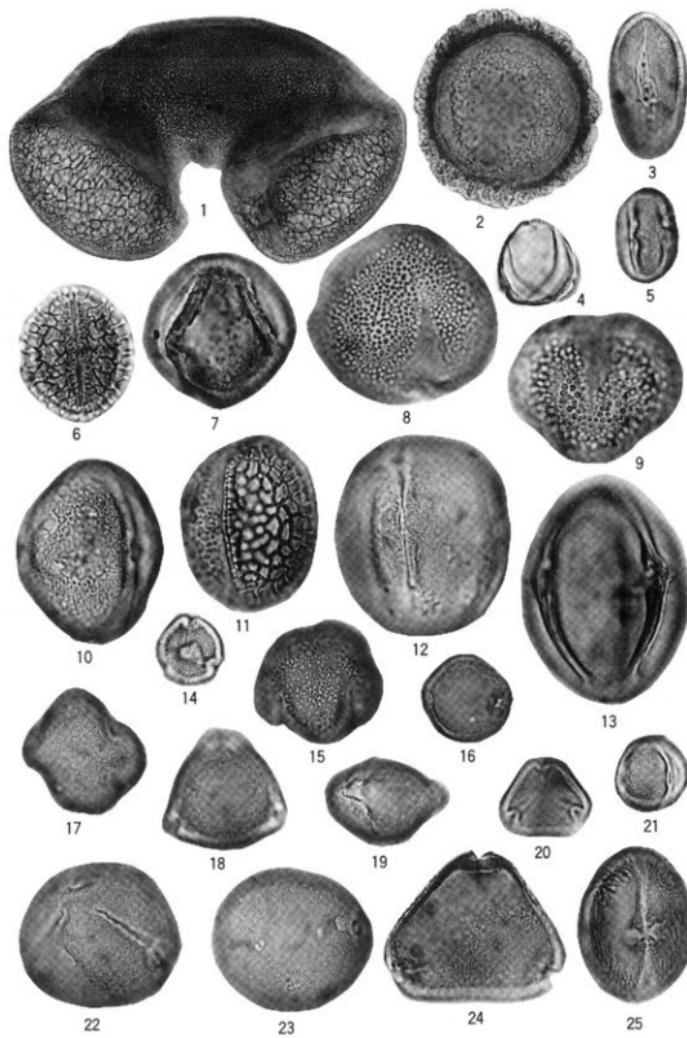


図173 大潟遺跡A区出土花粉化石(2)

			試料番号
Fig.26	<i>Nelumbo</i>	ハス	×1000 21
Fig.27	<i>Cucumis</i>	マクワウリ	タ 5
Fig.28	<i>Melothria</i>	スズメウリ	タ 15
Fig.29	<i>Fagopyrum</i>	ゾバ	タ 5
Fig.30	<i>Oryza</i>	イネ	タ 9
Fig.31	wild Gramineae	イネ科野生型	タ 6
Fig.32	<i>Nymphoides</i>	ガガブタ	タ 16
Fig.33	<i>Ranunculus</i>	キンポウゲ	タ 23
Fig.34	タ	タ	タ 24
Fig.35	<i>Monochoria</i>	コナギ	タ 4
Fig.36	<i>Paederia</i>	ヘクソカズラ	タ 17
Fig.37	<i>Reynoutria</i>	イタドリ	タ 16
Fig.38	<i>Chrysanthemum</i>	キク	タ 9
Fig.39	タ	タ	タ 9
Fig.40	<i>Halolagis</i>	アリノトウグサ	タ 4
Fig.41	<i>Cuscuta</i>	ネナシカズラ	タ 20
Fig.42	<i>Chenopodium</i>	アカザ	タ 5
Fig.43	<i>Persicaria</i>	サナエタデ	× 500 18

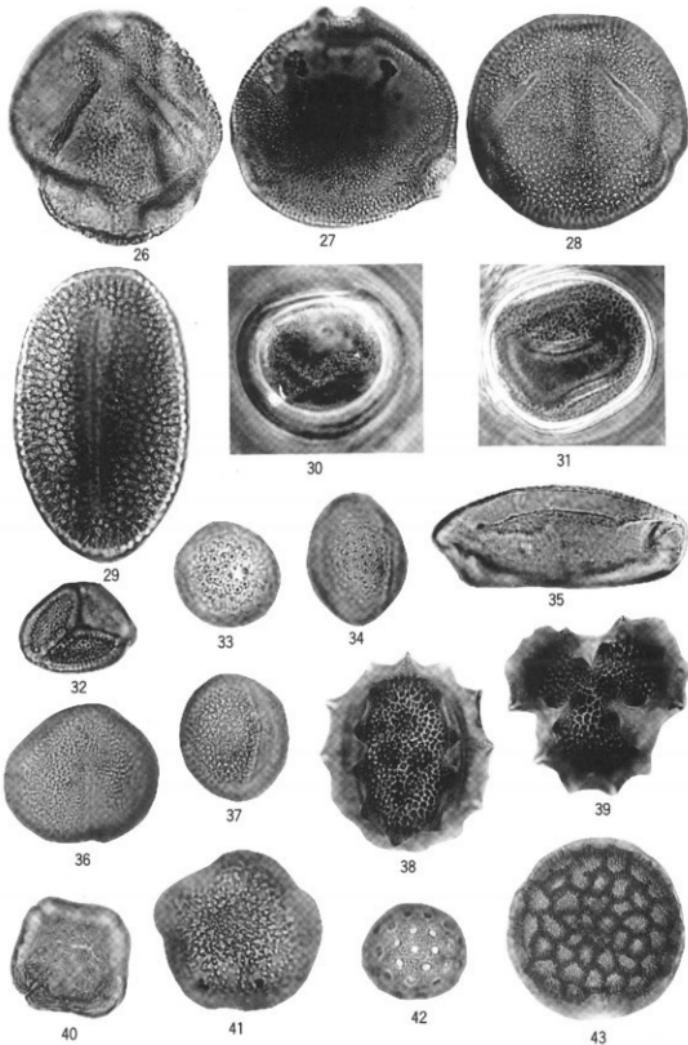
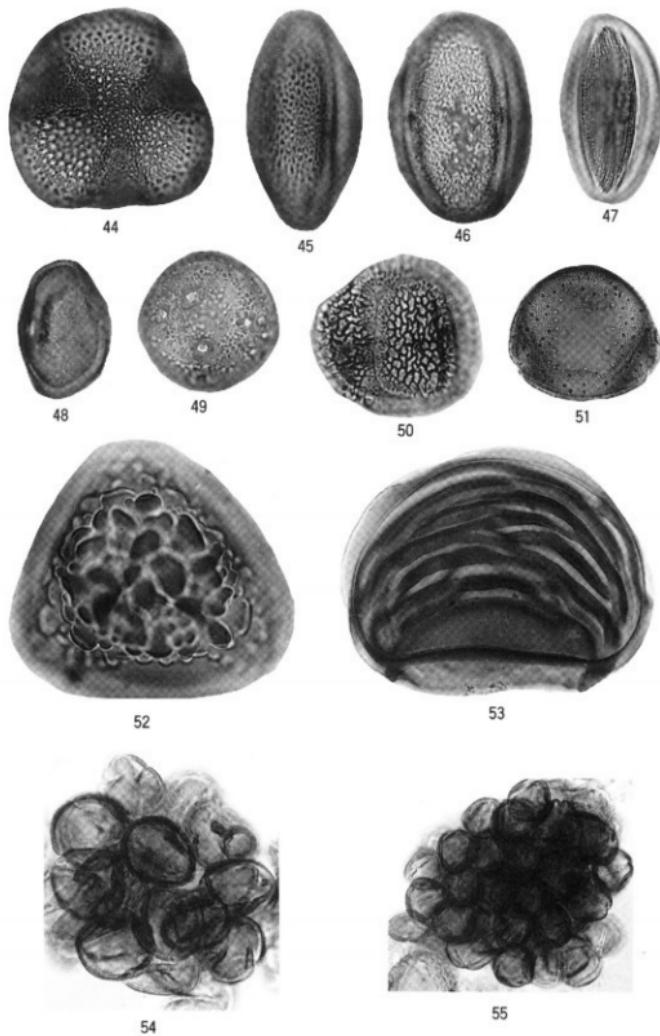


図174 大渕遺跡A区出土花粉化石(3)

			試料番号
Fig.44	Caesalpinia	ジャケツイバラ	×1000 16
Fig.45	Parthenocissus	ツタ	タ 16
Fig.46	Ampelopsis	ノブドウ	タ 16
Fig.47	Actinostemma	ゴキブル	タ 5
Fig.48	Anodendron	サカキカズラ	タ 16
Fig.49	Tracheospermum	ティカズラ	タ 19
Fig.50	Kadzura	サネカズラ	タ 16
Fig.51	Lonicera	スイカズラ	× 500 16
Fig.52	Pteris	イノモトソウ	×1000 16
Fig.53	Ceratopteris	ミズワラビ	タ 6
Fig.54	Cyclobalanopsis (pollinia)	カシ花粉塊	× 500 15
Fig.55	Sapindus (pollinia)	ムクロジ花粉塊	タ 15



に明らかに对比でき、年代的に縄文後期の多雨期はRⅢaの初期（約4000年前）に、他は中期（約3000年前）にあてはまる。また愛媛、高知両県境近くの中間帯に位置するカラ池湿原^⑦では3350±120y.B.P.、高知市の水久保湿原^⑧では3340±95y.B.P.前後の時期にツガの増加期がある。これらも縄文後期、または後期の多雨期に相当する。また、このRⅢaの初期は縄文海退期に対比されるから、第10層（試料番号25）に示された不安定な堆積環境は降雨量の増加に加えて海平面の低下にともなう侵蝕下刻のあらわれとも考えられよう。

また、最上部の第1、第2層は自然植生の全く破壊された状態を示しているからRⅢb時代にあてはまる。

摘要

大潟遺跡の古環境を復元するため、花粉分析学的調査をおこなった。その結果、

1. 縄文後期（約4000年前）から縄文晩期前半（約3000年前）の間は、遺跡内には沼が形成されていた。
2. 沼の周辺には、常緑カシ、シイなどの照葉樹林やエノキームクノキの夏緑林が繁茂し、トチノキも近くにみられた。
3. 縄文晩期後半になると沼は浅くなり、森林は縮小して背後の丘陵地にまで後退し、代わって湿生、乾生の草地が拡大した。その頃から稲作が営まれ、続いてソバの畑作も行われるようになった。
4. 気候的には全国的な冷涼多湿なRⅢa時代に対比され、縄文後期の多雨期と縄文晩期の多雨期が認められ、稲作は晩期の多雨期中に開始され、北九州地方と開始時期には大差ないと考えられた。

文献

1. 中村純（1977）「稲作とイネ花粉」『考古学と自然科学』10】 21~33
2. 那須考悌（1973）「滋賀県遺跡の花粉および植物遺体」『湖西線関係遺跡調査報告書』 237~240
3. 中村純（1988）「イネの自然科学的調査法—花粉—」『弥生文化の研究』2】 123~131 雄山閣
4. 中村純・簗中健一（1976）「板付遺跡の花粉分析学的研究」『福岡市埋蔵文化財調査報告書 第35集 下巻』 29~51
5. 中村純（1982）「葉瀬遺跡の花粉分析」『唐津市文化財調査報告 第5集』 341~353
6. M.Tukada et al. (1986) 「Oldest primitive agriculture and vegetational environments in Japan.」 [Nature 322, 6080] 632~634
7. 山中二男・山中三男（1977）「高知県カラ池湿原の植生および花粉分析的研究」『高知大学学術研究報告』26. 自然科学3】 17~30
8. 中村純（1980）「花粉分析による稲作史の研究」『自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究. 総括報告書』 187~204

(2) 大瀬遺跡出土糞圧痕について

元土佐高等学校 近藤日出男

糞圧痕のある土器片を出土した地点は、丘陵と微高地の間に広がる海拔3.5mの低湿地で、近くに久万川が流れている所である。

当地には、既に南方1kmに縄文時代晩期後半の遺物・河川状遺構を検出した船ヶ谷遺跡もある。

資料の採取地点は、別図A区（詳細は遺跡位置図にゆずる）で昭和62年8月21日より9月22日までに発掘されたものである。

第3層の古墳～中世包含層直下で黄色粘質土の安定層を確認したあと、地下50cmの5層で磨製石庵丁、刻目突帯文土器、7層から結歯式堅櫛2点があらわれ、下位の8層（地下80cm）で糞圧痕のある土器片数点があらわれた。なお、A区に隣接するB区の同時期の地層から、イネの茎葉片の一部もあらわれた。

調査結果

資料Aの土器片は、鉢底形の破片である。糞圧痕は土器底に対し、糞の背面が約60度の傾斜角度で押圧されならされたものである。圧痕口縁部には流砂泥が固着し、覆っているので口縁部の輪郭はやや不鮮明である。口縁部より少し入った内壁面には、炭化した糞物質の残留物が幅0.4～0.7mmの幅で固着し、残存している（図175の5）。内部奥には、同質炭化物が多数固着するが、この炭化物を埋めるかたちで0.5～0.6mm大の石英・長石、数個の灰長石が混ざり合ったかたちで埋没している。

資料Bの土器片は厚さ4mm、平皿に近い土器片の内側に糞の腹部が押圧されならされたとの圧痕である。糞圧痕頭頂部に相当するところの側面に小孔が3つあり、1つは長芒のあとであり、他の2孔は毛茸とみられる。あきらかに長芒であることを示している（図176の2a）。内壁側の一部に、糞の頸皮の一部が炭化したとみられる黒色炭化物が粘土質の薄膜下に透けてみえる。

資料Cの土器片は厚さ0.5mm大の石英・長石・灰長石が底部の1/3を埋め、残り2/3は被われていない。底部の一部には植物質纖維状細片が少しからみついていた。

資料Dの土器片は厚さ5mm、丸鉢の表面側は黄褐色で、線紋があきらかに刻されている。内壁面は黒色である。圧痕の様子は、玄米粒が壁面に30度の傾斜角度で押圧されたまま焼成されたもので、焼成により米粒がはじけて四散したあとを示している。押圧痕の口縁部には炭化物は見あたらない。底側部深く米粒の背腹側線部の組織細胞が加熱により変質したまま固着している。固着物の形状が丸みをおびた五角形の形状であるので、明らかに澱粉複粒組織細胞の変質したものとみられる。モチ米の場合では、加熱により変質すると気泡状に変わるが、ウルチ米の場合では澱粉複粒組織細胞の五角形を比較的残すことがあるので、ウルチ米ではないかと思われる（図176の4b）。焼成温度が低かったため、このように小塊状物として残存したものである。各資料ともに焼成によるヒズミもあるので、生糞（米）時の粒形よりやや短縮しているとみられるが、参考のため粒形値を計測した（表）。

考 察

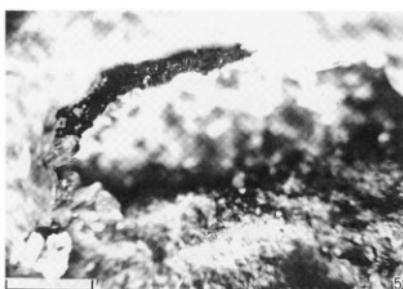
古代米の粒質を検討することは一般に困難である。ただし仏像胎内充填物として稻藁が用いられたのが人目に触れるとか、植物体が日干し煉瓦等の乾燥条件下で経過したものでは判明することが時に

大 溝 遺 跡

図175



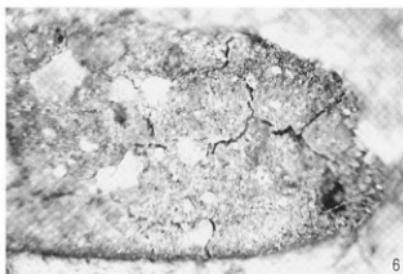
資料A



資料Aの口縁部。(単位 1 mm, 20×)



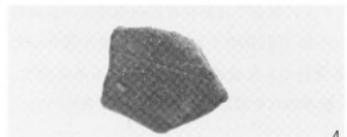
資料B



資料Bの押圧痕。



資料C

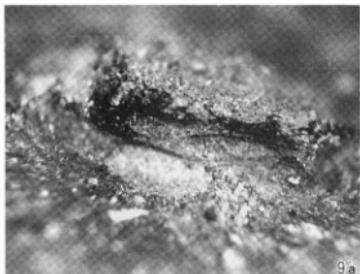


資料D

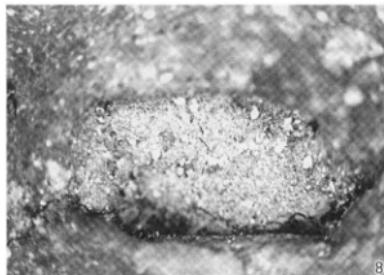




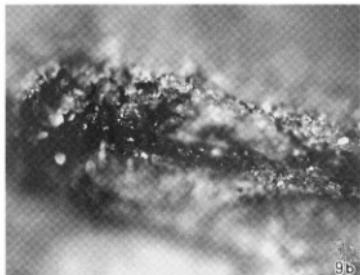
資料C、葉身と葉鞘の境目。(20×)



資料Dを30度傾斜せしめたもの。
左右を反対にして写す。(20×)



資料Dの押圧旗下方両端に五角形に近い炭化物残存す。
(20×)



9aの炭化物の拡大。(20×)

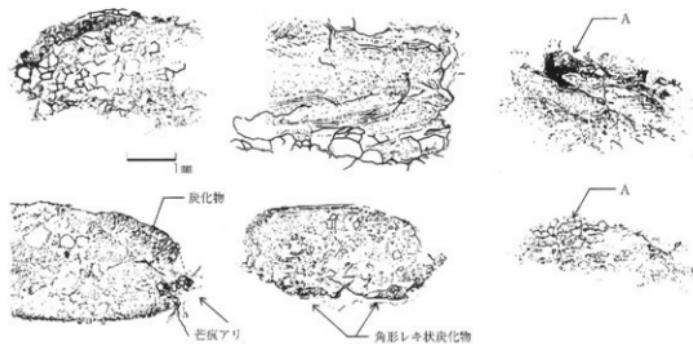
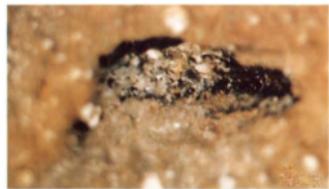


図176 (A)



資料D. 下方に炭化した組織がみられる。
(単位 1 mm, 20×)

図176 (B)



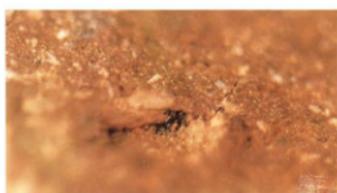
5a



5b

B区より出土したイネ稈片
(全長54mm, 20×)

資料	粒長	粒幅	粒厚	粒長／粒幅	備考
A	5.42mm	2.9mm	—	1.86	A区8層・稻
B	5.42	2.5	—	2.17	A区8層・稻
C	—	—	—	—	A区9A層・イネ茎葉
D	3.54	1.85	—	1.91	A区5下層・米



資料D. 土器片を30°傾斜させて圧痕
側壁に残る炭化穀粉組織を
見出したもの。(50×)

ある。焼成炭化された焼け糀の場合では、堅穴貯藏穴、或いは貯蔵庫最下部の土面に接している個所の貯蔵糀等では酸素不足の蒸し焼き、焼成温度上昇不充分の時には、澱粉複粒組織細胞を残存することがある（近藤1977）。

粒形から区分する糀の類別は比較的容易であり、日本型短粒では粒長幅比2.1以下、ジャワ型中長粒は粒長幅比2.1～2.8まで、インディカ型長粒米では粒長幅比2.8以上の区別がなされることがよく行われる。現在、日本型栽培稻の玄米粒長平均は5.15mm、大多数のものは4.6～5.7mmの範囲に納まり、粒幅では3.10～2.99mm、粒長幅比は1.66～1.94である（永松・石川1967）。

縄文時代晚期遺跡の糀圧痕としては、唐津市宇木汲田遺跡のもので、粒長5.8mm、幅3.3mm、長幅比1.76、別の一例では、粒長6.8mm、粒幅3.6mm、長幅比1.89であり、福岡県板付遺跡の糀圧痕では、粒長平均5.93、粒幅平均3.4mm、長幅比1.74である（佐藤1971）。

大洞遺跡の糀圧痕A、Bの粒長は5.42mm、粒幅2.9～2.5mmである。玄米粒圧痕である資料Dでは粒長3.54mmで、焼成によるちぢみを考慮しても日本型短粒の小型に属する。小粒であるのは、縄文時代晚期の気候は現在よりやや寒い時期で、亜高山帶針葉樹が下降はじめ湿润冷涼期になっていた（中村1967）現地は海岸に近く、塩水のしみこみやすい低湿地であり、塩分の侵入は稻の生育を妨げる（松木1973）。第5層から検出された石庵丁の存在を考え合わせると、明らかに稻の生育が不ぞろいで、成熟した穂穂をえらび収穫したものとみられる。

結 び

大洞遺跡から出た縄文晚期の土器片に押圧されていた糀（米）圧痕の粒形、及び米粒の炭化による残存物を調べた。

1. 糀圧痕のある2粒の粒長は5.42mm、粒幅は1.86と2.17、玄米とみられる1粒は粒長3.54mm、粒幅1.85mm、長幅比は1.91である。
2. 糀圧痕の粒形から判断して、日本型短粒の小粒で、長芒種である。
3. 糀（米）圧痕に米粒の構成組織が残存することは報告されていない。本遺跡ではその稀な例であろう。これは、土器焼成時の加熱温度がたまたま温度の低い250～300℃の、比較的低温で焼かれて、そのため土器も水もりしやすく、割れやすいものとなり、投棄されたものとみられる。
- 通常400℃以上になると、糀はすべて灰化して残ることはない。比較的低温で焼成されたため、糀（米）粒構成組織は変質し、炭化した。当然生糀時の澱粉複粒組織細胞の構成を知ることはできなかった。ただ、変質したものの、五角形の粒状物が圧痕周縁部に数多くみられたことから、モチではなくウルチ米であったとみられる。

文 献

1. 近藤日出男（1977）「北部九州地区古代米の粒形・比重及内部構造について」『農業 No1111』
2. 近藤日出男（1977）「地域時代を異にした古代米の粒形と米質について」『農業 No1112』
3. 佐藤敏也（1971）『日本の古代米』
4. 永松士己・石川文雄（1967）「本邦在米イネの玄米の形状と大きさの変異」『日作紀九支会報 No29』
5. 中村純（1967）『花粉分析』
6. 松木豪（1973）「熊本県古閑原遺跡出土の植物炭化物」『考古学ジャーナル 82』

(3) プラント・オパール分析

古環境研究所

1) はじめに

当遺跡では、縄文時代晩期とされる遺物包含層から石庖丁が検出され、當時この周辺で稲作が行われていたのではないかと考えられていた。

この調査は、プラント・オパール分析を用いて稲作の可能性の検討を行ったものである。以下に、調査の結果を報告する。

2) 試 料

昭和62年9月12日に現地調査を行った。サンプリング地点は、A地点、B地点、およびB'地点（B地点の西約10m）の3地点である。

土層は1～8層に分層されていた。このうち、1層は現耕作土、2層は床土、3層は中世～古代とされる黄灰色粘質土、4層は暗緑灰色粘土、5層は縄文時代晩期とされる黒褐色粘質土、6層は暗茶褐色砂質土、7層は黄灰色シルト、8層は砂層である。5層からは縄文時代晩期の土器とともに石庖丁が検出され、水田跡の可能性が考えられていた。

試料は、土層壁面において各層ごとに5～10cm間隔で採取した。採取にあたっては、容量50ccの採土管およびボリ袋を用いた。

採取した試料数は計21試料であり、これらすべてについて分析を行った。

3) 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原・1976）」をもとに、次の手順で行った。

- ①試料土の絶乾（105℃・24時間）および仮比重測定
- ②試料土約1gを秤量し、ガラスピーブを添加（直径約40μm、約0.02g）
※電子分析天秤により、1万分の1gの精度で秤量
- ③脱い機物処理（電気炉灰化法または過酸化水素法）
- ④超音波による分散（150w・26KHz・15分間）
- ⑤沈底法による微粒子（20μm以下）除去
- ⑥乾燥のち封入剤（オイキット）中に分散し、プレパラート作成
- ⑦検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーブ個数が300以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。



図177 試料採取地点図

試料 1 g 中のプラント・オパール個数 (Sp) は、次式にしたがって求めた。

$$Sp = |(G_w \times a) / S_w| \times (\beta / a)$$

ただし、G_wは添加したガラスピースの重量、aはガラスピース 1 g 中の個数、S_wは試料の絶乾重量、 α と β は計数されたガラスピースおよびプラント・オパールの個数を表している。

植物体生産量の推定値 (Bw、単位: t / 10 a · cm) は次式にしたがって求めた。

$$Bw = Sp \times As \times K \times 10$$

ただし、Asは試料の仮比重、Kは換算係数（機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体各部乾重）を表している。換算係数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ、タケ亜科はゴキダケの値を用いた。機動細胞珪酸体 1 個あたりの地上部全重（単位: 10⁻⁵ g）は、それぞれ 2.94、6.31、0.48 である。また、イネの機動細胞珪酸体 1 個あたりの種実重は 1.03 である。

Bw の値に層厚をかけて、その層で生産された植物体の総量 (t / 10 a) を求めた。

4) 分析結果

調査の主目的が水田跡の調査であるため、イネ、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族（ススキなどが含まれる）、キビ族（ヒエなどが含まれる）の主要な 5 分類群について同定・定量を行い、分析結果の数値データを表に示した。また、表 5 に、各層の深度や層厚および仮比重の値などとともにイネの推定生産量を示した。

図 178 に、イネのプラント・オパールの出現状況を示した。また図 179 に、環境の指標となるおもな分類群（イネ、ヨシ属、タケ亜科）について、植物体生産量とその変遷を示した。

5) 考察

① 水田跡の可能性について

水田跡の確認や探査を行う場合、イネのプラント・オパールが試料 1 g あたりおよそ 5,000 個以上と多量に検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にプラント・オパールの密度のピークが認められれば、後代のものが上層から混入した危険性は考えにくくなり、その場で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて、水田跡の可能性について検討を行った。

水田跡の可能性が考えられていた 5 層（繩文時代晩期の遺物包含層）では、すべての試料からイネのプラント・オパールが検出された。このうち、A 地点では密度が 5,000 個/g と比較的高く、明らかなピークが認められた。また、B 地点では、密度は 2,400 個/g とやや低いものの、明らかなピークが認められた。これらのことから、同層で稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。

5 層より上層では、A・B 両地点とも 1 層（現耕作土）まで連続的にイネのプラント・オパールが検出された。このうち、1~2 層は現在もしくは最近の水田耕作によるものと考えられる。3~4 層では、密度が 2,000 個/g 前後と低い値であることから、これらの層で稲作が行われていた可能性は考えられるものの、他所からの混入の危険性なども否定できない。

5 層より下層では、イネのプラント・オパールは検出されなかった。

② 稲穀の生産量の推定（表5参照）

5層で稲作が行われていたと仮定して、そこで生産された稻穀の総量（面積10aあたり）を算出したところ、平均5.4tと推定された。当時の稻穀の年間収量を面積10aあたり100kgと仮定すると、5層ではおよそ50年にわたりて稲作が営まれていたものと推定される。

なお、これらの値は、収穫方法が穗刈りでおこなわれ、稻わらがすべて水田内に還元されたことを前提として求められている。ここで推定した稻穀の生産総量ならびに稻作期間は、あくまでも目安として考えられたい。

参考文献

- 杉山真二・藤原宏志（1986）「根動細胞壁酸体の形態によるタケベ科植物の同定—古環境推定の基礎資料として—」『考古学と自然科学19』 p.69~84
- 藤原宏志（1976）「プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科栽培植物の珪酸体分析と定量分析法—」『考古学と自然科学9』 p.15~29
- 藤原宏志（1979）「プラント・オパール分析法の基礎的研究（3）—福岡・板付遺跡（夜ノ式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（*O.sativa*L.）生産量の推定—」『考古学と自然科学12』 p.29~41
- 藤原宏志・杉山真二（1984）「プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）—プラント・オパール分析による水田址の探索—」『考古学と自然科学17』 p.73~85

表4 試料1gあたりのプラント・オパール個数

A 地点		イネ	ヨシ属	タケベ科	ウシクサ族	キビ族
試料名	1	9,900	0	17,800	1,300	0
	2	7,900	1,600	11,800	1,600	0
	3-1	3,600	400	7,200	400	0
	3-2	2,100	800	12,900	400	0
	4	1,200	800	9,400	1,200	0
	5-1	3,600	0	10,600	1,200	0
	5-2	2,000	600	10,400	1,000	0
	5-3	5,000	400	13,900	1,200	0
	6	0	400	7,400	3,000	0
	7	0	0	1,800	900	0

B 地点		イネ	ヨシ属	タケベ科	ウシクサ族	キビ族
試料名	1-1	11,500	400	12,000	2,300	0
	1-2	8,300	0	13,100	800	0
	2	5,100	0	8,700	500	0
	3-1	2,300	0	6,500	1,400	0
	3-2	2,600	0	4,300	1,300	0
	4-1	1,400	0	6,300	3,400	0
	4-2	900	0	5,000	1,800	0
	5-1	2,400	0	15,200	3,100	0
	5-2	2,100	300	14,800	1,500	0
	8	0	0	900	0	0

B' 地点		イネ	ヨシ属	タケベ科	ウシクサ族	キビ族
試料名	5	4,100	900	22,200	2,300	0

表5 イネの生産量の推定

A地点

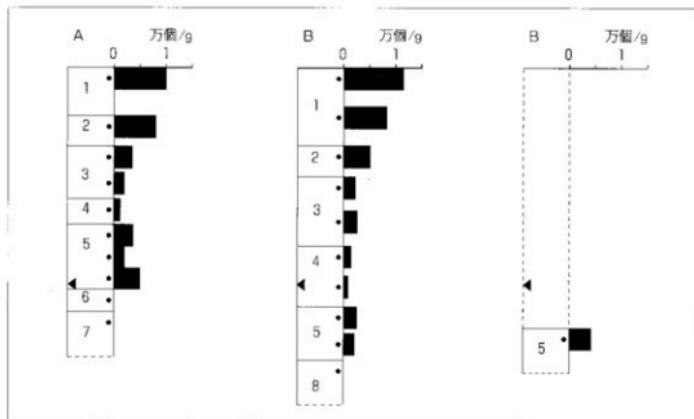
試料名	深さ cm	層厚 cm	P.O.数 個/g	仮比重	P.O.数 個/cc	稻わら重 t/10a·cm	稻稈重 t/10a·cm	稻穀総量 t/10a
1	0	11	9,900	1.28	12,600	2.41	1.30	14.28
2	11	7	7,900	1.41	11,100	2.12	1.14	8.00
3-1	18	6	3,600	1.55	5,500	1.05	0.57	3.40
3-2	24	6	2,100	1.50	3,100	0.59	0.32	1.92
4	30	6	1,200	1.48	1,700	0.32	0.18	1.05
5-1	36	5	3,600	1.36	4,800	0.92	0.49	2.47
5-2	41	5	2,000	1.41	2,800	0.53	0.29	1.44
5-3	46	5	5,000	1.26	6,300	1.20	0.65	3.24
6	51	5	0	1.32	0	0.00	0.00	0.00
7	56	—	0	1.39	0	0.00	0.00	—

B地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	P.O.数 個/g	仮比重	P.O.数 個/cc	稻わら重 t/10a·cm	稻稈重 t/10a·cm	稻穀総量 t/10a
1-1	0	9	11,500	1.15	13,100	2.50	1.35	12.14
1-2	9	9	8,300	1.15	9,500	1.81	0.98	8.81
2	18	7	5,100	1.40	7,100	1.36	0.73	5.12
3-1	25	8	2,300	1.45	3,300	0.63	0.34	2.72
3-2	33	8	2,600	1.45	3,700	0.71	0.38	3.05
4-1	41	7	1,400	1.53	2,100	0.40	0.22	1.51
4-2	48	7	900	1.50	1,300	0.25	0.13	0.94
5-1	55	6	2,400	1.30	3,100	0.59	0.32	1.92
5-2	61	6	2,100	1.30	2,700	0.52	0.28	1.67
8	67	—	0	1.26	0	0.00	0.00	—

B'地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	P.O.数 個/g	仮比重	P.O.数 個/cc	稻わら重 t/10a·cm	稻稈重 t/10a·cm	稻穀総量 t/10a
5	60	10	4,100	1.30	5,300	1.01	0.55	5.46

図178 イネのプラント・オバール密度
●印は試料を採取した箇所、◀印は50cmごとのスケール

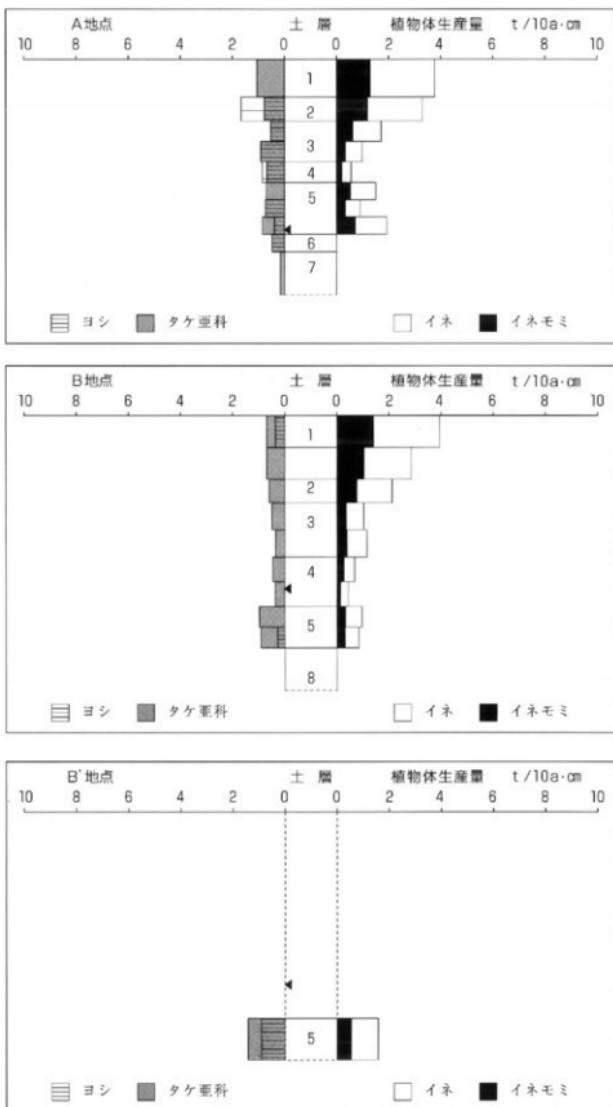


図179 おもな植物の推定生産量

◀印は50cmごとのスケール

(4) 大溝遺跡出土遺物の赤色顔料と漆塗り堅櫛の塗装構造について

本田 光子 (別府大学)
 岡田 文男 (京都造型芸術大学)
 成瀬 正和 (宮内庁正倉院事務所)
 志賀 智史 (別府大学文化財研究所)

愛媛県松山市大溝遺跡出土土器、石器に付着残存している赤色物の材質と付着状態を知るために顕微鏡による観察およびX線分析を行った。また、2点の漆塗り堅櫛について漆の塗装構造についても顕微鏡による調査をおこなったので併せて報告する。

出土遺物に赤色物が付着残存している場合、その赤色の由来として、第1は装飾を目的にした赤色塗彩、第2は赤色物の貯蔵容器、第3はいわゆる内面朱付着土器が考えられる。現在までの知見に寄れば、これらに用いられている赤色物は鉱物質の顔料であり、酸化第2鉄 Fe_2O_3 を主成分とするベンガラと、赤色硫化水銀 HgS を主成分とする朱の2種が用いられている。第1の装飾と、第2の貯蔵についてはベンガラと朱の両者が認められ、第3の場合は朱である。この他に古代の赤色顔料としては、四酸化三鉛を主成分とする鉛丹があるが、出土例はまだ確認されていない。ここではこれら三種類の赤色顔料を考えて調査をおこなった。なお、赤色塗彩遺物の塗装構造については、その制作された場所や時代・時期によりそれぞれ特徴を持つものもあり、薄片の顕微鏡観察が有効であるので、試料No18~37および漆塗り堅櫛についてはこれを行った。試料の一覧と分析結果を表に示す。

(本II)

1. 赤色塗彩土器と赤色物が付着する石器

顕微鏡観察

赤色顔料が比較的多量に付着している部分から小量を採取し、通常のプレパラートを作製するとともに、土器小片を採取しエボキシ樹脂に充填し最終的に薄片プレパラートも作製した。これらのプレパラートを反射光と透過光下で観察し、赤色顔料の種類や状態、塗装構造を調査した。

蛍光X線分析

No 1~9までは、宮内庁正倉院事務所設置の理学電機工業㈱製 蛍光X線装置、堀場製作所㈱製(X線管球；クロム対陰極、分光結晶；フッ化リチウム、検出器；シンチレーションカウンター、条件：印加電圧-印加電流；40KV-20mA、ゴニオメーター走査範囲(2θ)；10~65°、走査速度；2θ 8°/分、記録紙速度；80mm/分、フルスケール；2000cps、時定数；0.5秒-)、No18~41までは別府大学設置の堀場製作所㈱製の MESA-500 (条件：15kV-440μA；50秒、50kV-20μA；50秒、大気) をそれぞれ用い測定をおこなった。赤色物が比較的残りの良い部分と赤色物がない部分から、なるべく平らな部分を選んで測定した。赤色の由来となる主成分元素としては、鉄あるいは、鉄と水銀が検出され、鉛は検出されなかった。他には珪素、アルミニウムなどが検出されたが、これらは土器や石器そのもののに由来するので、表中では省いた。

X線回折

赤色の由来となる鉱物成分の検出を目的としてNo 1～9について実施したものである。宮内庁正倉院事務所設置の装置；理学電機㈱製 文化財測定用X線回折装置で、X線管；クロム対陰極、フィルター；バナジウム、検出器；シンチレーションカウンター、印加電圧-電流；25KV-10mA、発散スリット；0.34°、受光スリット；0.34°、ゴニオメーター走査範囲（2θ）；30～66° 走査速度；2θ 4°/分、記録紙速度；10mm/分、フルスケール；400cps、時定数；2秒の条件で測定を行った。

観察結果

顕微鏡観察によりベンガラの特徴を認め、蛍光X線分析により鉄が検出され、水銀や鉛は検出されなかったものはベンガラ、顕微鏡観察により朱の特徴を認め、蛍光X線分析により水銀が検出され、鉛は検出されなかつたものは朱と判断した。

赤色塗彩遺物

土器の外面に赤色塗彩の痕跡と思われる赤色物が付着しているが、その残存状態は、肉眼観察から顕著な塗膜があるもの（8, 9, 13, 18）とないものとに大きく二つに分かれる。後者はさらに、A：赤色顔料が器表面に粉状に残るもの（7, 25）と、B：器面と一体化し層状に残るもの（2～4、11, 12, 15～17, 20～24, 25～37）とに分かれる。

顕著な塗膜があるもののうちNo18については写真1, 2に示したように、2～3回の朱漆の重ね塗りが観察される。

(A) については從来から赤色顔料を塗布するための固着剤（有機物）が劣化して赤色顔料（無機物）だけが残存したものと理解されている。今回、このタイプのNo25は朱だけが塗られているが、明瞭な層の痕跡を観察することができない。漆を使用していない可能性があるかもしれない（写真3）。

(B) はいわゆる「丹塗り」と呼ばれる装飾技法で、土器の焼成前に酸化鉄、含水酸化鉄を主成分にした顔料やスリップなどを塗り、焼成によって赤く発色させたものと観察される。土器胎土が黒色に焼成された状態で「丹塗り」が観察されるもの（20）、器表面の胎土が白色に焼成された状態で「丹塗り」が観察されるものに分かれる。後者には「丹塗り」下により緻密な層が認められるもの（23, 24, 31, 34, 35, 37）とそうでないもの（21, 22, 25～30, 32, 33, 36, 38）が認められる。

赤色物が付着した石器

No38は蔽石であり、端部に赤色を帯びた土が表面だけに微量付着しているが、これを赤色顔料の原料として捉えることは無理であろう。No39にはベンガラが付着しているが、これも表面だけに僅かに残っており、本来的にこの石器に伴う物とは考えがたい。No40、41は赤色顔料ではなく、後世の付着物かもしれない。（本田）

2. 壇 横

2点の壇横は歯を結束し、その表面を漆で加飾したもので、試料は壇の棟の部分だけが遺存したものである。

試料と調査方法

2点の壇横（356, 357）について、棟の破片の端部から数ミリ角を採取し、それをさらに3分割し、それぞれをエポキシ樹脂に充填した。ついで、漆の塗装構造を観察するために塗膜の断面を研磨し、最終的に10数μmの薄片に仕上げ、反射光下と透過光下で塗装構造や混和材の種類を調査した。

観察結果

堅櫛（356）

塗装構造は下から塑形層（下地層含む）、透明漆層、赤漆層の順である。透明漆層と赤色漆層をあわせた厚さは約200 μm である。反射光および透過光による各層の検鏡結果は以下のとおりである。

反射光：塑形層は光を吸収して黒褐色に近い色を呈している。その上面に黄褐色で比較的均一な厚さからなる層、黒色で途切れがちな層、さらに均一な厚さの黄褐色層、さらにその上に黒色で薄い層の順に塗膜が観察される。最上面には赤色の漆層が1層観察される。透明漆層の厚さは全体で約160 μm 、赤色漆層の厚さは約40 μm である。

透過光：塑形層の部分は黄褐色を呈しており、表面に近い部分ほど漆分が多い。層中に無色の鉱物が観察される。鉱物の大きさは60 μm 程度である。塑形層は2層からなるようで、下層には200 μm 近い大きさの鉱物粒子が認められるにたいし、表面付近の粒子はそれよりもずいぶん小さい。塑形層の表面はあまり平滑でない。ついで、反射光で観察された2層の黄褐色層は不純物が混じり、透明度が低く、反射光で黒色に観察された漆層は透過光下で透明度が高い。

表面の赤色漆層は単層で、赤色顔料は10 μm 以下の朱の粒子が観察される。

堅櫛（357）

塗装構造は下から塑形層（下地層含む）、赤漆層の順である。各層の検鏡結果は以下のとおり。

反射光：塑形層は光を吸収して黒褐色に近い色を呈している。その上面に色の異なる赤色漆層が3層確認される。赤色漆層は下層がやや暗赤色であるにたいし、中層、上層には顔料の粒子が目立つ。

透過光：塑形層部分は黄褐色を呈しており、層中に無色鉱物が観察される。表面に近い部分ほど褐色が濃い。無色鉱物の大きさは約100 μm 以下。塑形層の表面はあまり平滑でない。ついで、反射光で観察された3層の赤色漆層があるが、そのうち、下から1層目にはパイプ状ベンガラがわずかに混じり、2層目、3層目には朱の粒子が認められる。朱の粒子の分布はやや疎らである。朱の粒子の長径は約15 μm 以下である。（岡田）

まとめ

大淵遺跡出土の赤色塗彩土器には、従来から「縄文」的漆工技法として理解されてきた「重ね塗り」の他に、多量の「丹塗り」が存在することがわかった。この「丹塗り」が黒色土器に施されたり、明るく焼き上げた土器に「丹塗り」ではなく「朱塗り」を施したりと、多様な展開をみせている。「丹塗り」もスリップ状の層の有無などでさらに細別される可能性もある。

堅櫛はベンガラと朱の両者を用いた「縄文」的な重ね塗りのものだが、No19の有機物塗彩層は朱の1回塗りである可能性が高い。該期の赤色塗彩遺物に認められる、赤色顔料とその塗彩技法は多様であり、今後の調査に期待される。

今回、土器の赤色顔料としては認められなかったパイプ状ベンガラの使用が堅櫛に認められており、該期の土器や漆器の製作（地）と赤色顔料の選択を考える上でも興味深い事例である。

調査の機会を戴きました松山市栗田茂敏氏と梅木謙一氏を始め関係者の方々に深謝いたします。

（本田）

大沢遺跡出土赤色塗彩遺物の調査資料一覧と分析結果

	出土地点	顕微鏡観察		蛍光X線分析		X線回析		赤彩技法 (赤色塗料の種類)	器種・部位	報告書番号
		ベンガラ	朱	鉄	水銀	赤鉄銅	辰砂			
1	N1E2 A区溝地5層	○	×	○	×	?	×		壺胴部	
2	N1E2 A区溝地5層	○	×	○	×	×	×	丹塗り(ベンガラ)	壺胴部	659
3	N1E2 A区溝地5層	○	×	○	×	×	×	丹塗り(ベンガラ)	壺胴部	663
4	S1E3 A区溝地5層	○	×	○	×	×	×	丹塗り(ベンガラ)	壺胴部	658
5	S1E3 A区溝地5層	×	×	○	?	×	×	朱漆?	壺頭部	
6	S1E4 A区溝地5層	×	×	○	×	×	×	汚れか	壺口頭部	655
7	N1E2 A区溝地5層	×	○	○	○	○	×	朱漆(朱)	浅鉢口縁部	650
8	N1E2 A区溝地5層	×	○	○	○	○	×	朱漆(朱)	浅鉢口縁部	646
9	N4E1 SX-1	×	○	○	○	○	×	朱漆(朱)	浅鉢口縁部	
10	S3E5 A区溝地5層	?	×					焼け	壺口頭部	653
11	N1E2 A区溝地5層	○	×					丹塗り(ベンガラ)	浅鉢口縁部	644
12	N1E2 A区溝地8層	○	×					丹塗り(ベンガラ)	浅鉢口縁部	293
13	S1W1 A区溝地9A層	?	?					朱漆(朱)	浅鉢口縁部	202
14	N1E2 A区溝地5層	?	×					焼けの発色	壺底部	
15	T-11 A区溝地8層以下	○	×					丹塗り(ベンガラ)	浅鉢胴部?	
16	A区溝地	○	×					丹塗り(ベンガラ)		
17	A区溝地	○	×					丹塗り(ベンガラ)		
18	A区溝地	×	○	○	○	○		朱漆	浅鉢頭部	
19	A区溝地	×	○	○	○	○		朱(木製品?)		
20	A区溝地	○	×	○	×			丹塗り(ベンガラ)	浅鉢胴部?	
21	N1E1 A区溝地	○	×	○	×			丹塗り(ベンガラ)		
22	S1E4 A区溝地	○	×	○	×			丹塗り(ベンガラ)		
23	N1E1 A区溝地	○	×	○	×			丹塗り(ベンガラ)		
24	N1E2 A区溝地	○	×	○	×			丹塗り(ベンガラ)		
25	N2E1 A区溝地	×	○	○	○			朱塗り(朱)	浅鉢胴部	
26	N1E2 A区溝地	○	×	○	×			丹塗り(ベンガラ)	壺胴部	
27	S1E4 A区溝地	○	×	○	○			丹塗り(ベンガラ)	壺胴部	
28	S4E5 A区溝地	○	×	○	○			丹塗り(ベンガラ)	壺胴部	
29	A区溝地	○	×	○	○			丹塗り(ベンガラ)	壺胴部	
30	A区溝地	○	×	○	○			丹塗り(ベンガラ)	壺胴部	
31	A区溝地	○	×	○	○			丹塗り(ベンガラ)	壺胴部	
32	S1E4 A区溝地	○	×	○	○			丹塗り(ベンガラ)	壺胴部	
33	S1E4 A区溝地	○	×	○	○			丹塗り(ベンガラ)	壺胴部	
34	S1E4 A区溝地	○	×	○	○			丹塗り(ベンガラ)	壺胴部	
35	S1E4 A区溝地	○	×	○	○			丹塗り(ベンガラ)	壺胴部	
36	A区溝地	○	×	○	○			丹塗り(ベンガラ)	壺胴部	658?
37	A区溝地	○	×	○	○			丹塗り(ベンガラ)	壺胴部	663?
38	A区溝地	×	×	○	○			?		
39	A区溝地	○	×	○	○			ベンガラ	敲石	
40	A区溝地	×	×	○	○			?		
41	A区溝地	×	×	○	○			?		
42	A区溝地		○					漆・朱	堅櫛	356
43	A区溝地	○	○					漆・朱・ベンガラ	堅櫛	357

大潤遺跡

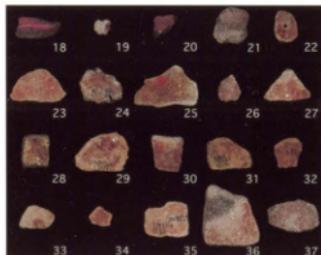


写真1 赤色塗彩土器外面 (No.18~37)



写真2 赤色塗彩土器内面 (No.18~37)

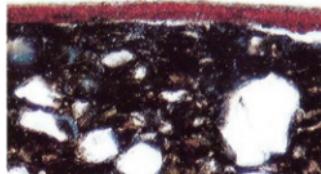


写真3 赤色塗彩土器 No.18

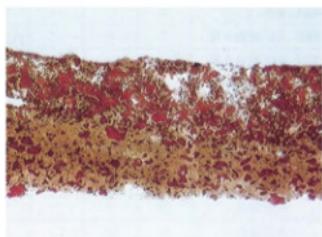


写真4 赤色塗彩土器 No.18



写真5 赤色塗彩土器 No.20

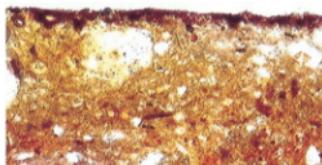


写真6 赤色塗彩土器 No.23



写真7 赤色塗彩土器 No.25

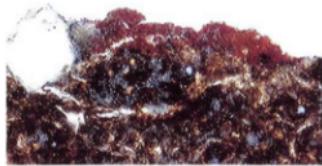


写真8 赤色塗彩土器 No.30

図180 赤色塗彩土器の塗装構造顕微鏡写真



写真9 堅櫛 (No.356)

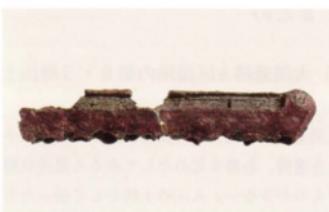


写真13 堅櫛 (No.357)



写真10 堅櫛 (No.356) 反射光×100

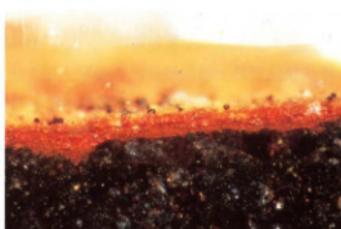


写真14 堅櫛 (No.357) 反射光×100

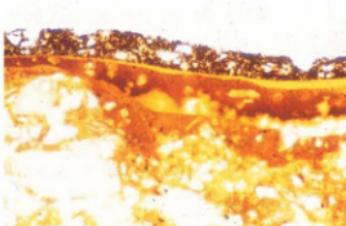


写真11 堅櫛 (No.356) 透過光×100

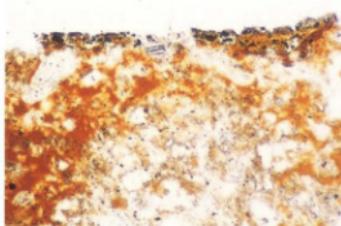


写真15 堅櫛 (No.357) 透過光×100

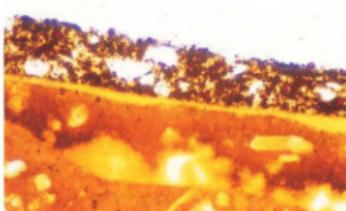


写真12 堅櫛 (No.357) 透過光×200

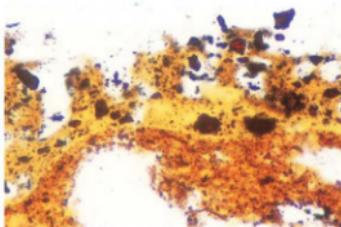


写真16 堅櫛 (No.357) 透過光×400

図181 漆塗り堅櫛の塗装構造顕微鏡写真

4. まとめ

(1) 大渕遺跡A区湿地内第6・5層出土の縄文晚期土器について

大渕遺跡では縄文時代後期中葉から晩期後半までの各期の遺物を出土しているが、A区、B区を通じた各遺構、各層を見わたしてみると混淆状態での出土が多く、遺物の量のわりには良好な一括性を示すもののが少ない。A区の土坑として扱ったものも、実際のところ掘りこみとしてある程度しっかりしたプラン、深さを備えるものはSK-1、あるいはSK-6とした2基の土坑のみであり、また、B区の土器溜まりとして扱ったSX-1の遺物も若干混ざっているようで、ここで問題にしようとしている突帯文期の土器について検討しようとすると資料的にはかなりの制約を受けざるを得ない。そこで、A区の湿地内の堆積各層について、その出土遺物をからめながら考えると、中粒砂層9層は下位の黒色腐蝕質粘土層堆積後、この粘土層を削り、とりこみながら堆積した層であると考えられる。この層の最下部9C層には、縄文後期中葉から末葉の遺物が含まれる。ちなみにこの腐蝕質粘土層のC¹⁴年代は 3160 ± 85 yB.Pという値が示されている^①。基本的には腐蝕質粘土層には遺物は含まれないので、遺物は下層からとりこんだものではなく、砂層自身がいずれかから運んできたものということになる。9層もその上位9A層、さらに8・7層になると後期から突帯文まで含めた混淆状態が形成され、6・5層になって夾雜物の少ない、比較的短い時間幅の遺物が包含されている。つまり、9A層から6・5層の堆積までにはさほど時間を要さず、ただ堆積環境が順次安定した環境に変化していくことを示している。したがって、ここで扱うのはこの6・5層の比較的安定した堆積環境での遺物をメインとすることとする。層位の項でも述べたように、5層と6層の違いはその粒度の違いであって、暗褐色シルトの5層が下位に向かって漸移的に沙質を帯びてゆき、6層に至って砂であると認識できるといった違いであり、かなり分層の困難な層ではあるが、自然科学分析の項で詳述されるプラント・オ・パールの分析結果でも明らかのように、6・5層に含まれる量には明確な差があって、この分層の有意さを物語っている。しかしながら、このような層の見た目の違いを僅かな土層観察畦を頼りに、ある程度面として掘ったことに加えて湧水にも遮られ、両層の遺物がしっかりと層位どおりにとりあげられない可能性は充分にあるが、ここでは恣意的な資料操作を行うことは避け、とりあえず現況で検討しておき、今後に資することとしたい。なお、ここで用いる分類名は次節で述べる船ヶ谷遺跡出土遺物も含めた分類とする。

まず、器種構成について6層287点、5層1048点の遺物をカウントした。破片の大小や完形に近いものの別なく、個数を単純にカウントしてどの程度の精度のパーセンテージが得られるのかははなはだ不安ではあるが、どの器種についても壊れて破片になるまでの条件は同一という前提に立った上のカウントである。6層では深鉢47.0%、浅鉢53.0%、壺は0%であり、5層では深鉢58.5%、浅鉢40.4%、壺が1.1%となり、傾向としては5・6層で深鉢、浅鉢の比率が逆転し、新しい器種として5層段階になって壺が加わることになるが、浅鉢の構成比率の減少分を補完できるような量ではない。

突帯文深鉢では緩く脇部が張って、口頭部が外反する所謂屈曲型のものがほとんどで、砲弾型のものは、図103に図示されたA区第5層の6点のほか5点計11点である。また脇部で稜を持って屈曲するものは同じく5層、図104の584と2条突帯の585の2点のみである。口縁部外面に突帯を持つ1条突帯のもの（C類）が6層では深鉢全体の75.6%、脇部にも突帯を伴う2条突帯のもの（E類）は

6・5層を通じて1点しか確認できないが、胴部突帯をもつ破片を2条突帯と仮定してみても6層では135点中2点のみ、1.5%である。なお、口縁部突帯を持たないもの（A・B類）が22.9%ある。5層のC類は86.3%、胴部突帯を6層と同様2条突帯として扱ってE類が1.1%、A・B類深鉢が12.6%となり、深鉢では無突帯のものが減少し、1条突帯深鉢が増加している。1条突帯文深鉢C類はそのほとんどが口唇部、突帯に刻み目を持っており、6層では両部位ともに刻み目を持たないものは1点、また口唇部を刻み突帯を刻まないものが2点、逆に突帯を刻み口唇部を刻まないものが1点あるのみで、96.1%のものが両部位ともに刻まれている。5層では98.3%のものの両部位に刻みが施されている。

口端部の形状は平坦面を持つものが最も多く、6層で57.1%を占め、以下、丸みを持つもの26.0%、先尖りになるもの16.9%で、5層では順に40.7%、31.5%、27.8%となり、面を持つものが減少している。

突帯の位置を口唇部に近接するもの、口唇部から0.5~1cm下がったところにあるもの、それ以下の位置にあるものを順にカウントすると、6層では6.3%、81.2%、12.5%、5層では11.4%、82.7%、5.9%で、口唇部から離れた位置にあるものの比率が下がっている。

浅鉢のうち鍵形の口頭部を持つもの（E類）には外反する長めの頸部を持つ深鉢風のもの（E1類）とそうでないもの（E2類）とがあるが、口縁部の破片だけでは見分けがつかないものが多いので、これを一括して扱うと、6層ではこれが19.1%、胴部で屈曲して口頭部が外反しながら開くもの（B2類）が65.1%、逆「く」の字口縁（G類）には口縁部の長短等いくつかのバリエーションがあるが、これも一括して扱うと5.3%、楕・皿状のもの（H類）が10.5%である。なお、5層ではE類20.1%、B2類47.5%、G類27.9%、D類4.5%となり、E類の比率に変動はないが、G類が大幅に増加する。なお、B2類のなかには彷彿形が隅九方形を呈するものがあり、これらのうち一辺が20cm以下程度の小型方形浅鉢をF類として分離して扱うと、5層で17点4.0%という値になる。ちなみに6層では4点、2.6%である。

以上、大潤遺跡第6・5層の突帯文、およびこれに伴う土器についてその器種構成や、属性について大雑把にみてきたが、数字でみる限り傾向として第5層のほうが新しい様相を示していることがわかる。以下ではこれら大潤遺跡の突帯文期の遺物を他の遺跡との関係でみていくことにする。

（2）船ヶ谷遺跡出土の縄文晩期土器（図182~192）

松山平野では、大潤遺跡の調査以降、いくつかの遺跡において晩期後半突帯文土器を出土する遺跡が調査され、その一部は既に報告、公表されている。ところで、大潤遺跡を含めたこれらの遺跡からの出土遺物を検討するうえで欠かせないのが、本調査地の南1kmに位置する船ヶ谷遺跡出土の遺物群である。この遺跡は、愛媛県青果農業共同組合連合会松山工場の拡張工事に伴い、1975（昭和50）年に愛媛県教育委員会（以下、県教委）によって調査が行われ、1984（昭和59）年には「松山市・船ヶ谷遺跡」として報告書の刊行もみている。しかしながら、調査によって出土した多量の遺物が必ずしもこの報告において網羅されているわけではなく、船ヶ谷遺跡の実態については必ずしもよくわかっていないのが現状である^⑫。そこで、今回県教委の全面的な協力を得て資料調査を実施することができたので、本書において特に土器について資料化しておきたい。ただし、調査では住居址や柱穴、河

川などの遺構等に伴う遺物が多くあるようであるが、図面資料の散逸等で細かいチェックをかけることはできなかった。したがって、船ケ谷遺跡で何がどのくらい出土しているのか程度の紹介にしかならないがご了解いただきたい。なお、紙数の制約上縮尺を1/6とせざるを得なかつたこともあわせてお断りしておく。

大雜把にみると、深鉢には粗製で条痕や撫で、あるいは削りによる外面調整が施され、口唇部の刻みや口縁部内面の刺突以外は無文のもの（A類）がまづある。さらに頸部に沈線や刺突による施文を施され、口縁部突帯を持たないもの（B類）と口縁部外面に突帯を持つもの（C類）との大きさは3種があり、また、磨きなどを施された浅鉢風のもの（D類）、さらに後期の遺物が数点みられるという構成である。

A類はカウントされた晩期深鉢878点のうちの359点、40.9%、B類が456点、51.9%、C類が63点、7.2%という比率で、あきらかに大洞6・5層とは異なって、古いありかたを示している。そこで、これらの各類の土器を個別に検討して、大洞との違いをみてみることにする。

まず、A類のうちの1179～1181は、口唇部無文のもの（A 1類）で、このようなものが51点、深鉢全体の5.8%存在している。このうち、外面調整に頸部まで条痕を残すものが（A 1 a類）8点、撫でや削りで仕上げるもの（A 1 b類）が43点ある。1182～1185は口縁部内面に刺突が施されるもの（A 2類）で、55点、6.3%ある。外面調整の内訳は、条痕を多用するもの（A 2 a類）17点、38点が削りや撫でである（A 2 b類）。1186～1201は口唇部を刻まれるもの（A 3類）、252点、28.7%である。これについても外面調整の内訳は、条痕（A 3 a類）21点、削り・撫で（A 3 b類）が231点である。大洞6・5層のうち特に6層にはA 2・3類のうち、頸部に条痕調整を伴わないA 2 b類、A 3 b類が存在し、また5層にA 1 b類が1点だけ存在する。

B類には、胴部と頸部の境の刺突と口唇部の刻み目、もしくは口縁部内面刺突を組み合わせたもの（B 1類／1202～1204）、これに縱方向に垂下する刺突が加わるもの（B 2類／1205～1208、1212～1220）、さらにB 2類に頸部沈線施文が加わったもの（B 3類／1221・1222）、また頸部沈線施文と口唇部刻み目または口縁部内面刺突が組み合わされたもの（B 4類／1237～1241）がある。この一群の胴部と頸部の境には刺突ではなく沈線が施されたり段が形成される場合がある。そして確定ではないが、1223～1225はB 1類に頸部沈線施文が組み合わされている可能性がある（B 5類）。これらのうち、胴部と頸部の境に刺突が確認できるもの、つまりB 1・2・3・5類を合計した値であるが、この点数が162点、うち確実にB 2類と認定できるもの22点、2.5%、B 3類と確認できるものが3点である。また、頸部と胴部の境の刺突と頸部沈線の双方が確認できるものが18点、2.0%である。これらB類のうち大洞6・5層に存在するものはB 1類と4もしくは5類で、B 2・3類は存在しない。

C類にもいくつかバリエーションが存在する。まず、口唇部に接してはつてとした突帯が貼り付けられ、ほとんど口端部の外面下方への肥厚帯のようになっているもので、突帯、口唇部ともに刻まれる（C 1類／1259～1264）ものがある。突帯上の刻みは大きく1261では巻き貝殻頂を用いた刺突であつたりする。また口唇部の刻みとはいうものの1259や1260では二枚貝の殻表の押し引きによる単位の大きな浅い圧痕である。1261では外方に傾いた面をなす口唇部の内端に小さなV字の刻みを加えている。1262や1263の突帯も口唇部に接して付けられており、厚みはないが幅広で、やはりボリュームがあり、刻みも大きい。大洞6・5層には存在しない深鉢である。こういった深鉢C 1類のような特徴を持ったものには、例えば大洞遺跡A区SK-6出土の深鉢（図21/31）にみられるようなものの

ま
と
め

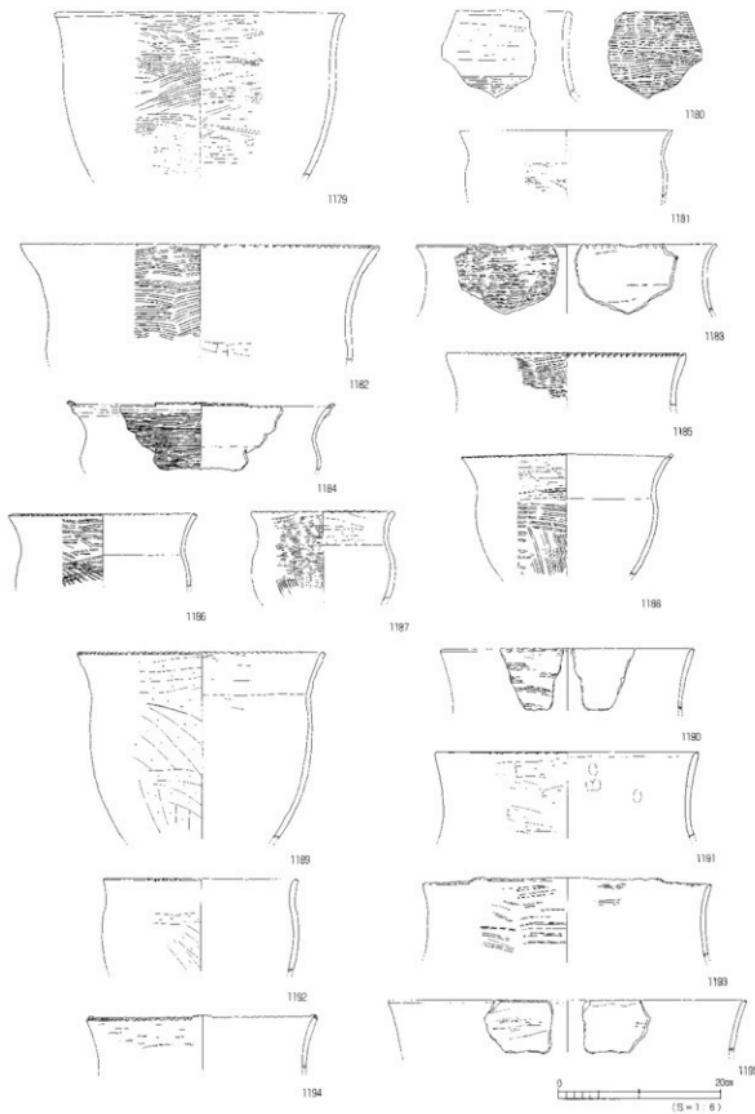


図182 船ヶ谷遺跡出土遺物(1)

大 溝 遺 路

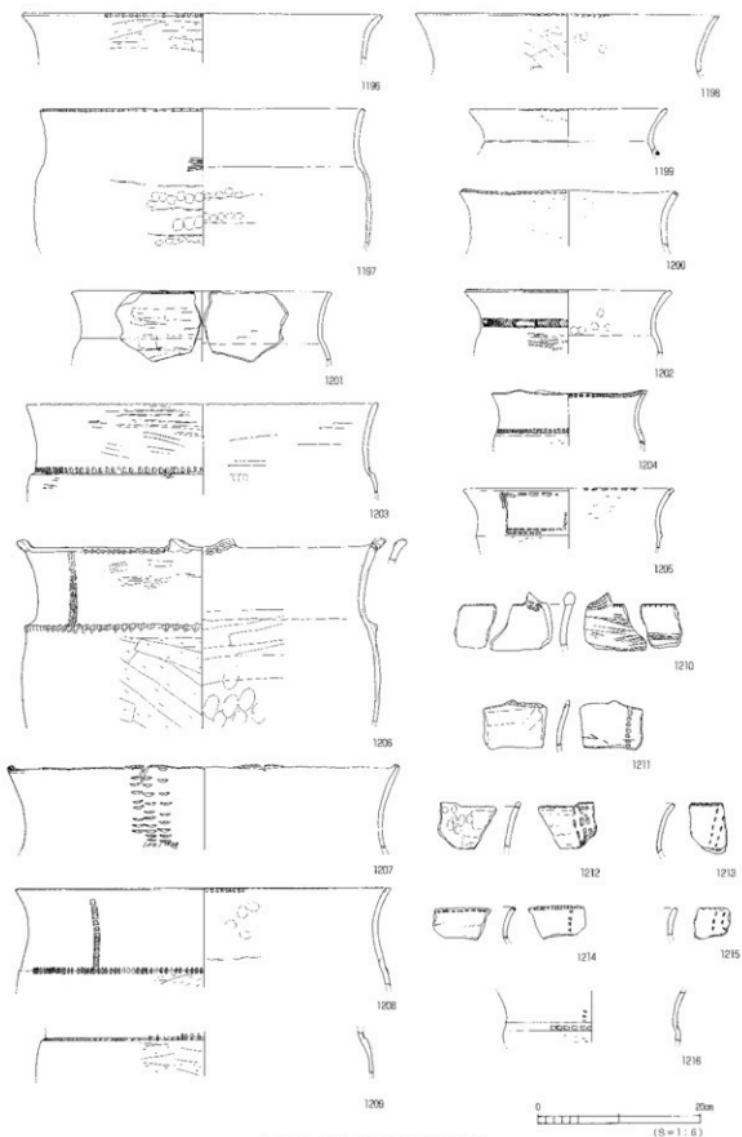


図183 船ヶ谷遺跡出土遺物(2)

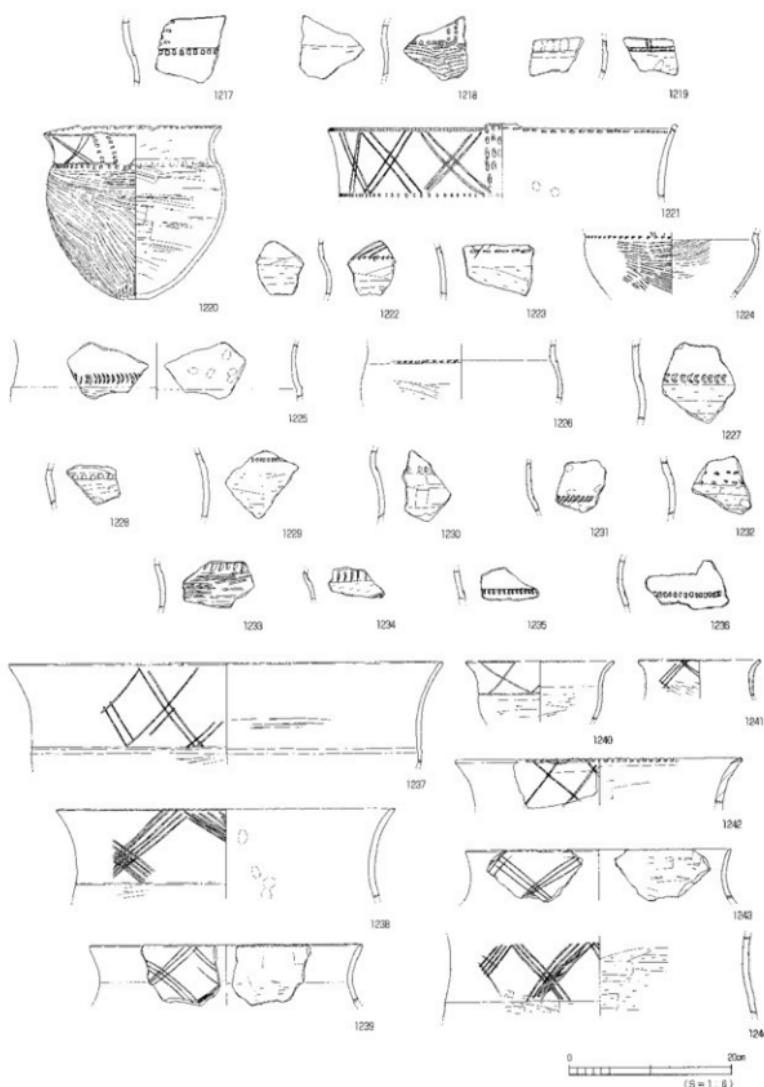


図184 船ヶ谷遺跡出土遺物(3)

大 洞 遺 跡

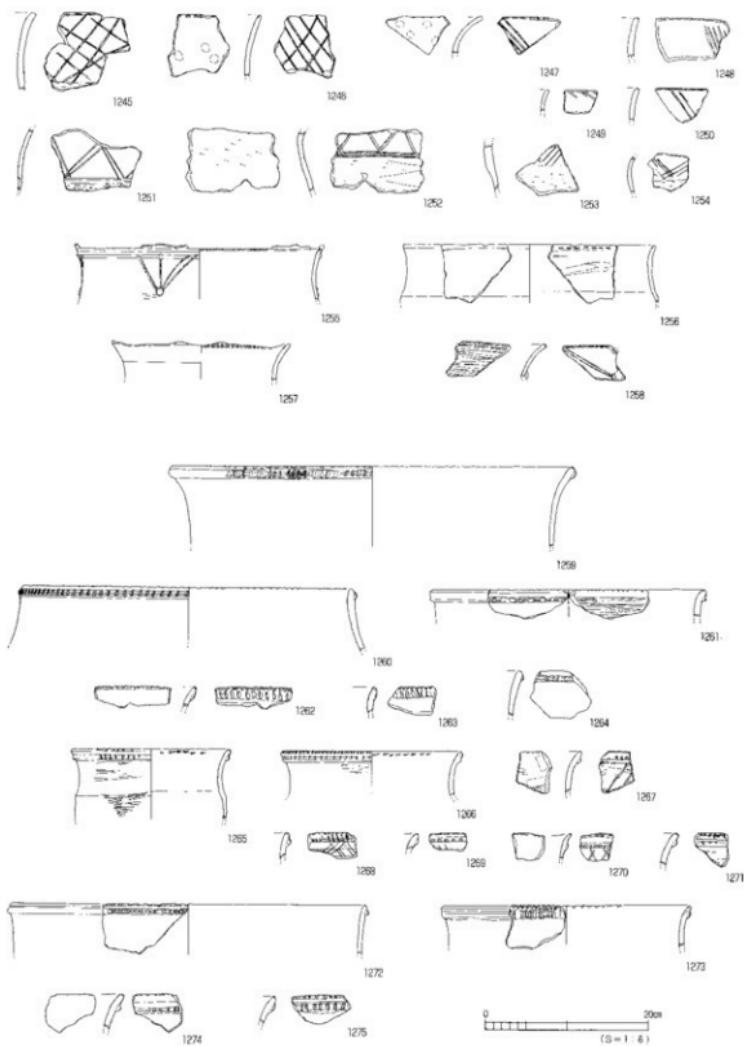


図185 船ヶ谷遺跡出土遺物(4)

影響を考えておきたい。A区の遺構群のなかでは最も遺存のよい土坑SK-6から出土した31は、外下方に傾いた口縫端面の内外の角を刻むことに特徴がある。共伴する浅鉢も後述されるように古い特徴を持ったものである。大潤でのこのような例は9A層でも一例確認することができる。C2類1265～1270は、断面三角形の突帯の頂部を刻まれるのではなく、三角形の上辺にあたる面に刺突が加えられるもので、このようなものが図示された6点存在する。1267・1268では口縫部内面刺突を伴う。また、破片1点しかないので分類はしないが1271は口縫部の刻みが口縫部平坦面の内外端に施されるもので、このような例およびC2類は大潤6・5層にはない。ちなみに大潤ではB区SX-1にそれぞれ1例ずつ例がある(図148/976・986)。このような、大潤からみれば異形ともいえる突帯文深鉢が30点、深鉢全体の3.4%、突帯文深鉢の47.6%ある。C3類1272～1280はしっかりとした口縫部平坦面を持っており、突帯の位置が口縫部から大きく離れた位置にあってみたり、突帯にボリュームがあつたり、刻みが大きなものなどで、大潤6・5層にはあっても僅かなもので、大潤に存在しても全く違和感のないものはC4類とする1281～1284程度である。このC3・4類が28点、深鉢全体の3.2%、突帯文深鉢の44.4%を占めている。なお、突帯や口縫部を刻まないものも5点存在している。

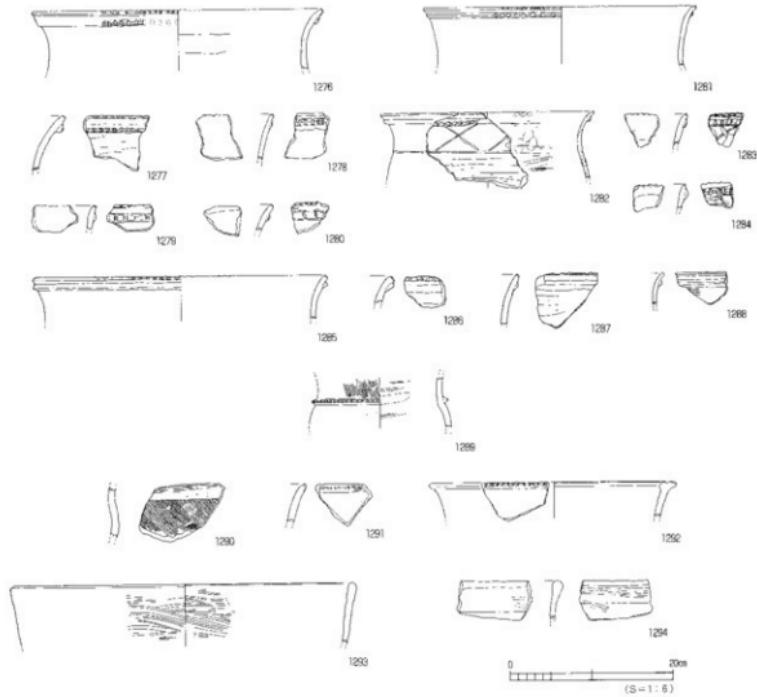


図186 船ヶ谷遺跡出土遺物(5)

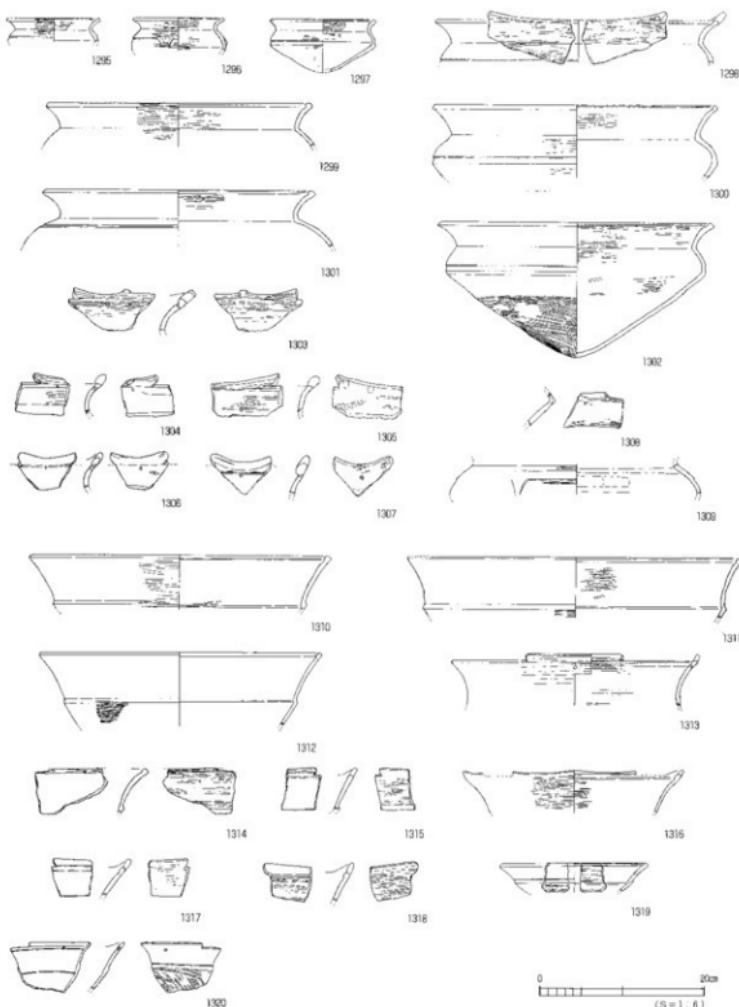


図187 船ヶ谷遺跡出土遺物(6)

1255～1258はD類としている浅鉢風に調整されているもので、1255や1258では頸部と胴部の境に円形浮文が貼られ、この部分で収束する沈線施文が頸部に施されている。このようなものは大渦6・5層には存在しないが、1256のように磨かれて口縁部内面施文を施されるものが6層に存在する。

1289は外面の調整に刷毛目が用いられており、弥生土器と考えられるもの、1290～1294は後期の深鉢である。

浅鉢には多彩な器型があるので、主だったものだけを分類しておきたい。まず外開きの口縁端部の内面に粘土帯を貼り付けて玉縁状に肥厚させるという特徴を持つものがあり、器型的には数種のバリエーションがある。A類1295～1309は、玉縁状の口唇部を持ち、比較的短い口頭部が強く外反して外上方に広がるもので、胴部が強く張り、この胴張り部やその上位に段が巡るものである。この段の部分に逆台形状の粘土板を貼り付けられることがある。底部は尖り気味の丸底で、外面底部から胴張り部のやや下位までは二枚貝条痕をそのまま残し、以上の部位および内面を磨いている。口縁部には鱗状あるいはリボン状の突起が伴うことがある。B類1310～1320は、胴部と頸部の境で稜を持って屈曲し、直線的あるいは緩やかに外反しながら外開きになる比較的長めの口頭部を持つもので、鱗状の突起を付されることがあるもの、口端部の肥厚が小さくなる1320のようなものも存在する。このB類には、近似した器型で口唇部の肥厚がなく、しばしば口縁面を刻まれるものがあり（1321～1326）、したがってこれをB2類とし、前者をB1類としておく。B1類と同様の口頭部を持つが、胴部が稜を持って屈曲せず内湾するもの、1327～1333をC1類とする。このC1類にも口唇部の肥厚の度合いが小さく1332のようなものがある。この器型にも1340のように口唇部の肥厚がないものがあり、B類同様、これをC2類としておく。さらに同様の口縁部で底部から口縁部まで単純に直線的に広がる深皿状のものがあり、これをD類とする。内面と外面口縁部のやや下位までを磨かれ、この部分あたりでわずかに外反する。外面の以下の部分は二枚貝条痕である。ちなみに、この器型のものにも口唇部の肥厚を持たないものがあり、前者をD1類、後者をD2類としておく。

所謂、鍵形口縁を持つものをE類とし、このうち、外反する長めの頭部を持ち胴部が張るもの、1346～1358をE1類、深皿状の器型のもの、1359～1372をE2類とする。1402～1404は小型の方形浅鉢で、これをF類、船ヶ谷では逆「く」の字といわれる器型の典型的な浅鉢は存在しないが、1409や1410のようなものがあるので、このようなものを含めて逆「く」の字口縁を持つ浅鉢をG類とし、椀、皿状のものをH類としておく。また、1392～1401のように口縁部内面に2条の凹線が巡るものがあり、1398～1401のように凹線間の凸部が細くなってしまうものもあり、一応I類としておくが場合によつては、A～D類の口縁部の突起部分の破片がこれに混ざると見分けがつかないことがある。なお、F類の1402・1403の口縁部もこの形態をなしている。

さて、浅鉢でカウントされたものは、総数792点である。このうち、口唇部を玉縁状に肥厚させるものの総数は294点、37.1%、つまり器型の特定はできないがA、B1、C1類に属するものの総数である。D1類は口縁部に近い部位以下に二枚貝条痕が施されるので、これらとは別にある程度特定することができる。この294点のうちA類と特定できるものの20点、B1類18点、C1類22点である。D1類と確認できたものは117点であった。この種の口縁部を持つ浅鉢は、大渦では6層、5層にそれぞれ1点ずつ例があるが、基本的には存在しないといってよい。ちなみにこの種の浅鉢がある程度良好なかたちで確認できるのはB区S X-1である。B類のうち口唇部内面肥厚がないもの、B2類は6点、0.8%、大渦の特に第6層で普遍的にみられる浅鉢のひとつであり、船ヶ谷にはないが、C2類

も6・5層にある程度存在している。D2類は船ヶ谷では僅かに2点、大潟でもさほど数は多くないが6・5層で数点確認することができる。

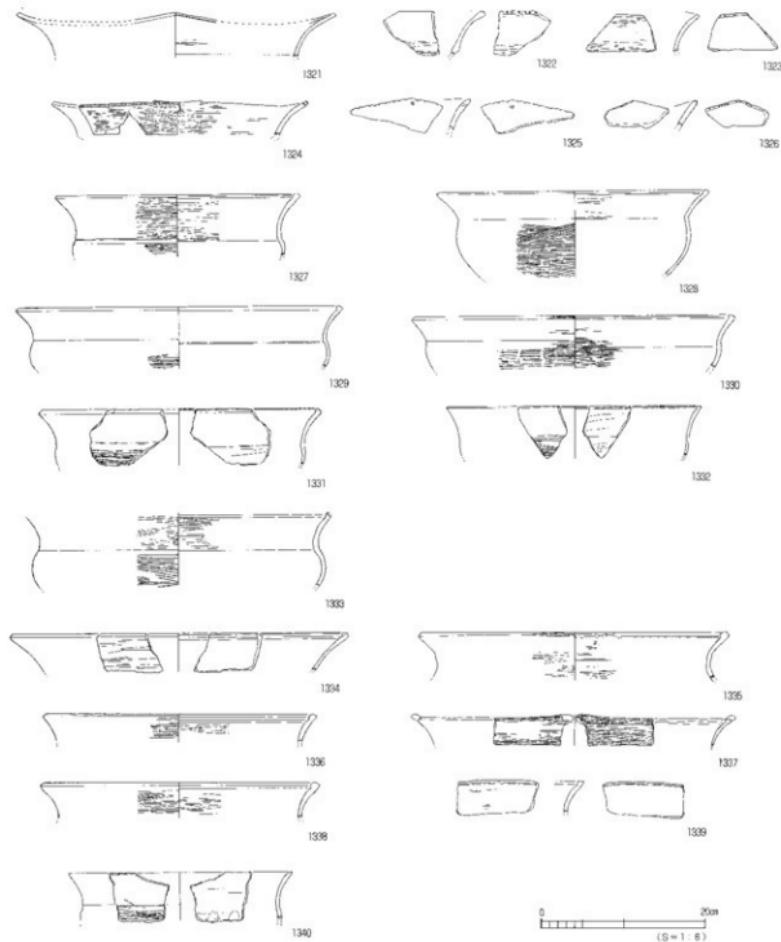


図188 船ヶ谷遺跡出土遺物(7)

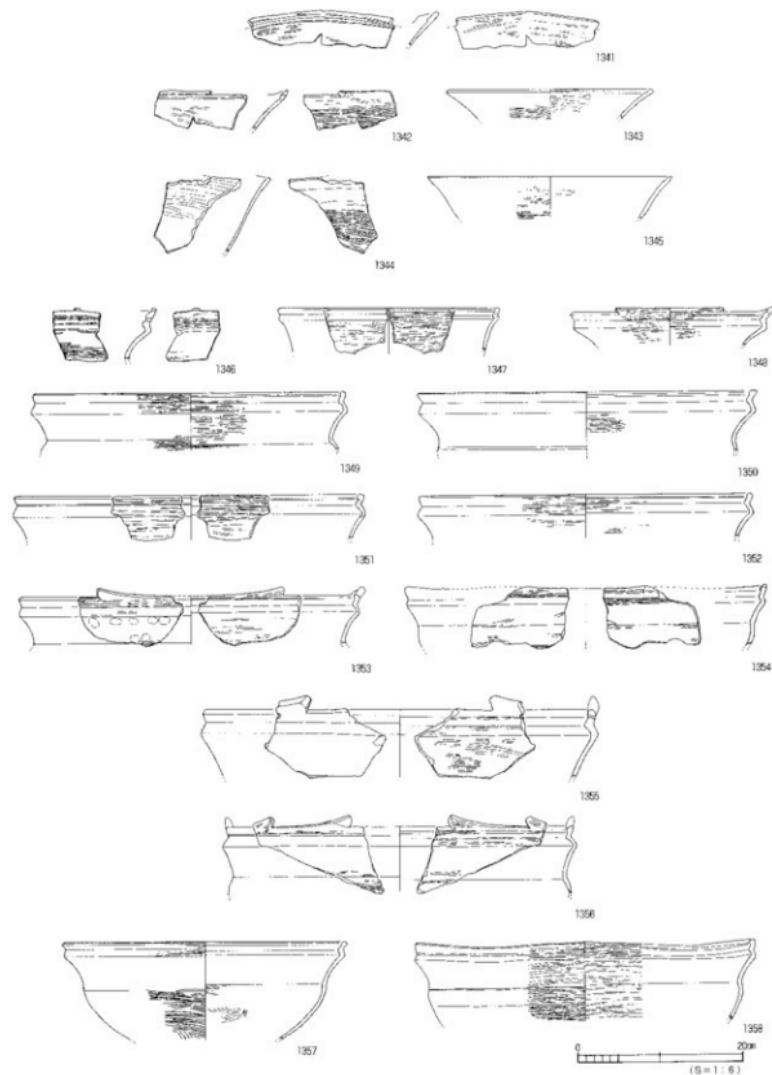


図189 船ヶ谷遺跡出土遺物(8)

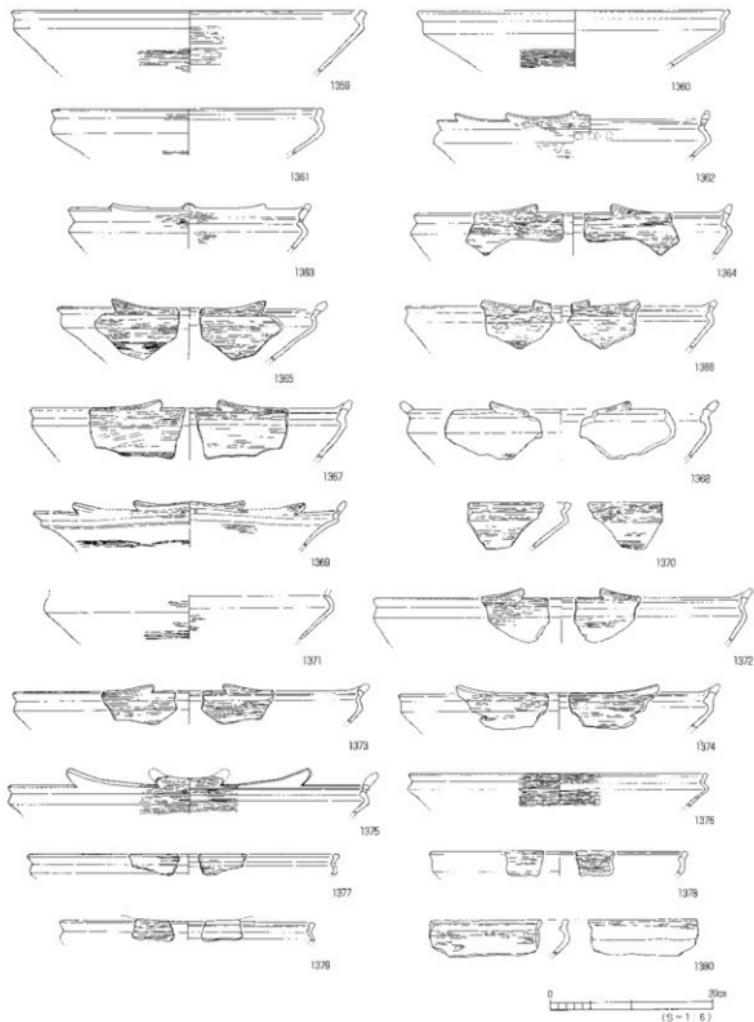


図190 船ヶ谷遺跡出土遺物(9)

浅鉢E類の総数は343点、43.3%で、E 1類と特定できるもの29点、E 2類と特定できるもの70点である。これらE類は大湊6・5層に一定量存在し、器種構成の一角を占めている。小型方形浅鉢F類は12点、1.5%で、大湊より低い比率となっている。G類は1409・1410のように特異な器型のものしか船ヶ谷にはみられないが、これが5点ある。大湊では6層で5.3%と低かったG類が5層で27.9%

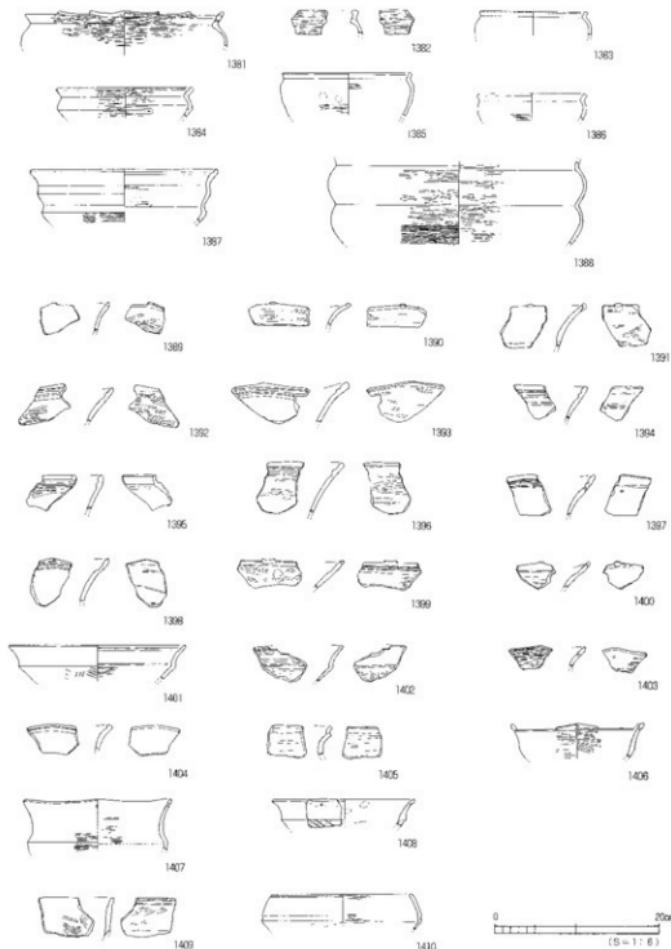


図191 船ヶ谷遺跡出土遺物(10)

大 潟 遺 跡

と浅鉢の主要な一角を占めている。さらに付け加えておくと、1410と同様の浅鉢が大瀆第5層で2点が確認されている。

ここまで、船ヶ谷にあって、大瀆6・5層にないもの、あるいはその逆を簡単にみてきた。船ヶ谷の突帯文深鉢の構成比率の低さ、あるいは浅鉢G類のはほとんど欠落といつてもよいような状況から、総体的に船ヶ谷が大瀆6・5層よりも古いことは自明である。そうすると、深鉢でいえば、A類のう

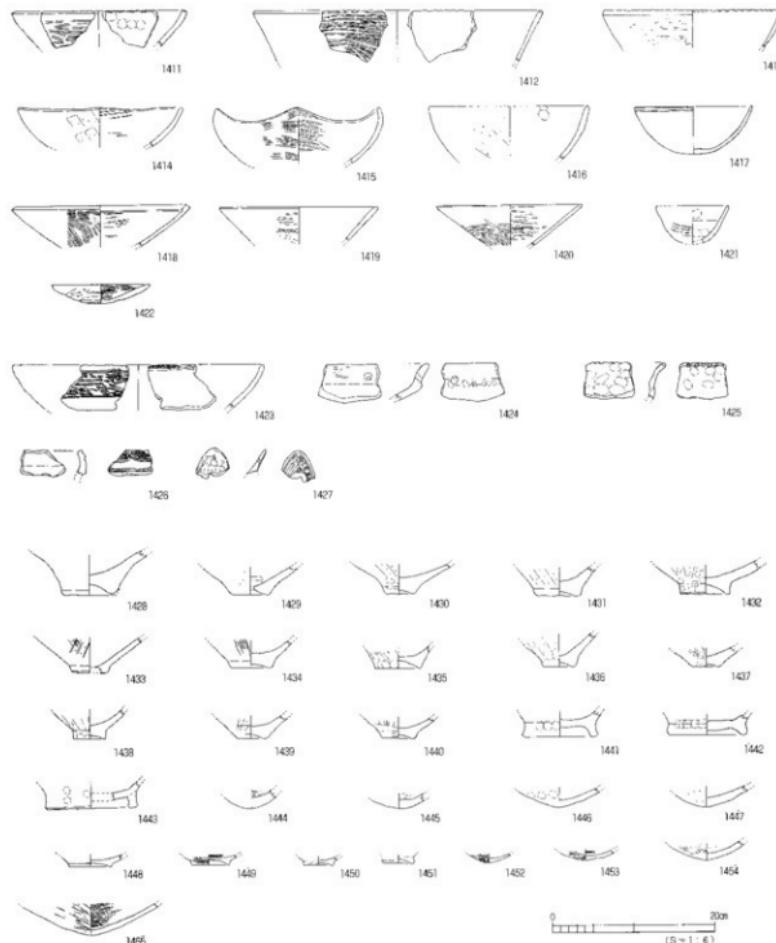


図192 船ヶ谷遺跡出土遺物 (II)

ち外面の調整に条痕を多用するa類、B2・3類、C1・2類、浅鉢ではA類、B1類、C1類、D1類、I類が大潤と船ヶ谷との違いを明確に示す器種であり、大潤を確實に巡る一群ということになる。突帯文系のC1・2類を突帯文深鉢と呼んでよければ、C3類の一部までを含めてこれらは当地における出現期の突帯文と考えられる。ところで、近年の各地における晩期の土器編年の進展によって、晩期中～後半の様相が明らかになりつつある。これらの編年との摺り合わせを行ってみると、船ヶ谷遺跡出土土器の大半は概ね九州でいう黒川式の新段階、瀬戸内の谷尻式、近畿の篠原式新段階に併行する遺物群ということができる。ただし、浅鉢A類・B1類・C1類の一群やE類がどちらかの混入というようなありかたではなく、それぞれが一定量を占めるようなありかたを示しており、なおかつ浅鉢E類やB2類が大潤6・5層にやはり一定量存在しているのであるから、船ヶ谷の遺物群はある程度の時間幅を持った資料であり、その新しい部分を受け持つのが浅鉢でいえばB2類、E類、F類や、口唇部内面肥厚の弱くなったB1類やC1類の一部と考えられる。ただし、近年の研究では浅鉢E類も古の細分が可能とのことであるので、E類すべてが新しいとは考えないが、現況ではそこまでの細かい点までの追究ができていないので、大きく括っておく^⑧。突帯文系以外の有文深鉢でも縦方向の垂下刺突を伴わず頸部沈線と口唇部刻み目を持つB4類や5類も大潤での出土例があることを考えれば、船ヶ谷の有文深鉢の中では後出のものと考えられる。また、深鉢B類のうち、頸部と胴部の境の刺突と口唇部刻み目や、口縁内面刺突が組み合ったB1類も大潤A区SK-1では浅鉢E類と共に伴しており、やはり船ヶ谷にあっては新しい深鉢のひとつと考えられる。したがって、突帯文深鉢のうちC4類は混入であるにしても、当地における出現期突帯文と考えられるC1・2類、あるいは3類の一部まで含まれるかもしれないが、これらが上述の船ヶ谷にあってより後出の器型の一群と組み合っていた可能性が最も高いと考える。

(3) 久米高畠遺跡36次調査出土の縄文晩期土器（図193）

近年松山平野東部の来住・久米地区における調査での出土遺物により、船ヶ谷遺跡の遺物群の系譜関係の一部が理解しやすくなつたのでここで紹介しておく。遺物は、1997年（平成9）年に松山市教育委員会および松山市埋蔵文化財センターが発掘調査を行つた久米高畠遺跡36次調査で、S-B004という晩期の堅穴住居から出土した一括遺物で、瀬戸内でいう舟津原段階の遺物である。1456は浅鉢A類の祖型となるもの、1459はB1類浅鉢につながる浅鉢と考えられる。E類浅鉢は、A類浅鉢の頸部が極端に短くなつて成立したものという考えがおおかたであろうが、1460～1462のようなものを祖型に他の浅鉢同様、口唇部内面の玉縁状肥厚を得て成立するという方向はないだろうか。その場合、船ヶ谷でいえば1369・1370・1376のように、屈曲部外面に比較的鋭角的な稜を持つものをE類深鉢のうちでも古いタイプとして抽出することが可能になろう。深鉢は胴部で屈曲する器型のもので、屈曲部に稜を持つものと持たないものがある。外面の調整は屈曲部以下を削り、1466と1468は頸部に条痕を施した後撫でており、またその他のものは削りの後丁寧に撫でている。口端部まで遺存している1466・1467をみるとかぎり刻み目や刺突は施されず、全くの無文である。この遺物群をみるとかぎり、この段階の粗製深鉢の外側調整にことさら柔痕を多用するという傾向は窺えず、むしろ胴部と頸部の調整を使い分けて違いを際だたせようとしていることがわかる^⑨。

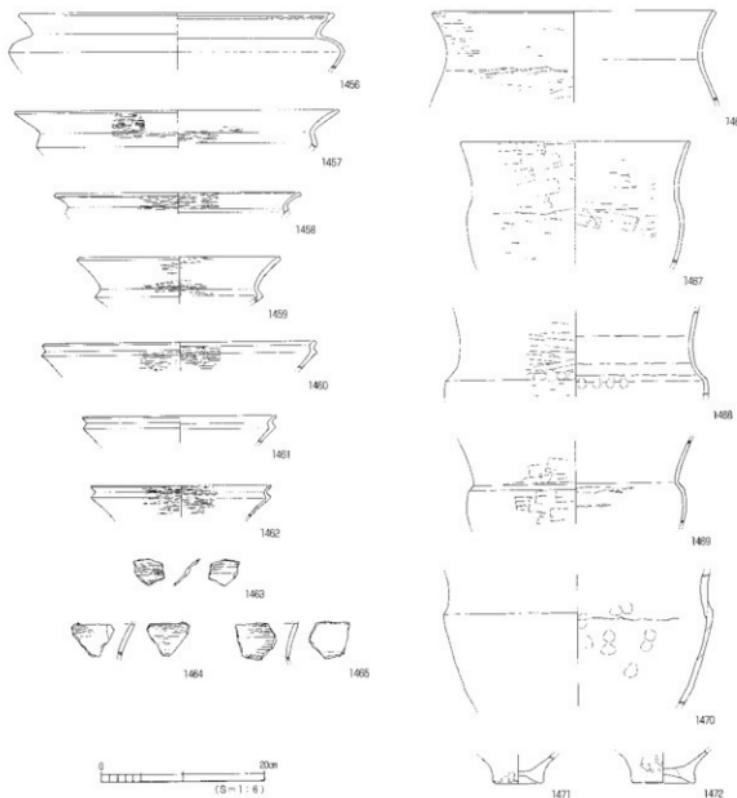


図193 久米高畠遺跡36次調査地 SB 004出土遺物

(4) 大渕遺跡A区湿地内第5層出土土器の編年的位置

以上、前段階の資料をまじえながら比較的夾雜物が少ないと考えられる、大渕A区湿地内6・5層の土器について簡単にみてきた。この両層のうち、特に第5層の遺物は石庖丁や壺の出土、あるいは自然科学分析の節で詳述されるが、土層サンプルからの花粉、プラント・オパールなどの分析結果によって当平野における稻作の開始と密接な関わりを持った遺物群であることがわかっている。かつ、両層のなかでもより上位にある第5層は、若干の混入があるにしても直下の第6層からのものであり、単純という意味ではより良好な遺物であると考えられる。そこで、この大渕遺跡A区湿地内第5層（以下、大渕5層）の土器についてもう一度整理しておき、他地域との併行関係を検討してみることにする。

さて、第5層での器種構成は深鉢58.5%、浅鉢40.4%、壺1.1%という比率であった。口縁部片をカウントするかぎり、壺は他の器種にくらべて口縁部径が小さいので、点数的には少なく出る傾向があり、また個体識別が比較的容易であるため重複してカウントされることが少ないというハンデがあるにしても、おそらく5%を超える値にはなるまいと思われ、壺という器種が存在するには存在するが器種構成の一角を占めるというところまでは至っていない段階の土器群である。

深鉢中に突帯文深鉢の占める割合は87.4%で、確実に2条突帯と認められるものは1点のみであった。C類としている1条突帯深鉢の器型は所謂屈曲型になるものがほとんどで、砲弾型が11点、ある程度器型の判断がつくもののうちの2.3%である。C類深鉢の98.3%に口唇刻み目と刻み目突帯の双方が併い、40.7%のものの口端部が面を持つ。突帯位置は、口脣部から0.5~1cm下がったところにあるものが最も多く、82.7%のものがこれに該当し、これより上位にあるもの11.4%、以下にあるもの5.9%の割合である。浅鉢は健形口縁のE類20.1%、胴部で逆「く」の字に屈曲して外上方に開くB2類43.5%、同様に逆「く」の字に屈曲して内傾して立ち上がるG類27.9%、椀・皿形のD類4.5%となっている。小型方形浅鉢F類は、4.0%ある。

ここで、他地域との併行関係を検討する前に、この大渕第5層出土土器を軸に当平野出土の突帯文系遺物群との比較検討を行っておきたい。大渕5層を通過するものは、先述の船ヶ谷遺跡のC1~3類であり、当地における出現期の突帯文である。これに近いありかたをしているのが大渕B区S X-1であるが、若干新古の混ざりがあるようで、新しい傾向を持った深鉢や特に壺や石庖丁未製品などを含んでおり、微妙な問題が含まれている。この遺構から大渕5層的なものを引き算し、船ヶ谷の遺物群との摺り合わせを行うことによって、より突帯文出現期の様相が明確になる可能性がある。大渕6層も先ほどの5層との比較により、特に器種構成において傾向としてより古相を呈することがわかった。稻作の存否に関わる大きな画期ではあるが、個別の土器の特徴において顕著な差異を見いだすことは難しく、編年として段階を設定するのは保留しておきたい。大渕遺跡湿地第5層に後続すると考えられる突帯文系の遺物を以下にあげておく。

道後今市遺跡10次調査11号土坑出土遺物（図194）

調査は1993（平成5）年愛媛県教委によって行われ、1994（平成6）年に報告書が刊行されている。隅丸長方形の竪穴から22点の土器が出土している。内訳は深鉢5割、浅鉢4割、1割が壺である。深鉢は屈曲型で、口縁部が強めに外反し胴部が張らない器型で、口径が胴部径を凌ぐ。口頭部外面を撫で、胴部以下を削りで調整し、頭部と胴部の境に横沈線が巡る。突帯は口脣部から0.5~1cm下がった位置に付き、刻み目を施される。大渕5層に較べると細く、薄いものが多い。口脣部は面取りされるものもあるが、丸いもの、尖るものが多いようである。口脣部の刻み目は確認できる8点のうち7点に施されている。共伴する浅鉢は逆「く」の字に屈曲して外上方に開くB2類、椀状のH類、いずれも口脣部内面に沈線を持つのが特徴である。なお、壺の頭部および胴部の小片2点が伴っている。

南久米片廻り遺跡2次調査D3区出土遺物（図195）

1989（平成元）年に松山市教委によって実施された調査で、1996（平成8）年に報告書が刊行された。遺物は包含層資料であるが、出土位置にまとまりがみられ、D3区出土品としてある程度の一括性を評価されている遺物群である。突帯文深鉢6点、浅鉢6点、壺1点の出土がある。深鉢6点のう

大洞遺跡

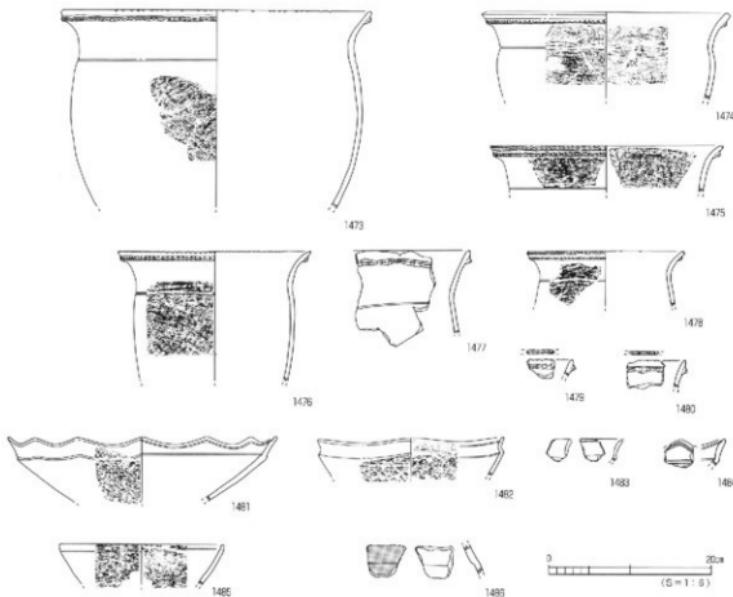


図194 道後今市遺跡10次調査11号土坑出土遺物
〔道後今市遺跡X〕愛媛県埋蔵文化財調査センター 1994より)

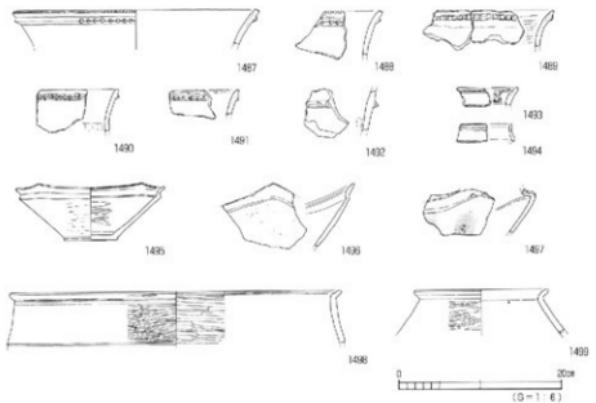


図195 南久米片廻り遺跡2次調査D3区出土遺物

ち1点は胴部突帯片で2条突帯深鉢と考えられる。深鉢は口頸部の破片しかないが、屈曲型の器型で、口唇部を0.5cm程度下がった位置に薄い突帯を持つ。突帯上の刻み目は道後今市のものより小さい。口唇部は面をなすものと丸みを持つものがあり、刻まれないものが2点ある。刻みをもつものの刻みも浅く、押し引きによる浅いD字形のものが2点ある。浅鉢にはG類の大型品、B2類の波状口縁小型品、F類方形浅鉢などがある。また、胴部片1497の屈曲部以下の外面には明確ではないが大渕5層出土の壺肩部に施された「なすび」文に似た黒斑が看取される。ちなみに、浅鉢胴部外面への「なすび」文施文例は、大阪府船橋遺跡、兵庫県口酒井遺跡などに例がある^⑤。

南海放送遺跡包含層出土遺物（図196）

1988（昭和63）年、松山市教委によって調査が行われ、市教委刊行の『年報II』に「道後城北RN B遺跡」として概要が報告された遺跡で、この遺跡の8・9層から晩期の遺物が少量出土している。突帯文深鉢の口唇部は面取りされるものではなく、端部を刻まれるものと刻まれないものがある。突帯は口唇部をやや下がった位置に貼り付けられるが、ほとんど接するような位置にあるものもある。刻み目は南久米片廻りよりもさらに小さく、胴部突帯を持つ破片の出土もみられている。

共伴する浅鉢は、屈曲する胴部から長めの口頸部が直上よりもやや外目に外反しながら立ち上がる大型品で、よく磨かれている。屈曲部に1条の沈線が巡る。

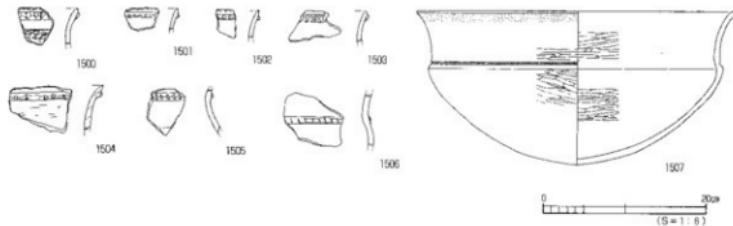


図196 南海放送遺跡包含層出土遺物

以上の突帯文系土器を出土する遺跡のほか、僅かな破片資料であるが遠賀川系土器と共に伴する突帯文系の深鉢がある。1508・1509は松山市朝美町澤（さお）遺跡2次調査包含層出土、また、1510は松山市文京町文京遺跡4次調査SB-1出土の資料で、梅木謙一による弥生前期編年1～2段階の土器に共伴するものである（図197）。口唇部に接して、断面三角形の薄く垂れ下がった突帯を貼り付け、小

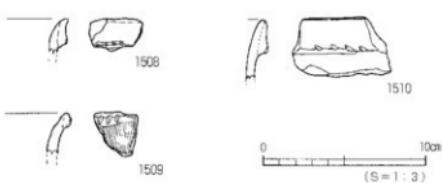


図197 朝美澤遺跡・文京遺跡4次調査SB-1出土遺物
(1508・1509／朝美澤、1510／文京4次)

さな刻み目を施したり、ほとんど高さのない細い突帯を口唇部に接して貼り付け、刻むもので、口唇部に面取りは行わぬ、また刻むこともない。ちなみに、当平野は弥生時代前期の間を通じて突帯文系の壺が存在する地域である。

このように突帯文深鉢の流れを追ってみると、やはり当平野でも新しくなるに

したがって、突帯は細く、小さくなり、刻み目も細かくなってくる。また、貼り付け位置も傾向として、口唇部に近くなり、端部は面取りされなくなり、口唇部刻み目を失うことが多くなるというこういった傾向は他地域と同様である。また、器型の全容を窺えるものが少ないので明確ではないが、大潤と道後今市の器型の違いとしてあらわれた、胴張りの有無も新古の指標となる可能性がある。

さて、文中でも瀬戸内の例として岡山県の編年を引用することが多かったが、瀬戸内でこの段階の研究編年が最も進んでいる地域であるので、主に岡山県の編年との対比を行っておく。先述のように船ヶ谷の突帯文深鉢を混入ではなく、出現期の突帯文としてとらえた。船ヶ谷の遺物の多くは岡山県でいう谷尻式の範疇に含まれるものではあるが、谷尻式の概念は突帯文を含まないところにある。そこで、大潤にあるもの、ないものとの差し引き勘定で少なくとも船ヶ谷の土器には新古があることがわかったので、船ヶ谷の古い部分を谷尻式併行の一群にあてておき、突帯文を含めた新しい段階を設定しておきたい。そうするとこの段階は岡山でいえば平井勝のいう晩期Ⅰ、平井泰男の晩期Va、阿津走出あるいは前池式の範疇におさまるものと考えられる。

大潤5層は突帯文の定着・拡大期、平井勝の晩期Ⅱ、平井泰男の晩期Vb期に併行するものと大略では考えてよいかと思うが、鍵形口縁の浅鉢E類を一定量伴っているところが岡山と若干様相を異にする部分であり、大潤5層の土器群の編年的な位置づけを微妙にしている要因のひとつでもあるが、現況では一応このあたりに落ち着けておき、今後の更なる良好な資料を待って、新たな段階設定の可能性を探りたい。

当地は深鉢口唇部の刻み目が遅くまで残る地位であるので、属性部分でいくつかの相違はあるものの、平井泰男の晩期Vb期に最もよく近似する様相をもつものはむしろ道後今市遺跡10次調査11号土坑、あるいはこれよりも若干降ると思われるが、南久米片廻り遺跡2次調査出土の遺物群であって、前者が南溝手河道1、後者が津島岡大遺跡あるいは、香川県林・坊城遺跡に併行する段階のものと考えられる。なお、南海放送遺跡8・9層出土の土器群はこれらよりもさらに降る、沢田式併行のものと考えているが、なにぶん小破片のみの資料であるので、この段階もやはり良好な一括遺物を必要としているのが現状である。

(5) 大潤遺跡における稻作の受容について

調査が行われてから、本報告に至るまでの長年月の間に、大潤遺跡そのものあるいは瀬戸内の初期稻作をテーマとしたシンポジウムなどが数回にわたって開催され^⑨、この遺跡における出土遺物の組成や個々の遺物の特徴から窺える伊予における稻作受容のありかたが検討され、ある意味語り尽くされた感があるが、ここであらためてまとめておこうと思う。

まず、大潤遺跡湿地第5層における遺物組成と自然科学分析の結果から大潤5層での稻作の存在はほぼ確定といってよい。そこで、この層からの稻作に関わりが深いものから出土遺物を個々に検討していくこととする。まず、土器では壺がこの層になってはじめて器種組成に加わったが、高坏は加わっていない。壺の組成比は1.1%、多く見積もっても5%を超えることはないということで、器種として定着するところまではいっていない。これらの壺のうちには、朝鮮半島南部に技法の故地を持つ彩文壺が少なくとも2点はある。カジ(なすび)文といわれる、黒斑を利用した八つ手の葉状の施文は器高40cm前後の中型品の肩部に施され、丹によって塗り分けられている。ところで、この種の施文

は半島では器高20cm前後的小壺の肩部に施されるもので、丹塗りも行われることはないようである。さらに用途としては、墓への副葬に用いられることが多く、これらの特徴的な壺はカジ文という技法で半島とつながっているだけで異なる点が多い。伝来品では勿論なくて、移住者によって製作されたものでもなく、どこかでワンクッション、あるいはそれ以上の経過を経た情報をたよりに製作されたものであろう。つまり、技法の伝播の過程で情報の変容が起こっている。この現象は、大渕を経過してさらに東へ伝播する時点でも認めることができ、この施文技法が東の口酒井遺跡や船橋遺跡にたどり着いた時、この種の施文は既に壺ではなく、浅鉢のしかも通常眼にふれることが少ないので、胴～底部の外面にかけて施されていることでもわかる。また、同じ平野でも南久米片廻り遺跡2次調査出土の浅鉢にも同種の施文と考えられるものがあるので、距離だけではなく、時間の経過もこの変容の一因になっていることは想像に難くない。この情報がどこを経由してきたかを考えると、図104の584の深鉢がヒントになる。この土器は胴部で稜を持って内方へ屈曲する器型で、刻みを持たない口唇部をやや下がった位置に突帯を貼り付け、指オサエで突帯を刻んでいる。頸部外面は条痕、胴部は削りで調整する、九州系の深鉢である^①。当然といえば当然のことながら、少なくとも情報の伝達ルートの一点には彼の地があったものと考えられる。これらのことから考えると、こういったカジ文を持った、よりオリジナルに近い壺が、故地に近い北部九州あたりで出土する可能性は高い。破片資料であった場合、単なる黒庭の付いた土器片としてしか認識されないことも充分考えられ、こういったことも勘案すると、もう既にどこかで出土している可能性は高い。

大渕5層では壺のほか磨製石庖丁の出土がある。形態は外湾刃半月形で、穿孔でも擦り切りでもなく、両側端に紐かけ用の抉りを持つことが特徴である。当地では弥生時代前期の石庖丁がよくわかっていないのが現状であるが、少なくとも弥生時代中期以降、側端抉りの石庖丁が一定量存在する地域であり、この地域の石庖丁のバリエーションのひとつとなっているのでこのタイプの石庖丁の相型となるものである可能性が高い。初期稻作に伴う石庖丁とはいながら、所謂大陸系磨製石器としてイメージされるものとはかけ離れたものであり、唯一磨いていることが大陸系といえばいえないこともない。この石庖丁にも先ほどの彩文壺と同様の情報の変容をみてとることができ、稻作がそれに伴う情報を変容させながらリレー式に伝わったことを示している。

さて、大渕5層で確認できる弥生的なものといえば上記の2例だけである。伐採斧は身幅の薄い縄文伝統の斧を用い、加工斧も大陸系の抉り入り柱状片刃ではなく縄文的な斧を使い、サヌカイトの剥片石器を多用する。また、石棒を使った縄文的な祭祀を行い、縄文的な硬玉製の玉をアクセサリーとし、縄文伝統の深鉢を煮炊きの器に用いる、縄文的な伝統社会に稻作が伝わったとき、受け入れる側の主体として受容したのは伝統的な道具で代用できない石庖丁や壺といった限られた道具や器であった。なおかつ、壺と稻作が密接な関係にあるとするならば、壺の組成比はきわめて低いわけであるから、社会としての稻作への傾斜度はこれまたきわめて低い、そんな段階だったのであろう。

註

①社団法人日本アイストープ協会の測定による。なお、この分析については愛媛大学教育学部 平井幸弘先生に仲介の労をとっていただきいた。記して感謝申し上げます。

②船ヶ谷や大渕の遺物を対象に組まれた編年には以下の先駆的研究がある。1989年宮本一夫は「壺子・標味遺跡」の調査報文中で、平井勝の示した北部九州、岡山、近畿の編年対比との擦りあわせを行い、黒川一船ヶ谷一谷尻・

(原下層) -滋賀里Ⅲbの併行関係を認め、船ヶ谷に後続する資料として大潟5層をとりあげた。北部九州では長行～山ノ寺(夜臼I)、東都瀬戸内では前池～(黒土B II)、近畿滋賀里IV～口酒井段階と、若干幅を持たせ細分の可能性を示唆している。ここでいう括弧つきの黒土B IIは、当時平井が示した、黒土B IIなる遺物総体から前池、沢田を差し引いた残りの部分という概念を踏襲している。なお、編年表に用いられた浅鉢では、ここでいうE類を船ヶ谷段階のものとし、B 1類、C 1類を大潟段階まで下げ、かつG類が大潟から欠落している。本文中でも述べたように、浅鉢B 1類、C 1類は船ヶ谷にのみ存在し、大潟には存在しない器種であり、E類、G類は大潟に一定量存在している。1995年、坂口隆は「持田町3丁目遺跡」報文中で、持田町の発明土器の位置づけにからめて船ヶ谷の土器群の細密な分析を行っている。結果、持田町を谷尻併行とし、船ヶ谷はこれに先行するものであり、突帝文系の深鉢は混入遺物であるとした。さらに、ここでいう浅鉢E類系譜につながるものが持田町で欠落することから、船ヶ谷との間に数式型の空白を予想し、船ヶ谷を黒川式古段階、縦原式古段階併行に位置づけたが、筆者は持田町3丁目の土器は、船ヶ谷を新古で二分した場合の古い段階に相当する遺物であると考えている。同1995年、大刺徹夫は『愛媛考古学13』に「愛媛県での縄文晩期土器の覚書—縄文から弥生へ—」を発表、愛媛県の縄文晩期の代表的な資料を紹介し、北九州、中瀬戸内、近畿との併行関係を検討している。このなかで、大潟5層は長行、前池、滋賀里IV、泉拓良のいう突帝文I期に中心をおく遺物とし、土坑出土のものを船ヶ谷同様の谷尻併行としている。そのほか、1991年、藤尾信一郎が「水桶農耕と突帝文土器」中で船ヶ谷・大潟を扱い、大潟土坑出土遺物を谷尻併行、船ヶ谷を瀬戸内型・条彫と鍵形口縁浅鉢が基本的なセットをなし、これに多量の粗製深鉢と屈曲型刻片文土器がともなう船ヶ谷式と設定し、突帝文I期とする。また、大潟5層を沢田式併行の二期としている。

- ③坂口隆によれば、新しいものは二段に屈曲する口縁肩部の屈曲が弱く、内面の棱も弱くなるとのことである。
- ④したがって、船ヶ谷の粗製深鉢の新古を判断する際に、外側調整の違いがどの程度有効なのかは疑問で、I層部の無文・内面削突・刻みといった要素をより重視するべきと考える。ただ、大潟5層には外側頭部まで条痕を残す粗製深鉢は存在しないことは事実である。また、5層に口唇部無文の粗製深鉢が1点存在することも事実であるが、この場合調整や施文といった属性のみではなく、張らない崩部に短い外開きの口頭部といった本来的な器型そのものによる分類が必要なのであろうが、今回はその余裕がなかった。
- ⑤この2遺跡の施文浅鉢は未報告資料であるが、下記の松山市埋蔵文化財センター特別展「瀬戸内の初期農耕」の展示のための借用に際して実見する機会を得た。口酒井遺跡のもの（伊丹市教育委員会蔵）は、口頭部の比較的短い波状I縫方形浅鉢の胴上半部から口縁部までの破片で、内外面ともに磨かれ赤色塗彩されている。施文は屈曲部以下の崩部外面になされ、「なすび」状の黒班が3単位で確認できる。船橋遺跡のもの（大阪府立弥生文化博物館蔵）はほぼ完形で、崩部で屈曲して直上に外反気味に立ち上がる長めのI頭部を持つ。口縁部外面には無刻日の突帝が一条巡る。この浅鉢の崩部以下の外側は削りであるが、屈曲部以下の崩部外面から、尖り気味の丸底をなす底部にかけて施文され、底部を中心に放射状に黒班が配されている。器表面の剥落が激しいが、外側崩部は赤色塗彩されていたようである。
- ⑥半なものには、1989年の古代学協会四国支部第3回大会「四国における農耕の始まり」や1995年松山市埋蔵文化財センター主催の特別展記念シンポジウム「瀬戸内の初期農耕」などがある。
- ⑦この深鉢について、高橋徹は大分県下黒野式との共通点からこれに併行するものとみており、下條信行もこの深鉢の存在から稻作の瀬戸内への伝播は、北部九州から一気にというわけではなく、東九州経由でリレー式に伝わったと発言しており、筆者もまたこれに賛同している。一方、藤尾はこの土器を西郷九州型壺として山ノ寺(夜臼I)併行とみるが、当然のこととして器面調整には東部九州的な特徴をみせると、伝播のルート上に東部九州があることを示唆している。また、家根祥多はこの土器について突帝上の指オサエが夜臼Iにはない特徴であるので山ノ寺終末のものとみている。なお、この高橋、家根の見解は1995年11月に松山市埋蔵文化財センターで開催された、「第4回土器持ち寄り会」席上で発言である。

文 獻

- 泉 拓良「西日本凸帯文土器の編年」『文化財学報 第8集』奈良大学文学部文化財学科 1990
- 尹 武昭「無文土器」『世界陶磁全集 第17巻 韓国古代』1979
- 大飼徹夫「愛媛県での縄文晩期土器の覚書―縄文から弥生へ―」『愛媛考古学 13』愛媛考古学協会 1995
- 梅木謙一「西瀬戸内地方の弥生時代前期土器―松山平野を中心として―」『牟田裕二君追悼論集』 1994
- 小笠原善治「久米高畠遺跡36次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報 X』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1998
- 坂口 隆「持田町3丁目遺跡出土晚期中葉資料の編年的位置について」『持田町3丁目遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター 1996 「剣日突帯文の成立」『先史考古学研究 第6号』阿佐ヶ谷先史学研究会 1996
- 坂本安光「松山市・船ヶ谷遺跡」愛媛県教育委員会 1984
- 下條信行「瀬戸内一リレー式に伝わった縄作文化」「弥生文化の成立」大阪府立弥生文化博物館編 角川書店 1995
- 高橋 徹「東九州における突帯文土器とその周辺」『古文化談義12』 1983
- 田崎博之「夜臼式土器から板付式土器へ」『牟田裕二君追悼論集』 1994
- 多田 仁はか「道後今市遺跡X」愛媛県埋蔵文化財調査センター 1994
- 西尾幸則「道後城北RNB遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報II』松山市教育委員会 1989
- 平井 勝「岡山県における縄文晩期突帯文土器の様相」『古代吉備第10集』 1988
- 「瀬戸内地域における突帯文土器の出現と展開」『古代吉備第18集』 1996
- 平井泰男「南溝手遺跡I」岡山県教育委員会 1995
- 「中部瀬戸内地方における縄文時代後期末葉から晩期の土器編年試案」『突帯文と遠賀川』 2000
- 藤尾慎一郎「水稻農耕と突帯文土器」『日本における初期弥生文化の成立―横山浩一先生追憶記念論文集II-』 1991
- 松村淳・梅木謙一「南久米片廻り遺跡」『小野川流域の遺跡』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1996
- 宮崎哲治「林・坊城遺跡」香川県教育委員会 1993
- 宮本一夫「道後平野における弥生時代開始期の動向」『鳴子・導味遺跡の調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室 1989
- 家根祥多「近畿地方の土器」『縄文文化の研究4』雄山閣 1981
- 「篠原式の捉唱」『縄文晩期前葉―中葉の広域編年』北海道大学文学部 1994

第3章

大渕遺跡2次調査

